緋弾のアリア～武偵の道～

荒木新二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア～武偵の道～

【Ｎコード】
Ｎ８６６２Ｕ

【作者名】
荒木新二

【あらすじ】
ある武偵に憧れて武偵になった少年、竹崎裕太は、パートナーを失ってから、武偵としての道に迷いながら生活していた。

自分に役に立つこと、
パートナーとの約束、
そして憧れていた人。

竹崎裕太の武偵生活が今始まる。

他作のキャラ引用

緋弾のアリア～運命を射す漆黒の魔弾～

緋弾のアリア　防人の４５口径

緋弾のアリア　～黒と紫の邂逅～

緋弾のアリア―黒の疾風・紅い閃光

【1章】・日常（前書き）

主人公説明

竹崎裕太
（たけざきゆうた）
強襲科１年Ｅランク

通称、崎太

身長１４９

体重３５

性格
（一般的）
基本、クールであるがときどきツンデレ
怒鳴り気味なツッコミをする。
友だちによくいじられる。
一人称が俺。

（本当の性格）
大人しい優男。
気弱で直ぐに自分を傷つける。
一人称が僕。

武器

銃
コルト・ピースメーカー×２
バンカー・ブレイカー（自作）

剣
長ドス×２
ドス（全部真っ黒）

見た目
髪は、
中空知の髪型に、右目が見えるように、右にヘアピンで髪を見えるように止めた感じ
目つきが鋭い以外は全体的にかわいい。

特徴
極度の人間嫌い。
友だちや興味のあるやつ以外はつけはなす。
だから、交友関係が少ない。

死が有り得ないほど怖い。
もし、死にそうな奴や殺されそうな奴がいたら、敵味方、ＴＰＯに構わず助けようとする。
そのせいで、過去に３回死にかけ、最後の３回目にパートナーを失った。

性的興奮に異常に弱い。
エロ本１つで鼻血の海に沈む。
バトル時も関係なく出るが、バトルはちゃんとする。

才能の塊のような人物で、特に探偵技術（推理や読心など）はシャーロック・ホームズ並で、
「第二のシャーロック・ホームズ」などと呼ばれている。

教えられたら何でも出来て、才能に限界がない。
武偵総合（総科目）は強襲科以外はＡ（探偵科はＳ）
故に、強襲科以外（ＣＶＲからも）から勧誘を受けている。（特に探偵科）

戦闘力は本編でドンドン公開していくつもりです。

以上、主人公説明終わり！

本編へレッツゴー！

【1章】・日常

雨が降っている…

ザアザアと、俺を濡らしていく…

雨が降っている…

俺は人を抱きかかえている…

雨は降っている…

俺の涙は雨となって、頬を流れている…

「…またあの夢か…」
僕は、左手で顔を隠す。
思い出とは厄介だ…
思い出は人をこうも憂鬱にする。

「涙まで流してるよ、こうもツラいものなんだな…」
とりあえず、涙で濡れた顔を洗いに洗面所へ向かう。
寝癖は…後で直そう。

顔を洗い終わった後、僕は持ち物の確認をし始めた。
「ピースメーカーは二丁ある。剣は制服に2つとも仕込んである。後は…と、バンカー忘れるとこだった！」
自作の銃を制服の背中に仕込んで部屋を出る準備をする。
へっ？
朝食はって？
朝食はあの子に作ってもらってるからいいよ。

僕はいつも走りで学校に向かう。
寮から学校は距離があるから、そこそこトレーニングになるんだよね～。
時間もかなり早めに着くから大丈夫だし。

「行ってきます…」
僕はある写真にそう声をかけ、写真の前に置いてある翡翠色の宝石みたいなペンダントを首にかけ、同じく置いてあった、柄と鞘と刀身が真っ黒なドスをケツポケに入れて、部屋を出た。

「やっと見つけたぜ、この武偵野郎！」
僕の目の前で何人ものヤクザと思われる人物が行く手を塞いでる。

「あぁ、俺に何か用でもってあんのか？」

ちなみに僕は1人のとき以外は俺って言う。

何でかって？

それは自分のいつもの態度じゃ、武偵の鑑の『強襲科』に相応しく無いからね～

そんな事より、今は目の前の人たちの方が重要なんだけど、

「テメー、よくもウチの組織のアジトをバラしやがったなー！！

おかげ俺ら以外はみんなパクられちまっただろーがー！！」

…あぁ、

確かこの間、探偵科のクエストで、

『大規模マフィアとヤクザの調査』ってのを受けたんだっけ？

僕は武偵憲章の1つ、『任務は裏の裏まで完遂せよ』…だっけか？

に従って、ヤクザとマフィアのアジトを見つけ、ついでに麻薬の取引と言う偽の情報を流してマフィアとヤクザを一網打尽に出来る状態をお膳立てしたんだったな～

確かマフィアは全員捕まえたらしいが、ヤクザの方は数人逃したらしい。

「お前を探すのに大分苦労したが…

まぁいい、今死ねやー！！」

僕に向かって銃を構えるヤクザたち、

それより早く僕は走り出した！！

「さすがに住宅街はアウトでしょー！！」

走りながら喋る。

「待てやコラー！！」

ヤクザたちも走ってくるが、追いつかない。

当たり前だ、

だって僕は陸上競技は1年…

イヤ、

全国1かも知れないぐらい速いのだから。
とりあえず、学校付近の物置に隠れる。
すると向こうは、
「死ねやー！！『ババババババ！！』」
だなんて、撃ってきた。
「…仕方ない、潰すか。」
僕は、右手で制服の左手の裾から長ドスを抜き、左手で腰にある2つのホルスターと腰の銃を撃ちやすいように調整する。
弾丸に注意しながら外を確認して誰もいない事を確認してから、
「…いくか！！」
物置から飛び出した！
僕が飛び出したからこちらに銃を向けるヤクザたち。
ハンドガンが3人（ベレッタM92×2とM500）
マシンガンが1人（UZI）か…
余裕だな。
そう思って、長ドスを構えると、
「裕太！大丈夫！？」

だなんて声とともに、
「ババババババババ！！」
なんて音が聞こえた！
その内、一発は被弾した。
「イッ！！」
痛いと言おうと思ったが余り痛く無い。
そんな事より、
今のは危なかった！
僕は自分の本当の性格を隠しているのと同じく本当の実力を隠しているんだ。
バレたらいろいろ面倒くさいからな～

そう思っているうちに、
ヤクザたちは先程の銃弾を大量にくらって、のびていた。
…後で先生に連絡して単位貰おう♪
そして、先程の発砲者が近づいてきた。
「ごめん、当たっちゃった？」
アサルトライフル（Ｍ１６Ａ１）を両脇に挟んで構えたまま辺りを警戒しつつ、話しかけてきた。
「綾さん…」
この二丁アサルトライフルの使い手は、
『京乃宮綾』さん。
３年の強襲科でＢランク。
人当たりがよく、昔からの知り合いで、
…俺の、亡きパートナーの姉さんだ。
ランクはＢランクって事になってるが、
アル＝カタと近接格闘は武偵高１で、
先生方からよく極秘ミッションを受けてるらしい。
綾さんはとにかく優しく気さくなので、教師生徒問わずみんなに信頼されていて、
５、６時間の専門科の授業はほとんど先生方のミッションか生徒達のミッションの協力に消えているぐらいだ。
１年の頃からそんな感じで、
あまり専門授業が出来ず、実力がＢ止まりな訳だが…
本来、彼女の物覚えの速さと運動神経を考えれば、Ａはおろか、Ｓランクすら狙えるぐらいなのに…
「そういえば、綾さん。
どうして俺がここにいるって分かったんですか？」

「今朝、電話してもでなくて、
先に学校行ったのかと思って登校してたらあの人たちが物置を乱射してて、
そしたら物置からチラッと裕太が見えたからね。」
「ふーん、そうですか。
てか、携帯忘れてたー！！」
「そんな事より！
裕太に弾当たっちゃったかな？」
「あぁ、大丈夫ですよ。
当たりはしましたが、綾さんの弾はゴム弾みたいでしたしね。」
綾さんは一応、当たったとしても大丈夫なようにゴム弾と実弾を携帯している。
「でも当たっちゃったでしょ。
ごめんね、裕太…」
沈み込む綾さん。
…いかん。
僕としたことが、
選択肢ミスった！
フツウは当たってないって言うんだろうが！

「そ、そんな事より！
早く学校行きましょう！
んでまたアル＝カタ教えて下さい！」
俺は素早く話題を変えることにした。

「うん、そうだね。
じゃあ、学校着いたらさっそくアル＝カタの練習しましょうか！
よーし、
おねーさん、がんばるぞ～！」

「綾さん、
お手柔らかにお願いしますね…」
ふー
なんとか話をそらせたか…

その後、
ヤクザたちを物置の柱に縛り付けてから先生方にメールで事件を知らせて、
綾さんに、アル＝カタの基本動作を教えてもらいながら、
僕らは学校に向かった。

【1章】・日常（後書き）

前書きのようなあとがき

イヤー、
いろんな二次小説を見てると書きたくなってきたので
つい書いちゃいました～

この小説では、俺の気に入った作品のキャラなどが主流になって来るので、原作のキャラはなかなか出ません。
てか、原作にはほとんど入り込まないつもりです。

まぁ、ときどき挟むけどね～

原作好きな方には申し訳ない。

せめて、ジャンヌとバスカービルは登場させるつもりです。
（特にジャンヌとキンジ！！）

では、
感想待ってま～す♪

…2（前書き）

今回は少しピンクです。

まぁ、お楽しみ下さい

…2

「そういえば、
裕太って…ときどき動きがとても過敏だよね～」
『ギクッ！！』
アル＝カタの実戦中に綾さんが鋭い事を聞いてきた！
「イヤ、それは…！？」
「隙だらけだよ♪」
「やべー！！
って、ギャァァァ！！」
完全装備のC装備にありったけの銃弾を撃ってくる。
イヤ、
C装備とは言え、連射なんて食らったらさすがに痛い。

「気を抜いちゃダメだよ、裕太～」
微笑みながら手を差し伸べてくれる綾さん。
…男として、情けない…！！
「…死にたい…！！」
つい、本音が漏れてしまった。
すると、
「ええー！！
ダメだよ裕太！！
死んじゃダメだー！！」

綾さんが泣きそうになりながら、俺を揺さぶってくる。
…苦しい！！

「綾さん、
ギブ！、ギブ、！！」

必死にタップする俺、
「やーだー！！
裕太がいなくなるのやーだー！！」
ますます強く揺する綾さん。
「ギブ！ギブ！！ギブ！！！ギフッ！？」
悲鳴を上げてグターとなる俺。
「裕太？裕太！？
…裕太ぁー！！」
まるで死の立ち会いをした人みたいに叫ぶ綾さん。
イヤ、
犯人はアンタだよ！！

そんな感じの実戦（コント？）をしていたら、
それを見ていたらしい女子が、
「何で綾先輩は、あんな役立たずの世話なんかしてんの？」
「さぁ…
どうせ、役立たずが泣きついて頼んでんでしょ。
」
「うわー、ウザ！！」
「だよね～
早く探偵科に消えろって～の～」
と小声（？）で俺を嘲笑っていた。

…うるせーよ…

俺だって、本当は探偵科が良かったんだ…

自分の能力を最大限に生かす事が出来きるし、

武偵高一、マシな科と言われるぐらい、『平和』な科なのだから…

だから、本当は…
俺は強襲科が嫌いだ。

大嫌いだ…

なぜかって？

決まってる。

『生存率約９７％』だ。

毎年、３人は必ず死んでる…
死んでるだ…本当に…

現に、俺がパートナーを無くしたのは、
強襲科のミッションだった…

だから、俺はそれ以来、強襲科を嫌悪するようになった。

『こんな科、やめてやる！』
と何度も思った…

転科届けを何度も出そうとした…

…でも、
いつも心の奥で、アイツの声が聞こえるんだ…

『…だから…お願い…
…アタシのマガママを…聞いて…』

死ぬ間際に残したアイツの声が、
俺をここに食い止めてる。

俺は、アイツを裏切りたくない…！

だから、黙ってくれ…！

その思いが通じたのか、
女子達が静かになった。

すると、

「…今、何て言った？」
綾さんが、
いつもと違う雰囲気を出しながらその女子達に向かって歩き始めた。

…コレはヤバい！！

俺は、本気のダッシュで綾さんに近づき、素早く羽交い締めにして
動けないようにした。綾さんは、
普段ならあり得ないぐらいのスピードで走り、
手際よく羽交い締めをした俺の行動に多少、目を見開いたが、
「…裕太、どきなさい…
…じゃないと裕太を巻き込んじゃう…」
底冷えしたような声で忠告してきた。

マズいな…
あのモードになってる。

綾さんは特異体質で、
怒りが一定値を越えると、容赦ない『殺人鬼』になるのだ。

大体、京乃宮家は代々、その特異体質の持ち主で、
平安時代にはあまりに恐れられて、
天皇の別荘を譲られたぐらいだ…。

…一度、俺はこのモードの綾さんと戦った事がある。

結果はズタズタのボロボロにされたが、
一瞬の隙を突いて、何とか倒した。

イヤ、
あれは倒したに入らないな…

あのモードが終わっても、
綾さんは俺を殺そうとしたし、
俺は俺で、
1週間の集中治療と1ヶ月間の入院が必要になったからな…

まぁ、それは置いといて、
まずはこのモードを解かないとな…

「…裕太…
…どきなさい…」

「綾さん、落ち着いてくれ…」

ちなみに、
このモードを解くには2つの方法がある。

1つは気絶させる事。
もう1つは…

「お前ら!!
死にたくなかったらここから逃げろ!!
んで、外から鍵かけろ!!」
先程の女子達に退避宣告と、スタジアムの封鎖を告げる。
女子達は一目散に逃げ始めた。

よし!!
準備完了。後は…

「…話しなさい…
…女の子たちが逃げちゃ……」
俺は、綾さんの正面に回り、大外がりで床に押し倒した。
そして、綾さんは何か喋ろうとしたが強引にその唇を止めさせる。

…俺の唇で、
「……」

綾さんはじっとして動かない。

俺も動く訳にはいかない。

もう一つの方法とは、

『相手と接吻を一分せよ』
だとさ…

意味が分からんわ…

それでなぜ治る？

すると、だんだん綾さんが抵抗し始めた。

残り２０秒間、抵抗に耐えれば、モードは解ける。

俺はより強く押さえつける。

そしてその時が来た。

「……、
……！！」

俺は、綾さんから唇を話すと、
綾さんの目に光が戻ったかと思ったら、
顔が一気に赤くなった。

ところで、
なぜ俺が、スタジアムを封鎖するように言ったか分かるかな？

１つはキスシーンを見せないため。

もう１つは…

「…な、なな、ななな、」
…くるぞ！
「何してんのよー！！」
俺を掌底1つで壁までぶっ飛ばすと、
スタジアム内の置いていたギターケースから、アサルトライフルを
二丁取り出して、
両脇に挟んで銃口を俺に向ける。

「許さないんだからー！！」
そういって2発、
足元に威嚇射撃をしてきた。

そう、
2つ目の理由は、
入ってきた人が怪我しないようにするためだ。

このモードは副作用でもある。

戦闘力は通常と同じまで戻るが、
怒りは残っていて、残り3分、相手をしなければならない。

「すみません、綾さん。
後、3分我慢してくださいね。」

ちなみに、綾さんのこのモードは、勝手ながら、
『シャイモード』と呼ばせてもらっている。

このモード時は綾さんの意識に残らない…

つまり、『本気』を出せる。

「行きますよ、綾さん！！」

俺は綾さんに向かって突進していった。

…2（後書き）

次からは、いよいよ本気のバトル！

まぁ、期待しててね～

感想、待ってま～す♪

…3　怒りＶＳ本気？（前書き）

バトルシーンと竹崎が壊れます。

ご注意下さい。

…3　怒りＶＳ本気？

僕は綾さんに向かって走り出すと同時に、
右手で左手の裾から長ドスを素早く抜く。
綾さんは左手のＡＲ（アサルトライフル）の銃口を動かす。
僕はそれを見逃さない。
得意の探偵術で行動を先読みする。

…綾さんの性格からすると、
彼女は無駄弾を嫌うから、まずは相手の動きを止めてくる。
…だとすると、体を狙って撃つのがフツウだが、彼女は強襲科の三年生。
彼女は、強襲科の一部生徒は銃弾を受けても突っ込んでくるといっていた。
その時の対処方法は…！！

僕は彼女が引き金を引く寸前に、右にズレた。
「！！」
彼女は自分の狙いが外れて、多少驚いていた。

その隙を逃さず、
僕は「ソニックショット」を放つ！

『ソニックショット』とは、手に何も持って無い状態から、０．１

秒で発砲する、
要は、『速撃ち中の速撃ち』だ。

ソニックショットにより、彼女は右手のＡＲを落とす。
が、彼女は左手のＡＲで僕を狙い撃ちにしてくる。
「ババババっ！！」っと言う音が聞こえた。

そして、また探偵術の登場！

銃声からして、弾は４発。
そうと決まれば、次の行動は決まっていた。
僕は後ろに大きく飛びながら、弾の行方を銃口の位置から推測して、

「キンッキンッキンッ！！」
と最小限の動きで斬った。

僕が距離をとったと同時に、向こうも距離をとってきたので、彼女と僕の距離は３０メートル位になった。

それに安心したのか、彼女は膝立ちの姿勢で撃ってくる。

だが…
『計画通り！』
心の中でそう呟くと同時に、
先程、ピースメーカーを持っていた左手で、背中に仕込んである銃、
『バンカー・ブレイカー』を構える。

…ここで、この銃を説明しておこう。

『バンカー・ブレイカー』
形はオートマチックで、銃身は２７センチ、縦に１７センチある。
重さはフツウじゃ有り得ない約３キロ、
総弾数も６発と、オートマチックにしてはかなり少ない。

しかし、この銃の最大の特徴は…

『綾さん、ごめんなさい。』
心の中で謝りながら、
先程撃たれた６発の銃弾と、彼女のＡＲに狙いを定めて銃の引き金を引く。

「ドウゥゥゥゥッッン！！！！！」
フツウの銃声にはないような激しい音が聞こえたと思ったら、
「キャァ！？」
彼女のＡＲが吹き飛んで、バラバラになった。
そして、彼女の放ったＡＲの弾が僕の近くに落ちる。
そう、
この銃の特徴は、『世界一強力な弾を撃つことが出来る銃』といくことだ！

弾の大きさは７０ＡＣ弾と言う、ドコにも販売されていない弾だ。
この弾は、フツウに言えばショットガン以上の威力を持ち、反動もショットガンレベルであろう。

まぁ、
９ｍｍ弾を使用してる時と同じぐらいの手ブレで、しかも片手で扱うことが出来るのは僕だけだろう…
さすがに痛みが無いと言ったらウソになるがね～

ちなみに、
この銃は、いかに才能の塊であろう僕でも、１人ではどうにもならなかったから、
装備科の平賀さんを含めた優等生、５人と僕とで銃の創作に当たった。

…しかし、このときかなりぼったくられたんだよな～

まぁ、最高の一品が出来たわけだが…

そんなチート銃（笑）で二丁ＡＲを奪った後、
バンカー・ブレイカーを背中にしまいながら、左手で右手の裾から長ドスを抜き放った。

「クッ！」
綾さんもダガーナイフを二本抜いて、俺の長ドスと切り結ぶ。
「キィィン！」
甲高い金属音とともに火花が飛び散る。

『よし！』
ぼくは心の中でガッツポーズをした。

何故なら、

綾さんは近接格闘とアル＝カタの神。
接近しても、負けるのは分かっている。
だが、こちらの銃はパワー系の物ばかり、
当たったら彼女を傷つけてしまう…
（バンカー・ブレイカーは致命傷になる。）

ならばどうするか？
銃を使わないかつ、近接格闘でも、アル＝カタでもない方法で彼女を止めるには…

答えは1つ、
斬り合いしかない！
そこで、僕は斬り合いと言う選択肢を選んだ。
幸いな事に、
彼女はアル＝カタや近接格闘ほど得意なものはないらしい。

僕は斬り合いがかなり上手く、本気を出したら1年が何人いても相手を出来るぐらいだ。

「ガキィン！ガガガ！カン！キィン！」
そんな感じでしばらくの間、斬り合っていると、
「うっ！」
綾さんが小さく悲鳴を上げて、倒れ込む。
「オオっと！」
僕は彼女を受け止めて、顔を覗き込む。

すると…
「ふみゃふみゃ…」
だなんてかわいい寝言を漏らしてる。

どうやら、シャイモードが切れたらしい。

ふー、と息を吐いて、気持ちを落ち着ける。

綾さんが相手だったから、なかなか銃を使わなかったので少し疲れたが、

彼女の寝顔を見てたら、これぐらいの疲れなんて大丈夫だった

「ふっ、かわいいな～全く！」

僕は綾さんをお姫様抱っこして、スタジアムから出ようと出口に向かった時だった…

じぃーーー

…俺らを観察している奴がいた。

ヤバい…

僕の本気を見られた！？

僕はとりあえず、出口と反対側に綾さんのギターケースがあるからそれをとるついでに、

携帯をいじるフリをしながら、背後の出口にいる人物を観察した。

うーん、

身長は１４０前後。
髪はオレンジ色のツインテール

偵察してるつもりだろうが、ツイテが二本とも見えてる事から、
身を隠すのが重要な、探偵科や強襲科では無いだろう、

と言うことは……殺レル！！！

僕は取りあえず、ギターケースの近くに一旦、綾さんを降ろしてから、
覗き娘に話しかけた。
「…みぃーたぁーなぁー…」
…多分、このとき僕は、
…鬼のような形相をしていただろう。
「ッッッッッッッッ！！！」
女子は一目散に逃げようとしたが、
「バァン！！……」
僕はソニックショットを使い、その女子の足元に弾丸をぶち込む。
「こっちを向け。」
そう指示すると、機械のような動きではこちらに振り向いた。
そして、何か喋ろうとしたが…
「あのー『バァン！！』……」
今度は耳スレスレにソニックショットをする。

女子生徒は、膝から崩れ落ちる。

「喋るな、喋ったら次は当てる…！」
銃を構えて、殺気を出しながら女子生徒に近づく。
女子生徒は恐怖で金縛りにあってるみたいだ。

だが、そんな事は気にせずに女子に近いて、
遂に、目の前まで来た。
そして、
「今から事情聴取を始める。ついて来い…！」
と言いながら、女子生徒を拉致った。

しばらくしてから思い出すと、

…我ながら、さすがにやり過ぎたなと後悔した。

…3　怒りＶＳ本気？（後書き）

次話が終わってから、キャラを増やすつもりです。

ヨロシク

感想待ってま～す♪

…4　事情聴取と救急救命？（1）（前書き）

他作品のキャラは次回が終わってからにします。

まぁ、お楽しみくださーい！

…4　事情聴取と救急救命？（1）

…見られた…

…見られてしまった…

俺はスタジアムから全力で校舎に向かって走っていた。

…勿論

「キャアァァァァ！！」

先程覗きをしていた現行犯を逃がさないでな…

取りあえず、俺はソイツの首根っこを掴みながら暴走新幹線の如く走る。

女子生徒は、引きずられるどころか、宙に浮いて目を回している。

俺はそんな事もお構い無しに全力で走る。

幸いにも、まだ朝の６時３０分。

他の生徒は見当たらない。

おかげで全力ダッシュが出来る訳だが、

…走るって、気持ちいいな～

「あっ…そうだ、アソコに行こう！」

俺はスピードを緩めないまま、

むしろ、スピードを上げてある場所へ向かった。

「よし、誰もいないな！」
ピッキングで鍵を開けて、部屋に入る。

俺が向かったのは、救護科棟の１０階、
こんな時間には人は絶対に来ない場所だ。

まぁ、俺はひとまず気絶してしまった女子生徒をベッドに寝かせ、念のために、諜報科で習った、盗聴器や監視の目がないかを確認する方法を用いて、辺りにそれらしき物が無いことを確認してから、
「オラー、起きろ～」
だなんて緩い言葉をかけつつ起こしにかかる。

すると、

「うーん、…はっ！！ここはドコ！？」
思ったより早く目を覚ました。

「目が覚めたか…」
俺の声に反応して、こちらをみた途端に、
「キャアァァァァ！！」
と、ベッドの端の端まで後ずさり、毛布を頭からかぶった。
…大分、恐れられたな…

まぁ、かえって好都合だがな。

…まぁ、そんな事より、
今はやらなきゃいけないことがアルよな…

「じゃあ、現行犯も気がついた事だし、事情聴取を始めるぜ～」
俺はやる気の皆無な声で、女子生徒に宣告した。
「まずはお名前ど～ぞ～」
なんだか、某銀髪の木刀パーマ野郎みたいな声で、名前を聞く。
「わ、私は間宮あかりです…あのー、アナタは？」
小声で怯えながら話してくれた。
良かった…
ここでダンマリ決め込んだら、また俺のピースメーカーが火を吹いてたぜ～

「俺は竹崎裕太だ。…と、1ついいか？」
気になった事があったので、質問してみる。
「何ですか？」
「お前ってもしかして、あの間宮か？」
「？、先程も言いましたが、私の名前は間宮あかりですよ？」
いまいち意味が伝わってないらしいが、俺の予想は当たっているだろう。

「そうか、お前があの、神崎・H・アリアの戦姉妹の間宮か…」
俺が感慨深く言うと、
「えっ！何で知ってるんですか！」
と、間宮は毛布を吹き飛ばして俺に近づいてきた。
「なかなかの有名人だぞ～お前。確か、滅多にお目にかかれないSランクの超人的武偵の神崎とEランクの落ちこぼれの間宮だからな～」
俺がそう説明すると、　間宮は…
「やっぱり、私なんかがアリア先輩と組んでなんかいけないんですよね…」
と落ち込み初めた。

そんな様子を見てもいられず、俺は思った事を素直に言った。

「なに落ち込んでんだよ。そんな事気にすんな。」

「…でも…」

「聞いた話によると、お前はエンブレム戦をして、勝ってあの神崎と戦姉妹になったらしいじゃんか。誰も勝てなかった神崎に…な。」

「…うん」

「それに、EランクがSランクに教えてもらえるなんて滅多にねーだろ?それを誇りに思え!神崎も戦姉妹になった事に意義は無いらしいしな。」

…俺もいつか、あの人と戦兄弟になれればな…

「うん!そうだよね!ありがとう。」

まぁ、間宮の調子も戻ったし、いいか。

…じゃあ、次にヤルことは…

「さてと、じゃあ事情聴取に戻るぞ~。」

すると、間宮はまた震えだした。

「なぁに、話を聞くだけだ。撃たねーよ。」

その一言に安心したのか、深くため息をした。

「じゃあ質問するぞ~。まずは…いつから見てた?……」

」

俺が顔を赤くしながら聞くと、

「えーとね、その…あなたが、その…抵抗する先輩を押し倒して、強引に…キっ、キスしてるところから…」

…神は我を見放した…

よりによってな～
そこから見られたのか～

俺の本気だけじゃなくて…ソコから見られてたのか…

「…スタジアムに鍵はかかってなかったか？」
念のために聞くと、
「いや、私は学校に向かおうと思ったら凄い勢いで強襲科のスタジアムから出て来た人がいたから、気になって入ってみたんだけど…」
続きは恥ずかしくて言えないらしい。

アイツらは、綾さんのアノモードの怖さのあまりに鍵かけずに逃げちゃったのか～

そして、今間宮に見られたのか…

…後の事を考えると、今やることは…

「…ふふふ」
俺は腰のホルスターから、ピースメーカーをゆっくりと抜いた。
「ひっ！！」
間宮がまた怯えだす。
そして俺はその銃口を…
「さようなら…」
自分のこめかみに突きつけた。
「何やってんですかー！？」
間宮が全力で止めてきた。
「死ぬ…死ぬ…死ななきゃ…」

「何言ってんですかー！！」
「本気見られた…それだけで不登校レベルなのに…」
「不登校もダメですけど死ぬのはもっとダメです！！ってゆうか何で本気を隠すんですか！？そして死のうとしないでくださーい！！」
拳銃自殺しようとする俺を、間宮が本気で止めてくる。

…その後、
俺は、約１０分間、間宮と銃の取り合いをした…

…4　事情聴取と救急救命？（1）（後書き）

次回が終わればミッションを入れていって、
緋弾のアリアっぽくしていくので、

飽きないでご覧いただければ嬉しいです！

まぁ、次回もお楽しみくださーい！

…5　事情聴取と救急救命？（2）（前書き）

面白一割、シリアス九割になってしまいました～

まぁ、お楽しみ下さい。

…5　事情聴取と救急救命？（2）

結局、俺は間宮に銃を取られて、今は間宮の正面向いて正座の状態である。

…立場が変わったな～

「…で、何で本気を見られただけで不登校になったり、…アレを見られて拳銃自殺しようとするんですか？」

…まぁ、ごもっともな質問だろう。

本来ならシカトしていただろう質問に、

「…俺は」

なぜか分からないが…

「俺は、パートナーを作るのが…怖いんだ。」

なぜか分からないが…俺は間宮に告白していた。

「パートナーを作ることが怖い…？」

間宮が怪訝な顔をした。

本来なら言うべきではないような話を俺は…語る。

「俺のパートナー…死んだんだよ…」

間宮が小声で、「…え」

と言ったのが聞こえた。

「俺のパートナーはさ、ガキの頃からずっと一緒にいた奴でさ、小中高一緒だったから、かなり息も合ってな、何よりも…」

俺は続ける…
長い間溜めていた、
暗い俺の闇を解放する。

「何よりも…俺はソイツの事が好きだったんだよ…」
間宮は黙っている。
そんな間宮に俺は忠告するような感じで、俺の過去を話す。

…今からパートナーを作っていく間宮に…

「向こうはどうだったか知らないが、俺はソイツの事が好きだった…コイツを護って死にたい、てくらいな」
間宮は黙って聞いている。
俺はドンドン話を進める。

「だけど、俺とアイツは戦いに対する意欲が違った。アイツはかなりの勇敢な男女で、俺は戦い…イヤ、殺し合いの大嫌いな探偵野郎だった。」
俺の言葉は終わらない。
「武偵高に入学して3日、俺は全科目に手を出していたんだが、そしたらアイツが、『このミッションを一緒にやろう♪』何て言い出したんだ…」

俺達は、中学の時から既にミッションを受けてて、百戦錬磨だったしな…
そう付け加えた。

「今思えば、アイツはこのミッションを成功させて、俺を強襲科に引き込もうとしたんだろうな…武偵高初のミッションとして…」

…そして…

「…そして…死んだ…」

そのとき、俺はどんな顔をしていたんだろうか…

「俺達のレベル的には楽チンだったはずだった…アル奴が乱入して来なければ…」

…アノ野郎のせいで…

…イヤ、

「…イヤ、結局は…俺のせいで…アイツは死んだ…！」

俺は…イヤ、

僕は懺悔するような気持ちで告白した。

「あのとき、あんな奴を…犯罪者を助けようとしなければ…！アイツは死ななかった！！！」

僕はほぼ怒鳴りながら、事実を話す。

「僕は言ったんだ！アイツの正面切って、『僕はお前を護る』って！それなのに、何だアノ様は！！僕はアノ乱入野郎の戦いでも護ることが出来ず、しかも、逆に助けられた！！！」

そんなの言語道断だ！！

即刻死刑だ！！

なぜ犯罪者なんかを助けようとした！！

僕の身勝手で…アイツは…！！！

アイツは死んだ！！！

僕なんかを庇って！！！

コレじゃあまるで…！

「コレじゃあ、俺が殺したようなもんだろうが！！！」

間宮はその間、身じろぎもせずに俺の話を聞く。

「何が『僕はお前を護る！』だ！バカバカしい！愚弄にもほどがある。自分でパートナーを殺すようなめに合わせて、僕はもうクズ中のクズだ！！！」

僕はもう、思い思いに叫ぶ。

…いつの間にか、涙まで流していた…

涙はまるで、滝のように流れ落ちる。

「僕はその後、キレた綾さんに殺されかけた、だけど、死ななかった…」

「なぜ死ななかったのか、なぜ生きているのか、分からなかった…」

「そんなとき、死に際に言った、アイツの声が聞こえたんだ…」

…その言葉は、俺を縛り付ける鎖…

「『強襲科で…弱い人のために…命を懸けた…私の…意志…を…ついで…』ってな…」

…俺の涙は止まらない。

「だから俺は強襲科にいる…殺し合いなんかがある強襲科に…」

何度も転科しようと思ったがな…

「でも、それなら何で本気を出さないの?じゃないと誰かを護れないんじゃない?」

…そうだ。

その通りだよ…

…でも、それ以前に…

「俺はもう、失うのが怖いんだ…」

「…」

「護ってやりたい…でも…それ以上に…失うことを考えてしまうんだ…」

間宮は相変わらず黙ったままだった。

俺の涙は止まらない。

「…本気を出さないのは…頼られたく無いからなんだよ…」

「頼られたく…」

間宮は驚いたように言う。

「もし、俺が本気を出たら多分、皆から頼られたるだろう。そしてミッションに参加を求められる。そして…またあんな事が…」

もう…イヤなんだ…

すると、いきなり視界が暗くなった。

何だろう…温かい…

「辛かったんだね…今までずっと。」

間宮の声が聞こえる。

あぁ、そうか…

僕は今、間宮に抱きしめられてるのか…

道理で視界が暗くなるし、温かい訳だ…

でも、それだけじゃない。

止まってきた涙が…

「ずっと1人で悩んでたんだね。パートナーの事や皆の事を…。皆を傷つけないように皆を突き放して、無能の振りをして相手にされないように、ずっと我慢してたんだね…」

なぜだろう?

アイツの言葉の一つ一つが僕の胸に刺さる…

涙が…止まらない!

「でも、私は認めるよ。あなたはとっても優しくて、仲間思いで、誰よりも…強いってね。」

「!!!!」

その一言で、俺の心のダムは決壊した。

「…ぅぅっうううっ！」

…もう、止まらないな…

「うわぁぁぁぁん！！！、うぁぁぁぁぁん、ひっ、ひっ、…うわあぁぁぁぁ！！」

まるで生まれたての赤ん坊のように泣く僕。

間宮は僕を抱きしめたまま、子どもをあやすように頭をなでてくれた。

それがまた嬉しくて…

一人じゃないと感じて…

僕は泣き続けた。

僕が泣き止むまで間宮は、

…ずっと抱きしめてくれた。

…5　事情聴取と救急救命？（2）（後書き）

事情聴取と救急救命？は後少し続きますが、
次回はミッションに入っていきます。

お楽しみに～♪

…6　武偵高最強（前書き）

いよいよ他作のキャラを入れていくよ～
ヨロシクーＶ（＾－＾）Ｖ

…6　武偵高最強

あの後、気付けばＨＲが始まりそうな時間だったので、俺はひとまず間宮を解放した。
勿論、また話し合うけど、今度は『事情聴取』なんかじゃない、ただの会話だ…

ちなみに、俺はメチャクチャ泣いたから目本が腫れていて、しばらくは人に見られたく無かったから、まだ救護科にいる。

「ふぅ～…」
意味もなくため息をついてみる。

…それにしても…

「間宮あかり…か…」

天井を見ながらボヤーと考える。

久しぶりだったな～
あんな風に接してくれる奴…

今度会ったら…

「久しぶりに見たでござるよ、裕太が誰かに本音を見せるところを…」
ドア越しに聞こえてくる声。
この声は確か…

「よう、久しぶりだなぁ風魔。」
ドア越しだが一応挨拶はしといた。

風魔陽菜
俺と同じ中学出身で、俺と風魔は同じ人を崇拝していた中もあり、
人間嫌いな俺には珍しく気が合う奴だ。

「お前、いいのか？ＨＲ始まるぜ？」
「拙者にとってはＨＲなどより、旧友の心変わりの方が気になるでござるよ。」
「…そうか…」
「こうみえても、拙者もずっと心配していたでござるよ？」
…へー
こいつは少し驚いた！
「何を意外そうな顔をしておるか、拙者かて人の子。旧友の事を心配するのは当たり前でござるよ。」
「…ありがとうな。」
俺が素直に言うと、
「裕太も素直になったでござるな～」
と、感慨深く頷く雰囲気がした。
「それにしても、裕太は本当に見た目は美少女でござるな～」
…何だか、いやな予感がする。
「…いきなりどうした、風魔？」
震える声で聞く。
すると、
「イヤー、コレは一部には大儲け出来て、今月の食事をまかなえそうな品なのでござるが…いかがかな？」
そう言ってドアを少し開けて、写真を見せてくる。
その写真は、泣いている俺を間宮が聖母のような表情で、優しく抱

きしめながら頭を撫でているシーンだった…
「風魔ぁぁぁぁ！！」
それから俺と風魔のリアル鬼ごっこが始まった。

アノ後、結局風魔から写真を奪い取ってやった。
風魔は、
「兵糧代が…兵糧代が～」
だなんて本気で泣いてたから今度何かのミッションを一緒にやるつもりだ。

んで今は、朝に放置したまま忘れてた綾さんと弁当を食べている。

「裕太ってさ～、憧れの先輩とかいないの？」
綾さんはフツウに聞いてきた。
今朝放置されたのに怒ってないって…
まぁいっか。
俺はフツウに答える。
「遠山キンジ先輩です！」
…失礼、誤植があったな。
訂正しよう。
フツウじゃなくて、熱っぽくこたえた。
「へー、やっぱり遠山くんか～、多いんだよね～」

綾さんは納得したように頷く。
そして、こんな話題を取り上げた。

「じゃあさ～、武偵高最強って誰だか分かる？」
…武偵高最強？
俺はフツウに興味が湧いてきた。

「へー、誰なんですか？」
綾さんはあまりタメもせずにフツウに教えてくれた。
「鳳凰院朱雀ってゆうんだ～」
鳳凰院朱雀…
聞いたことのあるような…
「彼は武偵高で珍しく三年間Sランクでいられたことでも有名なのに、一度見たことがあるけど、彼の銃技は…有り得ない。」
綾さんの手は、微かに震えていた。
「綾さ……」
綾さんに何か言おうと思ったら…

「キンジ今日も調教やるわよー！！」
「…今日もか。」
「アリア、少しはキンジを休ませてやったらどうだ？ストレス云々の前に死んじまうぞ。」
「そうよアリア。キンちゃんはわたさないわ！」
「なっ！何でそうなるのよ！！」
「はい朱雀、アーン。」
「舞、何をやっとるか！？朱雀はワシの許嫁じゃ！」
「あんた達何やってんのよ！もう、風穴開けるわよ！！」
「「いい加減にしてくれ…」」

何だか向こうのテーブルが騒がしいな…
「あぁ、噂をすればなんとやら。裕太、アノきれいな黒髪の男の人が、鳳凰院朱雀君だよ。」
あれが、武偵高最強…

…確かに肌で感じて分かる。
多分、俺の本気と探偵術はあの人には通用しない…

俺はしばらく、鳳凰院朱雀先輩を眺めていた。

いや、
眺めるだけで精一杯だった…

…6　武偵高最強（後書き）

次回は朱雀とミッション。なんです…

まぁお楽しみに～

…7　説得と逃走？

何を思ったのだろう。
自他共に認める『人間嫌い』な俺が、
「ほ、鳳凰院先輩！」
鳳凰院先輩に話しかけていた。

「何かようか？」
神崎達をあやすのを止めて、俺の方を見る。
「あっあの、その…えーと～」
しどろもどろになる俺。
クソ、人とあまり会話したことがないから何て言えばいいか分からねー！
とにかく、要件を言うんだ！

俺は大きく息を吸って、ほぼ叫ぶように言った。

「先輩！俺と付き合って下さい！！！」

……シーン

辺りが静まり返った。

あの後、俺は暴走した女子三人（生徒会長以外）に襲われながらも、綾さんの援護や遠山先輩と鳳凰院先輩の足止め、かつ探偵術を使って逃げのびた…
いや、ガチで死ぬかと思った…！

ちなみに、鳳凰院先輩と遠山先輩と一緒に逃げてきた。

「じゃあ、改めて。先輩！付き合って下さい！！」
「竹崎、大事なのが抜けてるだろ。」
憧れの遠山先輩からツッコミが入った。…ちょっと嬉しい。

「では今度こそ、先輩！俺とこのミッションに付き合って下さい！！」
『麻薬の取引を取り押さえよ！』というミッションの紙も見せた。
よし！今度はちゃんと言えた。
後は先輩の反応次第だ…。

「…悪いな。」
…断られた。
「何でですか先輩！」俺が大声だして聞くと、
「お前は確かEランクだったよな、言っちゃ悪いがこのミッションじゃ、Eランク武偵とSランクじゃあ、差があり過ぎる。お前が足手まといになるだけだぞ？」
と言った。

確かに本当のEランクとSランクの武偵がコンビを組むことは自殺行為と同じだ。
だけど、俺は本来の力を隠してる。
本当はSランク相当だと思う。

…だけど…

俺は結局、

「鳳凰院先輩！お願いします！俺と付き合って下さい！！」

頭を思いっきり、ガン！と地面にぶつけて土下座した。

「…ダメだ。」

ガン！

「お願いします！」

「…諦めてくれ。」

ガン！

「お願いします」

「別の人に頼んでくれ。」

ガン！

「…お願いします…」

「…大丈夫か？」

ガン！

「…おねがい…ひまふ…」

フラフラと頭突き土下座をする俺に見かねた遠山先輩が、

「竹崎、本当のこと言った方がいいんじゃねーか？」

と忠告してきた。

遠山先輩は俺の本気がどのくらい強いのかを知っている。

中学の頃に一度、本気の遠山先輩と戦ったことがある。

結果はほぼ互角（若干、優勢）だったが、予備の弾を持って来るのを忘れたから１０分で片が付いた。

ちなみに、今、俺は…

ガン！
「お…おねげーしますだー」
最早、無意識中の土下座をしていた。

「…やれやれ。」
そうつぶやくと、
遠山先輩は鳳凰院先輩に何か耳打ちした。
そして、１０秒ほど考えて、
「分かった。付き合ってやるよ。」
遂に了承してくれた。

「…本当ですか！？ありがとうございます！！」
俺は嬉しさのあまりに、鳳凰院先輩に思いっきり抱きついた。
「コラ、引っ付くな…よ…」
鳳凰院先輩の言葉が弱くなった。

うん、分かるよ～
強烈な殺気を背後に感じるね～

「朱雀、あんた何やってんの…！！」
「ねえ君、どうして私の朱雀に抱きついてるのかな…？」
「小僧、許嫁の前でいい度胸じゃな…」

…今は取りあえず、このバーサーカー三人組（恐）から逃げることが最優先事項のようだ…

…7　説得と逃走？（後書き）

次回いよいよバトル展開！

お楽しみに～！（ｂ＾ー。）

…8　知勇混合！？　麻薬の取引を取り押さえろ！（前書き）

朱雀＆崎太

果たしてどんなミッションになるかな～？

…8　知勇混合！？　麻薬の取引を取り押さえろ！

しかし、
死ぬかと思った…！
バーサーカー三人組は容赦なく二丁ガバをぶっ放したり、大量のナイフを一気に飛ばしてきたり、やたら長い刀をブン回してきたりで大変だった。

僕に探偵術がなかったら二秒で死んでたな…

僕は探偵術で動きを先読みや予想しながら、
最適かつ最小限の動きを見つけ出して避けながら、とある自衛隊出身の先輩から貰った閃光弾を使って一気に逃げ切ったのだった。

後で先輩にお礼を言っとかないとな。

…あのバーサーカー三人組には詫び入れとかないとだな…

まぁ、そんなこんなで、
僕はあの後、夜になるのを待って、
鳳凰院先輩と取引場所に向かった。

え？　口調？
それなら大丈夫。

どうやら僕が土下座している間に遠山先輩がバラしたらしい。

どうりで鳳凰院先輩が折れた訳だよ…

「そろそろだぞ、竹崎。」

「はい、先輩。」

…しっかし、

僕は今、武偵高最強と組んでいるんだよな～。

あの綾さんが震えるぐらいの先輩と…

「何かようか？」

思っていたよりジッと見ていたのだろうか、鳳凰院先輩は不思議に思ったようだ。

「い、いえ！何でもありません！」

慌てて反応した僕を、先輩は怪訝そうな顔をして見ていたが、

「まぁいっか、もう少しで取引場だから気をつけろよ」

と、軽く流してくれた。

取引現場はよくテレビとかで見るコンテナとかがたくさんある埠頭だ。

「先輩、事前の調査によると取引場にいる人数は２３人らしいですよ。」

「そうか。なら２人で間に合うな…って、え？何で人数なんて知っ

ているんだ？」
「事前調査したからですが？」
「いや、事前調査だけでなんでそこまで知っているんだ？」
先輩は分かってないみたいだ…

「先輩、俺は本来探偵科の優等生なんですよ。」
実際の実力はSランクでも足りないくらいだ。
「まぁ、こんなところで話していて取引が終わったら意味がないからさっさと行くぞ。」
「はい。あ、スミマセン、少し待って下さい」
僕は返事をしてから髪留めようの輪ゴムともう一つのヘアピンを取り出す。

「どうした？」
「激しい動きをしそうだから髪留めをするんですよ。」
そう言いながら左の方の目にかかっている髪もヘアピンで留める。

「そうか、じゃあ少し待つからなるべく早くしろ。」
「はい。」
今度は輪ゴムを口にくわえながら、後ろ髪をまとめ上げる。
…うーん、うまくいかない。
髪をまとめ上げるのに悪戦苦闘していると、

「…落ち着け、アイツは男だ…、アイツは女じゃない…、アイツは男だ…。」
と、なんだかいろいろ心配になりそうな事を呟いてた。

その後、僕はすぐに後ろ髪をポニーテールにまとめ上げて先輩に言った。

「先輩。スミマセン、遅くなりました。」
「あ、あぁ…。じゃあ行くか。」

顔を赤らめながら銃を取り出す先輩。
…『ＧＬＯＣＫ．１７』か…
弾の量を重視しているように見えるな、まぁ、『ＧＬＯＣＫ．１７』は使いやすい事でも有名だし、
少なくとも、僕の『コルト・シングル・アクション・アーミー』なんかと比べたら失礼な銃だけどね。

「竹崎、お前は抜かないのか？」
先輩が不思議に思ったらしく聞いてきた。

「心配しないで下さい。僕なりの考えがあるので…。それより先輩、僕はゴム弾を使うんですが、先輩も使いますか？」
「おう。使わせてもらおう。」
僕は９ｍｍ弾用のゴム弾が１７発分入っているマガジンを先輩に渡した。

「さてと、行くか！」
「行きましょう！」

鳳凰院先輩は右から、僕が左から突入して犯人たちを確保する。
それが先輩の作戦である。

…確かにいい作戦に見えなくはない。
だが…

「先輩、その作戦はすこし危ないと思います。」
「うん？何でだ？」
鳳凰院先輩が聞いてくる。

まぁ、簡単に説明すると、
「事前調査によると、向こうは狙撃者がいるそうです。」
と、手短に話した。

「狙撃者か…キツいな。」
先輩が苦い顔をする。

「安心して下さい。僕に考えがありますから！」
そう言いながら、僕はある人の携帯にかける

「あぁ、鷹山先輩。準備は大丈夫っすか？」
『あぁ、大丈夫だ。いつでもいけるぜ。』
「スミマセンね～、いきなりこんな事頼んで」
『ははは、まさかアサルトライフルで狙撃を頼まれるなんてな…まぁ、距離的には少しキツいが、なんとかするさ。』
鷹山先輩は、そう答えた。
後は、

「鳳凰院先輩、今からこちらの狙撃者が敵の狙撃者を狙撃します。距離はあまりないから音はすぐに聞こえて取引をしている奴らにバレますが、鷹山先輩が狙撃する二秒前に突撃します。そうすれば、ギリギリ向こうの狙撃を食らわないし、この距離ならキルイングゾーンに入ります。大丈夫ですか？」

すると、鳳凰院先輩は驚いたような顔をして聞いてきた。

「お前、まさか取引場がこういう状況だというのが分かっていたのか？」

と聞いてきた。

…んなバナナ

そんなのが完璧に分かるのはS研ぐらいだろ…

…まぁ、大体想像はついてたが…

「違いますよ。俺はただ、いろんなパターンを予想して、それらの全てに対処方法を考えただけですよ。」

そう先輩に言っといた。

まぁ、今はそんな事より…

「鷹山先輩、俺が合図してから十秒後にお願いします。」

『おう！』

「…スタート！」

俺はそう言いながら、鳳凰院先輩にも合図代わりのウインクをした。

…なぜか鳳凰院先輩が頬を朱に染めている。

「先輩、風邪ですか？」

腰のホルスターから銃を抜きやすいように調整しながら聞く。

「何でもない、後3秒だ。」
僕たちは、左右のコンテナの端に待機した。
僕は、取引の証拠の為に、写真を撮ってから…

「「行くぜ！」」
と二人同時に飛び出した！
走り出してすぐに「ターン！」という音が合図となり、
僕は無手の状態から0．03秒で腰のホルスターにある二丁銃を掴み、0．06秒で一気に引き抜き抜いて構えながら、0．02秒で放つ。
ようは自分の得意技の超速撃ちである『ソニックショット』をぶちかます。

「ダダダダダダダダダダ！！！！」
12発のゴム弾は全て取引場にいる23人のウチの12人の頭に当たる。

すると今度は、
『ガガガガガガガガガ！！！！』
と、銃声が聞こえたと思うと、
先輩のグロックから放たれた弾は、ヤクザの撃ってきた弾を全て弾きつつ、そのまま銃弾はヤクザの頭にぶち当たった。

僕は、ただぼーとするだけだった。

鳳凰院先輩は、なんと撃ってきた弾を弾いて当てただけではなく、障害物に隠れていた奴も、弾がギリギリ入るぐらいの所に平気に撃って、ヤクザを撃沈させたのだ。
僕は、よく放たれた弾丸を切り落とす事があるけど…
あんな曲芸みたいなことが平気で出来るんだ…

これが鳳凰院朱雀…
これが武偵高最強…

「…カッコいい…」
素直にそう思った。

ははは、
どうりで周り人が多い事だ。

「?、また何か言ったか?」

やべ！　また聞こえてたか！

「いや！何でもないです！後はこの人たちが起きる前にさっさと連行しましょう！」

そう言って僕は大量の手錠を持って来て、倒れている一人に手錠をかける。
そしてあらかじめ用意していたデカい車にヤクザをぶち込む。

「ああ、そうだな。」
先輩もその作業に取りかかった。

…ある意味、
このミッションで一番大変だったのは…
この作業かもしれなかった…

…8　知勇混合！？　麻薬の取引を取り押さえろ！（後書き）

次回は特にシリアスはありませんよ～

ギャグだけです！

それに、ページも少なくするつもりです。

あぁ、後

俺は夏休みあまりないから更新は三日に一度になります。

スミマセンｍ（＿＿）ｍ

…9　謝罪と感謝と1日の終わり。（前書き）

日常編はこれにて終了です。

風邪ひいてるなか書いたからユーモアが少ないかもしれませんが、よろしくお願いします。

…9　謝罪と感謝と1日の終わり。

俺はあのミッションの後、鳳凰院先輩のアパートにお邪魔していた。

何でかって？

謝罪だよ、謝罪。

今日、あんなに怒らせちまったんだからな…
詫びの一つぐらいは入れとかないとな…

「別に気にしなくてもいいと思うんだがな～」
鳳凰院先輩はそう言っていたが、それは俺のポリシーに反する。

何より、今謝っとかないと…
今後、鳳凰院先輩に近づくのを許してくれなさそうだしな…。

そんな事を考えてると、

「着いたぜ。」
鳳凰院朱雀、遠山金次と書かれた部屋に着いた。

…うん？

『遠山金次…？』

俺が怪訝そうな顔でそのネームプレートを見ていると、鳳凰院先輩が、

「俺とキンジは一緒の部屋なんだ。」
と言った。

「何ィィィィ!?」
俺は思わず、叫んでしまった。

武偵高最強でみんなの憧れの的である鳳凰院先輩だけじゃなくて、
俺の憧れの遠山先輩もいるなんて!!

この部屋はどんな楽園だよ!!

どんな化け物がいても訪れてやるぜ!!

すると、ガチャっとドアをあける音が聞こえて、いきなり化け物が
出てきた。

…前言撤回。
やっぱ無理。

「何よ!ウルサイわ…ね……」

俺のさっきの叫び声がうるさかったのか、
様子を見に人が出てきた。

…今度は、前言補強。

…バーサーカー（A）が表れた。

お互いに固まる事２０秒。

うん。

先ずは例の超大作ゲームを真似して、セレクト画面から行動を選ぼう。

1．戦う
2．助けを求める
3．諦める
4．逃げる

うーん、

3番はないな…

と思っていたら、

不意にバーサーカー（A）がスカートを軽くめくって

「あんた何しに来たのよー！！」

と、二丁ガバの銃口をこちらに向けて来た！

そしてかの名言をひとこと。

「風穴開けるわよー！！」
「ギャアー！！」
反射的に左手の裾から長ドスを抜いて、
「バスン、バスン！」
「ガキィン、ガキィン！」

と、二丁ガバから放たれた二つ弾を至近距離から斬り落とした。
「危ねーだろうが！！いきなり何しやがる！！」
掴みかからんばかりに言う俺。

「いきなりそれは無いだろ…」
呆れる鳳凰院先輩。

「うるさい！風穴開けてやる！！」
引き金を引こうとする神崎。

…て、
「危ねー！！」

「ガウン、ガウン！」
「キィン、キィン！」

再び放たれた弾丸とそれを切り落とす長ドス。

「「いい加減にしろー！！」」
俺と鳳凰院先輩の怒鳴り声が辺りに響く。

「あー、もう、風穴ー！！」
「「いい加減に諦めろー！！」」

神崎は諦める気は無いらしい。

…上等だ！

「来いよ！弾切れになるまで相手してやるぜ！」
「オイ！竹崎はいいのかよ！」
「問題なし！」
「風穴無双！」
「はっ！全部叩き落としてやるぜ！」
「お前らいい加減にしろー！！」

その後、駆けつけた遠山先輩と鳳凰院先輩が止めに入るまで、俺と神崎は止まらなかった。

「今日は誠に申し訳ありませんでした！」
鳳凰院先輩が、例の三人組をリビングに連れて来てくれたので、

俺は早速、謝罪と誤解の説明を始める。

…ちなみに、今のセリフは土下座で言ってます。

「あぁ、こちらこそごめんね。あのときはあまりにも予想外だったから…」

「それにその前の会話が会話だけにのぅ…」

「あ、あんたが悪いんだからね！」

元バーサーカー三人組は俺の説明を真摯に聞いてくれて、ようやく分かってくれたらしい。

ふう、

助かった…

「ところで、ミッションはどうだった？」

遠山先輩はそう聞いてきた。

「はい！とてもいい経験になりました！」

「そうか。」

「ええ、本当に…」

俺は頬を赤くしてもじもじしながら言う。

鳳凰院先輩を上目遣いで見ながら…

「本当に、先輩のアレ、…スゴかったんですから…」

シーン…

辺りが静まり返った…。

そして、

「やっぱり許さないわー！！」

バーサーカー三人組の再臨の瞬間が訪れたのだった。

「また、死ぬかと思った…」

結局、

俺はあの後、遠山先輩と鳳凰院先輩の手伝いもあって、誤解を解いた。

まぁ、どこに誤解を含む言葉があったかな…？

俺はただ、『先輩の銃技が凄かった』と言いたかっただけなのに…

ちなみに、今はとある公園に来ている。

…確か、その内この近くで花火があるらしい。

まぁ、そんな公園に
何しに来たかというと、

「よう、竹崎。」
「こんばんはッス、鷹山先輩。」
この先輩に礼をいいにきたのだ。

「鷹山先輩、今日はありがとうございました。」
「いやいや、別にいいんだよ。しかし、何でちゃんとした狙撃者を用意しなかったんだ?」
…それは…

「まぁ、普段だったら綾さんに頼んでるんですが、今日もいろんな奴にミッションの同行を求められてたし…、それに…」
「それに?」
先輩が聞いてくる。

「それに…俺、性格的に人と組むのが苦手で…」
「…あぁ…」
鷹山先輩は納得したように呟く。

そういえば、最初に先輩と会ったときも逃げ出しそうになったんだっけか?
懐かしい…。

「あぁ、後。閃光弾ありがとうございました。」
「おう！使えるだろ？」
「ええ、もう本当に…。あれが無いと死にますね…」
「…いや、俺はそこまでは言ってないぞ？」

とまぁ、そんな感じで、
公園で２０分ぐらい世間話をした。

俺と鷹山先輩はそういう仲である。
お互いに知っている情報を開示しあって、新たな発見を求めるのだ。

…まぁ、大概雑談で終わるが、
この人は話してて飽きないからいい事だ。

いざ帰ろうという時に、不意に鷹山先輩が切り出した。

「そういえば、アドシアード期間中に『魔剣』が動くらしいぞ。」
「ええ、分かってます。」
「じゃあ、お前も魔剣探しをやらないか？」
鷹山先輩は誘ってくれた。

そういえば、出会いもこんな感じだったよな…

一人ポツンと食堂で飯を食ってたら…
「これ、一緒にやらないか？」って…

そんな先輩の優しさに、俺は…今も甘えている。

…だからこそ、

「すみません。それには協力出来ません。」

俺は先輩の誘いを断った。

「…そうか…。」

少し残念そうな顔をする先輩。

「すみません、先輩。」

「いや、いいんだ。」

鷹山先輩は納得してくれたみたいだ。

多分、鷹山先輩は俺の中で綾さんと同レベルなぐらいいい人だろう。

「それに、アドシアードに出て来るヤバい奴は、『魔剣』だけとは限りませんし、俺はそっちにあたります。」

「ああ、分かった。」

「いつかまたこのミッションの埋め合わせでもしましょうか?」

「あぁ、そうだな!」

その後、また五分ぐらい雑談してから、それぞれの家路に着いた。

「ふう、ただいま。」
部屋には誰もいない。

この静かな感じがまたたまらないな〜

「はぁ、しかし疲れたな…。シャワー浴びて寝よう。」
今日は本当にいろいろあったからな…
本当に疲れたな…

俺はシャワーを浴びに、浴室に入ると、
気づいことが一つ…

「あ…、寝癖直してなかった…。」

まぁ、こんなドタバタな感じが、

僕の『日常』だ。

…9　謝罪と感謝と1日の終わり。（後書き）

次回からは、
『アドシアード編』です。
『魔剣編』ではありません。

俺の作品はもう一つのシリーズを狙ってるんで、原作にはあまり踏み込みません。

そこのところ、よろしく！

【2章】・アドシアード事件

「オラオラオラー！！」
俺は朝一番で射撃の練習をしている。
綾さんは後輩の指導に、鳳凰院先輩や鷹山先輩はまだ来ていない。

「おぉ、やるわね裕太。私もー！！」
隣では間宮が射撃練習をしている。
間宮とはあの一件以来仲良くなった。
こいつは俺の本気について黙ってくれている。
本当にありがたい。

「ふー、裕太も間宮殿も全く当たってないでござるな～」

背後から声が聞こえたので振り返ると、

「風魔、お前は何で逆さづりなんだよ…」
諜報科の一年生かつ俺の同士（遠山先輩を崇拝してる）の、風魔陽菜がいた。
…逆さづりで…

「それは忍者だからでござる。」
「黙れ金欠娘」
「それは禁句でござるー！！」
風魔は逆さづりのままクナイを投げる…って
「危な！！」
咄嗟に体を反ってかわす（マトリックス？）俺の鼻先を掠めて床に刺さるクナイ。

「何すんじゃー！！テメー、今避けなかったら額直撃コースだっただろうが！！」
「ふん、人のことをバカにするからでござるよ！」
「テメーが先に言ったんだろうが！！それに、金欠の贖罪って命を捧げることなのか！？あり得んわ！」
ギリギリといがみ合う俺たち、

「あのー、落ち着い…」
「「間宮（殿）は黙ってろ（下され）！！」」
俺と風魔に怒鳴られ静まる間宮。

「大体、何で裕太はワザと外すのでござるか？さっぱり分からないでござるよ！」
「よく見ろや！北斗七星型に当ててんだろうが！」
「意味が分からないでござるよ！撃つならちゃんと撃つべきでござるよ！」
「あぁ、分かった！こうしてやるよ！」
そう言って俺は、
「ガウン、ガウン、ガウン、ガウン、ガウン！」
と、残り五発の銃弾を使って、
「これでどうだ！」
銃と頭と心臓と鳩尾と肝臓部分をソニックショットで寸分狂わず撃ち抜いた。

「おぉ、さすがでござるな～！」
「すごいね～裕太！」

2人とも尊敬の眼差しでこちらを見る。

…恥ずかしい…

「それより風魔、いったい何の用だ？」

俺は何故風魔が来たのかが不思議でたまらなかった。

この『明日無き学科』にはあまり来たがらないだろ…

すると風魔は、

「いや、少し裕太に教えておきたいことがあるのでござるよ。」

教えておきたいこと？

「拙者らと同じ一年に物凄く仲間思いで、あの師匠と同じ雰囲気を持つ者がいるでござる…」

遠山先輩と…同じ？

確かに、遠山先輩は普通じゃない。

二重人格か、それににた得意体質だと思う。

「んで、ソイツの名前は何て言うんだ？」

「へー、人間嫌いの裕太が他人に興味を持つなんてね～」

「…間宮さん…」

「は、はい…ゴメンナサイ。」

間宮は速攻で謝った。

…全く。

「確か…その者の名前は……」
風魔がその名を言おうとしたら、
「最低!!さっさとこの学校辞めちまえよ!!」
「土下座だ土下座!!被害者に謝れ!!」
「いい分けないだろ!!!」

何だ?外が騒がしいな…

「少し様子を見に行くでござる。」

風魔が調査しにいってくれた。

「いったい何が合ったんだろうね?」
「さぁ…」
全く見解がつかない。
不確定要素が多すぎる…。

「ただいまでござる…」
風魔が帰ってきた…はいいが、

「どうした風魔?顔色が悪いぞ?」
明らかに蒼白な顔色になってるな…

「先程の騒ぎの原因は…まさかのあやつでござった…」

「…誰だよ？」

しばらく風魔は黙ったままだったが、風魔は口を開いた。

「先程の遠山先輩と同じ雰囲気を持つ男…神野恭でござる。」

…は？

「先程の騒ぎは、神野恭がパートナーをイジメから庇うために起こした報復らしいでござる。」

「パートナーを…庇う…」

…そこまで、パートナー思いの奴がいるのか…

…自分が何を言われるか分からないのに…

いるんだな…

ヤッパリ、そう奴は…

「風魔、ソイツの特徴は？」

「…裕太？」

間宮が不思議そうに聞いてきた。

ふん、
おもしれー。

「…興味が湧いてきたぜ…！どんな奴なんだ…神野恭！」

俺が久々に人に興味を持った、ある朝の出来事だった。

【2章】・アドシアード事件　（後書き）

感想待ってま～す

…2　アドシアード数日前（2）（前書き）

今回は、
『緋弾のアリア～武偵に憧れた少年～』のある章の竹崎視点でもってあります。

そして、何よりも竹崎のイタい失敗のミッションでもあります。

温かい目で見守って下さい…

…2　アドシアード数日前（2）

「オイ、そこのお前！」
俺は昼休み、噂の神野に話かけていた。

「ほえ？」
間抜けな声を出して反応する神野。

…何かイメージと違うな…
もっと悪鬼羅刹な人物かと思ったのに…

「んで…俺に何かようかな？」
そう言いながら俺の正面を向く神野。

ヤバい！
かなり恥ずかしい！
何て言えばいいんだっけ！？

とりあえずは、要件を言わないと！

「イヤ、その…、お前…」
『お前に用があるんだ！』と言おうとしてギリギリ止める。

バカか俺は！
この前の鳳凰院先輩の時の二の舞をするつもりか！？

つまりはこうすればいいんだ！

俺は思いついたセリフを言いかけた言葉に繋げていう。

「お前…何かに用なんてないんだからな！」

よし！これで前回の二の舞を踏まずにすんだ！

そう思って神野の様子を見ると、

「…あぁそうか。用がないなら俺はいくぜ。」

と歩き始めた。

…あれ～？また失敗！？

てか、どっかいくな！

「オイ、待てよ！」

咄嗟に銃を構える俺、

「何だ？撃ち合うのか？」

すると向こうも銃（ベレッタ）を構えてきた。

「いや、悪い。そうじゃないんだ。」

ここは素直に謝った。

当たり前だ、

いきなり人に銃を向けるなんて失礼すぎだしな。

謝りながら銃をしまい、とりあえずは場所移動を提案した。

「ついて来てくれないか？」

「うん、いいよ。」

「……」

何か軽いな…コイツ。

コイツが昨日、パートナーの為にクラスを敵に回したってゆう、冷酷無慈悲の神野恭かよ…？

ちょっと肩すかしだな…

そんな事を思いながら、俺は情報科に向かった。

「で？ご用件は？」

神野が不意に聞いてきた。

「それは・・・これ、一緒に行ってくれないか？」

「なになに？」

＜緊急、銀行強盗＞とかいうミッションの紙を神野に見せる。

「いいよ？さっさと行こうぜ」

「え？いいのかよ」

「いいよ？でもパートナーも呼ぶね？」

「あ・・あぁ」

…本当に軽いな…
これが軽薄ってやつか？

いや、それとも…
ただ単に人がいいだけか…

ひとまず俺らは分かれてから昨日、鷹山先輩と話した公園で待ち合わせた。

あの公園から現場は近いのだ。

公園で合流して、現場の銀行に向かう途中、俺たちは自己紹介をした。

「俺は神野、神野恭」

「俺は・・・竹崎裕太」
「私は須藤唯だよ、よろしく」

そういって俺達は銀行の前に着く

「さてと・・・」
神野がどうすべきか悩んでる。
俺のやることは決まってる！

「ボサッとすんな！！行くぜぇ！！」
そういって走り出す
「ちょ！！いきなり出るな！！裕太！！！」
神野は大声を出したが、俺は構わずに走り出す、

そりゃそうだろう。
これじゃ、どうぞ殺してくださいといわんばかりだからな。

中の犯人の姿を確認すると、驚いたことに気づいた。

『人じゃない！？』

中にいたのは人型の手に超小型ガトリングをつけたロボットがいた。

すると、
こちらにむけて、
「ガガガ！！！」
と撃ってきた！

フツウだったら弾を斬ることが出来るのだが、いかんせん神野がいる。
本気を出せない…！

仕方ないから俺は弾の動きを予想して、急所に当たらないように体を反らす。

…すると、

「ばかやろ！！」

神野は思いっきり俺を蹴飛ばし、変わりに銃弾を浴びた。

「ダッ！！！」

弾が当たって悲鳴を上げる。

武偵高の制服は防弾かつ防刃性質だが、いくら貫通しないとはいえ、痛みは対して変わらないのだ。

なのに、何で…

神野は俺をかばうようにして銃を構える

「裕太！勝手な行動をしないでくれよ！」

「わ・・ごめん」

そういって神野は犯人と思しきものに目を向けてビックリする。

その隙に、俺は神野から離れて、二丁銃を普通に発砲しながら突進した。

『この件は俺がキチンと落とし前を着ける！』

そう思いながら突っ込んで行ったのだが、

ここで2つ、問題が起こった。

まず1つ目が、

『…！、弾が当たんねー！』

俺の放った銃弾は2、3センチのところで当たらない。

…多分、昨日の、『ソニック12』のせいだ。

あんな荒技使っといて、手入れもしなければどこかにガタが来ておかしくないのに…！！

そんな事を思っていると、

「ダダダダダダダダダダダ！！！！」

放たれた１４発の弾丸。

俺は探偵術で弾の種類と軌道を確認する。

弾は９パラで、弾の軌道は全弾がほぼ同じコースだ。

『これならバンカーでいけるな。』

と、腰に隠してるチート銃、『バンカー・ブレイカー』を取りだそうとして、２つ目の失敗に気づいた。

『…！！、バンカーがねー！！』

いつもは腰のベルト部分にさしてあるバンカー・ブレイカーがなかった。

『くっ！弾斬りで応戦を…！』

と思ったが…遅かった。

銃弾はもう３０センチメートル。

…その時、俺は…

『死』を覚悟した。

「う・・わ・・うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
俺は１４発の弾丸をモロに受けて、
…痛みと衝撃で意識が飛んだ。

「…太！！おきろ！！！」
…どこかで、声が聞こえる…

「ん・・く・・・」
俺は目を覚ましたが、目の前には有り得ない状況だった。
なぜなら、変なロボットがその小型のガトリングを俺に向けていたからだ。
…え？

「クソッ！間に合え！！」
どこかでまた声が聞こえたが、それどころじゃない！
何で俺はこんなのに狙われてんだ？

「え・・ちょ！！！」

とりあえず何とかしようと思ったが、現実は厳しい。

「ダダダダダダダダ！！！」
ガトリングから放たれた銃弾が俺を襲う。

…ああ、そうだった。
…俺、このロボットにやられて気絶してたんだ。
その時！

今更そんな事を思って諦めかけた…

「伏せろ！！裕太！！！」

さっきから聞こえていた声が近くから聞こえてきた。

いきなりいわれて俺はとっさに伏せた。
しかし、俺は戸惑いを隠せなかった
いきなり俺の目の前を隠す人影があった
それは・・・会って間もない、神野だった

「じ・・・神野ーーーーーーーーー！！！！！」

俺は喉が張り裂けんばかりに騒ぐ。

あんなに銃弾を食らって！
防弾とは言っても威力は変わんないんだぞ！
それなのにあんなに弾を食らって、フツウならショック死してもお

かしくないのに…！！

…なのに、アイツは…

「このくらい・・・超楽勝！！！」

…笑っていやがった…

そのまま、神野はベレッタを構えて、ロボットにこう言った。

「改造ベレッタなめんなよ？」

＜ズガン！！＞

神野のはなった弾はロボットの眉間をぶち抜き、ロボットは停止した。

こうして、この事件は終幕を告げた・・・

俺は、ただ…

呆然と眺めているだけだった…

…2　アドシアード数日前（2）（後書き）

多分、次回はギャグ少ないです。

感想、待ってます～

…3　反省と鬼ごっこ？（前書き）

前日談はこれにて終了

…3　反省と鬼ごっこ？

あの後、僕たちは救護科へ向かった。
神野はどうやらあばらを三本やられたらしい。
ちなみに、僕は大量の打撲と五臓六腑が軽く損傷したらしい。

とりあえず、僕は神野に土下座で謝ったのだが、
神野は、
「大丈夫だ、超楽勝だって！」
と包帯を須藤に巻いてもらいながら、笑っていた。
…笑っていたんだ…

僕は、ずっと暗いままの気持ちでいつの間にか…

『どうした竹崎？何かようか？』
鷹山先輩に電話をしていた。
「先輩、今日の夜に会えますか？」
『ああ、大丈夫だが？』
「じゃあ、九時にいつもの公園で…」
『分かった。』
プツンと電話が切れる音がした。
そして、僕は自宅に死人のような足取りで帰った。

「よう、竹崎。今日はどうした？」
今現在８時５０分。
鷹山先輩は１０分前に公園に来てくれた。
「ああ、先輩。こんばんは。」
「こんばんは。」
鷹山先輩は僕の隣に座ってくる。

僕は、鷹山先輩に悩みをうちあかした。

「実はですね…俺、ミッションでパートナーに助けられたんですよ…。」
鷹山先輩は、少し驚いたみたいだが、
「…そうか。」
と短い返事をしただけだった。
多分、先輩が突っ込んでこないのは…俺にちゃんと自分の口で言わせる為だろう。

…この人は本当に…

「それで、俺はそのミッションでソイツの実力を試すつもりだったんです。…そしたら…」
「……」
「俺が足を引っ張って、ソイツに…怪我をさせてしまいました。」
…このひとことを言うだけで、
俺は…泣きそうになっていた。
「ふーん」

「俺は、ソイツの実力が知りたくて、いつもよりバカをしてみました。…けど、それが…あんな風になるなんて…！」
僕は顔を隠して泣く。
「あんな軽率なことしなければ、アイツは傷つかなかったのに…！」
「…それだけか？」
…やっぱりこの人は…凄い。

「それだけじゃないんです。ソイツが俺を庇った時に…思い出しちゃったんです。

俺のパートナーが死ぬ時のことを…」

「そうか…」
そして鷹山先輩は僕の頭を撫でてくれた。

「俺も向こうにいたとき、同じような経験を何度もしたさ…だから、お前の気持ちも分かる。」
「鷹山先輩…」
「しかも、その様子からして、かなり大切な人を失ったんだな。」
…確かに、僕にとってはかなり大切な人だった。
だって、
本当に好きだったんだから…

「だからお前は無能を装っているのか…」
「はい…。」
「トラウマになってんだな？」
「はい…」
「…でも、人を護りたい。」
「はい…」

俺は、最後の一言に嘘はないと言い切れる。

「…大丈夫だ、俺がいるさ。」

「？」

「例え、どんな状況であろうとも、俺はお前を助けるぞ。だから…安心しろ。」

「…！！」

…何なんだこの先輩は…！

どうしてこんなに…優しいんだよ！！

「ひっ、ひっ」

声を上げないように必死に我慢する僕。

それをなだめる鷹山先輩。

その光景は多分、弟をあやす兄みたいだったと思う。

次の日、

俺は神野を見つけるなり、土下座して頼んだ。「俺も仲間に入れてください！！！」

いきなり土下座されてビックリしてる神野。

「え？いや・・・なんで土下座？」

んなことよりまずは…

「先日のご無礼まことに申し訳ございませんでした！！！」

俺はロボット事件の事を真摯に謝る。

鷹山先輩は言ってた。

『相手がキレイな人間なら、真摯に謝ればどんな事も許してやる』

…と。

すると神野は、

「俺もパーティー組んでるが、君もパーティ組んでるだろ？」

と言ってきた。

「なっ！なぜそれを！？」

確かに、

俺は今、風魔や間宮とパーティーらしきものを組んでいる。

でも何で知ってる？

そう思っていると、神野は俺の後ろを指し、

「だってそこの二人ずっと君を凝視しているよ？」

と言った。

…ずっと？

それは・・間宮あかりと風魔陽菜だった

それを見るなり俺は顔を赤くして、

「お・・お前ラァァァァァあっぁ！！！！！」

と怒鳴った！

すると、
「アハハは！！だって傑作だったんだもん！！」
「おもしろいでござるな、人間嫌いの裕太が敬語で話すなんて」
「う・・・ううううううるせぇ！！！！」
と、ギャーギャー騒いでる俺らを見て神野は、
「あのさ、竹崎、友達としてならいくらでも力を貸すよ？」
と言ってくれた。
俺は顔をガバッと上げ、
「マジで！？ありがとう！！！！！」
そういって握手を求める。

「あぁ、ヨロシクな・・・裕太でインだよな？」
そういって握手する
「あぁ、俺は竹崎裕太、神野恭、これからヨロシクな！」

そう言って、俺と神野は別れた。

…後は、

「おーまーえーらー！」
「「ごめんなさい（でござる）！！！」」
脱兎の如く逃げる二人、
「待てやコラー！！」
長ドスを二本、構えながら追う俺。

こうして、
第2回リアル鬼ごっこが始まったのであった…。

…3　反省と鬼ごっこ？（後書き）

…多分、端から見たら、

『妹をあやす兄』みたいにみえたと思う。

次回はいよいよ本編に入ります！

お楽しみに～！

…4　不吉な情報（前書き）

いよいよ本編始まります

…4　不吉な情報

今日はアドシアード前日。
いつもはいろんな危ない物が置いてある武偵高が賑やかにいろどられていた。
なんせあの『強襲科』ですらキチンと危ないもんをかたずけたんだからな～。
とは言っても、武偵高は学年の差別が著しく、一年は最早パシリのレベルを越えてるぐらいの扱いなのだ。
しかも…
「竹崎、コイツを地下に運んでくれ。」
「あぁ？テメーでやれや。」
「竹崎、こっちも頼む。」
「オイコラ、人の話聞いてんのか？」
「こっちもな～」
「…マジでキレっぞコラ。」
しかも、同学年でも強さによって分かれるため、こうやってパシリのパシリが出来ていくのだ。

…んまあ、何やかんや言っても最終的にはやるんだがな。

そして気がつけば、周りはもうパシリ組しかいない。
皆帰ったみたいだな。
…薄情者。
そう思いながら、俺は薬莢の入った箱を運んでいた。
「はぁ、はぁ、はぁ」
…ん？
なんだ？

「はぁ、はぁ、はぁ」
どうやらパシリのパシリ組（俺を含む）の連中がバテてるらしい。
…しょうがねーなー。
「オイ、テメーら先に上がっていいぞ。後は俺がやるから。」
「…え、でもそんなのお前に迷惑かけるだろ？」
「そうよ。武偵憲章一条よ。」
食い下がる男子生徒と女子生徒。
「何言ってんだ？アドシアードは明日始まんのにお前らは疲れ残したままでいる気か？見たところかなり疲れてるみたいだし、この際ゆっくり休んで明日に備えな。」
「…でも。」
「あなたはどうするの？」
だんだん押さえ込んできたな。
「俺はまだ元気が有り余ってるから全部片づけるさ。」
そう言ったら、
「ダメだよ！それならみんなで終わらせた方がいいよ！」
「そうよ、みんなで頑張りましょう。ね、竹崎君。」
あちらこちらで反論が上がる。
…仕方ない、本当の事言うか…
「いいから帰んなー、人の親切はもらっておくべきだぜ。」
それがトドメになったのか、
「…本当に大丈夫か？」とか
「じゃあ、帰るね」などの声が聞こえた。
一部では
「…竹崎君って優しいのね。」
なんて好印象な声が聞こえてきた。
…止めてくれっつうの。

そして、みんなが帰ってから一時間後。

いよいよ、後1つダンボールを運べば終わりと言うときに、誰かがせわしなく強襲科棟に入ってきた。
「誰だー、忘れ物でもしたのか～」
と、緩い言葉をかけてたら。いきなり入ってきた武偵高の制服を着た男が、
「助けてくれ!!俺の仲間が殺されそうなんだ!!」
と騒ぎ出した。

…殺されそうに?

俺の冷静さが消えていった。

「どこだ!その仲間はどこにいるんだ!!」
俺は、先程の男子生徒並みに取り乱す。
「近くの港の倉庫だ!」
「よし、行くぜ!!」
そして俺らは港の倉庫に向かって走り出した。

…これが何を意味するか知らずに…

…5　罠と捕縛（前書き）

竹崎まさかの？！

…5　罠と捕縛

俺は、焦りながら男子生徒の後をついて行く。

もし、その仲間が死んでたらどうしよう…

バカ、んなこと考えんじゃねーよ！

今は何より現場に向かうのが最優先だ！

そうして俺たちは、現場に着いた。

「大丈夫か！？」

俺は倉庫に一気に駆け込んで、右手に長ドス、左手にピースメーカーを構えた。

…しかし、

「…誰も…いない…？」

その倉庫はいろいろな物が置いてあるだけで、誰もいなかった。

そして…！

「ババババババ！！」

「っがあぁぁぁ！！！！」

俺の背中に無数の衝撃が走った！

「あぐっ、ぁぁ…」

俺はなんとか気を失わなかったが、顔面から倒れ込んだ。

すると、

「へー、仲間のことや生き死にに関することなら本当に前が見えな

くなるんだねー。」
先程の男子生徒が、サブマシンガンを構えている体勢で話しかけてきた。

…てことは！

「…俺に…何のようだよ…」
虫息になりながら聞くと、
「お前を勧誘する為だ。」
と、前から聞こえてきた。

「竹崎裕太。君をランパンに招待しよう。」
男は、俺の目の前にあるコンテナに腰掛けていた。

すると今度は、
「ねーそこのアナタ、私たちと一緒に悪いことしよう？」
するとそこには、かなりのグラマー美人がいた…って！
「…ダバダバダバダバ。」
「あら、大丈夫？もしかしてお姉さんの姿に欲情したの？」
「…そうだけど何か文句あんのかー！？（ダバダバダバダバ）」
ええ、しましたよ！
そりゃするでしょ！
ただでさえ胸がデカいのにあの服の着こなしって…！！

…だけど、ここにいたのは3人じゃ済まなかった。
「どうだ、ヤったか？」
と筋肉質のチンピラに、
「…さっさとゆくぞ、いつ武偵が乗り込んでくるか分からん。」
と、白髪長身のじいさんが現れた。

マズいな…
このままだとさすがに、殺ラレル！

「どうだ？ランパンに来ないか？」
リーダー的な奴が俺に聞いてくる。

ソイツの特徴は、ピッシリとしたスーツを着て、オールバックの髪型に、顎のところに少し長めの髭を生やしている。
見た目はフツウのサラリーマンだが、２つフツウと違うところがある。

一つ目は、目つきがまるで蛇を連想させるぐらい異様に目つきが悪い。
そして二つ目が、
…コイツから有り得ないぐらいの殺気を感じる…！
この殺気から分かる。
コイツは今まで何人もの人間を殺したハズだ！

俺は、その殺気におののきながら、
「嫌だと言ったら？」
と聞いてみた。
すると、
「…強引にでもつれていく。」
と言いながら、ニヤリと笑った。

…状況は５対１、圧倒的に不利だ。
だが、

「痛い目を見る前に来たらどうだ。」

と誘ってくる。
…まるでいつでも連れ去れると言っている口調だ、
そして俺は、
「確かに痛い目にあうのはいやだ。だから…」
痛い目にあうのはいやだ、ってとこに反応して、オールバック野郎が小さく笑う。
その隙を俺は見逃さ無い！
「だからテメー等を全員逮捕すればいいだけだよな！なんせ俺は武偵なんだからよー！」
そう言って、俺は昨日鷹山先輩から貰った閃光弾を投げつけた。、
閃光弾は、俺と前にいる連中の前で眩い光を放つ
それを見逃さずに、俺は探偵術で、
先程記憶した相手の位置を脳内でイメージしながら、ソニックショットで光が終わらないうちに、
「バン、バン、バン、バン、バン！」
と、その場にいた全員に向けて撃った。
事実、
「ぐわ！」
とかいう悲鳴が聞こえてきたし、ドサッと何かが落ちる音がした。
どうやら全員倒したみたいだな。
俺が安心して目を開くと、
「残念じゃったな、坊主。」

グサッと、俺の腹にナイフが突き刺さっていた。

…え

腹に伝わるヒヤッとした刃、
ドクドクと流れ落ちる血、
ビリビリと伝わる痛み

全てがハッキリと分かる。

「ッグアァァァ！！！」
俺はあまりの痛みに悲鳴を上げる。
痛い。
ハッキリと痛い。

「何だ？もう終わらしたのか？」
「ふふふ、いけない子ね。」
「……」
「まさか戦闘力があるとはな、誤算だったが、嬉しい誤算だな。」

ヤバイ！
他の連中が起き上がってきた。

ひとまず、俺はじいさんを蹴り飛ばし、腹にナイフが突き刺さったままソニックショットを…
ダメだ！
最初のマシンガンのと今のナイフのダメージで、銃を取り出そうとするだけで一苦労だ！

だが銃はもう掴める位置まで手は伸びている。
銃さえ持てばこっちのモノだ！

後少しで銃を掴むまでいったとき、
「甘いわよ。」
「僕を忘れてないかな？」
ドォォォン！
バン！
と、先程撃たれた時の銃声とドデカい銃声がしたと思ったら、
…俺の両手に風穴が開いていた！

「いってぇぇぇ！！！」
痛みで周りの注意を怠った瞬間、不意に首と腹にに絡みついてくる物があった。
「オイ、クソガキ！痛み程度で気を抜いてんじゃねーぞ！」
後方からそんな声が聞こえる。
多分、あの五人組の中の誰かだろう。

後方にいる奴は、その太い腕で俺の喉を締め付ける。
ヤバイ、だんだんと意識が…！

「やはり、君は我々に必要な存在だ。君がいれば、イ・ウーにも勝てる！」

リーダー的な奴のそんな呟きを聞こえたが、
俺の意識はそこで途絶えた。

…5　罠と捕縛（後書き）

注意、
ランパンとはココが所属してるあの組織です。
漢字表記出来なかったので、カタカナにしました。

次は綾さんサイドです。

お楽しみに～

…6　不安気な捜索部隊（前書き）

更新遅くなってスミマセン

…6　不安気な捜索部隊

「うーん、裕太どこだろう？」
今日はアドシアード当日。
私は今日、近接格闘の競技にでるから裕太に応援してもらおうと思っていたのだが、
「うーん、やっぱりでないな…」
パタンと携帯を閉じる。
朝から三回裕太に電話してるのに、聞こえてくるのは、
「○○お留守番サービスに接続します。」の音だけだ。
うーん。
この前みたいに、携帯忘れて先に学校に行っていると思ってたんだけど…
強襲科コロシアム（？）にも１－Ｄクラスにもいなかった。
はぁと、溜め息が漏れる。
どうやら寝坊してるみたいだ。
「こんな事なら寮に行けば良かったな、そしたら裕太の寝顔見れたのに～」
と、少し後悔していたら。
「京乃宮先輩、ちょっとよろしいですか？」
と、私を呼び止める人がいた。
「はい？」
憂鬱な気分を振り切って、私は正面にいる人と向かい合う。
そこにいたのは、身長が１６８の私とほぼ同じで茶髪の凛々しい顔をした人がいた。
「ん～、どちら様？」
少し怪訝そうな顔をして聞くと、向こうは普通に名乗った。
「俺は二年の強襲科に所属している、鷹山勇治です。」
…うん？鷹山って…確か、

「あぁ、君が噂の鷹山君かー！」
「え！何で俺の事知ってるんですか！？」
「そりゃあメッタに見られないSランク武偵だし、何よりも裕太がよく話してたからね～、『あの人は俺にとってはマジで兄ちゃんだ！！』、てね。」
「……」
あれ？鷹山君が急に黙っちゃった。
頬も赤く染まってるし…風邪かな？
「ところで、私に何か用かな？」
とりあえず、用件を聞こうとすると、
「竹崎がドコにいるか知りませんか？」
と、とても不安そうな顔で聞いてくる。
「いや、私も裕太がドコにいるか分からないんだ…」
ドヨーンとした雰囲気が辺りに広まる。
…裕太、あなたどこにいるの？

「ところで、あなたはどうして裕太を探しているの？」
少し気になったので聞いてみることにした。
すると、
「いや、俺は竹崎とアドシアードの見回りを一緒にやろうとしたから探しているんです。」
ほ、
なんだそんなことか～
と安心していたのもつかの間だった。
「それに…アイツとは夜に会う約束をしてたんですが、来ないどころかメールも返ってこなくて心配に…」

…え？
昨日から連絡がとれない…？

嫌な予感がして、鷹山君に何か言おうとしたら、

ピロピロピロピロ
ブー、ブー、ブー

2つの着信音が聞こえた。

…そして、嫌な予感が現実になった。

『武偵高周知メール。昨日未明、竹崎裕太が拉致、又は殺害された模様。捜索部隊を志望する者は、強襲科コロシアム前に集まるように。なお、このミッションには二年生以上でAランク以上が条件である。』

…え?

アドシアードの賑わいが、気にならないほど辺りが静かに感じた…まるで世界が止まったようだ…

「京乃宮先輩!行きましょう!」
鷹山君の声で現実に戻ってきた。
そして、
「京乃宮先輩!速過ぎですー!!」
周りなんか視界に入らなかった。
私はただ無心で強襲科ドームに向かった。

『おどれ…本当に裕太護る気あるんのか?』

あの人に言われた事を、心に響かせながら…

ハァハァと息を乱しながらコロシアム前に来ると、生徒と先生が口論をいていた。

「行かせて下さい！裕太が助けを待ってるかもしれないじゃないですか！！…だから、お願いですから行かせて下さい！」「ダメだ。お前は一年生だろうが。」

「お願いでござる！裕太は拙者の大切な友なのでござるよ！今回だけはお許し下され！」

「諜報科に何が出来るんだ？諦めろ。」

「カテー事言わないで行かせて下さいよ先生。」

「一年生と言ってもこれだけの人数であたるから大丈夫ですよ！」

「…お前らなぁ」

どうやら一年生が捜索部隊に志願しようとして教師と口論してるらしい。

すると鷹山君がその三人に話しかけた。

「あれ？間宮たちじゃねーか！お前らも捜索部隊に志願すんのか？」

どうやら鷹山君はこの後輩たちと知り合いみたいだ…

「はい！だって裕太が、裕太が…」

「落ち着くでござる間宮殿。裕太の実力を知っているなら…そんな

心配は…無用にござる…！」
泣きそうになるオレンジ色のツインテールの女の子。
それをなだめようとしながら自分も涙をこらえる忍者姿の女の子。
そしてそれを見つめる金髪の長身の女の子と大和撫子系の女の子がいて、最後に

「裕太は俺が助ける！アイツは俺の命の次に…イヤ、俺の命より大切な…仲間なんだからな！」
と、かなり大柄なツンツン頭のゴリマッチョな男の子…もとい
『荒井玄司』君がいて、
合計５人の一年生がいた。
…てか私と鷹山君以外一年生だけだった。
「ねえあなたたち、今回のミッションは『二年生以上』よ。」
優しく指摘する私。
「そんなの関係ありません！」
「拙者たちは裕太を助けたいのでござる！」
「あかりだけだと不安だし、アイツには仮があるからな…」
「私もあかりさんが心配ですが、竹崎さんにも、探偵科のミッションを手助けしてもらいましたから…」
「アイツは俺の相棒だ！助けなくて何が相棒だ！アイツはこの荒井玄司の命にかけて…イヤ、存在にかけて助け出す！」怒涛の熱い叫びが聞こえてきた。
…特にラストは一段と熱い。

けど、こういう一生懸命さ…嫌いじゃないわ。
だから私は、
「先生、私たちが監督しますから許可を下さい。」
だから、私は先生に許可をとってた。

「…京乃宮まで…」

先生が呆れた顔をしている。
…ちょっと心外だな…
「先生、私の二つ名、分かりますよね？」
「くっ、『格闘神の綾』」
「そうですよ。それによく先生たちの危ないミッションをこなしているじゃないですか。」
「うーん。」

少し脅すような口調になってしまったが、そこはスルーさせてもらおう。
スミマセン。
だけど、畳み掛けてもらいます。
「しかも監督の私の他にはSランク武偵の鷹山君がいるんですよ。なら大丈夫じゃないですか。」

念の為、トドメの一撃を射しておいた。

すると先生がようやく折れてくれた。
「…分かった。このメンバーでの出動を許可する。」
よっしゃー！と喜ぶ荒井玄司君達。
すると先生が私と鷹山君に忠告を1つ、
「注意しろ、荒井玄司と間宮あかりはEランク武偵だからな…。一応、別の捜索部隊も編集しておくから無理するな。」

私と鷹山君は、
「「それを速く言って下さいよ…。」」
とうなだれていた。

あの後、私は裕太が攫われた証拠を聞いた。

第一発見者は間宮あかりさんらしく、倉庫が不自然に開いていて、
中から火薬の匂いがすると思って入ったら、大量の血とバラバラに
なっていた『コルト・ピースメーカー』と、極めつけには裕太の携
帯が落ちてたらしい。

普段なら大丈夫なのだけれど、
今から捜索にむかうのに、Eランク武偵2人はさすがにキツいと思
う…。
しかも片方は探偵科レベルはFランク相当らしいから捜索部隊には
合わないと思う…。

だけど、このメンバーはきっと裕太の事を助け出せる。
そう思ったのは事実だ。

何でかって？

決まってるじゃない！

みんな裕太の事をこんなに思っているから…かな？

私は、捜索部隊の部隊長として、みんなに命令する。
「みんな！誰一人欠けずに、必ず裕太を助け出すわよ！」
「「おおー！！！」」
そうして、あらかじめ用意してもらった、車に乗って出発した。

まずは、裕太の銃と携帯と血が見つかった倉庫からだ。

…待っててね、裕太！

…6　不安気な捜索部隊（後書き）

次回も綾さんサイドです

…ちょこっと裕太サイドも

…7　ランパンの目的（前書き）

竹崎サイドです。

…ちょっぴりエッチイかも…

（^―^；）

…7　ランパンの目的

僕が小学生四年生だったある日の事。

「ね～崎太、将来なりたいものとかある？」

幼なじみのアイツが話しかけてきた。

「うーん、僕は…イマイチ思いつかないな～。君はどうなの？」

僕が質問すると、アイツはニヤリと笑ってきて、見透かしたような目で、

「崎太～、嘘ついてるでしょ？」

真っ直ぐに嘘を見抜いた。

僕は頬を赤くしながら、

「た、確かにそうだけど…君には関係ないじゃないか！」

ヤケクソ気味に切り返した。

すると向こうは予想外の言葉をいった。

「多分、崎太とアタシの考えてる事は一緒だと思うよ？」

「え！？」

僕はビックリしてアイツの顔を見る。

「じゃあ、いっせーの、せでお互いに言おうよ。」

「うん、いいよ。」

僕の提案にのるアイツ。

じゃあ…いくよ！！

「いっせーの…」

そして同タイミングでそれぞれの言葉をいった。

「「誰かを助ける仕事。」」

サァーと気持ちいい風が2人の間を通り越した。

「ね、言ったでしょ？」

とてもかわいい笑顔でこっちを見つめてきた。
そんなアイツに僕は、
「でも、僕にそんなこと出来るのかな…」
そう不安を言うと、
「大丈夫！アタシは崎太のことを絶対に護るから、なんの心配ないよ！」
と、笑っていた。
その笑顔が…どこか不安気で、まるで後の展開を知っているようで、
とても、
『怖かった。』

そのうちどこかに行ってしまう気がしたからだ。
だから僕は、
「…君は、僕が護るよ！」
だから僕は、アイツに宣告したんだ。
アイツがどこかに行かないように…
「……」
アイツは黙ったまま俯いてる。
…やっぱり、こんな僕じゃ頼りないかな？
すると、
「ふーん、あなたがアタシを…ね～。」
まるで僕を試すような目でチラチラ見てくる。
…恥ずかしいな。
確かに僕はケンカでアイツに勝ったことは一度も無いけど…！
でも！
「僕が…君を護るよ！護ってみせるさ！」
力強く、真っ直ぐにアイツの目を見て話す。
また、一迅の風が通り過ぎる。
そのとき、
「ふっ、まぁいいわ。そこまで言うんだから、アタシを…護ってね。

」

天使が舞い降りたような笑顔で、アイツは微笑んだ。

ある春の日の、僕とアイツのちょっとした記念日だった。

「…うぅん」

急に視界が開けていく。

どうやら寝ていたようだ。

そう思って、立とうとするとガチャンと何かが引っかかった。

「…足に…手錠が…。」

何やら足に奇妙な文字が書いてある手錠がガッチリとつけられていた。

仕方ない、ピッキングするかと手を伸ばそうとすると、

「ガチャ、ガチャ」と嫌な音が聞こえた。

ハァーと溜め息が漏れる。

どうやら俺はいわゆる、『拉致監禁』されているようだ。

今までは、こんな状況にある人を何度も救出したことはあったが…

まさかこっち側になるとはね…

…ところで、

「ハァ、ハァ、ハァ」

何でこんなに息をするのがダルいんだろう?

いつもより体が重いし、何よりも
「体が……熱い…！」
まるで火鉢を周りに大量に置かれているみたいだ。
それに、いつもみたいなハッキリとしたいい案が思いつかない。
油断するとまた寝てしまうぐらい頭がボーとしている。
…この症状、風邪か？

そう決め込むと、いきなり、「ギイィ」っという音がして、視界が明るくなった。
どうやら、目の前のドアが開いたらしい。
そこにいたのは、
「あら、ようやく起きたのね～。」
「ようやく起きたか、竹崎裕太君。」
先程の胸デカ女と、リーダー格のオールバック男が入ってきた。

「ハァ、ハァ、ハァ…僕に、何をした…？」
息も絶え絶えに聞く僕。
口調を気にしている気力すらない。
「先程みたいに暴れてもらわれたら困るからな、超能力専用の手錠と体と頭の動きを鈍らせるために、毒を少々盛らせてもらった。」
「…！！」
…どうりで熱っぽいわけだ…

僕が妙なところで納得していると、
「君にはランパンに来てもらおう。そこで我々に協力してもらうぞ。」
オールバック男はそう静かに告げた。

「…協力って、何を…」
意識を振り絞って聞いてみた。
その答えはこうだ、
「我々の現在の目的は…イ・ウーの頂点、『教授』の暗殺だ。」
…は？
イ・ウー？
教授？
暗殺？
…そんな事に何で僕が必要なんだ？
…ダメだ、今の頭の状態じゃマトモな推理ができない。
そんな状態を気遣ったのか、向こうから理由を話した。
「イ・ウーの頂点、『教授』はかなり強い。だが、我々はここにいるメンバーと後５人、そのランパンの精鋭１０人で教授の暗殺にあたるつもりだ。」
…つまり、敵の大将をみんなで袋叩きにするつもりか。
…卑怯だな～
１対１０とか、勝敗は見え見えだろうが。
すると、オールバック男は予想外な言葉を言った。
「だが…このままだと我々は負ける。」
…はい？

１対１０で負けるのか？

「教授は強い。多分、この世界の誰よりも強いだろう。そして何よりも教授にはあるものが備わっている。」

オールバック男は続ける。

「教授に備わっているもの…それは『推理力』だ。」

その言葉を聞いた時、

僕は暑さではなく、冷や汗を書いた。

なぜ拉致られたか分かったからである。

…つまり、

「つまり、僕を使って、その、『教授』に、対抗する気だな…」

相変わらず、息が絶え絶えだが話した。

すると向こうの解答は、

「御名答」だってさ。

すると

グイッと急に胸ぐらを掴まれた。

そして、

「君は我々の勝利の鍵だ。絶対に…逃がさないぞ。」

僕はその時、

…震えていた。

ガクガクと、

ブルブルと、

震えていた。

それだけ、もの凄い殺気のある目で睨みつけられたのだ。

「あらあら、ダメじゃない『孫権』。そんなにその子をそんなにイジメちゃ。」

「…大蕎」

いつの間にか、胸デカ女が僕とオールバック男の間に割って入っていた。

ふーん。

この男は『孫権』ってゆうのか…

んで女の方が『大蕎』か…

…大蕎っていうより、『だっき』だろ。

「ふん、それより大蕎。毒が効き過ぎてないか?このままだと城に着く前に死ぬぞ。」

「あら?分量間違えたかしら?」

オイ、そこは間違うなよ。

死んじまうだろうが。

「少しぐらいは解毒してやれ。」

「了解。」

そういって何かの液体が入っているビンを取り出す大蕎(?)。

そしてそれを、

「んー。」
飲み始めた…てコラ。
そこは僕によこせよ。

そう言おうかと思ったら、

『はい、どうぞ。』
「！！！！！！」
小声で呟きながら、
…く、くく、『口移し』してきやがった！！

「んー！！んーんー！！んー！！！！！！」
必死に抵抗しようと思ったが、
僕は現在拘束中。
両手足が全く使えない！
故に抵抗できない！！

僕はそのまま、なされるままに相手の口の中にあった液体を受け取る。
その間、大蕎はずっと舌を絡めてくる。
大胆かつ繊細に、とても気持ちよく、
鏡を見なくても、自分がかなりウットリした顔をしているのが分かる。

かなりやりなれてるな…
なんだか…全てをゆだねたくなる。

そして、
大蕎になされるまま約1分経過。
「ぷはぁー。どうだった？」
大蕎がようやく僕の口を解放してくれた。

ちなみに、当の僕は、
「ほぇ……」
思考停止していた。

だが、まだ毒がかなり回っていたのか、
はたまた、解毒剤の副作用なのか、

また、僕の意識は闇の中に消えた。

綾さんたち、心配してるかな？
なんて思いながらね…

…7　ランパンの目的（後書き）

次回いよいよ場所特定までいきます。

ようは綾さんサイド

…8　現場特定と突撃用意（前書き）

現場特定に四苦八苦中

…8　現場特定と突撃用意

私たちは、裕太の血が見つかった倉庫前まで来ていた。
「ここで裕太が…」
倉庫の中にはいると、
中はかなり薄暗くてあまりまわりが見えなかった。

「確か、ここで裕太の銃とかをみつけたんですよ。」
間宮ちゃんが懐中電灯である部分を照らす。
…するとそこには、
「…う!!」
目を覆ってしまいたくなる程の黒ずんだ後があった。
私たちはそれが血であることが直ぐに分かった。
だって…その部分から鉄臭いニオイが発しているのだから。
「クソ!このままだと竹崎が!速く助けなきゃ、竹崎が死んじまうだろうが!!」
荒井君が叫び散らしている。
ダメだよ!そんな事したら…!

「裕太が…助からない…?」
「そ、そんなの嫌でござるー!!」
2人が突然泣き出した。

それはそうだ。
ただでさえ生きているか死んでいるか分からないという不安定な状況で、あんな事を言えばああなるだろう。

「オイ!お前ら落ち着け!」
鷹山君が怒鳴って止めようとしているが、3人とも混乱したままだ。

…仕方ない。
あまりやりたくなかったのだけど。

ふう、と息を吐いて心を落ち着ける。
次に前屈みになりながら、左足をゆっくりと引く。
最後に右足を大きく振り上げ！
全体重を右足に乗せて地面に向けて振り落とす！

ズドォーン！！！！！！

もの凄い音がして、右足周辺はかなり凹んでいた。

そんな状態から一言。
「静かにしなさーい！！！！！」

…シーン

どうやらみんな落ち着いたようだ。

「とりあえず、今は現場を確認するのが最優先よ。それもしないで悲観的になるのはやめなさい。」
みんなは黙って聞いてくれている。

ヤッパリ『震脚』は脅しにはかなり聞くようだ。

「鷹山君、とりあえず3人の相手をして上げて。」
「…あ、はい！」
鷹山君は、どうやら黙らせようとして構えていたＡＲを上に構えていたらしく、
それをコンパクトにたたんでからあかりちゃんと陽菜ちゃんの元へ向かった。

…その発想がヤッパリ自衛隊出身だね～。
混乱したときの落ち着かせかたをちゃんと理解してるみたいだ。さすが『第二次朝鮮戦争の英雄』だね～。

…後は、

「志乃ちゃん、あなた探偵科よね？」
「あ、はい。」
「じゃあ、現場のこの状態から考えられる犯人たちの行動を予想して。」
「え？たちって…何で犯人は複数だって分かるんですか？」
志乃ちゃんが不思議そうにこちらを見てくる。

何でかって？
そりゃあ…
「１対１で裕太が本気で戦っていたら、例え勝てない相手でも絶対に捕まったりなんかしないよ。」
「え？でも竹崎君はたしかＥランクなのでは？」
怪訝そうな顔を緩めない志乃ちゃん。

…裕太、ごめんね。
と心の中で謝ってから私は言った。
「…裕太はね、本当はSランクレベルの武偵なんだよ。」
「えぇ！？」
志乃ちゃんがビックリしている。
まぁそうでしょうね、何でSランクレベルの武偵がわざわざEランクレベルの武偵のフリをするのだと思うわよね。

そして私は…

…私は裕太のヒミツをバラした…

裕太は気づいて無いみたいだけれども、
私の『キル・ヴァーサク』を過去に三回止めてくれた時に副作用として発生した。
『メザ・キル』の時の記憶を恥ずかしくて覚えてない振りをしたから裕太はあの状態では、『あれは記憶に残らない。』と解釈して、手加減なしになって戦ってくるから分かる。

あの子は間違いなくSランクレベルだ。

なのに…あんな風に『落ちこぼれ』扱いされるのに、私は耐えきれなかった…
そのたびに裕太に助けてもらった。

…そんな優しい裕太を、誤解させたまま武偵高を卒業するのはイヤだったから、

私はこの場で全て告白させてもらった。

…ごめんね、裕太。

でも…アナタはもうこれ以上傷つく必要はないのよ!!

「…アイツにそんな過去があったのか…」

「そう言えば、入学して早々に死亡者が出たらしいですが…まさか竹崎君のパートナーさんだったとは…」

ライカちゃんと志乃ちゃんが驚いている。

でも、表情から察するに、

どうやら他のみんなは知っていたみたいだ。

いけない!

こうしている間に裕太が…!!

「みんな!速く現場検証するわよ!」

速くみんなに指示を出そうと思った矢先、

「ピロピロピロ♪」

と、私の携帯がなった。

慌てて電話にでると、知らない声が聞こえた。

『もしもし、京乃宮先輩ですか?』

「はい、京乃宮は私ですが?」

『どうも、俺は神野恭って言います。』

…神野?

神野って…この前の事件の神野!?

でも、何か私にようがあるのかしら?

「神野君、私たちは今任務中なの。手短に内容を教えてくれる？」
『はい。じゃあ軽く要約しながら言いますね。』
「うん。」
『今回のミッションは俺はパートナーの護衛があるので行けませんが、変わりに情報科の「神楽坂　冬威」ってヤツに今回のミッションを手伝うように言ったので、裕太の場所特定は冬威に任せてあなた達はいつでも出撃出来るよう準備してから情報科に来て下さい。情報科に来る頃には解析が終わっているはずです。』
…手回しが速いわね。
「ありがとう。じゃあ、後で情報科に向かうわ。」
『いえいえ、…裕太を頼みましたよ…』
そう言って電話は切れた。

私はみんなの方に振り返り、告げた。
「今から情報科の協力者のところに行きます。そしてその後は裕太がいる現場に向かいます。けれども現場で何が起こるか分からないからC装備で救出に向かいます。分かったかな？」
「「はい！」」

「じゃあ、行くわよ！！」
「「はい！！！」」

私たちは車に乗り込み、情報科に向かった。

そしたら本当に解析は既に終わっていたらしく、発信機とインカムを渡してきた。

私たちはそのまま急いでロジに向かった。

「みんな！必ず裕太を助け出すわよ！！」
「「オォーー！！」」

裕太…
私たちは…絶対にアナタを助けるわ！

だから、
後少しだけ…待っててね。

…8　現場特定と突撃用意（後書き）

まただよ…（―｜―＃）
ロジの漢字が見つかんねー

すみません。

後、次はいよいよバトルかな？

まぁ、お楽しみに～

…9　助けて…！（前書き）

すみません。

バトルはまだ始まりません

…9　助けて…！

「…了解した。今からそちらに向かう。」

「……ん」

何やら遠くで声が聞こえる。

だが寝起きのためもあってうまく聞こえなかったな。

「うん？起きたか竹崎裕太君」

近くに孫権がいた。

今、電話をしていたのは孫権らしい。

ちなみに、毒はまだ残っているみたいだ。

体がまだダルい。

「我々はそろそろランパンの城に向かう。」

「…そうですか…」

「…ふっ、随分と余裕そうだな？」

孫権は嘲笑気味に笑う。

…バカなのか？

「例え僕をその…ランパン？に連れて行ったところで僕はお前らには従わないぞ。誰が犯罪組織の言うことなんか聞くか。」

そう、ごくふつうの事を言ったら今度は、

「ははははは！」

…完璧に嘲笑された…

テメーはっ倒すぞ！！！

「分かっていないな、君は。そう言うときは頭を使うのだよ。…例えば、催眠術や薬を使うとか…」

…この言葉だけで既にヤバくないか！？

そう思いながら必死に回らない頭をフル回転させながらコイツらに従わない方法を考えてる中、孫権は恐ろしい事を言った。

「後は…人質をとるとか…な。」

「！！！！」

僕はそれを聞いた時、

口を大きく開き、そのまま思いっきり舌を…

「やはりな。」

「ムゴ！？」

噛み切ろうとしたら、

孫権に口の中に手を入れられて塞がれた。

「君はどうやら人質をとられるのが嫌みたいだな。よし、君には人質という脅しを使うようにしよう。」

「ムゴー、ンゴー！！」

クソ！このままでは…綾さんたちに被害が！！

「そして味方に被害が起きそうになると、敵を倒すことより自分を犠牲にして味方を護るタイプか…」

「！！」

ヤバい！いろいろバレた！

このままだと本当にヤバイ！！

速く、速く何とかしないと！！

「大喬。」

「ハーイ」

不意に口から手が抜けたと思ったら、コンマ一秒間で口に布を噛ませられ、そのまま素早く後頭部で縛り付けられつしまった！

「んー！んー！」

「これで自殺は出来ないな。」

「もう！危ないことしちゃダメよ！」

これはかなりヤバイ！！
この状態だと、自殺どころか助けを求めることも出来なくなった！
もう…手の撃ちようがない…！！

「さぁ、行くぞ。我々の城に、『ランパン』にな。」
「んー！」
僕は孫権の肩から必死に暴れて逃げようとするが、
努力むなしく、そいつらのデカい船…てか無人の豪華客船に乗せられてしまった。

孫権たちは、豪華客船のある青空がハッキリ見えるプールサイドに来ると、僕をまた近くの柱に縛り付けて、
僕をチラチラ監視しながら近くの椅子に座った。

あの様子を見るに、隙は全くない。

武器も全て客室において行かれた。

終わった…

もう…逃げられない。

僕はこのまま犯罪組織の一員となって、教授とやらの戦いや、いろんな犯罪を犯すのだろうな…

そう思うと…

涙が出てきた…

コイツらの組織の一員になったら、
アイツとの約束と正反対の事をする事になるんだろうな…

弱いを傷つけて踏みにじる…
そんな事を、するんだろうな…

そして…それを止めるために来た、綾さんたちとも戦うのだろうな…

そんな事…イヤだ!!
僕は、誰かを傷つけてたくなんかない!!

…誰か、誰か、誰か…!!

……不意に、
アイツが死んだ後。
綾さんに殺されかけ、そのときの仲直りに言われた言葉を思い出した。

『あの子の分まで…私があなたを護るわ。』

…助けて、綾さん！！！！！

「ありゃ、なんだ？」

チンピラみたいな男（めんどいからピラ男）が上空を見て不思議そうに呟いた。

どうやらヘリコプターがこちらに近づいているみたいだ。

…すると急に

「ガガガガガガガガガ！！」

と４方向から弾が無数に飛んできた。
孫権は素早く、腰に隠していた剣で柱を切り落とし、僕を担いで近くの遮蔽物に飛び込んだ。
その場にいた、ほかの３人もそれぞれの近くにある遮蔽物に飛び込んでいた。

ちらっと上空を見ると、
見覚えのある三人がパラシュートで降りてきていた。
そのメンバーは、

「竹崎ー！！生きてるかー！！」
金髪で、女子にしては長身の『火野ライカ』と、

「竹崎ー！！今行くぞー！！」
僕の、頼れる優しい兄ちゃん的存在の『鷹山勇次』先輩と、

最後に、
『裕太ー！！助けに来たわよー！！』
僕の…昔からお世話になってて、今では一番大切な人。
…『京乃宮綾』さんが、最後に降り立った。

そして、

「アナタたちを誘拐、および密銃の容疑で逮捕します。」
両脇に挟んで構えたＡＲを向けて、宣戦布告をしながら、
「裕太、もう少し待っててね。」
と言った。

…あれ？
何でだろう？

気づいたら、
涙が…止まっていた。

…9　助けて…！（後書き）

次回こそいよいよバトル開始です！

すみません、バトル開始まで時間をかなりとってしまって。

なにとぞ、飽きないで下さいまし。

m（＿＿）m

…10　救出戦ｂｙ一年連合ｖｓ陸遜（前）（前書き）

一年連合ｖｓ優男です。

果たして勝敗はどちらに

…10　救出戦ｂｙ一年連合ｖｓ陸遜（前）

「いい、今から作戦を説明するわよ。」
「「はい！！」」
私たちは今、ヘリの中でブリーフィングをしている。
「まずは、私と鷹山君とライカちゃんのＡＲ三人組で突撃するわ。」
「「はい！！」」
「そして、私たちが注意を引いている間に陽菜ちゃんたちが裕太の捜索をする。もし、私たちが裕太を見つけたのなら犯人の背後から容赦なく襲ってあげて。」
「「はい！！」」
作戦は以上で終わり。
…後は、

「京乃宮先輩、敵の船が見えました！」
裕太を助けるだけよ！

「鷹山君！ライカちゃん！準備はいい？」
「「はい！！」」
「陽菜ちゃんたちは反対側に降りていって。」
「「了解（でござる）！！」」
「３、２、１…ＧＯ！！」
そうして私たちは、豪華客船の甲板に向けて飛び降りたのだった。

そして、

「裕太、もう少し待っててね。」
ようやく…見つけた！

私は両脇に抱えたＡＲのトリガーを引く。
「ずだだだだだだ！！」
激しい銃声が辺りに響き渡り、四人はさらにバラバラに分かれる。
「鷹山君はそのおじいさんを、ライカちゃんは女の人を、私は目の前のゴツイ人と裕太を抱えている人とやるわ。」
「了解！！」
「無茶しないで下さいね！！」
対戦相手はそれぞれ決まった。

…後は、
「…ソクラテス。」
「…了解したでござる！」
インカムであちらの分隊長の陽菜ちゃんに暗号通信をする。

向こうも理解したようだ。

じゃあ、
「裕太を返しなさーい！！」
私は左右のＡＲをそれぞれに向けて発砲した！

それに乗じて向こうも銃を構える。

さぁ、救出戦の始まりだ！！

「急ぐでござるよ！」
「風魔…、速い…、」
「待ってよ～」
先程、綾殿から受けた暗号通信、『背後から強襲』のために、急いで向かっているのでござるが…
「みんな体力がないでござるな…。」
某以外は床にへたり込んでしまったでござる。
「風魔が、速すぎ、なんだよ、」
「陽菜ちゃん、そんなに、急いだら、襲撃に、合ったら、お終いだよ、」
「…あかりさんの、いう、通りです、」
みんなはかなり疲れているようにござるな…
それに間宮殿の言うことも一理ある。

…少しぐらいの休憩も必要にござるな。
「了解したでござる。今より1分間は休憩にするでござる。」

「「ふぅ…」」
「ただし！1分でござるよ！それ以上現場に留まると…」
『敵に見つかる可能性が上がるからだよね？』
「！！！！」
某は思いっ切り、前に飛び込みながら姿勢を変え、声の主の正面を向いたら真後ろにバク転とバク中しながら空中でクナイを3本、相手の両肩と鳩尾に向けて勢いよい放った！

…しかし、
《ガガガガガ！！》
と、持っていたサブマシンガンから放たれた六発の弾丸により防がれてしまったでござる。

「貴様…何奴。」
皆のもとに着地して、ゆっくりと相手の特徴を見計らう。
相手は、武偵高の男子の制服を着た、推定１７０の男で、
顔つきはかなり柔和で、決して犯罪組織の一員には見えないでござる…

「僕の名前は『陸遜』、ランパンのメンバーさ。」
「…ランパン？」
某は首を傾げたでござる。
ランパンなどという犯罪組織は今まで聞いたことがないでござるよ。

「そして…竹崎君をおびき寄せて捕らえたのも、僕さ。」
「…！！」
こやつが…裕太を…！！

プチン！っと、何かがキレる音がした。

「貴様ー！！」
…気づけば、
某は怒りに身を任せて敵に向かって突撃した…
向こうの薄い笑いや、向けられた銃に気づかないぐらいに怒りながら…
そのままクナイを…！
「落ち着け、風魔。」
「ぐえっ！！」
投げようと思ったら、荒井殿に制服の襟を掴まれ、そのまま力任せに後ろに引っ張られ、変わりに荒井殿が前に出る。
チャキッ、と右手に持った横に銃を寝せた状態で、漆黒のＭ５００の撃鉄の音が響く。
「何をするか荒井殿！」
「挑発にやすやす乗るんじゃねーよ。」
「しかし、あやつは裕太を攫って、あまつさえ裕太をどうにかするつもりでござるよ！それを荒井殿は看過するつもりか？！」
「別に看過はしない。ただ、冷静さを失ったら数で勝ろうが…こっちが負ける。」
「……」
確かに、荒井殿のいうとおりでござる。
戦いでは常に冷静であれ…そんな事は分かっているでござるよ！

しかし、しかし！
荒井殿は何も思わないのか！
裕太を攫って、何かを裕太にするつもりであるこやつらに…！

「荒井殿は！…」
某は、改めて荒井殿に反論しようと、荒井殿に視線を移すと…

荒井殿の銃を持っていない左手から、赤い液体が流れ落ちていた…
それに、
荒井殿の姿勢をよく考えると、
荒井殿は半身で某を庇いながら、銃を構えているのだ。

「何だ、風魔。」
「…すまない…荒井殿。」
「?それより、今はコイツに集中しろ。」
「うむ。」
確かに、そうでござった。
今は一刻も早くこやつを倒し、綾殿と合流しなければ…

「よし。とりあえず、フロントとバックを決めるぞ。」
「…うん?それは某の仕事では?」
「まずフロントが俺と佐々木、バックが間宮と風魔だ。」
「だからそれは某の仕事でござるよ!」
「「了解!」」
「お二人も了解するのが速いでござるよー!」

某がそう狼狽していると荒井殿が小声でみんなに通達してきた。
「…5秒後だ。」
「「了解…」」
同じく小声で返した。

5…4…3…2…
「行くぜ!!」
「「まだ2秒残ってるから!!」」
荒井殿がフライングして、志乃殿が刀を構えながら追いかける。
「間宮!風魔!撃て!佐々木は俺の真後ろにいろ!」

荒井殿は指示を出しながら自身も銃を撃ちながら走る。
「陽菜ちゃん！いくわよ！」
「…了解！」
《ダダダダダ！！》
と、左から間宮殿のマシンガンが、
《ヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュン！！》
と、右から某のクナイが陸遜を襲う！

…だが、
「甘いよ。」
陸遜は背中からＵＺＩをもう一つ取り出し、
「ババババババババババババババ！！」
と、自らに降りかかる無数の弾丸を二丁ＵＺＩで撃ち落とした。

「コレで倒せると思ってねーよ！」
すると荒井殿が体を左に曲げると、遠心力を付け加えた左拳を大きく振り抜いた。
「危ないな～」
陸遜は前もって予想していたらしく、
軽く右に避けた。
《ズドォーン！！！》
とスゴイ音がして、荒井殿が放った左拳が壁を貫通していたでござる。

…あり得ん…

そう傍観していると、
荒井殿が目でこちらに視線で指示を向けていた。
『二人とも突撃しろ！』

『『了解！』』
某と間宮殿は突撃する。

陸遜が右に避けると、そこには…
「ハァァァ！！！」
志乃殿が抜刀術で陸遜に斬りつけようとしていた。
「くっ！」
さすがにコレは避けにくかったらしく、背を思いっ切り反りながら、バク転をして何とか避けた。
…だけど
「私たちを忘れてない？」
「我々は、『四人』いるのでござるよ！」
「！！！！」
無防備な背中に、ありったけの弾丸とクナイを撃ち込む！
「ギャアアアア！！」
陸遜が大きな悲鳴を上げて、ＵＺＩを落とす変わりに、遠くにバク転して逃げる。
だが、
ダメージが大きいのか、その場に片膝をつく。
「陸遜、未成年誘拐と密銃の容疑で…」
そして、皆で一言。
「「逮捕します！」」
皆がそれぞれの武器を陸遜に向ける。

圧倒的不利の状況で、陸遜は
「…僕は、まだ、負けて、ない！」
虫の息になりながら、制服の中にあるホルスターから二丁のグロック１７を構える。
「諦めたらどうだ？この人数相手にそんな状態で勝てると思ってい

るのか？」
荒井殿が一歩前に出て皆の先頭に立つ。
「間宮、佐々木、後ろの警戒を頼む。風魔は俺の援護だ。」
「「了解。」」
皆に指示を出した後、
荒井殿は銃を構えながらゆっくりと近づく。

すると、陸遜がいきなり
「爆弾って怖いよね。」
と小声で呟いた。
その瞬間、
「お前ら！そのＵＺＩから離れろ！！」
と荒井殿が叫んだ。
…は？
「遅いよ。」
陸遜が片方のグロックを置き、ポケットから変なボタンを取り出して押した。

何をやっているのでござるか？
そう思ったのもつかの間、
ＵＺＩが眩い光を放ち始めた。

そこで某はやっと分かった。
…これが爆弾であることを。

そう思いながら、何もできずにただ、ボーとしていると
「お前らー！！」
と間近で荒井殿の声が聞こえて、
何かが上に覆い被さってきたでござる。

そして

《ドガァァァァァァァァァァァン！！》

と激しい音と激しい衝撃で、

某の意識は飛んだでござる…

…10　救出戦ｂｙ一年連合ｖｓ陸遜（前）（後書き）

次回は誰になるかな～？

…11　救出戦ｂｙ大蕎ｖｓ火野ライカ（前書き）

火野ライカｖｓ大蕎です。

では本編へ
レッツゴー！

…11　救出戦ｂｙ大蕎ｖｓ火野ライカ

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、」
「どうしたの？息なんか上げちゃって。もしかして、もう降参なのかしら？」
「ハァ、ハァ、…まだまだ！」
私はそう叫びながらＡＲを撃つ。
《ダダダダダ！！》
だけど、向こうにはちっとも当たらない。
向こうは軽く避けてしまう。
『まるで弾が見えてるみたいだぜ…』
牽制射撃をしながら近くの遮蔽物に隠れる。

とりあえず、状況を確認しないとな…
「チッ、後マガジンが一つだけかよ…！」
小声で毒づくと、何かが私のそばに落ちてきた。
「！！！！」
私は反射的に遮蔽物から飛び出た。

…だが、
「残念～。それ、手榴弾じゃないよ。」
と、微笑みながら、銃を構えて、
「ドオォォォン！！」
と、激しい銃声が聞こえた。
それと同時に右足に激しい衝撃と痛みの症状が表れて、
「キャアアアア！！！！」
思わず悲鳴を上げてしまった。
「あらあら、可愛らしい悲鳴ね。」
それを微笑みながら銃を構え直す大蕎と呼ばれている女。

「クソ！」
私は素早くナイフを取り出して、大蕎に思いっ切り投げる。
「おっと、危ない。」
すんでのところでかわしてこちらに銃を向けて来るが、何とか先に船内に逃げることに成功した。

私はしばらく走って、完全に大蕎が見えなくなってからたくさんある中の一つの客室に入って扉をゆっくりと閉める。
ちなみに鍵は開けたままにしておいた。

私は、ハァハァとワザと大きく息をして呼吸を整える。
とりあえず体力は持ち直しておかねーとな。

「ハァ、ハァ、ハァ、あの銃…多分『ＤＥ』だな、」
ＤＥとは、『デザートイーグル』の略であり、・５０ＡＣ弾という今現在では最大の威力が出る弾を扱うことが出来る。かなりの大型拳銃だ。
けど、
「ＤＥってフツウ、ワンハンドショット出来る訳がないだろ…！」
ＤＥは、最強の拳銃の一つ。
その威力は９パラと比べると桁違いだ。
だが、その分反動も９パラと比べ物にならないぐらいデカい。

女、子供はちゃんとした姿勢で撃たないと肩を脱臼したり手首を捻挫するくらいだ。

…それを、
ワンハンドショットだぜ…

男でもDEのワンハンドショットはかなりキツいのに、こんなに正確に当ててきやがる。

アイツは一体…何者なんだ?

けど、今は
「それより、残りのこの武装でどう戦うかな…」
こちらの方が優先だ。

私の今の装備は、
ARが一丁。
ARのマガジンが一つ
ナイフが残り二本と、
本格的に追い詰められてきた…

このままだと、『殺られる』な…

「…こうなったら、一瞬のチャンスに任せるか!」
私は決心して、作業に取りかかった。

「失礼しま～す。」
コンコンとご丁寧にノックした後、大蕎は警戒することなくドアを開けた。

「周りを警戒しないで入って来るなんて、随分と余裕みたいだな～」
私もワザと余裕ぶってみた。

アイツをこちらに釘付けにするために…

「ふふふ、だってアナタの残りの武装はあまり無いって分かっているからよ。私の見解では、多分マガジンが一つにナイフが四本以下、変わりの拳銃は無いと思うのだけれど…どうかしら？」
思いのほか鋭い推理だ。
実際にそんな感じだしな。

私は変わりに、
「さあな。敵にわざわざ情報開示するほど実力が無いんでね。」
とはぐらかしておく。

ちなみに大蕎はまだドアから室内に入っていない。

「あらそう。まぁ、私の言っていることは当たりみたいね。アナタの性格でそのセリフから推測すると…ね」
「……」

私は何も言わない。
ただ黙ってＡＲを構えるだけだ。

「アナタも薄々気づいていると思うけど、私は…特異体質の持ち主なの。その体質の一つで、私には飛んでくる銃弾がハッキリと見えるのよ。」
「…ふーん。」
「ふふふ、その返答からすると、気づいていたみたいね。」
「まあね。」
そりゃあ、あんなに銃弾やナイフを避けられたら余程のバカ以外は気づくだろ…

…けど、
「それがどうした？そう言えば私が諦めると思ったのか？悪いが私は諦めないぜ。アイツを救出するまではな。」
私は一層ＡＲを強く握りしめた。

「…何で、ここまで追い詰められても諦めないの？」
大蕎が不思議そうに…どこか悲しそうに…聞いてきた。

何でかって…
「竹崎裕太君はあまりアナタと関わりがない、むしろ皆に避けられてるぐらいだわ。あの子特有の探偵能力でね。仲がいいのはせいぜい、『京乃宮綾』と『鷹山勇治』と『風魔陽菜』と『荒井玄司』、後は『間宮あかり』ぐらいね。」
「…それが何だ？」
私は気づけば…怒りで飛び出しそうになっていた。

ダメだ、落ち着け。

私が動いたら意味がない…！

「だから、私が言いたいのはね、『アナタは竹崎裕太君を助ける義理がない』ってことよ。」

「……」

…コイツ、本当に分かってないみたいだな。

「まぁ、ぶっちゃけると私はあかりが一人でこのミッションを受けるって言ってたから心配になって一緒に着いてきたんだが…それよりも、」

「…？」

「…武偵憲章1条、『仲間を信じ、仲間を助けよ。』だな。」

「…武偵憲章…」

大蕎は感慨深く呟き、

『仲間か…羨ましい……』

と小声で呟いた。

…コイツ、仲間が欲しいのか？

あんな犯罪者じゃない、フツウの仲間が…

「…大蕎、そろそろ始めようぜ。」

私は、もう大蕎の言う言葉を聞きたくなくてジャキっと改めてＡＲを構えなおした。

「そうね…じゃあ、決着をつけましょうか！」
大蕎は、何かを振り払うように、こちらに向かって走り出した。

…その時私は、
勝利を確信した。

「あっ…！」
何かに躓いて前のめりに倒れ込む大蕎。

ソコにはピンとして張ってあるワイヤーがあり。
そのワイヤーに括ってあった棒が抜けて、
「はっ！！危ない！」
大蕎の目の前を中心に花瓶やら電話やらが落ちてくる。

大蕎はそのまま、背後に下がるが、ドンと何かにぶつかる。

それを私は見逃さない！
「ハァァァァァ！」
残り少ないＡＲ弾を撃ちながら走る。

大蕎は壁にぶつかりながらも、しっかり弾を避ける。

そして、
《ババババババッカチ……》

遂に私のＡＲが弾切れを起こした。

「…終わりよ！」

無数の銃弾を避けた大蕎がＤＥをこちらに向ける。

…だが、

「まだ終わらないぜ！」

私は残りのナイフ一本ずつ正確に投げた。

だが、この程度の攻撃が当たるとははなから思っていない。

現に、

「私にそんなものは効かない！」

と言いながら右に右に避けてしまった。

…右に右にと、

そして、大蕎は知らず知らずの内に、

部屋の一番端の角の部分に追い詰められていた。

「…！！」

大蕎は、それに気づいた直後にもう一つの事に驚いた。

逃げ場のない自分へクルクルと回転しながら凄い勢いで飛来する何か、

「くっ！」

大蕎は、反射的に屈んで何とか当たらずに済むがその武器は、
『ガンッ！！！！』
と壁にぶつかったのか、
凄い音を出しながらバラバラと何かの部品が落ちてきた。

…それは、
『…ＡＲ！！？？』
先程、私が使っていたＡＲだった。

大蕎は私が自分の武器を簡単に捨てた事に驚いてるみたいだ、

…けど、
「そんなに余裕そうで大丈夫かよ？」
「…！！」
大蕎が驚いて正面を向くいたが、遅かった。

私は素早い動きで大蕎の背後を取り、
その胸に反して細い胴体に足を、
魅力的な美しい首筋に腕を絡める。

そして、そのまま腕と足に力を込めて、気管を圧迫する！

「…裸締め…か…！」
大蕎が苦しそうに呟く。

代わりにに私は、
「生憎ながら、私はCQC（近接戦技）が大の得意てして…ね！」
「カッ、ハァァ……！」

そう憎たらしい事を言いながら、より腕に力を入れる。
大蕎はただジタバタして、何とか締め技から逃れようとするが、
私は振りほどかれないように、より強く胴や首に絡みついた。

「ァッ…ァァァ…」
だんだん、大蕎の声が小さくなっていく。
目もかなり虚ろだ。

『もうそんなに力を入れなくていいかな…』
そう思って、腕と足の力を少しだけ弱めると、

《ドオォォォォォン！！》
と、もう聞き飽きた例の音が鳴り響いて、
私は吹っ飛んでいた。

「ガハッ、ゲホゲホ…！！！！！」
今度は私が悲鳴を上げていた。
脇腹に感じるあまりの衝撃と痛みで息が上手くできない…！

「残念だったわね。」
「…！！」
大蕎の声が聞こえたのは別に驚かない。

どうせ先程の銃声も大蕎のＤＥだろうから、

でも…

でも何で息一つ切れてないんだよ！

三十秒以上は締められてただろうが！

そんな事を思っているのが顔に現れたのか、

大蕎が説明する。

「さっきも言ったでしょ？私は特異体質だ…てね。」

「…！！」

そうだった！

コイツは特異体質で、弾丸が見えるほどの胴体視力があるんだ。

それなら、

息を止められる時間も長かったはずだ！

…完全に油断した。

もう私はさっき喰らったＤＥの弾でしばらくは動けない。

…つまり、

「アナタの負けよ。」

大蕎がゆっくりと私の頭にＤＥを構える。

「ところで、まだアナタの名前を聞いてなかったわね？…せっかくだし、教えてくれないかしら？」

「…火野ライカ。」
「そう…ねぇ、ライカ。」
大蕎はまるで誘惑するような手つきで私の頬を触り、
多分、アイツの一番の願いを私に要求してきた。
「…私と一緒にランパンに来ない?私と仲間に…イヤ、姉妹にならない?」
…大蕎は手つきこそ誘惑的だが、
顔と口調は、
今までの寂しさをかもし出していた。
そんな大蕎に私は、
「悪いが私は武偵だ。犯罪者に協力はできない。」
そう静かに告げて…
死を覚悟した。
「そう…残念ね…」
大蕎は、
本当に残念そうに…
悲しそうに…
そして、

涙を目に溜めて、
ＤＥを改めて額に向けなおす。

ふと、
私はある時の事を思い出した。

それは学校の帰り道。

あかりと志乃と私で、
一緒にファッションの話をしながら、
一緒に買い食いしながら、
一緒にケンカしたりしながら、

一緒に笑いながら…

いつでも一緒にいた…ただの帰り道の風景だった。

だが、

私に取っては…掛け替えのない時間だった。

「…ゴメンな、あかり…志乃…。」

直後に近くで轟音が鳴り響き…

その後のことは、

私は、何も知らない…

…11　救出戦ｂｙ大蕃ｖｓ火野ライカ（後書き）

次回はまた陸遜に戻ります

まぁ、軽く終わらすつもりですがね～

あまり期待せずにお待ち下さい。

…12　救出戦ｂｙ荒井玄司ｖｓ陸遜（前書き）

陸遜戦後半

果たして軍配はどちらに！？

…12　救出戦ｂｙ荒井玄司ｖｓ陸遜

「ハァ、ハァ、ハァ、」
陸遜の息づかいは荒い。

なぜなら、先程背中に無数の弾丸とクナイを受けたからだ。

だが…陸遜は勝利を確信していた。

「ふっ、さすがに、爆弾を食らって、生きているわけが、ない、」

先程のプラスチック爆弾付きＵＺＩをほぼゼロ距離爆発させ、敵をしとめられたからだ。

陸遜は三国志の呉の名軍師。
圧倒的な数と勢いで進行する敵軍を計略に掛けてほぼ全滅まで持ち込んだ、
呉の救世主とも呼べる人物だ。

その名軍師の子孫である、今この場にいる陸遜も、三国志時代の陸遜には及ばないが、かなりの切れ者だ。

だから万が一の事を考えてＵＺＩに爆弾を仕込むという突拍子のない考えを思いついたのだが、
彼にも理解出来ない事が一つあった。

『あの荒井玄司と言う者…無能そうに見えて、かなりの統制力と実

力があると見えた。』

名軍師陸遜は、Eランク武偵であるはずの荒井玄司率いる一年連合に負けかけたのだ。

『しかし、荒井玄司が一緒に消えてくれたのは助かった。今のこの状態で1人でも相手にするのは大変だったからな。』

しばらくして、ようやく陸遜の荒い息が整い、爆煙で曇っていた辺りが晴れてきた。

陸遜は目を細めて辺りを確認すると、

「!!!!!」

陸遜は絶句した。

陸遜が見たのは、

「…ングッァァ…」

その高校生離れした大きな体をうまく使い、三人の女子を床に密着するように押し倒して、爆炎と爆風から身を呈して守った…荒井玄司がいた。

「…何故だ!何故あのわずかな時間でそこまで出来る!貴様は…一体何者なんだ!?」

天才である自分に理解できない事が多いのに苛立ったのか、

陸遜が怒鳴りながら聞いてきた。

その質問に
俺、荒井玄司は…
「さあな、自分で考えな～名軍師さんよ～。」
と、未だに陸遜を見ずにゆっくりと立ち上がる。
「…化物が…！」
「はっ！化け物とはひでー言い草だな～。俺はフツウの人間なんだがな。」
今は陸遜に軽いジョークを言って、余裕そうに見せてるが…
…ヤバいな
背中の感覚がもう無い。
ただ、太ももより上から大量に流れる液体の感覚以外は感じない。
目の前の陸遜が少し霞んで見える。
服はもうズタボロだ…
上半身と下半身は素っ裸に近い、
残っている服も血で赤黒く染まっている。
だけど…！
「裕太を返してもらうまでは…俺は戦いつづけるぜ…！」
そう宣告して、
振り返りながら、自前の『オートマグ?』を横寝かせの状態で構えた。

陸遜は、初めはおののいていたが、震える俺の足を見て
「…ハハハハハ！そのような状態で僕に勝てると思っているのか！？」
と、まるであざ笑うかのように高らかに笑う。

そんな陸遜に俺は、
「勝手に笑ってろ。」
と呟き
《バン、バン、バン、バン！》
四発の弾丸を放ちながら、マグを持ち替えて走りながらも放つ。

「ふん！無駄なことを！！」

迫りくる銃弾を二発は避けて、ほかのは上手くグロックでいなしているが、
反撃は出来ていない。

俺は、陸遜の５ｍ手前でまだ三発残っているマガジンを射出して、
ポケットにあるフルに入っているマガジンと取り替える。

…これは、裕太が俺のために教えてくれた、

「見ろよ！これが武偵の、戦い方だー！！」

アル＝カタの戦法だ！

《ガン、ガガン、ガン、ガンガンガン、ガンガン、ガンガンガンガン、ガン！》
《ババン、バン、バン、バン！》

お互いがお互いの腕を弾きながら、お互いに銃弾を発砲しあう！

どうやら陸遜は武偵じゃないから、裕太と猛特訓していた俺の方が多少有利だ。

だが油断は出来ない、

こちらは弾の量がフツウの一丁拳銃。
あちらは、弾が二十発ぐらい入る二丁拳銃。

フツウなら弾切れを起こすのはこちらが速い、
だが、もしそうなったらリロードしている間に蜂の巣にされるのが落ちだ。

だから今は耐えなければならない。
一瞬のその隙まで、

《ガンガン、ガンガンガンガンガン、ガン、ガガン！》
《バン、バン、バン！》

陸遜の右手の銃を左手で払って右手の銃を向け
その右手を陸遜の左手が弾き、左手の銃を向けるが
俺のハイキックで払われて、
辺りの壁が銃弾でボコボコに穴だらけになっていく。

そんな一進一退の至近距離の銃撃戦が続いている。

すると、

《バン、バン、バン！》

「…ぐわ！」

陸遜が集中力を乱して銃の弾き方が甘く、一発脇腹に受けた。

『…隙あり！』

俺は、ここぞとばかりに銃のトリガーを引きまくる。

そして気づく。

…やってしまった、と

《バン、バン、ガキン！》

マグ？のスライドが止まった音がした。

弾切れだ…！

陸遜は、待ってましたと言うような顔をして、

俺の両胸に二丁拳銃を突きつけ、

トリガーを…

「引いてもいいのかよ？」

「なに！！」

俺は素早く陸遜の腕を両脇に挟み込んだ。

《ガン、ガン、ガン、ガン、ガキン！》

陸遜はトリガーを引く指を止められず、弾を全て撃ち出してしまった。

「おーらよっ！！」

俺は包み込んだ陸遜の腕を支えにして、ドロップキックを至近距離から撃ち込む！

「ぐはっ！！」

陸遜は軽々しく向こうまで飛んでいった。

俺は陸遜が起きあがる前にリロードし直し、

そして陸遜にトドメの一発を…！

「…ぐぅ！？ッァァァ！！！」

だが、不足の事態が起こった。

先程はアル＝カタの激しい動きで飛び散っていた血が、

今のドロップキックの着地の衝撃で、真下に流れ落ち

両目に入ってしまった。

「ぐぅ…！！クソ！目がァァァ！！！」

必死になって目をこすり、強制的に涙を流して視界を確保すると

そこには

「残念だったね、荒井玄司君。」
ドスッと、俺の腹に深々とサバイバルナイフを刺した
…陸遜がいた。

「ぐぼぁ!!」
口から大量の血を吐く。
…どうやら胃を完全にやられたみたいだ。

俺が反撃に出ないことが分かったからか、
陸遜は、

「ハハハハハハ!!どうだ!!僕の勝ちだ!!」

と、笑っていた。

「ハハハハハハ……しかし、何故君はそこまで竹崎裕太君にこだわるんだ?」
陸遜は素朴な疑問を口にした。

…俺が裕太にツルむ理由?

そんなもん、決まってんだろ。

「…温かかったんだよ、昔のアイツは…」

「俺は…独りだった。」
俺は陸遜の疑問に答えた。

「俺は…中学の頃、やさぐれてた。」

「ケガをして、大活躍だった部活を止めた灰色の中学生活、それに耐えきれなくて俺はぐれちまった…。周りはみんな敵、家族も気まずくて話しかけられない、絡まれ続けて、毎日殴ったり殴られたりする毎日。」

「そんな悲しくて苦しい生活から俺を引っ張り出してくれたのは…裕太なんだ。」
「…」

「裕太に俺は命や心を助けられて生きる意味を教えて貰った…だから！」
俺は気力でナイフを持つ陸遜の手を捕まえた。

そして、

「だから俺は裕太を護りたいんだー！！！！」

あいてる右手を強く、強く！血が出るほど強く握り締め、
背後に思いっきり右腕を持っていき、

そのまま返す勢いで、
「ハアァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！」

思いっきり、
天を突くような右拳を思いっきり、

陸遜の腹部にぶつけた！

…これが、裕太に始めて教えてもらった
『ナイフが刺さった時、体をうまく使って使う殴り方』だ！！

「グワァァァァァァァァァァァァァァ！！」

陸遜は、激しい悲鳴を上げながら
まるでアニメを見ているがごとく
後方に１０ｍぐらい吹っ飛んだ！
陸遜は、地面にぶつかって、そのまま数回バウンドしてから

…動かなくなった。

「ハァ、ハァ、ハァ、グハッ！！」

クソ！
本格的にやべーな…！
背中と腹の両方から大量の血が流れ出ている。

速く止血しねーと、
死ぬな…。

「君は…言ったよな…」

…チッ

「…まだ動けんのかよ。」

陸遜は仰向けで大の字に手と足を開いているのは変わらないが、
その状態で話している。

「…君は、竹崎裕太君が、昔は明るかったと言ったね？それはどういう事なんだ？」
「…お前には関係無い。」
「そうか…残念だ。」

陸遜はそう呟いて、静かになった。
どうやら気絶したみたいだ。

すると、インカムから
『荒井君!!聞こえる!?』
京乃宮先輩の焦り気味の声が聞こえた。
「はい、何でしょうか?」
京乃宮先輩は、その後、内容を手早く話して通信を切った。
クソ!
俺の体がもう少しマシなら…!!

「荒井殿!!」

うん?
この特有の口調は…風魔か。

「よう、風魔!お昼寝は終わったか?」
そんなおふざけを言いながら振り返ると、

「…すんっすん!」

風魔は…目に涙を溜めていた。

「オイオイ、何泣いてんだよ。」

少しだけ怯む俺に、風魔は…

「だって、荒井殿が、そんなに、傷だらけに、なって、」
「あぁ～、なるほど…って、武偵なら有り得るだろ?現に裕太はこれぐらいの事は何度かあったらしいぜ。」

泣いてる風魔をなだめながら、
俺はコイツに託してみる。

「実は、ついさっき京乃宮先輩から通信があったんだが、裕太が船内のどこかに隠されたらしい。俺は少し休憩してから行くから…先に行っててくれ」

「え?」

風魔が少し不安そうな顔をする。

「大丈夫だ。京乃宮先輩も裕太を探してるから別に一人になるわけでも…」
「違うでござるよ!!」

風魔が怒鳴って、周りにいた間宮と佐々木もようやく気がついた。

「某は、荒井殿を心配してるのでござるよ!!そんな大怪我をして…置いていけないでござるよ!!」

風魔の一言で俺の真っ赤な背中や腹から流れ出る血、

全身くまなく火傷で覆われてる俺に気づいて絶句する二人。

そんなコイツらに、俺は

「…ハハハハハ！！安心しろ！俺はこんなに元気なんだからな！！」

そう言いながら、証拠と言わんばかりに近くの壁を拳一発で破壊する俺

「だから…行ってくれ。裕太はどうやら毒を盛られたらしいんだ。急がないとかなりヤバい！俺も後で向かうから、速く行ってくれ！！」

半ば叫ぶように言う俺に、分隊長である風魔は、

「…間宮殿、佐々木殿、直ぐに追いつくでござるから先に行くでござる。」

そう命令して二人を先に行かせてから、

俺に近づき、

「絶対に…死んではいけないでござるよ！！」

そういって、自らも走り出した。

ふーう

そう息を着いて、

「…がはっ、げほっげほ！！」
一気に吐血して、壁に背を預けるようにしてゆっくりと座る。

「…ハハ、どうやらここまでのようだな～」
もう、体が動かねー
視界が暗い
だけど、
自然と…後悔はないな。
裕太の為に、命をかけたからかな？

「風魔、間宮、佐々木、裕太を頼むぜ…」
そう呟いて、
体に力が入らなくなり、
俺の意識は深い闇に消えた…

…12　救出戦ｂｙ荒井玄司ｖｓ陸遜（後書き）

少し解説

このアル＝カタ戦中に結構、時間がたっています（２０分弱）
だから、戦闘が終わってインカムを使っているひまがあるのです。

それに、全く二人ともリロードしてないわけではありません！

陸遜が弾切れになると同時に自分も弾切れにして同時にリロードしているわけです

後、陸遜が弱いと感じた方もいるでしょう。

しかしよく考えてください！

陸遜は満身創痍で不慣れなアル＝カタを長時間やってのけたのですよ！

彼は決して弱くありません！

…失礼、取り乱しました。

次回は鷹山先輩の出番です。

『防人の４５口径』ファンは必見ですよ～

ではまた～

…13　鷹山勇治ｖｓ太公望（前）（前書き）

鷹山先輩がブチ切れます

ご注意下さいｍ（＿＿）ｍ

…13　鷹山勇治ｖｓ太公望（前）

京乃宮先輩が先制攻撃を始め、銃撃戦が始まった。

「悪いが、老人相手でも手加減はしないぜ！！」

俺はまずは様子見に数発じいさんに向けて撃つ。

すると、

「甘いわ、小僧。」

ガキンガキンガキン！

と、金属と金属のぶつかり合う音が辺りに鳴り響いき、

全ての銃弾がじいさんを避けるように軌道を変えて、背後の壁に穴を開けた。

俺は一瞬、何があったと首を傾げたが、じいさんの右手に持つサバイバルナイフで何が起こったか理解した。

このじいさん…

放たれた銃弾を素早く取り出したサバイバルナイフで全て真っ二つにしやがった…！

俺が驚愕していると、じいさんは更に驚くことをほざいた。

「ふむ…ワシも老いたな。全て四つ切りにできなかったか。」

「！！！！」

俺は、戦闘中であるのに関わらず、

じいさんから視線を外し、背後の壁に視線を向けた。

そこには…

１０個の銃弾痕が残っていた。

普通に弾切りをしたのなら、三発をそれぞれ半分に切り裂くから銃弾痕は６個になるはずだ。

だが、じいさんの背後の壁に開いてる穴は８個。

つまり、三発中二発は二回斬ったのだ…！

だが、驚く事はソレだけではない。

じいさんは
「ワシも老いたな。」
といった。

つまり、本来はアレが不完全な状態と言うわけだ！

「ウム、だがまだまだいけそうじゃな。」

じいさんはそういって、こちらに視線を向けた。

その目は、間違っても犯罪者には見えない。
柔和な目だった。

「うん？どうした小僧、来んのか？」

「ハハ！…マジで遠慮する必要が無そうだな！」

俺は、最早気遣う必要はないと判断して、

《ズガガガガガガガガ！！》

俺の８９式小銃が火を噴いた。

弾は、急所など関係なく、体という体を狙う。

フツウなら武偵法９条があるから、下手に乱射は出来ないが…

このじいさんは違う。

逆にこのぐらいやらなきゃ…コッチが殺られる！

現に、じいさんは

「ふむ…」

とか唸りながら、

いつの間にか大きく右にズレていて、

《ガガガガガガ！！》

と大量に開いた穴をジックリと眺めていた。

だが、避けた右側には、

パァァァァッッ！！

閃光弾が眩い光を放った、

その隙に、

《ガガガガガガガガガガガガガガガガ！！カチッ》

俺は、目をつむりながら、弾切れになるまでじいさんのいたところを蜂の巣にする。

多分、死んではいないだろうが、病院もんだな…

そう思いながら、目を開けると…

「貴様もか…小僧。」

サバイバルナイフを心臓めがけて突き出してるじいさんがいた！

「うわっ！！」

俺は咄嗟に半歩ズレたのと、C装備のおかげで脇腹を掠る程度ですんだが、

変わりにC装備が無惨に切り裂かれた。

『オイオイ、嘘だろ…！』

そう思いながら、突き出された右手を掴み、

そのまま上手く抑えつけようとしたが、蹴り飛ばされ距離を取られてしまった。

俺は、まるで蹴られた空き缶のように、軽く近くの壁まで飛ぶ。

ガンッ！！

と嫌な音がして、俺はズルズルと壁から床に落ちた。

だが、そのさいにうまくサバイバルナイフを奪えたのが、不幸中の幸いだったな。

向こうもこちらに手出しができないみたいだ。

「ほぉう、このワシから武器を奪ったか…やるな。それに先程の閃光弾からの攻めの一手、どうやらあの坊主の師か何かのようだな。」

…あの坊主？
それって…！

「オイ、じいさん！その坊主って…竹崎の事か！？」

俺は勢いよく立ち上がり、地面に落ちてた８９式小銃を素早く取りって構えた。

じいさんは敵意など感じない笑みを浮かべ、質問に答えた。

「ああそうじゃ。あの髪の長い坊主はお前と似た戦法をとっとったぞ。おかげでランパンの精鋭メンバーが下手をすれば全滅しておったわ。」

「…竹崎…」

お前、こんな強い奴らを一人で…

俺は、竹崎の勇敢さに先輩としての嬉しさを持ったが…

それは、
すぐに別の感情で塗りつぶされた。

「じゃが…ワシの一刺しで大人しくなったがのぅ！」
「！！！」
「ああ、確か最初は陸遜が背後から無数に弾丸を喰らわしたのじゃったな～、その後坊主がかなり暴れたから、ワシが腹に一刺しして、大蕎と陸遜がそれぞれの手に風穴を開けて…」
「……ォィ」

俺の小声の忠告は聞こえてない…

だが、俺も大声を出す程精神が安定してない。

竹崎が…刺された？
傷つけられた？

その事が頭に廻っている…

だが…次の言葉で、一気に俺の頭は現実に戻された。

「今は、毒で上手く頭も体も動かないようにしてるからのぅ。」
「…！！！！！！！！」

毒…だと？

何の毒かは分からねーが…これだけは分かる。

それまでの戦闘で失った血液と、毒に対する抵抗力を考えると、
下手に時間をかけたりしたら、

竹崎が…死ぬ！！

あの、
かわいくて、責任感が強くて、強がりで、でもどこか寂しがり屋で、
…とても仲間思いの優しい竹崎が…

…俺のかわいくてかわいくて仕方ねー大事な後輩が…！

こんな奴に…

こんな、犯罪者どもに…！！

…殺される！！！！

「こんの…クソジジイがァァァァァ！！！！！」

俺の頭には…怒りしかなかった。

腹の奥底からドス黒い何かが体に回る…

血管が破裂するぐらいの勢いで血が回る…

そんな危険な状態の頭が指令を下す。

『コイツを殺せ！』…と

「死ネェェェェェェェェェ！！！！！」

俺は、素早くリロードし直して、フルになったＡＲをぶっ放す！

急所なんて知るか！！

武偵法９条が何だ！！

そんなの関係ねー！！

ぶっ殺してやる！！

「おぉう！危ないのう！」

ジジイは素早い動きで弾を避けながら近くの遮蔽物に逃げ込んだ。

「そんなんで隠れたと思ってんのか！！！」

俺は、ＡＲを撃つ手をいったん止めて、手榴弾を遮蔽物に投げ込む！

だが、

「危ないと言っておろうが。」

ジジイは、手榴弾が爆発する寸前に、ミサイルみたいに飛び出した。

「チッ！まだ死んでねーのかよ！！」

《ガガガガガガガガガガガガガガガ！！》

逃げ出したジジイを追うように銃を向ける。

だが、ちっとも当たらない。

それが怒りをを加速させていく。

「鷹山君！挑発に乗っちゃダメよ！！」

向こうで、京乃宮先輩が敵を相手どりながら必死に俺を落ち着かせようとしたが、

俺はもう、怒りで熱くなりすぎて止まらない！

気づけば、

《ガガガガガガ！！カチッ》

ＡＲが弾切れを起こした。

仕方なく攻撃を止め、スペアマガジンを取りだそうと思っていたが、

『…ッチ！マガジンがねー！』

残りを考えずにバカスカ撃っていたから、気づけばマガジンはさっ

きので最後みたいで、
つまり、全て使い切ってしまった！

『何じゃ、終わりか？』

新たな遮蔽物に隠れたジジイの声が聞こえる。

『コレならまだあの坊主の方が見所があったのぅ…』

「テメーなんかが…竹崎を、語るなァァァァ！！！！！」

怒り狂った俺は、普段なら絶対に有り得ない行動を…

手持ちの手榴弾を
全部、ピンを抜いて遮蔽物に投げ込んだ！

《ドガァァァァッツン！！》

激しい爆風と爆熱から両腕で顔を覆って守る。

次第に煙が晴れてきて、
目を細めて様子を見ると、ソコには…

「…そろそろこちらからいくかのぅ…」

ゆっくりと爆煙を掻き分けるように、
ジジイが悠然と歩んでいる。

どこか、威風を漂わせて…

ジジイは背中から、長い何かを取り出した。

あれは…剣だな。

長さは大体柄を合わせて８０ｃｍ。

鍔もなく、柄も刀身を布を軽く巻いて作ったような自作感たっぷりの剣だ。

だが、その恐ろしいまでに直線的な形で、刀身の幅が５ｃｍを維持している。

何よりも、
あの刀を持ったジジイ雰囲気で分かる。

かなりの業物だ…！

キラリと輝く刀身に、額から脂汗をかく俺が写る。

不意に、ジジイが動き出した！

俺は咄嗟に８９式小銃を構えるが、構えて気づいた。

もう、コレのマガジンはないと…！

だが、そんな僅かな隙を突いて
ジジイはもう俺の５ｍ以内にいた。

ジジイは、右手で持っていた剣を思いっ切り突きだしてくる！！

その切っ先は、俺の心臓へ目掛けて、
《ブォォォォン！！！》
と、空気を裂くような激しい音を立てて、銃弾みたいな速さで近づいてくる！

咄嗟に８９式小銃で受け止めようとするが、

有り得ない事が起こった。

切っ先が８９式小銃にぶつかる。

ソコまでは予想できてた。

だが、

《ツゥウゥウゥウゥウゥッッ！》
「…！！！！！」
８９式小銃が、
まるで包丁に突き刺された豆腐のように貫通されたのだ！！
ただ、
今回は初めから８９式小銃を盾にしながら半歩ズレたため、
幸い、胸を軽く掠っただけだった。

だが、変わりに今まで愛用していた８９式小銃が…壊れた。

壊された…
一振りの剣で…！

「クッソ！」
慌てて、俺はＰ－１４・４５を至近距離で放つ。
《バンバンバン！！！》
「…ぬ！」

だが向こうはバックステップでキレイに弾丸を避けて、距離を取る。

俺は、もう怒りに支配されていない。
さっきの突きで、一気に頭が冷えた。

そして、その冷えた頭でジジイに聞いてみた。

「オイ、テメーの名前…何だ？」

Ｐ－１４・４５を両手で構えて睨みつけながら、
ぶっきらぼうに聞く。

「ふむ、名前か…」

ジジイは、長く伸びている顎髭を触りながら答えた。

「ワシは呂尚…別名『太公望』、かの有名な周の軍師、後に斉の始祖の末裔じゃ！」

と名乗った。

「た、太公望…だと…」

「まぁ、それぐらいでよかろう。今はそれより…」

ジジイこと太公望は、先程の手榴弾のせいでボロボロになった着物の襟から両腕を出して、上半身裸になった。

その露わとなった上半身は、
見る者を魅力するかのような、
歳に似合わない、美しいぐらいに引き締まった筋肉があった。

そして、肌はあちらこちらに傷痕がある。

どれも剣で付けられたような、細い傷痕だ…

そして、太公望は

「さぁ、闘争を続けようぞ！」

キラリと輝く刀身をこちらに真っ直ぐ向けてから、フェイシングの構えをする。

対する俺は、

「ハッ！どうやらその剣にはC装備は通じねーみたいだな。」

と、言いながらC装備を素早く脱いで、

念のために着ていた武偵高の制服にコスチュームチェンジする。

さらに、動きやすさ重視の為、

ジャケットも脱いでネクタイも外す。

「さぁ、準備オーケイだ！」

P－14・45をホルスターにしまい、

代わりにスペツナズナイフを取り出して構えた。

「ふむ、では……行くぞ！！！」

「行くぜ！！」

俺と太公望はほぼ同時に走り出した！

「ハァァァァァ！！！」

「ヌォォォォォォ！！！」

お互いがお互いの獲物を振り抜く、

《ガキィィィィィィン！！！》

激しい刃物がぶつかり合う音がして、

俺ｖｓ太公望の第２ラウンドが開始した！！

…13　鷹山勇治ｖｓ太公望（前）（後書き）

第2ラウンドは刃物と刃物がぶつかるナイフ（？）アクションです。

銃撃戦ではありません

…14　救出戦ｂｙ鷹山勇治ｖｓ太公望（後）（前書き）

長いです！

まぁ、お楽しみ下さい！

…14　救出戦ｂｙ鷹山勇治ｖｓ太公望（後）

《ガキィィィィィ！！》

激しい金属音が辺りに鳴り響き、火花が飛び散る

《ガンッガキィン、ガガガガガ、キィン、キィン、ガキィン！》

こちらのナイフが素早く太公望の体を狙う。

だが向こうは細長い直刀なのに関わらず、
急所を狙うナイフを上手くいなしつつ、
最小限の動きで直刀をまるでレイピアを扱っている様に、
素早く振ったり、突き出してくる。

俺はそのあまりの斬撃の速さに、反射的にナイフで直刀を急所から外すので精一杯だ。

ヒュン！ヒュン！
と、風を切る音がして、
右手に持って、無意識のうちに動くスペツナズナイフに重たい衝撃が走り、ピリッと肌が痛む。

「ッチ！」

軽く舌打ちをして、フェイシングの突きを上手くいなしつつ、現状を打破する方法を考えていると、

「考える隙をあたえると思っとったか？」

ヒュン、ヒュン、ヒュン、ヒュン、ヒュン！

複数の風を切る音がして、
俺の体に５つの掠り傷がつく。

「うぐっ！」

考え事をして警戒心を緩めていた為、
全く反応出来ずに斬撃を貰ってしまった。
しかも、今受けた傷は少し深い。

少し、痛みで俺が怯んでいると、

不意に、頭上を謎の影が覆った。

反射的にスペツナズナイフを頭上に構えた直後、

《ガキィィィィィィ！！》

振り下ろされた太公望の直刀が、俺のスペツナズナイフと切り結び、
激しい金属音が辺りに鳴り響く。

「ぐぅッうぅぅぅぅ！！」

振り下ろされた直刀は、見た目とは裏腹にかなりの重さがあり。

俺はあまりの威力に耐えきれずに片膝を着いてしまった。
スペツナズナイフは何とか壊れずに済んだが、
腕が…痺れている。

太公望はそれを見て、バックステップをして少し距離を取った。

そして、そのまま流れるような動きで右足と右手下げ、左手を手刀みたいして突き出しつつ半身になって、腰を落としてから…

目を細める。

その瞬間、周りの雰囲気が一気に変わった。

その時、俺は理解した。

『…くる！！！！！』

さっきの、

俺の愛銃を豆腐みたいに貫いた、

あの、超殺人的な突きが…！！

俺は、右方向に大きくズレる。

太公望は、弓を構えているような腕の位置から、右足で思いっきり踏み込み、
左手を引く反動で右手を突き出した！

《ヴァァァァァ！！！！！！！！》

また、あの恐怖の音が聞こえる！
Ｆ１カーのような爆音を上げて、煌めく白銀の刃が、

…いつの間にか俺の脇を有り得ないスピードで通過した！

…何てこった。

俺は1秒前には理解出来て、素早く避けたつもりだった。

でも、実際は…

避け遅れて、ほんの少しだが脇を掠めて通過したのだ！

ほんの僅かな時間で…

しかも、

刃が…全く見えなかった！

銃弾をギリギリ見える動体視力を持つこの俺が…

スピードでは銃弾に圧倒的に劣るはずの突きに、

全く反応出来なかったのだ…！！

「クッ！！」

俺は、痺れる右手に鞭打ってナイフを振るう！

対する太公望は、またバックステップで避け、また直刀を構える…

マズい…！！

右腕はさっきのでしばらくは動けない。

かといって、銃を構えるヒマも無い。

『クソ…』

俺が敗北を確信した…

その時！

『させないわ！！』

《ガガガガガガガガガ！！》

京乃宮先輩が援護射撃をして、太公望が珍しく弾斬りをしないで後方に下がっていった。

「あ、ありがとうございます。京乃宮先ぱ…」

京乃宮先輩の方を見ると…

《ドゥゥゥゥゥッ！！》

『キャアアアアアア！！』

かなりデカい銃声が聞こえて、
京乃宮先輩が悲鳴を上げながら思いっきり後方に倒れ込んだ！

しまった！

俺の方に注意を向けていた京乃宮先輩が、裕太を肩に担いでいるオールバック男のＭ５００の弾丸を食らってしまった！

京乃宮先輩は自分が撃たれるリスクを犯して、俺を助けたんだ！

しかも、
ヤバい！！

向こうにいるチンピラが京乃宮先輩に銃を向けている！！

慌てて京乃宮先輩を助けに、銃で牽制射撃をしながら突っ走る！

『ッチ！』
向こうは牽制射撃のせいで撃ってこない。

「京乃宮先輩！！大丈夫ですか！？」

取りあえず、京乃宮先輩の正面に来て、ニーリングショットで上手く敵を抑えつつ容態を聞く。

だが、京乃宮先輩は、

「ウッ、ウゥゥゥゥ…」

苦しそうに目を閉じて呻くだけだ。

「クッ！…京乃宮先輩！しっかりして下さい！」

京乃宮先輩に声を掛けながら、俺より背の高い彼女を抱えて何とか無事に近くの遮蔽物に飛び込む。

ただ、遮蔽物に飛び込む寸前にみた、
オールバック男の笑みが、印象的だったが…

〈バン、バン、バン、バン、バン！！！〉
《ガン、ガン、ガン、ガン、ガン、ガン！！》

遮蔽物越しに撃ち合いながら京乃宮先輩の様子を確かめる。

しばらくして、彼女は目を覚ました。

「あぁ、うん…ありがとう。大丈夫…げほっげほっ！」

京乃宮先輩が苦しそうに咳き込む。

…当たり前だ。

京乃宮先輩が食らった弾は『５０マグナム弾』
一般的には世界最強の威力を持つ弾丸だからな。
そんな弾を食らってすぐ喋れる人間何てそうそういない。

第一、下手をしたら…死んでもおかしくないレベルなのだ。

だから俺は、牽制射撃で無くなった弾をリロードしながら京乃宮先輩に告げる。

「京乃宮先輩！しばらく休んでいて下さい！俺がまとめて相手を…」

相手をします
と言おうとしたら、京乃宮先輩は俺の唇に人差し指を軽く押しつけてきた。

「大丈夫よ…私は裕太並みにタフなんだから。
それにね…アナタに全て任せてアナタが傷つき過ぎたら、裕太が泣いちゃうじゃない。」

京乃宮先輩は俺を見ながらウィンクをした。

…やべー

マジ、カワイイなこの人。

さすが『武偵高三大美女』のひとりだな。

「それに…アナタにはあの人がいるしね。」

そう言って、俺の背後に視線を向ける。

視線の先には、

直刀を地面に突き刺して仁王立ちをしている太公望がいる。

相変わらず、殺気など感じない柔和な笑顔をこちらに向けながら…

「私じゃあ、あの人の相手にはならない。…なら得意な方の射撃で2人を相手どるだけだわ。」

そう言って、京乃宮先輩の近くに置いといたＡＲを彼女は掴み、俺に背を向けながら遮蔽物越しから敵を観察して、ＡＲの弾の量を確かめて再装填した。

…背まである後ろ髪を肩より少し下辺りでリボンで軽く縛っている彼女の背中や、マガジンを再装填しているときのマジメそうな顔つきを見て、俺は思った。

これは…覚悟を決めたヤツの顔だと…

俺は第二次朝鮮戦争で、こういう顔をしたやつをたくさん見た。

そして、ソイツらは…皆、死んだ。

だから俺は、京乃宮先輩に告げる。

「分かりました。俺はあのじいさんの相手をします。終わり次第、救援にきますから…」

俺は、ようやく痺れが治った右手でスペツナズナイフを構えながら、精一杯見得を切って言う。

「…待っててくださいね。」

…ちょっとセリフがクサかったかな…

恥ずかしい。

対する京乃宮先輩の反応は、

「ふふふ、じゃあ…アナタがくるまで待ってるわ。だから…早めにきてね？」

京乃宮先輩は、持ち前の美顔に女の武器の上目遣いをトッピングして、メインディッシュの護りたくなる名ゼリフを繰り出す。

…卑怯だぜ、色んな事が。

「はい、お任せ下さい！…では、その時まで…」

「うん、じゃあ一旦お別れね。」

ジャキン！

とＡＲの撃鉄を上げる。

そして、

「今よ！鷹山君！！」

《ガガガガガガガガ！！》

京乃宮先輩のＡＲが火を噴くと同時に俺も駆け出した！

「ウォォォォォォォ！！！」

雄叫びを上げながら、自分が出せるだけのスピードで太公望に近づく！

太公望は、薄く片目を開き、地面に刺さっている直刀を一気に引き抜く。

「ウォォォォォォォ！！！…ハアァッ！！！！」

全速力のスピードに合わせて、右腕を思いっきり突き出す！

そして！

「食らえェェェェ！！」

鍔の位置に配置されたレバーを押した。

そして、刀身が前方に射出する。

「！！！！」

太公望は、どうやらスペツナズナイフのヒミツを知らないらしく、驚いて迫り来るナイフを見ていた。

だが、

《ガキィン！！》

ナイフの刀身は、一瞬で左から右へ振り払われた直刀に払われてしまう。

しかも、左から右へ振り払った直刀を右足とともに後ろに下げて、左手を突き出す。

要は、『アレ』の構えだ！

今、ナイフも無い無手の状態で闘うのは無理だ。

絶対に…

だけどな、

俺もやられたままじゃ終わんねーぜ！！

俺はスペツナズナイフの柄を投げ捨てて、走るスピードを更に速くする！

そして、俺は心の中である言葉を唱えた。

『スローモー！！！！！』

そう呟いた瞬間、
辺りが急にクリアに見える。

そうして、太公望の突きまでの素早いモーションが、年相応のかなりゆっくりとしたものに変わった。

俺の特殊能力、
『スローモー』は名前どおりに、
いろんな物がスローモーションに見えるのだ！

俺は、太公望が踏み込み始めた瞬間に、さらに突進した。

だが、驚いた事があった。

太公望が踏み込み終わった瞬間、

スローモーを使っているはずなのに、
直刀がまるでバッティングセンターにある球速１４０ｋのボールの速さぐらいで俺の心臓部分に向けて近づいて来るのだ！

けれども、そんなんじゃ俺は止まらない！

直刀の切っ先が俺の心臓に迫る。

後、１０ｃｍ…

１０ｃｍで俺の心臓に届く。

だから…！

「ハアァァァァァァ！！！！！！」

俺は、心臓部分から１０ｃｍ手前で、刃がその線を越えたのを確認して、

手刀状態に開いていた両手を、

迫り来る白刃に向けて俺が出せるだけの全力のパワーを使って挟み込んだ！！！

《バチィィィィィィィィィィィィィィィィッッ！！！！！》

雷がなるような激しい音がする！

直刀は、急速にスピードを落とす。

…だが、

『クソ！止まんねー！！』

スローモーを通して見えたのは、

スピードはかなり落ちたが、それでもギリギリ止まらないで心臓目掛けて突き進む白刃だった！

…だけど、俺は、

…諦めねぇ！！

「ウォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

両腕に力を込めて、目を閉じて祈る。

とまれ…

とまれ、とまれ…

とまれ、とまれ、とまれ…

とまれ、とまれ、とまれ、とまれ、とまれ、とまれ、とまれ、とまれ、とまれ、とまれ、とまれ…

…とまれェェェェェェェェェェェェ！！

不意に、胸にチクリと何かが刺さった。

目を開けると、

俺の胸に…

美しく煌めく白刃が刺さっていた。

だが、

それは、たったの『1mmだけ』だった。

「…な……にぃ…！！」

太公望が驚愕している。

俺はその隙に、

『ハァアアアアアアアアア！！』

直刀を持つ太公望の右手を蹴り上げる！

《バチィィィィン！！》

太公望の直刀はそのまま天高く宙に上っていく。

「ムゥン！！」

だが、太公望は素早く着物から新たなサバイバルナイフを取り出して
俺へ向けて突き出す！

…が、それよりも速く！

〈パァン！！〉
と、一発の銃声が聞こえた。

「うぐっ！」

太公望は腹を押さえながらヨロヨロと後退する。

俺は、直刀を蹴り飛ばした瞬間、
素早く取り出した、ｍ３６チーフスペシャルを発砲したのだ！

さらに、

〈バン！〉
「む！」

太公望の右手に持っているサバイバルナイフを素早く取り出したＰ－１４・４５で撃ち落とします。

俺は、無手で立ち尽くす太公望に告げる。

「…お前の負けだ。」

〈ジャキ！〉

《……ドスッ！！》
《カラカラカラン！！…》
撃鉄を上げる音が響き、
銃を突きつけられた瞬間に、直刀が床に刺さる音とサバイバルナイフが転がっていく音がした。

つまり、

俺の勝ちだ。

「ははは…やるな、小僧。」

太公望は、腹を押さえながら呟いた。

血は少しずつ流れている

「ワシに傷をつけたのはぬしも合わせて2人目じゃ。」

「ソイツはどうも。」

俺は警戒を怠らない。

銃は構えたままだ。

「じゃが…ぬしはまだまだじゃな」

「あぁ？」

今のは多少、いらっときた。

まだまだって…

「ぬしは、イ・ウーを潰すつもりなのじゃろう?あの小娘の為に…

な。」
「！！！！……どこで知った？」
俺は、内心の驚愕を隠しながら探った。

「陸遜じゃよ。あやつはワシらの情報源じゃからな。」
「そうかい。」
「じゃから言う。」
太公望は、ハッキリと断定した。

「貴様らじゃ、絶対に『教授』を倒せん。」

…教授？

なんだそりゃ？

「イ・ウーのトップじゃよ。」
「はぁ～ん、そうなんだ～。…って、あんた読心できんのかよ！？」
「うむ。多少はな…」

ええ～
本当にできるのかよ…

まぁ、今はそれよりも…

「じゃあ、あんたのその切り傷は…もしかして…」

「あぁ、そうじゃ。これはワシが全盛期のころから闘ってつけられたら傷じゃよ。しかも、ヤツは寿命こそ近いが、ワシと違って実力は全く衰えていない。」

「……」

俺は、ただ黙っていた。

こんなクソ強いじいさんの全盛期よりも強いって…

そんな奴に…

アリアは立ち向かっているのか…

「ハッキリ言うと、教授と相手になるのはワシと孫権ぐらいじゃ。だからあの坊主を持って行くのじゃ。」

「はっ！させねーよ。俺がいるかぎりはな！」

そう言って、Ｐ－１４・４５のトリガーを引く！

その時！

『はっ！女は大人しくしてな！そんで死んどけや！！』

遠くで嫌な声がしたから振り返ると、

『カハッァァ…』

京乃宮先輩はチンピラに片手で首を絞め上げられながら、苦しそうに呻いている！
しかも、足は地面に着いておらず、中に浮いていて、手はだらしなく下がっている。

そんな京乃宮先輩にチンピラがもう片方の手に持っている銃を額に押しつけて、トリガーに指を掛ける！！！

「京乃宮先輩！！！！！！」

俺は慌て京乃宮先輩に向かってかけだした！

速くしないと京乃宮先輩が殺される！

そんな恐怖を感じながら走っていると、

あることを思い出した。

『あれ？あの直刀……どのくらい遠くに飛ばしたっけ？』

急いで振り返ると、

ソコには…

「抜かったな…小僧。」

あのモーションをしているじいさん…

太公望がいて、

「さらばじゃ。」

煌めく白刃が俺に向かって襲いかかった…

…14　救出戦ｂｙ鷹山勇治ｖｓ太公望（後）（後書き）

次回は綾さんが活躍？

まぁ、ご期待下さいまし

ｍ（＿＿）ｍ

…15　救出戦ｂｙ京乃宮綾ｖｓ張飛&孫権（前書き）

更新メチャクチャ久しぶりだ！！

長くなってしまってスミマセン、
本当にスミマセン。

しかも、かなり乱雑になりました。

本当に、本当にスミマセン。

…15　救出戦ｂｙ京乃宮綾ｖｓ張飛&孫権

「裕太を返しなさーい！！」

二丁ＡＲが火を噴いて弾が二人に襲いかかる

「アァン？かかってこいやー！！」

と言って、
ファイティングポーズをとるチンピラ風の男

……えっ？

そんな事したら……

「ギャアアアアアア！！！」

案の定、銃弾を全部真っ正面から食らってのびていた…

…えー

いくら何でも…それはね…

あまりの行動に驚き呆れていると

「ハァ……バカが、」

裕太を左肩に担いだオールバック男が銃を私に構えた。

「……！！」

そして、その銃を見た瞬間

私は近くの遮蔽物に必死に飛び込んだ！

〈ズドーン！！〉

と、激しい銃声が響き遮蔽物である壁をへこます。

あの銃…！！

きっと、『Ｓ＆ａｍｐ;Ｗ　Ｍ５００』だ…！！

Ｓ＆ａｍｐ;Ｗ　Ｍ５００は……

現在、世界で一番の威力がある．５０マグナム弾を使用する銃で、２００３年に開発した超大型の回転式拳銃。一般市場に流通する商品としては世界最強の拳銃として有名だ。

だって、

あの『アジア最強の武偵』として有名な我らが強襲科のドン。

蘭豹先生が愛好しているんぐらいなんだから…！！

『とにかく、これで迂闊に動けなくなったわね……』

S&W　M５００は何度もいうが、世界最強の銃。

あんなのを食らったら、

いくら完全装備のC装備に、念のために着てた防弾防刃製の武偵高の制服でも、

下手したら……死ぬ。

それでも…

『裕太が……近くにいるのよ。…なら、やるしかない！！！』

私はＭ１６をより脇に強く引き締めて、覚悟を決めた！

「あたなは私が守る……あの子の分まで。」

あの日の約束を言葉に表して、

〈ダダダダダダダダダダ！！！！！〉

オールバック男にむけてＡＲを乱射する！

だが、

〈ガウンッッ！！〉

と言う激しい銃声と共に、何かが右肩を掠めた、

それだけで、
私は肩から地面に倒れた！

掠めただけでこの威力って……！！

嫌な汗を流しながら、取り落としたＡＲを持つと

ライカちゃんがかなり危ない状況に追いつめられていた！

「ライカちゃん！！」

私はとっさに左のＡＲでライカちゃんに援護射撃をする。

すると向こうは大人しく引き下がった。

…だが

〈ガウンッッ！！〉

「ッグゥゥッッ！！」

私の左脇腹に銃弾が掠って床に深く食い込んだ。

イヤ、
掠ったではない…

私の脇腹に当たって、軌道を変えて床に突き刺さったのだ…！

私はまた左肩から床に倒れる。

右脇腹がじんわりと熱い……

「綾先輩！！」

ライカちゃんがこちらに振り向いた、

〈ダダダダ！！！〉

私は痛みで痺れる脇腹に構わずライカちゃんに向けて発砲した。

正確には、ライカちゃんの後ろにいる女性に向けてだが、

「あら危ない。」

だが、いとも簡単によけた。

…まるで銃弾が見えてるみたいに…

けど、そんな事より

「ライカちゃん、私は大丈夫だから。アナタは自分の敵に集中して。…できるわね？」

痛みを完全にこらえてウィンクをする。

すると、ライカちゃんは少し赤くなって小さく頷いて敵に振り返った。

小声で、『かわいいな…うらやましい……』と聞こえたのを私は聞き逃さなかった。

大丈夫よ…

私がアナタをかわいくさせてあげる。

だから今は……

「裕太を助けなきゃね…！！」

私は再びＡＲを構えた。

裕太を返してもらうわよ！！

（数十分後）

ライカちゃんが敵に追いつめられて船内に逃げ込んで、鷹山君がお

じいさんと激しいナイフ戦に入った時、
私は気づいた。

『裕太の様子がおかしい……？』

裕太の様子が明らかに変わっていた。

今裕太は、明らかに顔が真っ赤に染まって、手足がダラーンとしている。

…まるで風邪をひいているみたいな…

すると不意に、
〈ガキィィィィィン！！〉
と、今までよりひときわ大きい金属音がしたから
銃撃を一旦やめて、慌てて遮蔽物に隠れながら遠くを見ると、

Sランクの鷹山君が膝立ちの状態で右手を下げていた！

しかも、敵のおじいさんは今にも鷹山君を突き刺そうとする態勢だ

った。

私はなりふり構わず、遮蔽物から飛び出してＭ１６をおじいさんに向けて放つ！

「させないわ！！」

〈ガガガガガガガガガ！！〉

私の援護射撃をおじいさんは後方に下がってよけた。

「あ、ありがとうございます。京乃宮先ぱ…」

こちらに振り向いた鷹山君が言い切るより速く、

〈ドゥウゥウゥウッ！！〉

「キャアアアアアア！！」

Ｍ５００の銃声が聞こえて、

私は悲鳴を上げながら思いっきり後方に倒れ込んだ！

弾は、私の胸の中央、

鳩尾の部分に垂直に当たり、

私はあまりの痛みと衝撃で

一瞬で意識が飛んだ……

「……すか……みや先輩……」

誰の声が聞こえる……

〈バン、バン、バン、バン、バン！！！〉

《ガン、ガン、ガン、ガン、ガン、ガン！！》

…銃声？

ふと目を開けると、
目の前で鷹山君が遮蔽物越しに敵と撃ち合っていた。

…そうだった

私、確かあのオールバック男に撃たれて気絶したんだ……

それでわざわざ助けに……

「あぁ、うん…ありがとう。大丈夫…げほっげほっ！」

いきなり私は咳き込んだ。

おそらく、さっきの銃弾のせいかな？

まぁ、・５０マグナム弾を真っ正面から食らって生きてる私も私ね
……

頑丈に生まれてよかったわ。

そう思いながら、
鷹山君にバレないように多少吐いてしまった血を隠していると、
鷹山君が私に提案してきた。

「京乃宮先輩！しばらく休んでいて下さい！俺がまとめて相手を…」

鷹山君は喋っていたけど私は強引に静かにしてもらった。

私の人差し指を鷹山君の唇にくっつけて……

「大丈夫よ…私は裕太並みにタフなんだから。
それにね…アナタに全て任せてアナタが傷つき過ぎたら、裕太が泣いちゃうじゃない。」

私は鷹山君を見ながらウィンクをした。

すると鷹山君がカァ…っと赤面した。

大丈夫かな?

「それに…アナタにはあの人がいるしね。」

そう言って、鷹山君の背後に視線を向ける。

視線の先には、

直刀を地面に突き刺して仁王立ちをしているおじいさんがいる。

柔和な笑顔をこちらに向けながら…

「私じゃあ、あの人の相手にはならない。…なら得意な方の射撃で2人を相手どるだけだわ。」

そう言って、私は近くに置いといたＡＲを彼女は掴み、鷹山君に背を向けながら遮蔽物越しから敵を観察して、ＡＲの弾の量を確かめて再装填した。

弾は十分、敵は出てくる気なし。

大丈夫かな?

私はとりあえず、特攻精神で裕太を助ける事だけ考えていた。

自分は死んでもいいから、

裕太を助ける方法だけ考えていた。

すると、

「分かりました。俺はあのじいさんの相手をします。終わり次第、救援にきますから…」

急に鷹山君がキメ顔でかっこいいセリフを呟いた。

…元々鷹山君はイケメンなのにこの状況でそんな事言われたら大概の女子は、

……惚れるわね……

まぁ、私は

「ふふふ、じゃあ…アナタがくるまで待ってるわ。だから…早めにきてね？」

お決まりの言葉を呟き返した。

勿論、これは本心だけどね…

するとまた鷹山君は赤面した。

…かわいいわね～

「はい、お任せ下さい！…では、その時まで…」

「うん、じゃあ一旦お別れね。」

雰囲気を変えるため、私は

ジャキン！

とＡＲの撃鉄を上げる。

そして、

「今よ！鷹山君！！」

《ガガガガガガガガガ！！》

私のＡＲが火を噴くと同時に鷹山君も駆け出した！

「ウォォォォォォォォ！！！」

雄叫びを上げながら、もの凄いスピードでおじいさんに向かっていった。

…ごめんなさい、鷹山君…

「ウッ……」

私は鷹山君の牽制をしてから遮蔽物に隠れて胸を押さえる。

じんわりと滲み出す血……

だけど、見えないだけで体中内出血だらけだ。

体が悲鳴を上げている。

それでも、私は諦めない……！！

「君は何が何でも竹崎裕太君を助けるみたいだな。」

すると、オールバック男が遮蔽物越しに私に話しかけてきた。

「ええ、そうよ。それがどうしましたか？」

敵とは言え、相手は年上。

私は一応、敬語を使った。

「そうか、慕われているんだな。この子は……」

そう言いながら肩に担いでいる裕太を見つめる。

裕太は、いつの間にか意識を失っていた。

ただ、

私みたいに苦しそうに息をしている。

「…裕太に、何をしたの？」

敬語ではない。
荒っぽい口調で私は質問した。

するとオールバック男は、恐ろしい事を言った。

「この子に毒を仕込ませてもらった。」

「！！！！！！」

私は声が出なかった…

…毒？

何の毒？

けどそれより、

裕太は本当に、大丈夫なの？

「あ、あなた達は自分が何をやっているのか分かっているの!?」

ジャキッ!とM16を構える。

すると、船内から女の人が帰ってきた。

「ただいま、孫権」

「大喬か……」

あの人はさっきライカちゃんと闘っていた…

って事は……!!

「ラ、ライカちゃんはどうしたの?」

驚きながらも左のARで女性を、

右のARで男性に銃口を向けて、二人をそれぞれ睨みつける。

対する向こうは、冷静に行動する。

「大蕎、私は今からこの子の解毒を行う為、一時離脱する。頼んだぞ。」

「了解～」

ヒラヒラと手を振りながら孫権を見送る。

…って！

「待ちなさい！」

ジャキ！とＭ１６を構えた瞬間、

〈ドゥウウウンッッ！！！〉

〈ガゥウウウンッッ！！！〉

激しい二つの銃声が鳴り響いたと思ったら、
女性の持っているＤＥと裕太を担いでいる男性のＭ５００によって、
私のＭ１６がバラバラにされた！

「そんな事より、君は気にすることがあるだろう？」
男性は意味ありげにそう言った。

私の後ろを見ながら…

「…！！」

反射的に体を捻るように強引に振り返った直後、

〈ドスッ！！〉という鈍い音が私の腹部より少し上、５０マグナム
弾を真っ正面から受けた鳩尾から響いた。

「…ッッッッッッッ！！！！！！」

声にならない悲鳴を上げながら、鳩尾に深く食い込んだ右拳をはじいてヨロヨロと後退する。

だが、そんな事はお構いなしと言いたいのか、
今度は脇腹にミドルキックが入った。

そして今度は顔にニーキック。

降り注ぐ拳や蹴りを私は止められない。

それだけの体力は私には残っていなかった。

で５０マグナム弾を急所に食らって生きてるだけでもかなり凄い事なのに、
もう動くことなんて、無理だ。

気づいたら…

私は首を締め上げられていた。

…苦しい…

…苦しいよ…

「はっ！女は大人しくしてな！そんで死んどけや！！」

間近で不良みたいな男の人の低い、
嫌な声が聞こえたと思ったら、
私の首がさっきより強く圧迫された。

『カハッァァ…』

たまらず私は微かな悲鳴を上げる。

すると、

「京乃宮先輩！！！！！！」
鷹山が慌て私のに向かって駆け出してきた！

恐怖を顔で表しながら走っている。

だから、
鷹山は後ろのおじいさんの警戒を疎かにしてしまった。

私の虚ろな目に見えるのは、
おじいさんが遠くの刀を引き抜いて、鷹山君の三倍ぐらいの速さで
鷹山君に迫っている。

「た、鷹山…君…。逃げ……て……」

小虫のような小さな声を上げる私に反応したのか、
鷹山君が後ろを見る。

…でも、遅かった…

鷹山君には直刀が迫って、
私には、額に突きつけられたら銃の引き金が引かれようとしてた。
終わった……
頭の中が、完全に真っ白になった。
ただ、真っ白な中でひとりの人物が浮かんできた。
その人は、
腰まで届くような長く、黒に近い藍色の髪を風に靡かせながら、
微笑んでいる。
私達が来るのを信じて待っているように、微笑んでいる。
『ごめんなさい、裕太…』

目を閉じなら、私は懺悔する。

頬を何かがつたっていく

私達、アナタを助けられなかった……

〈ガキンッッ！！！〉

……？

何の音だろう？

閉じた目を開くと、

〈ガタッガタッ〉と、男性が持っていた拳銃が吹っ飛んでいた。

「チッ！！」

明らかな舌打ちをして、男性は遮蔽物に隠れる。

支えを失った私はだらしなく甲板に倒れ込む。

すると、鷹山君の方でもって同じことがあったらしく、

おじいさんも攻撃を止めてバックステップで何かをかわしていた。

不意に、

〈タァァァァン……〉

という銃声が二つ聞こえた。

と思ったら！

〈タァァン、タァァン、タァァン、タァァン、タァァン！！！！！〉

連続で多少違うが、銃声が聞こえて、

『ウオッ！！危ねー！！！！』

『ぬう…、狙撃か…』

敵の二人がひたすら逃げ回っていた。

「京乃宮先輩、大丈夫ですか？」

鷹山君が、ヨロヨロと危ない歩きで私のそばに来ていた。

「あはは……大丈夫…よ……」

「…少なくとも、大丈夫ではないみたいですね…」

鷹山君は多少呆れ気味に呟いた。

まぁ、確かに今の私は体中、擦り傷や打撲だらけだと思うけど……

「ふ～ん、鷹山君こそ疲れた顔して、しかも両手の皮が剥けて血が出てるじゃない。」

「あ……」

鷹山君の手のひらは、まるで走行中の自転車を地面に手をつけて止めたみたいに無残にズタズタになっていた。

「けどそんな事より、一体何が…？」

鷹山君がズタズタの手に拳銃を持ちながら辺りを警戒する。

私はまだ手も動かせないぐらいに弱っている。

…せめて片手でも動かせれば…

〈……バラバラ〉

…？

「何の音？」

「さぁ…」

二人揃って首を傾げる。

「…バラバラバラバラ」

「どんどん近づいているわ…」

「一体何が…」

〈バラバラバラバラバラ！！〉

そして、私達はようやく分かった。

「「ヘリコプター？」」

遠くに見えるヘリコプターが、こちらに近づいてくる。

しかも、ヘリコプターの脇から光が見えて、そのたび〈タァァン！！〉という銃声が聞こえる。

…そういえば、先生が言ってたわね…

『一応、別の捜索部隊も編集しておくから無理するな。』

ってね。

そしてヘリコプターは限界ギリギリまで近づいて、中にいた人たちがパラシュートで甲板に降り立つ。

一人目は、

「すまない、待たせたな！」

言わずと知れた、武偵高最強にて『漆黒の魔弾』の異名を持つ、強襲科三年Ｓランクの鳳凰院朱雀君。

二人目が、

「Ｏｈ、ワターシ、ニホンゴ、アンマリワカラナウィー！ダケド『ソゲキ』ハ、サイキョーダゼェェェ！イエー！！！！！」

…やたらテンションの高いクリーム色の髪を逆立てた長身の外国人の生徒。

三人目が、

「ヘブッ！！」

着地に失敗して顔から落ちた可哀想な女の子。

四人目が、

「……」

武偵高の狙撃科の麒麟児、
狙撃科二年Ｓランク・レキちゃん。

極めつけが……

「くぁら、京乃宮！！お前はそれでも格闘神なのかぁ！？」

ズドンッ！！とパラシュートなしで１０ｍぐらいの位置から甲板に飛び降りた、

我らが強襲科のドン…

蘭豹先生が現れた。

そして、

「ふふふ、確かにこれでは『格闘神』の名が廃りますね。」

カシュッ！というガス圧の音を立てて、
背中に仕込んでいたネビュラをようやく動くようになった右手で左手に打ち込んだ。

ほんの数秒…
あえて体に力を入れずにいる。

……よし！

「私はまだいけます！！」

私は勢いよく立ち上がり、一気にC装備を脱ぎ捨てる。

隣にいた鷹山君は呆然としている。

けどそんな事は関係無い。

私は後ろ髪を留めていたリボンもほどき、
C装備に仕込んでいた二つのホルスターのベルトを素早く両太ももに巻きつける。

「そうよね…、私何勘違いしてたんだろう？」

私は死にに来たんじゃない。
私は…『裕太を助けに来た』んだ！

「私はもう、諦めない…」

独り言を漏らす。

「京乃宮先輩？」

鷹山君が心配そうに見上げてくる。

「大丈夫、大丈夫よ…」

優しい笑みを軽く返して、敵を見直す。

大丈夫、私は……勝てる！

「行くわよ！！」

私は駆け出した。

周りは見ない。

私に見えるのは、この先にいる、

裕太だけ…

「ハァァァァァ！！！！」

私はその道を駆け抜けてみせる！

例え、どんな敵が来ても…

打ち勝ってみせる！

私の二つ名は『格闘神』。

その意味を敵に分からせてあげるわ！！

…15　救出戦ｂｙ京乃宮綾ｖｓ張飛&孫権（後書き）

…つたない文でスミマセン。

次回はみんなの自己紹介と、
『格闘神』が活躍します。

よろしくお願いします。

…16　救出戦ｏｒ総力戦（前書き）

綾さん活躍……って短！！！

代わりに鷹山君サイド大量

…16　救出戦or総力戦

私は船内へ向かって全力で走る。

風の抵抗を最小限に縮めるため、前屈みになりながら全力で走る。

本当に、全力で、

リボンを解いた後ろ髪が馬の尻尾みたいに風になびいているのが分かる。

周りは見ない。

信頼できる仲間がいるからできる事だ。

「待ちな！ここから先は通さないぜ！！」

不意に道を塞ぐ人影。

さっき私をボコボコにした男の人だ。

…丁度いい。

さっきのお返しついでに肩慣らしでもしますか…

「……手加減はしないわよ。」

両腕を胸の前でくの字に折って、拳で頬を守るように、ボクシングのポーズをとる。

「はっ！俺に近接格闘で勝つ気か？バカが！！」

男性もボクシングポーズをとる。

……今の自信、木っ端微塵に打ち砕いてあげるわ。

お互いがお互いに向けて走り出す。

気づけば、互いの距離は２ｍ、

キルイングゾーンだ！

「ウルァ！！！」

敵の男性が、ボクシングポーズから、〈シュッ！〉っと言う風切り音とともに、右拳を繰り出す。

その拳は、プロボクサー顔負けの鋭いジャブで、それに対する私は、

『……遅い。』

繰り出された右拳を完全に見切り、顔を右へスライドさせて、難なく避ける。

その間に、突き出された右腕に左腕を重ねる形で私の左拳が男性の顎にヒットする。

「ウグッ！」

クロスカウンターを顎に食らって、頭が大きく揺れた。

軽い脳震盪だろう。

だけど、

〈シュッシュッシュッシュッ！！〉

「グフッ！」

五つの風切り音とともに、

目に見えない速さで男性の眉間、鼻先、顎、喉、鳩尾に、素早いが

多少重い右ジャブが入る。

男性が痛みで防御を疎かにした瞬間、

〈ズドンッ！！！〉

という鈍い音をだしながら、男性の鳩尾にニーキックを放つ。

「ゲハッ！！」

あまりの威力に男性が体をくの字におる。

そして、くの字に体を折ってちょうど蹴りやすい位置に来た頭を、

「ハァァァァァ！！！！」

先程、ニーキックを放った右足を多少後方に下げてから、
返す勢いで、全力で蹴り上げる！

「ゴボハァ！！」

口から血を流す男性。

だけど私は攻勢を緩めない。

蹴り上げた右足をまた返す勢いで首筋に振り落とす！

〈ゴキンッ！〉と嫌な音がして、男性が前に倒れ込む。

その瞬間！

「……死ねェェェ！！」

男性がカッと目を見開いて、全体重を込めた右拳を私の顔目掛けて突き出す。

だが、

「甘いわ。」

私は体を思いっきり反って、ブリッジの格好で右拳を難なく避ける。

しかも、両手を地面についた瞬間に、
引っ張られたゴムみたいに足が自然に宙に上り、

「ゲハッ！！」

男性の顎を痛打してから地面につく。

だが私は、両手を地面につけたまま、また両脚を上げて扇状に脚を広げる。

そして腕に力を入れて、回転する！

〈ガッガッゴッゴッガスッガスッ！！！〉

カポエラで、男性はこめかみ、顎、首筋、脇腹、太ももといろいろな所に蹴りが入る。

「ラスト、行くわよ。」

そう宣告して、回転の勢いを弱めないまま足を地面に着ける。

当然、体は簡単に止まらない。

だが、それを利用して、遠心力で相手に向き合う瞬間に右拳を突き

出す！

〈ドスッッッッ！！〉

今までに聞いた中で一番鈍い音を出して、通常バージョンに遠心力を加えたキラーアタックが男性の鳩尾を突く！

そして、

「これが真のラストよ……」

左手をネコみたいに指を丸めた状態から、鳩尾に突き立った右拳をもの凄い勢いで引き抜く。

そして、代わりにさっきより勢いよく突き出された左の手のひらが、

〈トンッ……〉

と、当たる直前で威力を消した状態で胸の中央に触れる。

それだけで、

〈…ドサッ〉

男性は、遂に倒れた。

男性は白目になって、ピクリとも動かない。

死んではいないだろうが、軽傷でもないはずだ。

「ふぅー。」

息を落ち着けながら周りを見回すと、みんなが固まっているのが分かる。

怒涛の格闘技で敵の攻撃を全く受けなかったからかな?

まぁ、そんな事はどうでもいい。

今は……

「私はこのまま裕太を捜索します。ここは皆さんに任せます。」

そう告げてから返答も聞かずに船内へ駆け出した。

「鷹山、大丈夫か？」

綾先輩が船内に走り去った後、朱雀先輩が俺のもとに駆け寄ってきた。

「あぁ、俺は手以外は大丈夫です。けど、この手じゃ拳銃を上手く撃てるかどうか……」

俺はさっき、太公望の殺人突きを真剣白刃取りしたとき、剣の摩擦力で手の皮が大幅に剥けてしまった。

今は拳銃を持つことはできるが、当てるのは難しい。

「そうか。なら、目の前のじいさんは俺に任せろ。」

そういいながら、朱雀先輩はホルスターからグロック17を取り出した。

「朱雀先輩、あのじいさんには銃は効きません。全て斬られるか避けられるだけですよ。」

とりあえず、先程まで戦っていたときの経験談を朱雀先輩に教える。

朱雀先輩は黙って頷いて、右手にコンバットナイフと左の指に分割されたギミックロッドを取り出した。

「鷹山、危ないから蘭豹のところに行ってくれないか?」

朱雀先輩の目つきが変わる。

あれは、今から殺し合いをする人の目だ……

「わかりました。……気をつけて下さいね。」

「あぁ」

返事をしてから朱雀先輩が太公望に向かって走り出す。

それと同時に俺は蘭豹の所に駆け出した。

「何だぁ鷹山、そのざまは。お前、それでもSランクなのかぁ？」

すぐさま蘭豹の背後につくと、いきなり蘭豹から罵倒が飛んできた。

「……すみません。」

一応、謝っておいたが……酷いな。

「まぁいい、適当にそこのバカ二人に自己紹介でもしとけ、んで戦って死ね。」

蘭豹はそう告げてから目の前の女に向き合う。

それにしても、

『戦って死ね』って……

いくら何でも酷すぎないか？

まぁ、こんなのは強襲科では当たり前だし、深くは受け止めないで蘭豹に言われた通りに自己紹介をした。

「強襲科二年の鷹山勇治だ。お前達は？」

まず最初に返ってきたのが、

「ドウモ、タカヤマセンパイ。オレハ『ジョン・リケイド』、スナイプイチネンノCランクデス♪」

と、不慣れな日本語にラップを混ぜたような話し方で挨拶をするヤツがいた。

何というか……

何を言っているか分かりづらいな……

「あぁ、その……ジョン、すまないがもう少し分かりやすく話せないか？」

苦虫を噛み潰したような顔で提案する。

まぁ、多少の聞きづらさは我慢す……

「なるほど、先程の話し方ではご理解いただけませんでしたか。先程の無礼、申し訳ありませんでした、鷹山先輩。」

「日本語ペラペラじゃねーか！！」

俺は、いきなりのスラスラな日本語と敬語にビックリした！

何が、『ニホンゴアマリワカラナウィ』だよ！！
敬語使ってる時点で完全に日本語把握してんじゃねーか！！

まぁ、それは置いておいて……

「それで、君は？」

俺は、もう一人。

顔面から甲板に着地した女子生徒に自己紹介を促した。

その女子生徒は、おずおずと恥ずかしそうな仕草を見せながら、小さな声で告げた。

「わ、私は……救護科一年の……夜麻貴火憐…です。」

手を胸の前でせわしなく動かしながら話している辺り、かなりの恥

ずかしがり屋みたいだな。

仕草がまるでリスみたいだな。

ただ他の人と違って
女子用制服に、地面すれすれまである長い白衣を羽織って、
背中にある、かなり大きめのカバンを肩にベルトで引っかけている
以外はな……

そして、最後に……

「レキ、来てくれたか。」

ジョンと同じ狙撃科の麒麟児。

レキに話しかけた。

「今回の任務にはアナタだけでなく、朱雀さんやキンジさんにも依
頼を受けましたから」

棒読み口調で何気なさげに話したが……

「キンジからも依頼を受けていたのか？」

少し疑問に思ったので、聞いてしまった。

「はい。キンジさんは、『あれだけ俺を慕ってくれてるヤツに見知らぬ振りはしたくない』とおっしゃっていました。」

……やっぱり、キンジはキンジだな。

多分、白雪の護衛がなかったらこの任務に来ていただろう。

だから、その分まで俺が頑張らないとな。

すると、不意にインカムから連絡が入った。

相手は風魔からみたいだな。

そして、内容を聞いた瞬間、俺は……

「…！！！！！」

その情報により、驚愕から青ざめていた…！

そして素早く作戦を頭の中で考えて、３人に告げる。

「レキ、ジョン、夜麻貴。ここは朱雀と蘭豹先生に任せて二手に分かれるぞ！まず、レキとジョンが竹崎を捜索する。俺と夜麻貴が荒井の救護に向かう！」

そう言った瞬間、

「「荒井（君）がどうしたんですか？！」」

と、凄い剣幕で質問してきた。

俺は、多少ビックリしながらもありのままに答えた。

「どうやら荒井はプラスチック爆弾を背中に受けたり腹を刺されたりと瀕死の状態らしい。だからまずは荒井に救護の必要がある。」

と、短絡的に述べた。

ちなみに、ジョンの小声の『…犯人、ぶっ殺してやる…！！』はシカトした。

「夜麻貴、お前は何ランクだ？」

「私はこれでもAランクです。それに、私の一家は有名な医師の家系で私も小さい頃からがいろんな怪我や病気に関わっているから大丈夫です！」

そう言いながら、制服の上に羽織った白衣をめくると、メスや注射器といった大量の医療器具が、

背中かなり大きめのカバンからは輸血パックやいまいち分からない薬の入ったビンなどが大量に詰め込まれていた。

「よし、それなら大丈夫だな。ならさっさと行くぞ！」

そう言いながら立ち上がる。

「鷹山先輩、少し待って下さい。今、手の治療をします。」

そう言いながら俺の手に消毒薬をしたしてからクリームみたいな物を手のひらに塗って包帯をした後、皮の分厚いＯＦＧを手に被せた。

ちなみに、今の作業は１０秒以内にはすましていて、本当にＡランクである事を実感した。

「そのＯＦＧは衝撃を９０パーセント吸収して感じないレベルまで衝撃を分散できる特殊な品物です。これで多分、拳銃ぐらいなら使えますよ。」

つまり、今からＰ１４が使えるってことか。

「ありがとう、夜麻貴。助かったよ。」

感謝を込めて笑顔で礼をする。

すると夜麻貴が真っ赤になっていた。

『……あっ、カッコいい…』

…最後の部分はいまいち聞こえなかったが、

まぁいい。

今する事は……

「レキ、ジョン！竹崎を頼む！！」

「鷹山先輩コソ荒井ヲ頼ミマシタヨヨ♪」

そう言いながらお互い船内に入って、別々の方向に走り出す！

場所は風魔にインカム越しに聞いた。

少なくとも竹崎と鉢合わせはないが……

綾先輩とレキ達に任せよう。

そう心に決めて、

俺を先頭に夜麻貴が背後に隠れるような形で荒井の本へ目指して駆け出す。

『荒井、死ぬんじゃねーぞ。』

嫌な汗を背中に感じながら、

俺は無意識の内に、
夜麻貴がついてこれないぐらいの速さで駆け出していた。

…16　救出戦ｏｒ総力戦（後書き）

次回、いよいよボス戦！！！

作者も気合い入れて頑張ります！！

後、

感想書いてくれたら嬉しいです！

…17　救出戦（始まった最終戦）（前書き）

いよいよ最終戦の開始！！

と言ってもほんの少しですがね……

…17　救出戦（始まった最終戦）

私は今、オペラ会場にいる。

ホルスターから『H&K　USP9』を二丁取り出してから、念のためコッキングをした。

薄暗い中、台座だけにスポットが当たり、視界が狂う。

私は薄暗い中、一つ一つの座席に注意しながら、ゆっくりと舞台に近づく。

すると、

「ようやく来ましたね、京乃宮綾さん。」

漆黒のスーツを着た中肉中背の男の人。

約１７０ｃｍの身長に、蛇を連想させる鋭い目をした。

孫権と呼ばれる男が、静かに玉座に腰掛けていた。

「……裕太は、どこ？」

周りに注意しながら舞台にのぼる。

「竹崎君ならあそこだよ。」

そう言いながら視線で場所を伝えてきた。

私も目だけで視線の先を追うと、

「……！！！！！！」

とても大きな十字架、

その十字架に、裕太は縛り付けられていた。

その姿は、処刑されたイエスを私に連想させた。

「裕太に何をした？！！？」

怒鳴りつけながら、ジャキッ！！っと、持っていた二丁の『Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＵＳＰ９』を突きつける。

「まぁ、慌てるな。私はただたんに竹崎の毒をある程度解毒してからここに来ただけだ。磔にしたのはただの演出だ。」

孫権は立ち上がり、銃を構える。

白銀の『Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ５００』が、嫌な光を輝かせる。

さっきは油断したけど……

今度は絶対に！！

「裕太を助ける！！！」

私は孫権に向かって駆け出す！

敗北は許されない！

〈バンバンバン！！〉

左右から二発づつ、弾丸が飛び出す。

それを左に大きくずれて避ける。

そのまま追撃に数発撃とうとした瞬間！

〈バサッ〉と、孫権がジャケットを脱いで私に投げつけた。

〈ババババババン！！〉

私は、立ち止まらずにそれが私を覆う前に銃弾で上空に打ち上げ視界を確保する。

そして駆けながら、目の前に現れるであろう孫権にＵＳＰの照準を構え直す。

だが、

〈ドォォォォォッ！！！〉

激しい音とともに、防弾制服越しに、左太ももに有り得ないぐらいの衝撃が響き、思いっきり倒れ込んだ。

カラカラ……とＵＳＰが私の手から転がり落ちる。

『一体何が……』

じんわりと血のにじむ太ももを押さえながら顔を上げると、

そこには孫権はいない。

「残念だったな、京乃宮綾さん。」

孫権は、いつの間にか背後にいた。

「いつの間に……！！」

痛みに耐えながら立ち上がろうとする私に、

〈ドォォォォォンッ！！！〉

またもや激しい銃声が響き、私の左肩を何かが掠める。

それだけなのに、

私は再び地面に倒れ込んむ。

まるで、力士の張り手を肩に食らったみたいな衝撃だった。

今度はうつ伏せに倒れる私に孫権はゆっくりと近づく。

「たいした事はない。私はただ、君が注意を逸らした瞬間に背後を取っただけだ。」

M５００を脇のホルスターにしまい、私が落とした二丁のUSPを拾いながら歩み寄る。

そして、大の字に倒れてる私の両腕を両脚で強く踏みつけて、銃を構える。

「…ま、まさか……！！」

次の行動が目に見えて、恐怖で目を見開く私に孫権は、残酷に告げた。

「君にはここで死んでもらおうか。」

そして、

〈バババババババババババババババッ！！！！！！〉

フルオートに設定されたＵＳＰが、私に向かって眩い光を放ち……

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！」

私の体に無数の激痛が走る！！

銃弾はわざと防弾制服だけに当ててあるが、その防弾制服の範囲に全て銃弾を浴びせる。

もう、痛いなんてレベルじゃない……

アニメでよく見たマシンガンで撃たれた人みたいに体を激しく動かす。

だが、いくら動かしても踏みつけてられた両腕が抜けずに、ただ脚をバタバタと激しく動かすしかできない。

〈ババババッ！！！ガキンッ！！……〉

ＵＳＰのスライドがオープンした状態で止まった音がして、地獄の五秒が終わった。

だが、体のあちらこちらが痛い……

多分、内臓が少しヤられただろう……

意識が朦朧とする。

「ほう、まだ生きていたか。」

孫権が感心したような顔をしたが、

「安心しろ。今すぐに、楽にしてあげよう。」

そう言いながら再びホルスターからＭ５００を取り出す。

虚ろな目で確かめたけど、今度は頭を狙うつもりみたいだ。

つまり、

『私、死んじゃうのかな？』

不意に私の頭に死の宣告が響いた。

やだよ……

死にたくないよ……

誰か、助けて……

Ｍ５００のトリガーがもうすぐ引かれる。

その瞬間に、私は死ぬ。

イヤだよ……

死にたくない……

お願い、誰か……

不意に、病院で言われた事を思い出す。

『今度こそ、僕は守ってみせます。アイツの二の舞は絶対に踏まない。僕はこの命にかけて……あなたを守ってみせます。だから……僕を、信じて下さい。』

「た……たす……けて……。」

かすれた声を必死に上げる。

届いて……

「たす……けて……」

「裕太……」

その瞬間、

〈ガウンッ！！〉

一つの銃声が聞こえた。

そして私は、

…

……

………

…………

……………

………………

…………………

…………………………

……………………………

『あれ？私……生きてる。』

銃声から十秒は経過したが、

私は死んでいなかった。

代わりに、〈カラカラ……〉という、何かが転がり落ちる音がする。

『けど、何で私……生きてるの？』

不思議に思って、孫権を見ると、

「……やはり試してみる価値はありましたね。」

右手首を痛そうに押さえながら、自分の正面を面白そうに見て、私から離れる。

私は、力を込めてうつ伏せに態勢を変える。

そして、

「…！！！！！！」

絶句した……

私の背後から１０ｍのところに、人がいた。

その人は、

黒に近い深く染まった深海みたいな藍色の髪に、

ズタズタのボロボロなかなり大きめの武偵高の制服を身にまとい、

高熱のせいなのか、
真っ赤な顔をして、額から大量の汗を流しながら、マラソンを走り終えた後のようなかなり荒い息をしている。

そして、

カタカタと震える手で、銃身が長めの『コルト・ピースメーカー』を両手で持って構えている。

私は、声が出ない。

単純に痛みで出せないのもあるけど、
それだけじゃない。

だって、私を助けてくれたのは……

「ハァ、ハァ……ンッ、大丈夫ですか……綾さん……」

私を助けてくれたのは、

他でもない、

裕太だったのだから……

【ほんの少し前】

僕は燃えるような熱さに苛まれていた。

さっき、僕がうっすらと目を覚ますと、
孫権が僕に何かを飲ませて、ベルトに何かを2つ差し込んだのは覚えていたが、

そこからの記憶は無い。

無意識の中で、僕は燃えるような熱さに耐えていた。

すると、

〈バンバンバンバン!!〉

銃声が聞こえて、僕は目を覚ました。

まず驚いたのが自分の状況。

僕はいつの間にか、巨大な十字架に張り付けられていた。

だがこれまた驚いたことに、

縛り付けられてる縄は、あまり強く締め付けられておらず、
頑張れば抜けそうと言うことだ。

そして2つ目が、

『綾さんが、ヤられている……』

格闘神とも呼ばれて、本当の意味で百戦錬磨の綾さんが、

地面にひれ伏している。

『早く助けないと！』

僕は悲鳴を上げる体に鞭打って、必死に拘束から抜け出そうとする。

だが、いきなり

「アアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

耳をつんざくような、甲高い悲鳴がホール全体に響き渡った！

慌てて綾さんを見ると、

綾さんは〈ピクッピクッ〉と、痛みからか、体を僅かに動かしていた。

それを見た瞬間、

僕の何かがブチリとキレた。

だがキレたのは僕だけではない。

制服からはみ出した長ドスを何とか掴んで、僅かに刀身を抜き、そ

れで腕を拘束している縄を断ち切った。

『綾さん！！！』

僕はフラフラと揺れる体を無視して駆け出す！

そして、腰に手を当てた。

すると予想通りに、腰のベルトにコルト・ピースメーカーが差し込んであった。

それを僕は素早く構えたが、

不足の事態が起こった。

『照準が……定まらない…！！』

毒の影響からか、僕の体はカタカタと震えている。

だが、僕は諦めなかった。

片手撃ちから両手撃ちに変え、より命中率を高める為に、膝立ちになる。

それでも手はカタカタと震えるが、

『いける！！』

そして、

〈ガウンッ！！〉

ピースメーカーから．４５ロング・コルト弾が発射される。

その弾丸は、真っ直ぐに……

〈ガキンッ！！〉

Ｍ５００に当たって、遥かかなたにぶっ飛ばした。

そして、

「ハァ、ハァ……ンッ、大丈夫ですか…綾さん。」

綾さんを助ける事が出来た。

「やはり君ならやれると思っていたよ。」

孫権は、何かを僕に向かって放り投げた。

パシッと左手で受け取る。

「……何ですか、コレは？」

最早、強がっていられないからありのままの自分で対応する。

「解毒剤さ、そしてこっちは活力剤だよ。」

そう言いながらもう一つビンを投げる。

こちらも僕は受け取る。

だけど、

「なぜ、このようなことをするんですか？」

僕はただたんに理解出来なかった。

何故、わざわざ敵を治す必要があるのか……

「簡単なことだよ。私は君の実力をもう一度、試したいんだ。」

そう言いながら、綾さんをお姫様抱っこして、玉座に座らせる。

「戦わないなら構わない。だが、この少女がどうなるかは……分かっているね？」

孫権は親指と人差し指で、気を失った綾さんの顎に軽く触れて、こちらに顔を向ける。

その顔は、

痛みに苛まれて辛そうな顔をしていた。

「そんな小細工しなくたって、初めから答えは決まってますよ。」

そう言いながら、まずは解毒剤を、

次に活力剤を飲む。

ドクンッ!!と心臓が激しく動き、体がよりいっそう熱くなる。

だが、
だんだんと熱が引けて、終いには体は普段通りに動くようになっていた。

「僕は武偵です。武偵はどんな時でも悪を見逃しません。」

そう、

僕は武偵なんだ。

あの人に憧れて……

僕を助けてくれた、

あの、

『義』に生きるある一族の中でも『義』に徹した人物……

ほつれのない茶髪に美しく輝く翡翠色の目をした端正な顔立ちをした、
完璧な人。

あの人を真似て髪を伸ばしたり、武器をコルト・ピースメーカーにしたぐらい
憧れた人。

そして、
１２月のある日に、自分を犠牲にして、乗客全員を救ったあの人。

遠山金次先輩のお兄さん、

『遠山金一』さんに憧れて、

武偵になったんだ。

けど、

「孫権さん、アナタはいけないことをした……」

アナタは……

アナタは……！！

「綾さんを傷つけた。その意味を……しっかり理解して下さいね。」

制服の袖から素早く二つの長ドスを抜き、ジャケットとネクタイを投げ捨てて、

孫権を、殺気の籠もった目で睨みつける。

孫権は、一瞬怯んだような仕草を見せたが、

「あぁ、そうだね。それを覚悟して私はわざわざ君に本気を出させたんだ。」

そう言いながら、ホルスターを固定するベルトを解きながら、背中

から日本刀を二本取り出して、

「だから、私をガッカリさせないでくれ。」

孫権は、二本ある内の一本の日本刀の鋭利な切っ先を僕に向ける。

それに対して僕は、

「安心して下さい。僕は……負けませんから！！！」

僕は弾丸のような勢いで駆け出した。

そして、ニ秒足らずで１５ｍの距離を詰めて、

「ハァァァァァァァ！！！！！」

右の長ドスを振り落とす！

孫権は袈裟斬りの容量で、

「ウオォォォォォォォォ！！！！！」

左手に持つ日本刀を斬り上げる！

〈ガキィィィィィィィィィィィィィン！！！！！！！！！〉

激しい金属音が鳴り響いて、

僕と孫権の、

『この戦いの最終戦』が始まった！！！！

…17　救出戦（始まった最終戦）（後書き）

次回、
裕太と孫権の命を懸けたバトル！！

次回にご期待下さいね～

感想、待ってま～す！！

P．S．
裕太と金一との出会いは……いつか番外編で書くつもりです。

…18　救出戦　予想外の結末（前）（前書き）

何かバトルがかなり雑……

まぁ、温かい目でご覧下さい。

…18　救出戦　予想外の結末（前）

〈ガンッガキンッガガガガガッキキンッキキンッッ！！！〉

孫権の日本刀と僕の長ドスが、お互いの急所に向けて鋭い一撃を放ち、
それをお互いの武器で弾き合う。

「やるな、竹崎君！！」

「あなたは強過ぎですよ、孫権さん！！」

〈ガガガガガッキキンッキキン！！！〉

会話の中でもお互いの剣技は揺るがない。

お互いに急所に切り込み、
開いてる方の剣で防がれ、
防いだ方の剣が急所に襲いかかって、
また防がれての繰り返しだ。

「ふん！！」

孫権の左刀が僕の頸動脈に向けて振り落とされる。

だがそれを僕は右刀で受け止める。

そして内側から外側に弾きながら、大きな円を描くような流れで右刀を孫権の脇腹目掛けて下から切り上げる！

だが、向こうも迫る僕の右刀を彼の右刀で受け止めて、弾かれた左刀を僕の顔に向けて突き出す。

それを左刀で右に押し流して、左刀を彼の脳天に向かって振り落とす。

だが、また受け止められ、攻撃が迫る。

そんな事が続いて、いつの間にか……

『裕太ー！！助けに来たでござるよ！！』

振り返れないから分からないが、

風魔を含む複数の集団が俺を救出に来た。

だが、風魔達は何もできない。

何故なら……

〈ガガガ！！！！！！〉

風魔達は、ぶつあり合う無数の金属音に驚愕していた。

『……太刀筋が、見えない……！！』

佐々木の声が聞こえたが、そんな事を気にしているヒマは無い。

一瞬でも油断したら、

その瞬間に僕は死ぬ。

〈ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！〉

一進一退の攻防が続く。

まるで至近距離から放たれたマシンガンの弾を斬っているみたいだ。

お互いに、体のいたるところに無数の掠り傷が出来ているが、関係ない。

……気がついたら

「ふふふ……」

「ははは……」

気がついたら、僕たちは……

「「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハァァ！！」」

笑っていた。

殺し合いの嫌いな僕でさえ、

笑っていた。

僕の頭に浮かぶ感情はただ一つ、

『楽しい』

それだけが、僕の頭にあるだけだ。

それから何分たったかは分からないけど、

事態が大きく変わった。

〈ガガガ！！！！！！〉

相変わらずマシンガンみたいな音をたてながらぶつかり合う見えない刃。

だが、

「ウッ……！！」

だんだん、僕の体につけられる掠り傷が孫権より多く、深くなってきた。

多分、活力剤の効果が切れてきたのだろう。

いくら気絶しているうちに風穴を塞いでもらったところで、僕の血が戻って来るわけではない。

だんだんと動きが鈍くなると同時に、頭が動かなくなってきた。

そして遂に、

〈ヒュンッ！！〉

金属音が途切れて、風を切る音がした。

僕は反射的に顔を左にスライドさせる。

それと同時に右眉の上辺りを何かが掠めていき、
ドバッと血が流れて、右目に血が流れ込んだ。

「ウクッ……！！」

目に多少の痺れと痛みを感じ、右目を瞑りながらバックステップで
距離をとった。

…つもりだったのだが、考えが甘かった。

髪で多少隠れた左目が捉えた物は、

銃弾のような速さで迫り来る何かだった。

それが刃と認識したのは、

〈ドッドッドッドッドッドッドッドッ！！〉

体に刃が深く突き刺さった後だった。

「…ッガアアアアアアアアアアアアアアッッ！！！！！！」

一拍遅れてくる痛みに悲鳴を上げながら、膝をつく。

左目で確認すると、

右腕以外の上半身の至る所に、大量の刺し傷ができていた。

しかも酷いのが左肩で、明らかに貫通していた。

痛みで涙目になりながら、無事な右腕で一番酷い左肩を抑えていると、

気付かぬうちに、頸動脈スレスレのところに煌めく白刃が突きつけられていた。

「君の負けだ、竹崎君。」

孫権の低く、威厳のある声がホールに響く。

「裕太！！」

ジャキッと銃を構えた間宮の声が聞こえる。

雰囲気で分かるが、風魔や佐々木も武器を構えて、突進しようとしている。

「お前ら来るなァァァァァァァ！！！！！」

ホールに響き渡る僕の大声に、風魔達が足を止める。

「僕は大丈夫だよ。だから来ないで……」

僕は最早、口調を気にできないぐらい弱っていたが、取り落とした長ドスを右手に持ち、地面に突き刺す。

「でも裕太、アナタそんな体で……！！」

振り返ると、間宮が目に涙を溜めながら悲しそうな目で僕を見つめていた。

そんな間宮に、僕は微笑んだ。

「大丈夫だよ間宮、僕は死なないから。」

そう言って、長ドスを杖にして無理やり立ち上がる。

ガクガクと足が震えているのが分かる。

それでも僕は、孫権を真っ直ぐに見つめて、

「終わりにしましょう、孫権さん。」

倒れ込みそうな体に力を入れて、右腕だけで長ドスを構える。

「君の実力は分かった。合格だよ、竹崎君。だから、そこまで頑張らなくていいよ。」

孫権が呆れた顔で刀を鞘にしまう。

そんな孫権に、独り言を言うような口調で呟く。

「……次がラストだ。」

「……何？」

怪訝そうな顔でこちらを見る孫権に、僕は改めて告げる。

「次の一撃に、僕の本気を注ぎ込みます。」

真っ直ぐと孫権を見つめる。

「……ほぅ、面白い。」

孫権が興味津々の顔で僕を見つめながら、日本刀を一本取り出して、

「ならばその本気とやらを見せてもらおう！！」

僕の脳天目掛けて思いっきり振り下ろした！！

だけど、僕は動かない。

ただ心を落ち着けて、
そっと呟いた。

「…レパル…」

その瞬間、

飛んだ。

何が飛んだというと、

まず、日本刀が飛んでいった。

飛んでいった日本刀は、天井に刀身が見えなくなるぐらい突き刺さった。

それとほぼ同時に、孫権が吹っ飛んだ。

車にひかれた人みたいに、ステージを転がり
僕が張り付けられていた十字架にぶち当たって、止まる。

「何だ…それは……」

息も絶え絶えに言葉を紡ぐ孫権。

孫権の目に映るもの、

それは、再び長ドスを杖みたいにして寄りかかる僕の中心に広がる半径１ｍの薄紫の球体だった。

「先程も言ったはずですよ。」

僕も、息も絶え絶えながら説明する。

「これはレパル……つまり、『反発』ですよ。」

「……なにぃ」

孫権が驚愕の眼差しで僕を見る。

「僕の超能力の反発（レパル）はその名の通り、反発」

「内から外へはいけるけど外から内には何でも跳ね返す、一方通行の結界。」

それはつまり、

「銃撃であろうと斬撃であろうと衝撃であろうと爆撃であろうと、ありとあらゆるモノを何でも『反発』する。」

「……！！」

「しかも『反発』の名と同じく、憎めば憎むほど反発力も二倍や三倍になる。つまり……」

孫権を真っ直ぐに見つめて、告げる。

あなたに勝機はないと……

「これは完全攻防体の結界なんですよ。」

「つまり……私が跳ね返されたのは……」

孫権が確信したような顔をした。

「この長ドスはブラフです。」

本命は、

「僕はこの能力をアナタにゼロ距離で食らわせて『反発』させただけですよ。」

「……そうか、」

孫権が大の字に倒れたままこちらを見つめる。

「……私の負けだ。」

その言葉で、この戦いは終わった。

…はずだった。

…18　救出戦　予想外の結末（前）（後書き）

次回、いよいよ最終局面へ！！

どうぞ、お楽しみに～

感想待ってま～す！！

P．S．

最終局面といっても、アドシアード編が終わる訳ではありません。

…19　最終局面（僕が守りたかったもの…）（前書き）

まさかの展開、

フルサイドかつ長いです。

自分的にはこの展開は……

もう、本当に……

…19　最終局面（僕が守りたかったもの…）

【鷹山サイド】

「……いた！！」

荒井を捜索して走ること、たった3分。

俺と夜麻貴は荒井を発見した。

……だが、

「これは……ひでぇ……」

あまりの荒井の惨状に、
俺は息を呑んだ。

荒井は、力なく体を壁に預けていた。

その周りは、

無数に転がる薬局と、悲しいまでに飛び散った血痕だった。

そして、荒井の顔色と周りの血の量を計算してみたが……

生存率は、二桁もないだろう……

「夜麻貴、何とかならないか？お前には荒井を助けることはできないか？」

ある程度、覚悟を決めて夜麻貴に質問する。

多分、答えは「できません」だとおも…

「できます。」

即座に告げられた、否定の言葉。

「……本当か！？」

夜麻貴の返答に、俺は夜麻貴に詰め寄る。

だが夜麻貴は今までみたいに狼狽しない。

それどころか俺すらみない。

夜麻貴はただ、荒井を鋭い目でジッと見つめながら、
カバンから輸血パックやチューブを、

白衣からよく分からない医療器を取り出す。

「3分……」

「何がだ？」

「荒井さんは、後3分で絶命します。」

「……」

血が凍るような感覚が体を襲う。

荒井がたった3分で死ぬということも理由の一つだが、

俺は、夜麻貴の人の代わり様に恐怖した。

今の夜麻貴には、出会い頭のような気弱な感じはない。

…ただ、感情が読めないような顔をして、ロボットみたいな喋り方をしている。

……まるで、『人型医療ロボット』みたいに、医療器を自分の周りに展開する。

「これより、『蘇生手術』を行います。鷹山先輩、アナタがいらっしゃると集中が切れる可能性があるので、目的の救出に加わって下さい。」

そう告げて、夜麻貴は治療に入る。

俺は、死にかけの後輩に何もしてやれないことに、無力感を感じた。

「……荒井は任せたぞ。」

そう告げてから、俺は駆け出した。

すると、

『……ァァァ……』

不意に、悲痛な悲鳴が聞こえた。

何故か、胸騒ぎがする。

得体の知れない不安感が、俺を襲う。

「クソッ！！」

俺は、悲鳴が聞こえた場所に向かってはしりだした。

どこかは分からない。

ただ、

得体の知れない不安感を振り払うがごとく、走り続けた。

【鳳凰院サイド】

「ハァ、ハァ、ハァ」

「ウム、やるな小僧。」

太公望は悠然と佇んでいる。

それに対する鳳凰院朱雀は、大きく肩で息をして、ギミックロッド

を構える。

「しかし、貴様はあの坊主や小僧とは実力が違うみたいじゃな、あやつらならば既に１０回は死んでおるぞ。」

太公望は、柔和な笑みを崩さずに感嘆の表情を作る。

そのほめ言葉を朱雀は一蹴する。

「当たり前だ。」

「ほぅ……」

興味津々の顔で朱雀の顔を見る太公望。

そんな太公望に、諭すような口調で朱雀は告げる。

「三年生（年上）が一、二年（年下）の見本にならなきゃどうする。」

「……」

辺りに会話が無くなり、遠くから響く銃声が聞こえる。

絶対的な静寂のなか、
不意に動いたのは……

「ゆけ…」

太公望だった。

「どういうことだ?」

ギミックロッドをより強く握り直し、警戒心を露わにする。

だがそんな朱雀に太公望は直刀の腹を肩に乗せて、背を向けて歩き出す。

「心配なのだろう、あの坊主が。」

「……」

「そのような心無い状態ではワシの息を切らすことすら叶わぬぞ。」

「……」

多少の掠り傷があり肩で息をしている朱雀に対して、
太公望は腹に弾丸がありながらも怪我や息に全くの異常が見あたらなかった。

再び訪れる静寂。

しかし今度は、

「礼は言わないぞ。」

そう告げて、朱雀は素早く太公望の真横を駆け抜けて船内に入る。

その様子をジッと見つめて、太公望はため息を一つ漏らした。

「精々、自分を責めん事じゃな。」

青空を見上げて、
太公望はまた一人、ため息をついた。

【蘭豹サイド】

「火野はどこにやった～」

蘭豹はドデカいリボルバータイプの拳銃、
『Ｍ５００』を倒れている女に突きつける。

銃を突きつけられてる女性はピクリとも動かない。

「……ッチ、面倒やな…」

蘭豹は大きくはないが小さくは絶対ないくらいの舌打ちをして、女性を蹴り飛ばす。

その女性……『大蕎』と呼ばれた女性は力無く辺りを転がる。

蘭豹は、それが普通と言わんばかりに仰向けで倒れていた大蕎の首襟を片手で持ち上げ、
思いっきりうつ伏せに地面に押し倒す。

そして流れるような手つきで両手首に手錠をつける。

「はい、逮捕完了。」

ガチャリと金属音がなり、大蕎の手が拘束される。

「蘭豹先生!!」

するとそこに、彼女の名を呼ぶ人物が現れた。

蘭豹が面倒くさそうに振り返ると、

そこには、胸の中央を苦しそうに押さえる金髪の少女がいた。

「火野か」

蘭豹が短絡的に本人かを目で確認して、
本人と理解して気だるそうに指令を下す。

「火野ぉ～、面倒くさいから今から言うこと、お前がやれ。」

そう言って火野ライカに投げつけられる、インカムとは違う通信機。

それを難なくキャッチしながら、ライカは不満げに蘭豹を見る。

「ハァッ!?何で怪我人の私が……ハイ…やります……」

火野が一瞬、蘭豹を非難しようとしたが、止めた。

多分、そうしたら武偵高名物の『体罰フルコース』の一つを今、ここでくらわせられそうだったからだ。

「それで、何て連絡すればいいんすか?」

ライカが呆れ顔で機械を操作しながら蘭豹の指示を求める。
蘭豹は気だるそうな口調を変えずに淡々とライカに指示をする。

「ロジの林隼人（はやしはやと）にヘリで１０分以内に来いと伝えろ。」

「じゅっ、１０分!?」

驚愕するライカをよそに、蘭豹は指示を休まず伝える。

「あぁ、ヤッパちがうな…。よし、ロジの林隼人を中心に、ヘリを速く動かせられる上位3人にヘリを用意させろ。」

「えっ?」

「んで、そん中の二つはドクターヘリにして、救護科の優等生を三人づつ待機。」

「ちょっ、ちょっと!?」

「そんで、武偵病院にいつでも手術ができるように準備しろと…」

「待って下さい、蘭豹先生!!」

「何や、死にたいのか火野?」

蘭豹がようやくライカの声に耳を傾ける。

「どうしてそんなに急いで救護科を呼ぶ必要があるんですか？そんなに重傷者はいな…」

「お前、一変死んでそのバカ治せバカ。」

ライカは蘭豹の罵詈雑言で多少、泣き目になっていたが蘭豹はそれを無視して返答する。

「お前は『敵がどれだけ強かった』か忘れたんか？ウチですらこれや。」

「……」

ライカは、蘭豹が示した二つの掠り傷と、一度死にかけた事を思い出し、
事の重大さを感じたのか、押し黙った。

そして、蘭豹が確信をつく。

「オマケにコッチのメンバーには、只でさえ戦闘経験のない一年が大半を閉めてる、しかもその一年の最低ランクの『Eランク』が参

加してるんやぞ。」

「…！！」

ライカの顔から血が引けていく。

蘭豹は気だるいそうに、

だが、深刻そうに呟いた。

「死人がでても、おかしくないやろ…」

静まり返った船内の一室に、

カツン…と、ライカが持っていた通信機の落ちる音が響いた。

【竹崎サイド】

「私の負けだ……」

大の字で倒れている孫権は、静かに敗北を認めた。

〈グラッ〉

『あれ？視界が……』

一瞬、視界が急に変わり、
背中から地面に引っ張られるような感覚が体を襲う。

すると、背中と頭にに何かがぶつかった。
最初は床かと思ったが、違うみたいだ。
妙に柔らかい何かが後頭部に当たっている。

「裕太、頑張りすぎにござるよ……！！後は某たちに任せるでござる。」

風魔の声が聞こえる。

どうやら風魔が俺を抱きとめたらしい。

この柔らかいモノは……風魔の胸かな？

ふとそんな事を思っていると、あることに気づいた。

『僕、鼻血出してない……』

普段だったら鼻血を流しているだろうこの状況に、僕は平然としている。

…あぁ、そうか…

『もう鼻血を出せないぐらい、弱ってるのか……』

どうやら僕は頑張りすぎたみたいだね…

もう、殆ど感覚がないや……

……けど、

「ごめん風魔、僕は最後まで、あの人と決着をキチンと自分でつけたいんだ……」

振り返って風魔を見つめる。

風魔は迷うような仕草をしたが、やがて僕から手を離した。

「無茶をしてはいけないでござるよ……」

「ありがとう。」

僕は軽く礼を言ってから歩き出した。

ゆっくりと、ゆっくりと孫権に近づく。

孫権は起き上がらない。

そして僕は、大の字で倒れている孫権を見下ろす。

「ははは、君はつよいね。」

「あれは……チートみたいなモノですよ。」

こんな感じのくだらない会話を軽くした後、

僕は言いたかったことを言った。

「僕は、違う形でアナタに会いたかった……」

「……」

「お互いを高めあえる、そんな環境でアナタに会いたかった……」

「……そうか。」

「……話しすぎましたね。」

僕はそう言って、手錠を取り出す。

そのとき、

不意に視界が揺れた。

そして気付いたら、
僕は孫権に抱えられていた。

背後からビキッ!!、となにかにひびが入る音がした気がした。

「すまない、竹崎君。だが、あれを見たまえ。」

孫権にお姫様抱っこされたまま背後の壁を見ると、
さっきまで僕の頭があった壁に深く銃弾が食い込んでいた。

「それより前を見たまえ。」

孫権が前方に注意を促したので前に向き直ると、
そこには……

「……ロボット？」

人型のロボットが一体、いつの間にか現れていた。
そして、僕はそのロボットが持っている獲物を凝視した。

「Ｍ６０マシンガンって……！！！」

ロボットはＭ６０マシンガンを持っていた。

そしてその銃口を構えなおした。

……風魔達に向けて、

「……えっ？」

間宮が素っ頓狂な声を上げたと同時に、

〈ババババババババババババ！！〉

Ｍ６０から爆音が響き、風魔達に向けてＮＡＴＯ弾が発射された。

だが、ＮＡＴＯ弾は風魔達には当たらない。

ＮＡＴＯ弾は一直線に放たれたところに戻り、

〈バカンッッ！！〉

発砲源であるＭ６０を穴だらけにした。

「ゆ、裕太。いつの間に……！！」

風魔が驚愕する。

風魔達の前には、薄紫の球体を纏った僕がいた。

そう、

今のＮＡＴＯ弾は僕の『反発』で全て跳ね返したのだ。

「うぁ……」

僕は反発を解いて、膝をつく。

「裕太！！」

ふと、風魔でも間宮でも佐々木でもない女性の声が聞こえた。

……と言うより、

「綾さん……」

綾さんがよろよろと玉座からこちらに向かって歩いてきた。

……が、それだけではない。

綾さんの後ろにいる。

一つの物体。

先程のとは違う、別のロボットが、綾さんの後ろにいた。

「綾さん！！！！！」

その瞬間、

僕は反発を『右足首辺り』だけ展開してその右足で床を強く蹴った。

すると、僕の体は加速装置がついたみたいな速さで一直線に綾さんとロボットの間に割り込んだ。

さっきの風魔の時もこれを使って移動した。

これは地面と体を『反発』させて、その威力で有り得ない速さで移動できるのだ。

……だが、今ので『反発』は打ち止めみたいだ。

体の感覚で分かる。

『それならコレを使うまでだ！！』

そして腰のベルトからピースメーカーではないモノを抜き取る。

……それは、

『期待してるよ、バンカー』

僕の自作大型拳銃、
『バンカー・ブレイカー』だ。

僕はそれを両手で構え、
あろう事か、セミオートから『フルオート』に切り換えた。

コレが意味すること、

それは……

『完全破壊（パーフェクトブレイク）』

『ババババババババババババ！！！』
『ドドドドウウウウンッッ！！！！！！！！』

発砲音はほぼ同時だった。

バンカーが六発の１５ｍｍ弾を全て射出したと同時に、
バンカーがスライドごと木っ端微塵になって吹っ飛んだ。

コレが『完全破壊』の代償。

完全破壊は自らも壊す。

自らを犠牲にした最強の六発と無数の弾丸、
それぞれの銃弾が交差する。

バンカーの弾であるオリジナル弾の『１５ｍｍ弾』の一発がＮＡＴＯ弾を三つ弾いて、更なる三発のＮＡＴＯ弾により弾き落とされる。

だが、弾き落とされた１５ｍｍ弾の進路から更に１５ｍｍ弾が通り抜けて更に六発の銃弾を弾き落として地面に落ちる。

徐々に１５ｍｍ弾がＭ６０マシンガンの銃口との距離を縮める。

そして最後の１５ｍｍ弾が、

Ｍ６０マシンガンの銃口に……

『入った！』

そして、

〈バガァァンッッッ！！〉

Ｍ６０マシンガンは吹っ飛んだ。

どうやら勝つには勝った。

だが、

「あっ、ぐぁ……」

ゴトッと、グリップだけになったバンカーが手から滑り落ちる。

右腕が痛い。

『……クソ、右腕の骨が全部イったか……』

僕は痛み加減で大体把握した。

どうやら右手首から右肩にかけて、骨に罅が入っているみたいだ。

あぁ、クソ……

これじゃ、両手を動かせないじゃん。

〈ガ……ギギギィ……〉

……何の音だ？

妙な機械音がした方向を見ると、そこには最初に破壊したＭ６０マシンガンを持つ、人型ロボットがあった。

なぜか銃口が、綾さんに向いている状態で……

「危ない！！！」

僕は、無意識に綾さんに向かって跳び蹴りをしていた。

綾さんが僕を見ながら仰向けに倒れようとしている。

その顔には、恐怖でひきつっていた。

〈バァン〉

一つの発砲音が聞こえて、何かがバラバラになった音と同時に、

〈ドッ！！〉と何かが突き刺さる音とともに、
僕の右腹に物凄い衝撃が伝わったかとおもったら左背中から何かが体を突き抜けた。

僕はあまりの衝撃に体をくの字に折って、ほんの少し宙に滞空してから床をバウンドしながら後方に転がる。

そして、壁にぶつかって仰向けの状態で倒れる。

腹からドクドクと血が流れているのが分かる。

そうか……

僕、撃たれたんだ……

「裕太！！」

風魔達が俺に駆け寄る。

「はは……みんなどうして泣きそうなんだよ……」

必死に声を紡いだが、声は掠れて口からは血が流れる。

……あまり無いはずの血液が……

風魔達は声を上げて泣き出した。

ホールを鼻をすする音や嗚咽で満たされていく。

「……裕太？」

いつの間にか、綾さんが僕の顔のすぐ横に膝立ちで座っていた。

僕は綾さんを見つめる。

ボロボロになった武偵高の女子制服。

ほどかれた茶色の長髪。

何があったか分からないというような困惑した表情。

どれをとってもいいといえる所は見つからないけど、

それでも僕は見つけた。

「よかった……」

綾さんが困惑した顔で『何が？』と聞いた。

そんなの決まってるじゃないですか……

「綾さんに怪我が無くて、よかった……」

「……！！！！！！！」

綾さんが困惑の表情から驚愕の表情に変わる。

そして、目にはうっすらと涙が溜まっていた。

「僕、今度こそ約束守れましたね……」

「！！！！！！！」

力が無くなっていく中で、必死に僕は言葉を紡ぐ。

「これで……アイツの所にいける……」

「嫌よ！！裕太、私を置いていかないで！！！ずっとそばにいて！！！」

綾さんが僕を抱き締める。

強く、強く抱き締める。

温かい雫が僕の肩に落ちる。

「もう、『あんな事』は嫌よ！！」

あんな事とは多分、綾さんの妹の事件だろう。

確かに今回の事件はあの事件と多少似ている。

けど、あの事件と違うのは……

『僕は、ちゃんと助ける事ができた……』

僕は無理やり右手を動かして綾さんの背中を触るように抱き締める。

僕も強く、

自分が出せるだけの力で抱き締める。

「ごめんなさい。」

そして告げる

いつの間にか、涙を流しながら、

「それから」

僕の最後の言葉を……

精一杯の笑顔で……

「ありがとう」

途切れゆく意識の中、

重くなる体の中、

最後まで僕は、

綾さんを強く抱きしめていた……

…19　最終局面（僕が守りたかったもの…）（後書き）

次回は……敢えて予告しません。

感想待ってます

…20　どうして……（前書き）

更新が微妙に遅れました。

すみません。

…20　どうして……

今、私たちは武偵病院にいる。

緊急搬送された裕太や荒井君の手術が行われている。

「…裕太、…裕太…！！」

陽菜ちゃんと間宮ちゃんが泣いている。

鷹山君と朱雀君は外に出て行った。

そして私は、

「裕太……」

膝を抱えて顔を隠す。

もう……

何も考えたくなかった……

【6時間前、船内にて】

「危ない！！」

そう叫ぶと同時に、いきなり裕太が跳び蹴りしてきた。

手加減したのか、私の体は床に向かって軽く傾く。

何があったか分からず、私は裕太の行動を不思議に思って
倒れる前に裕太の顔を見た。

その時の裕太の顔は、何かを失ってしまうという恐怖感が分かる顔
だった。

〈バァン〉

その音とともに、裕太の表情が変わった。

恐怖の顔より更に目は見開かれていた。

そう思ったのもつかの間、

裕太が吹っ飛んだ。

確認しようにも私は床に倒れ込む。

倒れた時に見えたのが、

バラバラになっていくＭ６０マシンガンを構えたロボット。

そして響く泣き声。

立ち上がって辺りを見回す私の視界に入ったのは、

「……裕太？」

腹から大量の血を流している、

裕太だった……

私は裕太に駆け寄って顔のすぐ近くに膝立ちで座る。

それをようやく見つけた裕太の目は、虚ろだった……

私を視覚で確認した裕太は嬉しそうにこう呟いた。

「よかった……」

私は分からなかった。

裕太がなぜ腹部から大量の血を流しているのか、

何がよかったのか、

「何が？」

だから私は質問した。

……そして後悔した。

「綾さんに怪我が無くて、よかった……」

「……！！！！！！」

怪我が無くて？

それって、私は危ない状況だったわけ？

私は裕太が吹っ飛んだ所の壁を見る。

そこには、さっきあたしがいた辺りの場所の所に、大きな罅が入っていた。

『まさか……コレって！！？？』

私は瞬時に全てを理解した。

『裕太は……私の代わりに銃弾を……！！！！！』

いつの間にか、私の目にはうっすらと涙が溜まっていた。

「僕、今度こそ約束守れましたね……」

「！！！！！！」

約束と聞いて、私の体が震え上がった。

確か裕太はあの時、こういった。

『今度こそ、僕は守ってみせます。アイツの二の舞は絶対に踏まない。僕はこの命にかけて……あなたを守ってみせます。だから……僕を、信じて下さい。』

まさか、『この命にかけて』って……

死ぬことも、厭わないってことだったの？

「これで……アイツの所にいける……」

その言葉を聞いた瞬間。

私の心を見えない刃物が突き刺した。

……また、いなくなる

その事が、私の頭の中を回った。

「嫌よ!!裕太、私を置いていかないで!!!ずっとそばにいて!!!」

私は倒れている裕太を抱き締めた。

もう離したくない!!

失いたくない!!

ずっと一緒にいたい！！

傷ついた裕太の体を、
強く、強く抱き締める。

ボロボロと零れる涙が裕太の肩を濡らす。

私はもう……！！

「もう、『あんな事』は嫌よ！！」

あんな思いはしたくない！！

私のかわいい妹を失った時の……

あの言いようのない辛さを、もう感じるのは嫌だ！！

絶対……！！

絶対、裕太だけは何があっても守る！！

そう誓ったのに！！

悲しみに明け暮れて、止まりそうもない涙を流す私の背中に何かがふれる。

それが手であることと、
その手は裕太の手であることは直ぐに分かった。

裕太の手は、
はねのけてしまえば二度と戻らないようなくらい、

弱々しかった……

「ごめんなさい。」

不意に告げられた謝罪の言葉。

私の涙は止まりそうに無い。

「それから」

私は最後の言葉を、

聞きたくなかった……

「ありがとう」

……

……

……

……

……

……

……

……

……

「裕太？」

私は裕太の名前を呼ぶ。

返事は、

返ってこない。

ただ、

私の背中に置かれていた裕太の右手が、
静かに、床に落ちた。

「裕太…」

もう一度、裕太の名前を呼ぶ。

返事は無い。

「裕太、お願い。返事をしてよ……」

裕太は私に答えてくれない。

ただ、私に抱き締められてる。

わざと、強く抱き締める。

それでも、裕太は声を上げない。

不意に、

私たちが子どもだった時の会話を思い出す。

『僕たち、ずっと仲良し三人組でいようね』

『当たり前じゃん、崎太！』

『私たちは、ずっと一緒よ！』

『『『ずっと一緒だ！』』』

どうして……

どうしてなの……

どうして……

みんな、私を残していくの？

「裕太ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

悲痛の叫びがホールに響き渡る。

声が枯れるまで、私は叫び続けた。

そして感じる……

アノ感覚が……

血が、体が、頭がドンドン冷えていく。

京乃宮家に伝わる、

呪われた力……

それが発動しようとしている。

けど、私は止めようとしない。

むしろ、流れをより強く覚醒させようとする。

もう、どうなってもいい……

「壊れちゃえ……」

その一言から先の記憶は、

私には無い……

【間宮サイド】

「綾先輩？」

私は急に立ち上がった綾先輩を見上げる。

綾先輩はうつむいてた顔を少し上げて、私たちを見る。

その目は、赤く染まっていた。

普段の赤に近い黒色の目とは違う。

真っ赤に染まっていた。

「あ、綾先輩……なんですか？」

震える声で私は質問する。

認められない。

この人が綾先輩だなんて……

初めて会った時の綾先輩は、まるで太陽のように光り輝いていた。

だけど今は、

氷よりももっと、もっと冷たい。

冷えに冷え切ったような雰囲気を纏っていた。

シュッと風を切る音がした。

そう気付いた時には、私と陽菜ちゃんの体は宙に浮いていた。

いや、

浮いたと言うより、吹っ飛んだ。

そしてそのまま近くの壁に背中をしたたかにぶつける。

「カハッ…！！」

肺から空気が抜けて、声が出なくなる。

咳き込む私達を無視して、綾さんは裕太を抱きかかえる。

綾さんは、裕太の死に顔を見つめる。

後悔のない、優しい笑顔を間近で見つめる。

「……どうして……」

綾さんが呟く。

悲痛の思いを……

「……どうして、裕太が死ななきゃならないの……」

綾さんの言葉に、みんなが動けなくなる。

綾先輩から感じる圧倒的な殺意と憎しみからか、

恐怖で、動けなくなる。

「……こんなに、いい子だったのに……」

「あ、綾殿……」

陽菜ちゃんも綾先輩を落ち着かせようとする。

……だが、そんな思いも潰える。

「……壊しちゃえ……」

「……えっ？」

私達は同時に驚いた。

……今、何て言ったかが理解できない。

綾さんは、玉座に裕太を座らせた。

そして……

「……壊しちゃえ……」

今度はハッキリと聞こえた。

……綾先輩が、壊れた……

「…そうよ…、…あんなに優しい裕太が死ななきゃいけない世界なんて…、…こんな世界なんて……」

無感情な顔と声で、
綾さんはハッキリと宣言した。

「……ぶっ殺してやる……」

そして綾さんが動き出した。

いや、

動き終わっていた。

「…まずはアナタからね…」

綾さんが、いつの間にか間近で私を見下ろしていた。

そして、貫手を構える。

ヤバい、避けられない…！！

「京乃宮先輩！！！」

綾先輩を呼ぶ声とともに聞こえてくる銃声。

多分、声からして……鷹山先輩だろう。

しかし、綾さんは自分の足元に着弾する弾を無視して銃声した方向に落ちていたＮＡＴＯ弾の薬莢を投げつける。

すると、投げた瞬間に鷹山先輩の拳銃が鷹山先輩の手を離れて後方に落ちた。

まるで、銃弾で拳銃を撃ち落とされたみたいに……

すると、いつの間にか綾先輩が鷹山先輩の目の前にいた。

そして流れるような、誰も反応できない動きで左手で鷹山先輩の右肘辺りのワイシャツを、右手で鷹山先輩の胸ぐらを荒々しく掴むと、体を反転させて、床に引き込むように『背負い投げ』をした。

畳じゃないのに、ダーンという音がする。

そして、トドメの踏みつけに鷹山先輩の抵抗が消えた。

「…まずは一人…」

綾先輩の呟いた言葉に、私は絶句した。

「…朱雀君、いるのは分かってるのよ…」

綾先輩が、今度は座席を睨んだ。

「ッチ！！」

〈ババババババン！！〉

軽い舌打ちとともに、綾先輩に迫る無数の弾丸。

それに対してあろう事か、

綾先輩は駆け出した。

そして迫り来る弾丸を……

〈ガガガガガキィンッ！！〉

いつの間にか取り出したダガーナイフで、全ての弾丸を切り落とし

た。

「クソッ」

対する朱雀と呼ばれた男子生徒は綾先輩に細い棒みたいなモノを投げつける。

だが、綾先輩には当たらない。

綾先輩は軽く身を屈めてた瞬間、視界からいなくなっていた。

「あ、あり得ないだろ!?」

朱雀さんの視線を追うと、

床から１０ｍぐらいの所に、綾先輩がいた。

そして、綾先輩は重力の加わったドロップキックを朱雀さんの頭に放つ。

朱雀さんは転がりながら回避して拳銃を構える。

だが、綾先輩はいつの間にか朱雀さんの目の前にいた。

そして……

「…勝負しましょう…」

拳銃を構えた。

「バカな…！！　いつの間に銃を奪った！？」

裕太と戦っていた男の人が驚いていた。

だが、そんな事はお構い無しに二人は対武偵用の戦術、『アル＝カタ』を始めていた。

〈ババンッバンッバンッ！！〉

〈バスンッバスンッバスンッ！！〉

私は今までアル＝カタを見たことが無いけど、それでも見たことはある。

だから言える。

二人は格が違いすぎる…！！

〈ガッ、バンッバン、ガスッ、バンッ、ガスッ、バンバンッ！！〉

〈ガスッ、バスンッバスンッ、ガッ、ドッドッドッ、バスンッ！！〉

二人のアル＝カタは銃撃戦だけではなかった。

二人はお互いに発砲しながら、殺人クラスの拳や蹴りを放っていた。

これは明らかにアル＝カタを越えている。

まるで、ムエタイに近距離銃撃戦を混ぜたような動きだ。

ただ、不安なのは朱雀さんだ。

一見互角に見えるけど徐々に朱雀さんが押されている。

密かに綾先輩の蹴りや拳が朱雀さんに入り始めていた。

だが、

〈バスンッ、ドッドッ、バスンッ、ガッ、ドッドッ、バスンッ！！
ガキンッ〉

綾先輩の拳銃がスライドをオープンした状態で止まった。

それを好機と言わんばかりに朱雀さんはバックステップをしながら、
はじかれた拳銃を構え直す。

だが、綾先輩はいつの間にかリロードし終わっていた。

しかし、そんな事も気にせず、
不意に、綾先輩がリロードはしたが、スライドがオープンしたまま
の拳銃を天高く真上に投げた。

「…アナタはいつまで耐えられるかしらね……」

そしてまた私がまばたきをしていた一瞬で、綾先輩がまた朱雀さんの懐に侵入していた。

ぎゅっと拳を握る綾先輩。

朱雀さんは咄嗟に腕をクロスの状態に固め、顔と必要最低限の急所を守る構えをした。

それと同時に、ゴッ!!という鈍い音が辺りに響いた。

音源は、朱雀さんの腕。

朱雀さんの腕に当たる拳、

ガードがなければ、鼻を粉砕していただろう拳が、

無数の拳が朱雀さんに襲いかかる。

〈ドドッッッ！！！！！！〉

鈍く痛々しい肉を打つ音が辺りに響き渡る。

朱雀さんが、ドンドン引き下がっていく。

だけど、見えない。

明らかに、朱雀さんが綾さんの攻撃を受けているのはわかる。

でも、私には見えない……！！

私の目には、肘から先は見えないけど激しく腕を動かしている綾先輩と、

見えない何かに必死に耐えながら徐々に引き下がる朱雀さんだけだ。

ハッキリ言って、

見てられない…！！

綾先輩は、拳を止めるのを止めない。

たとえ朱雀さんが壁に退路を断たれて拳の威力を軽減できなくなったとしても、

明らかに腕を守る力が弱くなってたとしても、

綾先輩は、殴り続ける……

「やめて下さい、綾先輩！！」

気が付いたら、私は駆けだしていた。

痛む脇腹を左手で抑えながら駆けだしていた。

綾先輩の前に、拳銃が落ちてくる。

あれがもし綾先輩の手に渡ったら、
多分朱雀さんの命はない……

逆にアレを奪えば、勝機が見つかる！！

綾先輩は私を見ない、
左手で拳を連発させながら右手を上げる。

そしてその右手に拳銃が収まり、スライドが閉じられた時には、
私は綾先輩に手が届く位置にいた。

「…あら……」

けれども綾先輩も気付いたらしく、
私は拳銃のグリップで殴られた。

私の体は何度も床をバウンドして、座席の一つに当たって止まる。

痛みからか涙目になりながら綾先輩を見ると、綾先輩は自分の右手にあるはずのモノが無いことに気付いておかしそうに右手を見る。

……『鳶穿』……

私の最大の特徴である特技。

鳶のように獲物を穿つ。

この技に私はどれだけ助けられた事か……

後は、

「でかした、後輩！！」

ジャキッという金属音とともに、綾先輩に拳銃が構えられる。

そして、

〈バンッ！！〉

発砲音が鳴り響いて、
ドサッと倒れる音がした。

私たちは、綾先輩を……

「…残念ね…」

止められなかった……

綾先輩はいつの間にか左手に私が奪った拳銃と同じモノを撃っていた。

私を見ながら……

私は知らなかった…

綾先輩が『双銃使い』だったなんて……

朱雀さんはどこに当たったかはよくは分からないけど、
胸辺りを撃たれていた。

明らかに、意識を失っている。

「…アナタもですよ…、…蘭豹先生……」

「！！！！」

私が一瞬、目を離している隙に
先輩の背後に大刀を逆刃にして先輩の首に振り落とした体勢の蘭豹
がいた。

しかし、あの距離は避けられない。

そう思ったら、先輩が口を大きく開けて、

……閉じた。

〈ギィィィィィィッッッ！！！〉

激しく金属が擦れる音がして、大刀が綾先輩の唇に挟まれる。

正確には歯で強引に止めた訳だけど……

だが、刃が唇に挟まれた瞬間、

ドガッという鈍い音が聞こえたと思ったら、蘭豹が壁にぶつかっていた。

壁から床に倒れる前に、蘭豹先生の鳩尾に拳が入る。

ゲハッという悲鳴をよそに、

綾先輩は拳を鳩尾に連発する。

ゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッゴッ

聞きたくもない鈍い音が、蘭豹先生の苦痛の声が聞こえなくなるまで続けられた。

……負けた……

私たちは、負けた……

裕太だけじゃなく、

綾先輩も、助けられなかった……

「……ははは……」

綾先輩が笑っている。

悲しそうに……

苦しそうに……

やるせなさそうに……

自暴自棄になりながら、

笑っている……

一瞬だった。

まばたきをするような一瞬だった。

ドスッと、何かが刺さる音がした。

そして、
綾先輩の体には八本の何かが刺さっていた。

それは、注射器だった。

けど、誰が……

「オイオイオイオイオイ、なんなんでスかぁこの惨状はー。」

ソプラノよりも更に高い、女性の中でも極めて高い声が聞こえる。

振り返ると、
武偵高の女子用制服に血で染まった白衣を着た身長１５０ｃｍより少し大きいぐらいの燃えるような真っ赤な髪をしたショートヘアーの少女がいた。

「つーかよぅ、仲間同士で戦ってんの？
バカなのかぁテメーラはよぅ。
言っとくけどなぁ、バカにやる薬なんざぁねーんだよクソどもが。
なんだったら俺が骨と皮と肉の塊にしてやるぜぇ。
あぁ、内臓とかはもらってくがなぁ！」

さっきから、女の子に似合わない暴言を吐き散らしながら、少女は私を無視して綾先輩に近づく。

「あぁそうそう、テメーさぁ、仕事増やさねーでくれっかなぁ。
忙しいんだよ、コッチもよ。
んなに暴れてぇんなら動物園で一人で一騎当千でもしてろや、バカとクズとボケとカスとアホの総称が！！」

甲高い声で可愛い顔に似合わない暴言を発する少女を見つめてしまう。

「や、夜麻貴か……」

鷹山先輩が気が付いたらしく、少女に話しかける。

少女は、鷹山先輩を見下したような目で見てから視線を綾先輩に戻す。

「俺はぁ、面倒なのがキライでよう……」

夜麻貴さんは指をパキパキ鳴らしながら近づいて行く。

「んだから、麻酔をこんだけぶち込んだのによう……
何で意識保ってんだぁ、テメーはよぅ。
アレか、テメーは新種のインドゾウか？」

鷹山先輩を完全無視して、綾先輩に近づく。

綾先輩は膝をガクガクと震わせながら夜麻貴さんを獣みたいな目で睨めつけて、犬歯をむく。

「オォ、コエー！
マジで獣丸出しじゃん、このアマァ。
誰かぁ、獣医さんいませんかー、って医者はコイツだけじゃん！
あっはー、ミスったな～。コイツ殺しちゃうかもしんねーなー！
でも医者何だよなー、面倒くせー。」

夜麻貴さんは、綾先輩の５ｍ辺りで立ち止まり、綾先輩を指さす。

「てなわけで、コイツの医者の技量からして……
１０分の９殺しにしてやるから感謝しなぁ。」

…20　どうして……（後書き）

次回、

綾さんＶＳ夜麻貴（？）です。

そして気になる裕太の手術の結果が明らかに！！

では、また次回～

…21　事件終了（前書き）

京乃宮綾（キル・ヴァーサク）

ＶＳ

夜麻貴火憐（？）

です。

…21　事件終了

【鷹山サイド】

俺の目には、夜麻貴に見える女子がいた。

だが、それが夜麻貴と認めたくなかった。

あんなのを夜麻貴と認めたくなかった。

「あー、ヤッパリ１００分の９９殺しでいいかなぁ、
それとも一回死んで人生やり直しますかぁ？
ゴキブリにでも生まれ変わって無様な生き方しますかぁ、クソが！」

今の夜麻貴には、悪意しか感じられない。

善意という燃料を容赦なく燃やし尽くすような、
暑い悪意しか感じられない。

そして京乃宮先輩からは、

「…殺すわ…」

体の芯のさらに芯まで凍り尽くすような、
凍る狂気しか感じない。

この相反する力がぶつかったら、

一体、どうなるのだろう。

誰もが息を呑む静寂が訪れる。

するとまた、京乃宮先輩がいつの間にか対象の懐に潜り込んでいた。

「夜麻貴ィー！！」

咄嗟に叫んだが、間に合わない。

京乃宮先輩の拳が夜麻貴の鼻を粉砕……

「危なっ！！」

……しなかった。

夜麻貴はギリギリのところで気づき、顔を右にスライドさせる事で攻撃を避けた。

と思ったら、縮まった距離を更に縮め、

クロスカウンター気味に左手で綾先輩の顔を鷲掴みにした。

「こちとら貴重な麻酔を八本も使ったんだ。」

夜麻貴が至近距離から綾先輩を睨む。

そして右足を踏み込み、顔を綾先輩の耳元に近づけて……

「さっさと沈めやコラ」

綾先輩を左手で強引に頭から地面に　叩きつけた！

ゴゥッと鈍い音が聞こえた。

それだけで体が震え上がる。

「ヒハハハハハハハハハハハ！！
オイオイオイオイィィ！！！
さすがの『格闘神』様も薬には勝てねーみてぇだなぁ！！
あぁー、愉快愉快！！」

夜麻貴が高笑いをする中で、俺は密かに思う。

この症状は、明らかに……

「うぉっ！！」

夜麻貴が急にバク転して下がる。

何があったかと視線を向けると、

さっき夜麻貴の顔があった位置に京乃宮先輩の足があった。

どうやら夜麻貴は蹴りを咄嗟に避けたみたいだ。

京乃宮先輩がゆっくりと立ち上がる。

顔を俯かせてゆっくりと歩き出す。

「……アナタに…何が分かるの……」

不意に、京乃宮先輩が駆け出した。

あまりの素早さに、夜麻貴の反応が遅れる。

「…アナタに…私のこの気持ちが分かるの！！！！！」

雷のような速さで腹部に近づく貫手を夜麻貴はギリギリでかわす。

だが、防弾制服がまるでティッシュペーパーのように断ち切られた！

夜麻貴の顔に、恐怖が宿る。

チラッと見えた京乃宮先輩の顔は、

血の涙を流していた。

「…私にとって、裕太がどれだけ大切な人だったと思ってるのよ！！！」

夜麻貴の首を狙うハイキックが、ゴゥンっと空気を切り、夜麻貴を追い詰めていく。

「…こんな力のせいで、化物扱いされて孤独に明け暮れてた私たちの心を救ってくれたのは裕太なんだ！！！！」

襲いかかる拳を肘をぶつけながらギリギリのところで逃げる夜麻貴。

だが、遂に夜麻貴の退路を壁が塞ぐ。

そして、逃げ場を失った夜麻貴の懐に京乃宮先輩が迫る。

「…失いたくないモノを、大切なモノを二回も失われた私に……」

夜麻貴は咄嗟に腕をクロスして、胸辺りを守る。

右手を血が滲むぐらい強く握った京乃宮先輩の拳が夜麻貴に狙いを定め、

「…アナタ達に、この気持ちが分かるかァァァァァ！！！！！！」

雷の如き速さと威力が籠もった拳が、クロスした夜麻貴の腕に当たる！！

「ぐぅっ！！　うぅぅ……！！」

夜麻貴が苦しそうに顔を歪める。

背後の壁に、ビキビキと深く亀裂が入る。

「ッッ、クソがぁ！！」

夜麻貴が苦し紛れに京乃宮先輩を蹴り飛ばす。

蹴られた京乃宮先輩は、フラフラと後退して、不意に半回転して右足を蹴り出す。

夜麻貴はこれを予想できていたらしく、

前に転がってローリングソバットをかわした。

そして先程、夜麻貴の顔があった壁に、京乃宮先輩の蹴りがぶつかり……

背後の壁を粉砕した。

〈ドガァァァァッッ！！〉

壁が破壊された音とともに破片が辺りに散らばる。

「…ハァ、…ハァ、…ハァ、…」

京乃宮先輩の目が大分、虚ろになってきた。

麻酔に体が逆らえなくなってきたのだろう。

京乃宮先輩は既にボロボロだ。

もう動かない方がいい。

なのに、

「…ハァ、…ハァ、…ハァ、…」

京乃宮先輩は歩き出す。

夜麻貴に向かって、

いつ飛んでもおかしくない意識を振り絞っり、夜麻貴に近づく。

対する夜麻貴は、バックステップを数回して距離をかなりあける。

そして右手の薬指で自分のこめかみを押しながら誰かと会話をする。

「火憐、悪い。
コイツは殺さねーとマジでやべーから殺すわ。」

すると夜麻貴は自分で自分の名前を呼びかけた。

「すまねぇ。
だが、殺さねーとこいつらどころか俺ごとお前の体がなくなるぞ。

そいつだけは絶対阻止しなきゃいけねーんだよ。」

京乃宮先輩が徐々に夜麻貴との距離を縮める。

それをみた夜麻貴は、焦りながら言葉をまくし立てる。

「悪いけど、俺の最優先事項は『お前』だ。
んだから俺はその理論に従う。
後で叱りは受けるから、今は見逃してくれ……」

夜麻貴はこめかみから指を外し、代わりに強く握り締める。

「てなわけでよぅ。
コイツだけは絶対に死なすわけにはいかねーから……殺すわ。」

夜麻貴は自分の心臓に親指を突き立てて、その後先輩を指差した。

そして腰を少し落とす。

「死んでくれや！！！」
弾丸の如く駆け出した！

京乃宮先輩はただ右腕を上げて、殴る態勢に入る。

お互いの距離が２ｍになり、遂に拳が突き出される。

その瞬間だった。

〈〈バァウウンッッ！！〉〉

二つの銃声が俺たちの耳をつんざいた。

そして、京乃宮先輩が急に体の力を失ったかのように、
夜麻貴の額に自分の額を軽くぶつけて倒れ込む。

京乃宮先輩は遂に限界が来たらしく、
倒れたまま微動だにしなくなった。

対する夜麻貴は、
銃声がした方向に視線をゆっくりと向ける。

そして、ジャキッと金属音が鳴り響く。

痛む体を無理やり動かして立ち上がり、
銃声がした入り口を振り返ってＰ１４を構える。

そこには、２人の男女がいた。

まず、男の方が

持ち前の『H＆amp;K　PSG1』を肩に担ぎ、

武偵高の少し大きめのジャケットの中に、目の眩むぐらい真っ白なTシャツを着込み、

クリーム色の少し長めの髪をワックスでツンツンに固め、もみ上げを三つ編みで結び、前髪をタオルで掻き上げた青色のサングラスを掛けたワイルドでチャラい青年。

「オゥ、ナントカナリマシタカ……」

似非外国人の、

ジョン・リケイドがいて、

女の方は、

薄いハーブの様な髪に、瑠璃色の瞳をした

細身の低身の体で、耳にヘッドホンを付けている。

そして、ドラグノフ狙撃銃を膝立ちの状態で構え、微かに銃口を京乃宮先輩へ構え直す。

「やめろ、レキ！！」

俺はその少女の名前を呼び、止めさせる。

もう一人の少女は狙撃科の麒麟児、

またの名を『ロボットレキ』と呼ばれる

狙撃科二年Ｓランクのレキがいた。

レキは俺の呼びかけに応じたのか、

ドラグノフのスコープから僅かに顔を放し、銃口を下げる。

するとジョンはＰＳＧ１を肩に担ぎながら舞台に向かってゆっくりと歩き出す。

「鷹山センパイ。

ソンナニ心配シナクトモ、レキサンハ撃チマセンヨー♪」

ラップがかりの口調で話しかけるジョン。

…はっきり言ってイラつく。

「……間もなく武偵高の救援のヘリが来ます。」

するとジョンが急に真面目な口調になった。

明らかに、何か大切な事が始まるような気がした。

「救援部隊が到着すれば、アナタ達に勝ち目はありません。」

舞台に上がったジョンは、ジャキッと片手で孫権にＰＳＧ１の銃口を向ける。

そして、銃口を下げた。

「しかし、今回だけは見逃します。」

「……はぁっ？」

あまりの衝撃発言に、俺は素っ頓狂な声を上げてしまう。

だが、そんな俺に構いもせずにジョンはオールバックの男性に話しかける。

「まぁ、武偵高のヘリコプターが到着するまでの後三分を乗り切ることは簡単ですが、
こちらとしては死傷者は誰も出したくないのですよ。」

ジョンは淡々と理由を告げる。

「夜麻貴さん。
あの生徒の治療をお願いしますね。」

夜麻貴の肩に触れてからまた男性に視線を向ける。

話しかけられた夜麻貴は、またこめかみを押さえて小声で誰かと会話して、

「わっ、分かりました！
では早速治させていただきます！」

一番最初に会った時の『気弱な女子生徒』に戻っていた。

そして、血だらけの竹崎に近づき、
また表情と口調を変える。

「……対象を超重体と見なし、これより『緊急高精度蘇生手術』を開始します。」

そしていつの間にか展開した医療道具で見た目は荒々しく手術を開始し始めた。

そんな夜麻貴を振り返らずに、ジョンは男性に話しかける。

「では答えを聞きましょうか、
アナタ達は我々を見逃し、我々もアナタ達を見逃す。
『ＹＥＳ』ｏｒ『ＮＯ』？
この二択からお選び下さい。」

男性は、ジャキッと改めて突きつけられたＰＳＧ１の銃口を真っ直ぐ見つめ、
言葉をはっした。

「我々の答えは『ＹＥＳ』だ。」

そして男性は立ち去ろうとする。

だが、不意に立ち止まり
振り返ってジョンに問いかける。

「……太公望の仕業か？」

俺は縁のある言葉に反応して、男性と一緒にジョンを見つめる。

するとジョンはパチッと指を鳴らしながら人差し指を向けて
その問いに一言で答えた。

「ＢＩＮＧＯｏｏｏ！！」

その答えに男性はふっと小さく笑い、立ち去る。

「どこまでお人好しなんだか……」

その一言が俺の頭に印象深く残った。

そして、

それからきっちり三分後にヘリが到着して、
俺達はそれに乗り込んだ。

重症者の竹崎と荒井は別々のヘリコプターに乗せられて、

俺達は武偵病院に向かった。

こうして、
竹崎裕太の救出と、それにまつわる戦闘があった事件、

『アドシアード事件』は終わった。

二人の重症者を出した、

『任務失敗』の四文字の形で……

…21　事件終了（後書き）

竹崎裕太と荒井玄司の容態は次回に持ち越しです

マジでスミマセン！！！！

…22　悲しみの声（前書き）

かなりシリアスです

ご注意下さい。

…22　悲しみの声

【京乃宮綾サイド】

武偵病院についてから一時間経って
私は目を覚ました。

そして、
私はあの状態、

京乃宮家に伝わる呪われた体質である『キル・ヴァーサク』の事を
みんなに話した。

『キル・ヴァーサク』

京乃宮家に代々伝わる呪われた体質。

この能力は、

怒りや悲しみという『負の感情』がスイッチとなり、

臨界点を突破すると、

体温が低下して周りに冷気の籠もった殺気を排出しながら
負の感情を出し尽くすまでに破壊と殺戮を行う脅威の能力で、

負の感情を糧に、

身体能力と動体視力に聴力や嗅覚、反射神経や直感と言った、
『殺すため』に必要な技術を五倍以上まで倍増させる事ができる最悪の能力。

しかも私はよりによって、
『歴代最強の使い手』であり、

私を止める事ができるのはRランク相当の武偵だけらしい。

だが、
裕太や鷹山君から教えてもらった救護科の女の子みたいに、
『本当にほんのわずかな小さな隙』さえつければ、Sランクなら何とかなるらしい。

だけどその隙を突けるのは一瞬一度だけ、
それを逃せば
後はただ死体にされるだけだ。

そんな呪われた体質を、
かつて一人だけ制御した者がいた。

それは、私の妹。

ただ、その一人だけだった。

私の暴走が終わった後、

私を追い詰めたらしい救護科の夜麻貴火憐という女子生徒が、みんなの治療をしてくれたらしい。

そして、今は私も含めて全快とはいかないけど、『4分の3』快した私達は、
裕太と荒井君の手術が終わるのを待っていた。

私はずっと顔を体育座りした膝に埋める。

みんなを見るのが……辛かった。

みんなには、傷つく必要のない傷を作ってしまった。

そして何よりも、

裕太を助けられなかった……

あれだけ誓っていたのに、

守れなかった……

戦闘の時のダメージと罪悪感で、

私は心も体もボロボロだった。

パチンと『手術中』のランプの消える音がした。

中から手術着をきた先生が現れる

そして私は知らないうちに先生に飛びついていた。

「先生!!
裕太は、裕太は!?」

自分の襟首を掴まれて困惑する救護科の先生だったが、
先生は優しく私の手を自らの襟首から放させて、
二人の容態を告げる。

「まずは、荒井君だが……」

ゴクッとジョン君と救護科の火憐ちゃんが息を飲む。

「荒井君は、出血量が多く、背中の細胞組織が殆ど死滅してましたが
夜麻貴さんの荒治療のおかけで何とか回復しそうです。」

「ほ、本当ですか!?」

今度はジョン君が先生に飛びついた。

「はい、峠は越えました。
しかし……」

「しかし？」

逆接の言葉にジョン君と夜麻貴ちゃんが顔をしかめる。

そんな中で先生は静かに症状を述べた。

「荒井君は、腹部と背中に一生消えない傷痕を残します。
特に背中は……見てもいられないぐらい悲惨な傷痕が……」

ジョン君と夜麻貴ちゃんは静かに俯く。

夜麻貴ちゃんは顔に手を当てて声を出さないように静かに泣き、

ジョン君は壁を殴りつけた。

そんな暗い雰囲気の中、
私は静かに言葉を発する。

「裕太は……？」

その一言を聞いた瞬間、
先生は静かに床に視線を落とし、改めて私に視線を向けた。

私に向けられた視線は、申し訳ないという感情で満たされていた…
…

「……嘘よ……」

無意識に後ずさる私の顔を真摯に見つめる眼。

とても嘘をついている様には見えない。

だけど、
私は信じられない。
信じたくない！

「嘘よ！！！」

頭を抱えて首を激しく振る。

頭に入り込んだ幻覚を必死に振り払う。

「嘘じゃない。」

先生の声が、私の動きを止める。

辛そうに、

悲しそうに、

私に事実を突きつける。

「竹崎裕太君は……死んだ。」

思考が止まった。

ハッキリと五秒は止まった。

そして、再び稼動した私の思考に埋め尽くされた感情を表す言葉は一つ、

『嘘だ！！』

「うわあああああああああああああああああああああああああ

ああああああ！！」

気が付いたら、私は駆けだしていた。

周りなど見ないで、必死に駆けだしていた。

頭に張り付いた、
『死』というたった一文字を振り払うために、駆け出した。

意識は最早ない。

ただ、無意識の内に走っていた。

車や歩行者を気にしている余裕なんか無かった。

ただ、がむしゃらに走りまくる。

意味もなく、走りまくる。

だけど、

いくら走っても、頭から離れなどしなかった。

むしろ重くのしかかる。

それでも、私は走り続けた。

立ち止まらず、

走り続けた。

そして、

気が付いたら、私は墓地でへたり込んでいた。

この墓地には縁がある。

武偵高から約２０ｋｍ離れた京乃宮家が所有する山にある墓。

そして、一際大きいお墓の前に私はへたり込んでいた。

私は力を振り絞ってそのお墓にギリギリまで近づく。

いつの間にか土砂降りになった雨が
私の体をぐっしょりと濡らしていく。

まるで私の心のように……

濡らしていく。

「ごめんね……」

私はお墓に向かって、謝る。

その中にいるであろう少女に、

私の妹に……謝る。

「ごめんね……真咲……！」

京乃宮真咲
（きょうのみやまさき）

それが私の妹の名前だ。

歴代京乃宮家最強を名乗れるだけの実力があり、

キル・ヴァーサクを始めて制御して、

武偵高を卒業したら、

世界で名高い『Rランク』を与えられるだけの実力を有した、

私の自慢の妹。

そして、

裕太が本気で恋をした女の子。

私の恋心敵でもあった女の子。

そして、

裕太を守ってその命を散らした、

儚い女の子。

「ごめんね……真咲。
私、裕太を守れなかった……」

私の辛い思いが涙とともに流れ落ちる。

だが、その涙さえ雨と混じって分からなくなる。

「私、好きだったのに……
大好きだったのに……
アナタに託されたのに……
それなのに……！！」

辛い気持ちと悲しい気持ちが混じり合い、
この感情が何なのか分からなくなる。

だけど、揺るがない気持ちがある。

それは、

「私は裕太を守れなかった！！！！！」

叫ぶように私は謝る。

私の中に残っていたもの、

それは、
『自責』だった。

「アナタがいなくなって、私は裕太を守る事ができなかった！！
アナタみたいに何度も裕太を助ける事が出来なかった！！
それどころか私は……」

守るはずだったのに……

「私は裕太に『守られた』！！！」

そして、

「私を守って、裕太は死んだ！！！！」

とめどなく流れる涙が一層強くなる。
追い討ちをかけるように雨も強くなる。

「私なんて……
死ねばいいのよ！！！！！！」

私の叫び声が誰もいない闇夜の山頂に響き渡る。

しばらく、黙って泣きながら雨風に晒していると
私の首筋筋に半透明の不思議なものが触れた。

けど、触れられた感覚はない。

静かに振り返ると、ソコには半透明の人がいた。

私にそっくりだけど、どこか違う

……見覚えのある人だった。

私はその見覚えのある人の名前を呼ぶ。

「真咲……」

私の後ろにいたのは、

私そっくりの顔立ちだが、
私よりも数段美しく、艶美な笑みを浮かべ私を見つめる……

京乃宮真咲がいた。

『お姉ちゃんは悪くないよ。』

霊体の腕を後ろから私の首筋に回す。

『お姉ちゃんは悪くない。
だからと言って、崎太が悪いわけでもないよ。』

真咲は、触れられない私に頬擦りをして、私を慰めようとする

「でも、私は裕太に……助けられたのよ？
私が守って上げるはずなのに……
こんな、しょうもない私を救って裕太は死んじゃったのよ……」

『お姉ちゃん、勘違いしてない？』

真咲が少しおかしそうに微笑んだ。

『崎太はお姉ちゃんを助けてくれた。
それはつまり、崎太はお姉ちゃんを大切に思ったからでしょ？
それだけ、お姉ちゃんは信頼されてたのよ』

私は妹の言葉に反論できない。

いや、
したくなかった。

『それに、お姉ちゃんがそんな事いったら、
そう言うことして死んだ私がバカみたいじゃない。』

真咲はそう言って頬を膨らませる。

「ごめんね、真咲。」

『いいわよ。
だからね、私がいいたいのは……』

真咲は私の正面に現れて、伝えた。

『あまり自分を責めないでね……』

そう呟いて、その姿が静かに霞んでいく。

「ま、真咲！！」

私は必死に手を伸ばして真咲を掴もうとする。

だが、それよりも速く霞は空に消えた。

残されたのは、
お墓に手を伸ばしながら大雨にうたれる私だけだった。

「もう、誰もいない……」

私の声は、大雨によりかき消される。

「うっ、うぅぅっ」

消えかけた涙が再び流れ出す。

私は、もう耐えるのを止めた……

「うわあああぁぁぁぁぁん！！！！！！！！」

大雨をも凌駕する私の泣き声が山に響き渡る。

私は泣いた。

ずっと泣いた。

雨が止んでも、泣いた。

夜が明け始めても、泣いた。

私は、涙と声が枯れても泣いた。

朝焼けとともに私を見つけ出した京乃宮家の使用人達が来るまで、

私は泣いていた……

…22　悲しみの声（後書き）

まさかの主人公が死亡。

悲しみに明け暮れる綾さん。

書いててこっちも辛かったです……

次回は荒井サイド。

主人公がいない状態で果たして物語はどうなるか、

お楽しみ下さい。

…23　竹崎裕太（前書き）

えっ？　の一言が似合います。

はたして、新主人公は誰に？！

…23　竹崎裕太

【荒井サイド】

夢を見た……

約半年前の夢を……

暗い部屋の中、奮われ続ける暴力に耐える俺がいた。

何もかもどうでもよくなったその日、

俺はヤクザに絡まれた。

そして俺は殴られている。

抗う気すら起きない。

不意に、俺に向けてではない殴打の音が聞こえた。

そして暴力の雨が止む。

そして差し出される手。

その手の奥にいる人物を見る。

ソイツは、黒に近い藍色の長髪を左手で整えて右手を俺に差し出していた。

「どうしたの？
受けてとらないのかな？」

女子にしては少し低めの声だけど、
それでも女の子らしい声だった。

俺は無言で差し出された手を握る。

……温かい。

俺は体まで温まった気がしたが、そんな事もお構いなしに強く引っ張られる。

そして、
ようやく見えた顔に俺は言葉を失った。
語彙が少ないからあまり語れないので一言で語ろう。

『かわいかった。』

すると、その美少女は笑顔で話しかける。

「よかった。
キミが死ななくて、よかった。」

その笑顔に、俺の心臓は射抜かれた。

完璧に『一目惚れ』だった。

後に俺はこの美少女が『美少年』である事を知ったが、
それでも思いは変わらなかった。

その日以来、
俺は心に誓った。

コイツの笑顔を守れるような男になる。

この思いが伝わらなくてもいいから、
コイツの幸せを守ってやる。

あの日から、

俺は、『竹崎裕太』を守ると誓った。

「うっ……」

俺は痛みで目が覚めた。

ここは……どこだ？

「玄司……？」

ふと真横から声がする。

首をそちらに傾けると、
そこには今にも泣き出しそうな親父とお袋がいた。

「俺は……」

頭が上手く働かない。

あぁ、まぁ取りあえず武偵高に行かなきゃな。

そして、裕太に……

……裕太……？

……裕太！！

「そうだ！！
裕太を助けなきゃ！！」

俺は慌てて起き上がる。

だが、背中の全体からビリィィァっと、激しい痛みが走る！

「ンガァァァッツ！！！！」

痛みで吠える俺に、お袋たちは慌てる。

「玄司！落ち着きなさい！！」

お袋が必死に俺を宥めようとする。

だけど、俺は……

「荒井君？」

俺を呼ぶ声がした。

そっちに視線を向けると、

そこにいたのは、夜麻貴火憐だった。

「あ、あぁ、荒井君ー！！」

火憐が俺に駆け寄って来る。

けど、そんな事よりも……

「火憐、裕太はどこにいるんだ！？」

火憐の肩を強く掴み、声を荒げる

「荒井君、痛い……！」

必要以上に力が入ってしまったのを自重して俺は手を離す。

火憐は、少し思案顔になり、
親父たちに話しかける。

「あ、あのう……
荒井君を…その、
少しお借りしてよろしいですか……？」

親父とお袋は黙って頷いた、

それを確認して、火憐は俺に松葉杖を渡す。

「ついて来て。」

静かにそう言って、俺を確認しながら歩き始めた。

「ここです。」

火憐はある扉の前で立ち止まった。

俺は覚悟を決めてドアノブに手をかける。

ギィィと扉が開く。

部屋の中は薄暗く、一部だけが蝋燭（ろうそく）で照らされている。

その中央に、人らしきモノが台に寝かされていた。

中にいたのは、
膝を抱えた京乃宮先輩、
泣きながらそのモノを見つめる風魔と間宮、
辛そうに目を深く閉じて泣くのを我慢しながら壁にもたれかかる鷹山先輩、

そして、

一度だけ見たことのある、裕太の家族がいた。

「お兄ちゃん…、お兄ちゃん……！！」

裕太の妹が、そのモノに抱きつく。

そして、俺は気づいた。

その顔を布で覆われたモノからはみ出て見える髪。

黒に近い藍色の髪が……

見えた。

無意識の内に、俺の口から言葉が出た。

「……裕太？」

俺は松葉杖を使い、そのモノの近くに移動する。

そして、右の松葉杖に体を預けながら左手で布を掴む。

カタカタと指が震えていた。

そして、その布を持ち上げる。

そこにあったのは、
真っ青になった。

裕太の顔だった……

俺は尻餅をつく。

ガタンと支えを失った松葉杖の音が響き渡る。

「何でだよ……」

何で、裕太はこんなに真っ青なんだよ……

これじゃあ、まるで……

「荒井。あえて言うがな……
竹崎は、死んだんだよ。」

鷹山先輩の感情を無理やり消した声が聞こえる。

その声は、微かに震えていた。

「裕太が……死んだ？」

鷹山先輩の言ったことが、理解できない。

何で裕太が死んだのか、

はたまた、裕太が本当に死んだのか……

未だに理解出来ない俺の耳が何かの音を捉える。

……ダダダダダ

何かと思って振り返ると、
そこには、裕太と同じ目と髪の色の身長が２ｍを越す大き過ぎる女性がいた。

「裕太…」

俺と全く同じ反応をした女性は、

いつの間にか、裕太のそばにいた！

「「「！！！！！」」」

俺たちは全員、驚いた。

いや、

綾さん以外は全員驚いた。

ここにいる誰もが反応出来なかったのだから……

「裕太、何でそないな格好で寝てるんや！！

姉ちゃんことからかっとんのか！？
悪ふざけはよくないで……！！」

ジョンと同じぐらい似非っぽい関西弁を話す女性。

どうやら裕太の姉みたいだな。

『姉ちゃん』って自分の事を指していっていたし……

「裕太はイタズラがすぎるでー、ホンマ。
姉ちゃんを困らすのもいいかげんに『死んでるんですよ』……」

割り込まれた声に、女性は黙る。

そして、声のした方向にゆっくりと振り返る。

その女性の視線の先には、
体育座りをした綾先輩がいた。

「夜凪さん。
裕太は、死んだのですよ。」

夜凪と呼ばれた裕太の姉は、綾先輩に視線を向ける。

そしてその目は、
憎悪に染まっていく。

「裕太は、私を守って死にました。」

そう言った瞬間だった。

夜凪さんが飛び出した。

いや、

飛び出し終わっていた。

皆が振り返った時には、綾先輩は壁にはりつけられていた。

首にがっちりと食い込んだ夜凪さんの右手によって……

「オイ！　何やってんだよアンタ！！」

鷹山先輩が銃を取り出して威嚇するが、

それしか出来ない。

正確には、皆何も出来ない。

夜凪さんの人を遥かに凌駕する殺気に、

皆が動けなくなる。

チラッと夜凪さんが首だけ動かして鷹山先輩を睨みつけた。

それだけで、鷹山先輩の顔を恐怖で埋め尽くす。

構えた銃口が大きくブレて、照準が定まらない。

「んなもん向けんなや、ァァン？」

夜凪さんが、開いてる手で緑のコートから何かを取り出そうとする。

「夜凪、止めない！！」

裕太の母親の怒鳴り声が、夜凪さんの手の動きを止める。

そしてまた綾先輩に視線が向けられた。

その目は、後悔に満ちた悲しみの目だった。

「何でこないなヤツに任せたんやろな……」

暗く静かに夜凪さんは呟く。

「何でウチは、『裕太を殺そうとした奴』を信じてみたんやろ……」

そう言って、綾先輩を足の着く所にゆっくりと下ろして首から手を離す。

綾先輩の首には、クッキリと痣（あざ）ができていた。

夜凪は、ゆっくりと死人のような歩き方で出口に向かう。

そして、出て行く前に忠告をした。

「おどれ、二度とウチに近づくんやないぞ。
次会ったらウチはおどれを……」

夜凪さんは、そこのセリフだけ振り返った。

「ブチ殺す。」

振り返った夜凪さんの顔は、
涙で濡れていた。

アレから３０分後。

裕太の家族が泣きながら帰って行った。

俺たち武偵高のメンズは動かない。

黙って裕太を見つめる。

「クソ……」

意味もなく俺は呟く。

だが、誰も反応しない。

「裕太……」

俺は、裕太の頬に触れる。

裕太の体は、冷たい。

「あの時の約束、覚えてるか？」

俺は裕太に問い掛ける。

あの日、

俺が裕太に助けてもらった日にした、

一つの約束。

「俺がいつか独り立ちできるようになったら、パートナーにしてくれるって……」

……なのに、

「何で、お前が逝っちゃうんだよ……」

俺の夢は、

お前のパートナーになる事だった。

そして、

「今度は、俺がお前を助ける番だってのによ……！！」

それなのに、

お前は俺を待ってくれなかった。

裕太の頬に、雫が落ちる。

全く、お前ってヤツはよ……

「酷いぜ……」

そう言って、

俺は出て行く。

忌々しいこの空間から、

俺は逃げ出そうとする……

「あぁ、全くだね。」

突然聞こえたソプラノ級の高い声。

今までに聞いたことのない、
美しい声。

「全く、僕はどれだけの人間に迷惑を掛ければ気が済むのかな?」

俺は、出入り口で立ち止まる。

そして、
ゆっくりと振り返る。

そこには、寝ている姿勢から上半身だけを起こして掛けられていた布で裸であろう上半身を前だけ隠した姿で俺を見つめる人がいた。

ソイツは、
誰がどうみても認めざるを得ない美少女で、

黒に近い藍色のほつれの無い長髪に、
目が隠れるぐらいの前髪を垂らして、

見る物を惹きつけるような美顔を最大に活用した笑顔を俺に向ける。

俺はコイツを知っている。

コイツも俺を知っている。

俺は荒井玄司。

強襲科一年のEランク武偵。

自称
竹崎裕太のパートナー

そして、
俺の目の前にいるのは

強襲科一年Eランク

二つ名は、

『深藍の知者』
『第二のシャーロック』
『知の神』
『才色兼備の体言者』

などと二つ名で分かるように、

稀なる推理力をもち、
探偵科の隠れエースとまで呼ばれた
秀才武偵。

『夜鳳』に続く中学生武偵コンビ、『知竹勇宮』で知られた有名な
武偵。

そして、
俺の憧れであり、師匠であり、守るべき人物である。

竹崎裕太がいた。

生きている。

まだ体は青白いけど、

生きている。

「ゆ、裕太？」

俺はゆっくりと呼びかける。

「あぁ、」

裕太は返事をしてくれる。

生きている。

生きている！

「裕太ー！！」

俺は裕太に向かって抱きついた。

体に物凄い痺れが走ったが、どうでもよかった。

ただ純粋に、
嬉しかった。

俺は嬉しさのあまりに
裕太の胸に顔を押し付けてグリグリと押す。

すると、裕太の様子がおかしくなった。

「アンッ、や、止め、てぇ、
荒ぁ、荒井ぃぃっ！！」

何故か奇妙な喘ぎ声を上げる裕太を不思議に思うと、
今更ながら、俺は顔に柔らかいモノを感じた。

ふと、俺の頭がいやな方に思考を働かせる。

まさか……

「裕太、すまん！！」

前もって謝りながら裕太の体を隠す布を掴む、
そして、

「あ、荒井!?ダメだって!!それはいくら何でもっ……って、ダメェェェ!!」

荒々しく引っ剥がす。

そして、裕太を見る。

そこには、素っ裸になった裕太がいる。
口をパクパクさせているのを見るに、あまりの驚きに声が出ないみたいだ。

俺はへたり込んだ裕太を上から下に見る。

まずは裕太の驚愕の美顔。

ここまではよかった。

次に見えたのは、
裕太の低身長には少し不釣り合いなぐらいの膨れ上がった胸。

そして、男ではどうがんばってもこうはならないと言うぐらいくび

れた腹部。

そして、アルべき物がない裕太の股。

それの全てをゆっくり観察する。

改めてもう一度。

……

変わらない。

「ぁ……ぁぁぁ……」

裕太がようやく声を出せるようになったらしい。

顔を真っ赤に染めて、両腕で胸を隠しきれない胸を隠し、股を閉じる。

対する俺は、鼻に異常を覚える。

そして、その時がきた！！

「キャアアアアアアアアアアアアア！！」

女の子らしい悲鳴を上げる裕太。

「「「ブッッッ！！」」」

瞬時に鼻を押さえる俺。

……と、ジョンと鷹山先輩。

「荒井ぃ！！
お前、いきなり何やってんだよ！！」

「荒井サン！！

サービスショット、アリガトウデース！！」

「鷹山先輩、俺はただ裕太の胸に怪我があるかと思ったから……
てかジョン、ふざけんなよコラ！！
まるで俺が分かっててやったみてーだろうが！！」

「荒井、そんな事あるわけねーだろ！！
いくら探偵科レベルがFだからってそれぐらいは分かるだろ！！
てかジョン、お前はアホか！？」

「ＹｅＡＨｏｏｏ！！
イッツ・ア・パラダイス！！」

「「テメェ、黙ってろぉぉ！！」」

俺と鷹山先輩とジョンの三つ巴の会話が部屋中に響き渡る。

「トリアエズ、デジカメデトッテネットへＵＰシナケレッ〈ゴッ！
！〉ッヴァァァァ！！！！！」

デジカメがどうこういってるジョンの顔面に細長い金属の棒が食い込んだ。

そして、

「ゴミはゴミ箱に消え失せやがれ！！
この、生ゴミがァァァァァ！！」

棒が振り切られ、ジョンの長身が宙に浮いた。

「ＮＯｏｏｏｏｏｏｏｏ！！！！！」

そして、出入り口の付近にある大きなゴミ箱に頭から突っ込んだ。

俺たちは恐る恐る背後を振り返ると、
そこにいたのは、

「そのままゴミと同化しやがれ！！
こなＦＵＣＫがぁァァァ！！！！！」

女の子は絶対言ってはいけないようなＮＧワードを薬指を立てながら言っている
夜麻貴火憐（？）がいた。

右手には点滴などを引っ提げて使用する、……まぁ、鉄の細長い棒

を肩に担いでいた。

そして、その棒を物凄い速さで何かの芸みたいに降り始めた。

は、速い！

見てるだけで目が回りそうなぐらいの速さで振り回す火憐が、不意に棒を振り落とした。

……俺に向けて……

「……って、ハアァァァァ！？」

咄嗟に痛む体を無理やり捻って棒をよける。

すると、金属の棒は床を大きく削り取った。

「逃げんじゃねぇぞ、このＦＵＣＫがぁァァ！！！」

今度は横薙に払われた一線を屈んでやり過ごし、出口に向かって走り出す！！！

さすがに傷だらけの体でバトルのはマズイ。

『今はひとまず逃げるのがいちばっ〈ドガァァンッッ！！〉っ……』

出口を塞ぐ細長い足。

その足が床に激しく食い込み、病院を揺らす。

「よかったわねー、荒井君。」

また俺の動きは固まる。

その細長い足から視線を上に向けると、

そこには笑顔の綾先輩がいた。

……血管を五つ程浮き上がらせた綾先輩が、だが……

「あ、あはは……

な、何がよかったんですか、綾先輩……？」

俺は取りあえず質問してみる。

気のせいか、
声がかなり震えている……

「あはは。だってさぁ……」

綾先輩は笑顔のまま答える。

けど、笑顔なのに先輩の目は……据わっていた。

「私たちに『お仕置き』されるんだから、光栄よね♪」

そう言って綾先輩は、バキボキと関節を鳴らす。

「安心しろぉ！
ちゃんと火憐が治してやるっつってんだ。
んだからもっかい死ねや！！」

いつの間にか、火憐（？）も後ろにいた。

「あれはわざとじゃないんだ！！
だから頼む、助けてくれ！！」

俺は土下座の姿勢で必死の懇願する。

二人の答えは……

「「ダァァメッ♪」」

の一言だった。

そして、

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

一つの大きな悲鳴が病院内に響き渡った。

ちなみに、

二日連続で蘇生手術が必要になったのは、

俺が初めてらしい………

…23　竹崎裕太（後書き）

作者
「はい、新主人公は『竹崎裕太ちゃん』でした～！！」

裕太
「……『レパル』」

作者
「ちょっ待って、冗談だから。
ってギャアアアアアア！！」

〈ドガァァンッッ！！〉

……数分後、

裕太
「次回、長かったアドシアード編も遂にラスト。
お楽しみ下さい。」

作者
「グフッ。
女体化の理由もねー
……ってもう一発はさすがに……！！！」

〈ドガァァンッッ！！〉

…２４　決意を胸に（前書き）

いよいよ長かったアドシアード編のラストです。

では、お楽しみ下さい！！

…24　決意を胸に

「全く、荒井君は何をやってるんだか……」

「あはは、そうですね……」

アノ後、荒井は綾さんと夜麻貴にボコされて、
今は何と二度目の蘇生手術中だ。

「全く、私が『キル・ヴァーサク』だったら本当に死んでたわよ！」

「『メザ・キル』でも十分に死ぬと思うんですけどね……」

さっき聞いた話によると、綾さんは何気にメザ・キルになっていたらしい。

てか荒井はどれだけ頑丈なんだよ……

いくら掛かりの弱いメザ・キルでも綾さんのキル・ヴァーサクの力なら素手でも十分に殺傷能力があるのに、
それを瀕死の体で受けて生きてるって……

「それにしても、綾さんはいつの間にメザ・キルまで操れるようになったんですか？」

僕としてはそっちの方が驚きだった。

綾さんが、メザとは言え、キル・ヴァーサクを操れるようになったんだから……

「まぁ、正確に制御できるようになったのはアドシアード前日かな？」

「へぇ、そうなんですか。」

「そんな事より裕太。」

綾さんがいきなり顔を近づける。

お互いの鼻と鼻が触れるぐらいに近づいてきた。

「なっ、何ですか？」

少し顔を赤らめて言う僕を真っ直ぐに見つめる綾さん。

「今度はアナタの事を教えてちょうだい。」

……ヤッパリか。

「この体の事、ですよね？」

「その体の事。」

そう言って、綾さんの右手が僕の胸部を鷲掴みに……って！！

「キャアァァァァァァァ！！」

慌てて右手で綾さんの手を払いのける。

綾さんは右手を握ったり開いたりしてから、「結構大きいけど、私の方が大きいわね♪」と上機嫌になる。

当たり前だ。

綾さんの胸のサイズは確か生徒会長を上回るとか言ってたからな……

C装備無しのアル＝カタだと揺れに揺れて、もう……

鼻血でフツウに死にかけたくらいだよ……

……って、そんな事より！！

「いきなり何するんですか！？」

取りあえずキレた。

「確認よ確認。

あなたが本当に女になったのかのね……」

「ハァ、そんな事しなくても分かるんじゃないんですか？」

綾さんに呆れた視線を向けると、綾さんは頬を膨らましてへそを曲げる。

…フグみたいでかわいい……！！

まぁ、それは置いておいて…

「コレは『レパル』の副作用ですよ。」

そう言いながら人差し指で膨らんだ頬を押す。

綾さんはアッと軽く驚いた顔をして口内の空気が抜けていつもの美顔に戻る。

……本当に美しい人だな……

「レパルは他の超能力（ステレス）と違って、ホルモンを分解してそれを使うんですよ。」

「……え？」

綾さんのキョトンとした顔がこれまた……ゴホンゴホン、これ以上

は自重しよう。

「レパルはちゃんと生命活動をギリギリ維持できる辺りで打ち止めになるんですけど、それでもほっとくと生命活動に異常をきたします。」

「はい。」

「故に、レパルの使用後には自動で急速にホルモンを摂取する必要があるんですよ」

「へっ、へぇ……」

「で、ここからが大切なんですよ。」

僕は人差し指を立てる。

綾さんは、緊張した顔で続きを待った。

「失ったホルモンを取り戻すにはまず生きてる状態では無理です。ですから、ホルモンを取り戻す為の状態ができるまで『仮死状態』になるわけですよ。」

「えっ、でもそれじゃあ……」

綾さんが驚いた顔をして僕を見る。

「確かに普段だったら5分以内にはホルモンの摂取が終わっていたはずなんですけど、あの時は体が到底ホルモンを摂取できる状態じゃなかったので仮死状態がずっと続いた訳ですよ」

まぁ、致命傷だったしね、あれは。

そしてそれが、

「手術のおかげで体の傷が防がって、ホルモンを調整する準備が整ったって事です。」

「で、でもどうしてそれが女の子になるのと関係があるの？」

いかにもな質問をする綾さん。

ちょっと恥ずかしいんだよね…

とりあえず気を紛らわせるために頬を人差し指でかるく掻いてから説明する。

「人間のホルモンは元々女性ホルモンが主流なんですよ。

レパルはホルモンを燃焼して使う技。

そして、とりあえず何でもいいからホルモンは摂取しなければならない。

つまり、」

そこまで教えて僕は綾さんにウインクをする。

綾さんはハッとした顔になり、さっきの続きを答える。

「女性ホルモンを大量に取り入れるから『女性』になるってわけ？」

僕は微笑んで頷いた。

しばらく沈黙が病室内を支配する。

サァッと風が木の枝を緩やかに揺らして入ってくるのが心地よい。

不意に、綾さんが切り出す。

「……それ、治るの？」

綾さんの心配そうに見つめる目が真っ直ぐに僕の目を見つめる。

それに僕は、一言で答える。

「治りますよ。」

そう、たったの一言。

それだけで綾さんは、安堵した表情になる。

「今は女の体ですが寝ている内に男性ホルモンが大量に増えていって、次に起きた時には男になってますよ。」

これでレパルの解説は終わりです。

そう言ってから僕は俯く。

「裕太？」

綾さんが心配そうに僕の顔を覗き込む。

そして、顔をゆったりと離した。

僕は、

「ごめんなさい……！！」

申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「僕を救出する為に色んな人が来てくれたのは嬉しかったです。……でも！！！」

僕は顔を上げて綾さんをしっかりと見つめる。
でもなぜか視界が霞むし、頬から何かが伝ってこぼれ落ちる。

「そのために、皆が傷ついてしまった！！」

荒井をみた時には、息が止まりそうになった。
体の至る所に包帯がまかれていて、顔色も悪かった。
僕なんかを助ける為に……
みんなが……！！

「なぁんだ、そんな事で悩んでるのね。」

「……えっ？」

綾さんの言葉の意味が分からず、間の抜けた声を上げてしまう。

「裕太は考え過ぎよ。って言っても私がそうなんだけどね。」

「綾さん、でも僕のせいで綾さんや皆が……」

「だから、裕太は考え過ぎなのよ。
でもそこが裕太のかわいい所でもあるわね。」

綾さんは嬉しそうに微笑む。

「ねぇ裕太。例えば私が無数の強敵を前にして死にかけてる時、アナタはどうする?」

「勿論助け出しますよ。」

「そう、それがアナタのいいところ。」

綾さんは静かに分かりやすく説明する。

「そして、私を含めた皆がそうだっただけよ。」

「で、でも……」

「『僕のせいで皆が傷ついた』だっけ?」

「……はい。」

「それは仕方ないわよ。」

綾さんは諭す。

まだまだ子どもな僕に、大人の理論を……

「何かを守るために作った傷は、決して悪いモノではないのよ。むしろその傷が自分自身を大きく育ててくれる。『この傷はアイツを守った証し』ってね。」

「綾さん……」

「だから裕太は……」

ガバッと綾さんが僕に抱きつく。

強く、強く僕を抱き締める。

「考え過ぎないで、みんなを頼りなさい。」

「……」

僕は何かを言いかけて、止める。

何も言えない。

「お願いだから……」

綾さんの言葉が、静かな病室に響く。

「私を、一人にしないで……！！！」

僕の肩に、雫が落ちた。

綾さんは体を震わせる。

耳元から綾さんの嗚咽が聞こえる。

そうだった。

綾さんも、真咲が死んでから誰かの死が怖くなったんだった。

しかも、今回は真咲と同じくらい大切に思っていた僕が死んだ。

その事が、どれだけ綾さんに負担をかけたことか……

「ごめんなさい、綾さん。」

僕は綾さんを抱き締め返す。

強く、強く。

「僕はもう、いなくなったりしません。」

「……本当に？」

綾さんが、僕から少し離れて僕の顔を見つめる。

その顔は、涙で濡れている。

「僕は、綾さんを悲しませる事は二度としないと誓います。だから……」

指で綾さんの目元を軽く拭う。

そして、告げる。

精一杯の誠意と笑顔を込めて……

「綾さんも、僕から離れないで下さいね？」

「！！」

綾さんはビックリした顔になったと思ったら、徐々に顔を赤らめた。

そして、少し俯きがちに僕に訪ねる。

「裕太は、私を本当に大切に思ってくれてる？」

「はい。」

綾さんを真っ直ぐに見つめる。

おふざけのない、真剣な眼差しで……

「よかった……」

綾さんの安堵の声とともに、唇に何かが触れる。

温かくて柔らかい何かが……

……どうして、綾さんの顔がこんな間近にあるのだろう？

そして、僕の唇に当たってるこの柔らかいモノは何だろう？

「ン……」

綾さんの顔が、ゆっくりと引いていく。

「ゴメンね裕太。」

綾さんは顔を赤らめて自らの唇を触れる。

そして、衝撃発言。

「勝手にキスしちゃった。」

……えっ？

さっきのって、まさか

……キス！！

「でもこれだけは言わせて、」

綾さんが強引に僕をベッドに押し倒す。

そして、また顔を近づける。

ヤバい……意識が！！

「私は、裕太のことが……す『ガクッ』き。

……て裕太、裕太！？」

綾さんの必死の呼びかけむなしく、

僕はあまりの恥ずかしさで気絶してしまいました。

僕って、どれだけウブなんだろう？

……

……

……

……

……

『ピリリリリッ、ピリリリリッ』

武偵高の女子寮のとある一室で携帯の着信音が鳴り響く。

少女はその携帯を手に取り、静かに通話ボタンを押す。

「レキです。」

その少女、レキは電話の会話を静かに聞き取る。

相槌は無い。

「はい、では予定通りにお願いします。」

そう告げて、静かに携帯電話を閉じる。

そしてまた、ドラグノフ狙撃銃を抱えて睡眠の態勢に入る。

自分のやるべき仕事を終えた彼女は、眠りについた。

……

……

……

……

……

……

……

「月が、綺麗だな……」

その少年は、誰もいない病室で一人呟く。

開けられた窓から、春の終わりを告げる風が吹き込む。

その少年の藍色の髪が、風で静かに靡く。

「本当に、みんなに迷惑かけたな……
鷹山先輩からは、ねぼりはぼり質問されたし。」

含み笑いの混じった声が風の中に消えていく。

「それに、お前には本当に世話になったよ。
お前がいなかったら、僕は本当に死んでた。」

少年は自分の胸に垂れ下がっている、透明な翡翠色の石をギュッと握り締めて真横に視線を向ける。

「ありがとうな、真咲。」

その少年の隣には、半透明な少女がいた。

赤に近いオレンジ色のショートカットの少女は、その少年の肩に頭を乗っけている。

『えへへ、それほどでもないよ～』

少女は嬉しそうにはにかむ。

少女も静かに微笑む。

「お前が僕をあの空間から引っ張り出してくれたから、僕は生き返れたんだ。」

『まぁ、結構苦労はしたんだよ？
冥界から引っ張り出すって相当難しいんだから。』

少女は多少疲れた表情を少年に見せた。

だがそれは一瞬。

次に少年が見たのは、

『でも、私のお墓の前で見たお姉ちゃんの……
あんな表情を見るよりは辛くなかったわね。』

満足感に溢れた清々しい笑顔だった。

「本当にありがとうな、真咲。」

『いやいや、私と崎太の望むことは一緒だからいいのよ。
……それより、アナタは大丈夫?』

少女の顔に僅かに陰が差し掛かる。

それを少年は笑い飛ばす。

「大丈夫だよ。
僕はこの体質も、この能力も、この血も耐えて見せるさ。
これもあるしね。」

そう言って少年は翡翠の石のついたネックレスを掲げる。

少女は安心したように顔を笑顔に戻す。

『そうね。
じゃあ、私は戻るわ。
用事があったら呼んでね。』

突如、翡翠の石が薄く輝いた。

それとともに、少女の体が霞む。

「あぁ、またな。」

少年と少女はお互いに笑顔を向けあう。

そして、輝きが終わる頃には少女はいなくなっていた。

「安心しろ、真咲。」

少年はまた石を握り締める。

それは自分の覚悟を表していた。

「僕は、みんなを守る。」

少年の言葉は風にさらわれる。

真っ白に輝く満月の光が、
一人の少年を静かに照らし続けていた。

…24　決意を胸に（後書き）

イヤー、長かった……

本当に長かった……

んで、次回からは再び短編集の再開です。

まずは『防人の４５口径』の風連希や現在のアリアやキンジの登場!!!

そしてさらに新キャラが増えていきます。

では、これからも竹崎裕太と愉快な仲間たちのバトルコメディー小説、

『緋弾のアリア～武偵の道～』

をよろしくお願いします!!

【3章】・パートナー編（前書き）

バトル無し

シリアス無し

ギャグ満載のシーンです！！

タイトルの本質に入るまではかなり時間がかかりますから
しばらくはこの作品の本質であるギャグをお楽しみ下さい！

P．S．

白石先生、スミマセン！！

【3章】・パートナー編

「んんー、朝か……」

朝日の暖かさで僕は目覚めた。

眩しい朝日に体の細胞が活性化される。

「うぅーん……」

隣りで荒井が寝ている。

毛布が明後日の方向に吹っ飛んでるのを見ると、少し笑えてくる。

「全く、魔剣との闘いでボコボコにされたのに毛布を蹴っ飛ばすぐらい元気あんのかよ……」

ちなみに、アドシアードは昨日終わったらしい。

何か悲しいな……

「さてと、注文したモノでもって取りに行きますか……」

僕は、ベッドの近くにあるカバンから制服を取り出し、素早く着替える。

「よし、いくか！！」

ネクタイをだるんだるんに閉めて、膝まであるかなり長めのジャケットを着て袖を手がでるまで捲る。

そして鏡で再チェック。

「ピン留めはちゃんと右側に止めたし、
制服に長ドスは仕込んだし、
ピースメーカーは……いっか。
んでアホ毛もちゃんと着いてるな、
よし！！」

最後に真上に伸びている少し大きめのアホ毛をつついて確認終了。

「後は装備科に寄り道するだけだな。」

そうぶつくさ言いながらドアに向かうと、ドアは既に開いていた。

そこには、

「た、竹崎君！！
安静にしてなきゃダメでしょ！！」

驚いた表情で僕を見つめる夜麻貴だった。

「早くベッドに戻りなさ……って何で窓に向かって走り出すのよ！！
……いや、何で窓に手と足をかけるの？
危ない！！それは危なすぎるわよ！！
戻って来て竹崎君！！」

夜麻貴が取り乱しているのを尻目に僕は笑って手を振る。

「夕食までには戻ってくるから飯よろしく～」

そして右足に力を込めてジャンプ！

ちなみにここは四階。

だけど『俺』には関係ない。

地に引かれるように降下する俺はどこか楽しげだ。

そう。

俺には楽しみがたくさんある。

それをたのしまなきゃな！

背後から聞こえる夜麻貴のツッコミを軽く耳に入れながら、目の前の地面に意識を集中させる。

ダンッと物凄い着地音とともに俺は衝撃が体を破壊する前に前転して衝撃を逃がし、そのまま態勢を直して走り出す。

……それにしても、

『アナタは飼い犬かぁぁぁ！！』

っか……

いいツッコミだ！！

…

……

……

……

……

……

「平賀さーん、いますか？」

僕はいま装備科にいる。

とりあえず、武器の改造とある物を頼んだからだ。

「ハイハイ竹崎君、用意は出来てますよ～」

平賀さんが少し大きめな箱を持って登場して来た。

その箱の中身は俺が注文したモノが入っていた。

「はい、まずは『グロック１７』です！」

「あぁ、ありがとうございます。」

僕は前もって頼んでおいた二丁のグロック17を受け取った。

「ご注文通りにグリップを少し改造して総弾数を20発にしてなおかつ弾倉排出をより速く、
そしてフルオート機能をつけたのだ！」

俺は試しに銃を構えてみる。

うーん、軽いな。

自動拳銃は3kgもある『バンカー・ブレイカー』しか使った事がないからあまり馴染まないな……
今日あたりみっちり射撃訓練をして馴染ませよう。

「それと今度はこれですのだ！」

「あぁ、そっちも出来てるんですか。

さすがですね。」

今度もらったのは、白銀の大型拳銃。

それは、

「『デザートイーグル改』か……
バンカーの代わりには少し不安だな……」

見た目は完全にデザートイーグルだが、中身は別物だ。
何せスライドの中は殆どバンカーと同じなのだから。

「これは魔改造中でも傑作ですのだ！
まずは持ち手を改造して無理やり１２発も入れられるようにして、
バンカーみたいに対物狙撃銃並みの威力に耐えるようにしましたのだ！」

平賀さんは小さな胸を張って自慢する。
そして何かを思い出したかのような顔をした。

「そういえば、弾はどうするのですだ？
コレは５０ＡＥ弾以上は入らないですのだー」

「それについてはお構いなく。
家の親戚がオリジナルの弾と拳銃を作ってますんで大丈夫ですよ。
いずれバンカーも出来上がりの報告が来るはずです。」

そう言って、平賀さんがサービスキャンペーンとか言ってくれたホ

ルスターにグロックとDE改を入れる。
そしてグロックの入ったホルスターのベルトを太ももにとめて、今度はDE改をベルトを通して入れようとしたときに気づいた。
「あれ？
何かピースメーカーが帯銃してある…？
しかも二本も……？」
いつの間にか俺の腰にピースメーカーがそれぞれ入った二本のホルスターが引っ掛かっていた。
メモ付きで……
とりあえずメモを取って口に出して読む。
「えーとなになに、
『裕太が銃を忘れていたから飛び降りる寸前にさり気なく帯銃させてもらったでござる。
風魔陽菜』っていつの間にだよ。」
てか何で病室にいたんだよ。
全然気づかなかったぞコラ。
「竹崎君～、まだ続きがあるですのだー」

「えーと、『P．S．裕太の寝顔は五万円からせりだすでござる』って、風魔ァァァァァ！！」

咄嗟に平賀さんが耳を塞ぐのと同時に
俺の怒りの声が装備科に響き渡る。

俺の叫び声の衝撃で、向こうの銃の山が崩れた。

「朝っぱらかな何騒いでるんだよ竹崎。」

ふと後ろから声をかけられる。

そこにいたのは、

「おはようございます、鷹山先輩。」

「あぁ、おはよう。」

俺の兄ちゃん的存在である鷹山先輩だった。

けど、鷹山先輩の後ろに誰かがいる。

鷹山先輩の背中に隠れるようにして俺をチラチラと見ている。

それに伴って、黄色のリボンで留められたポニーテールがピョコピョコと跳ねる。

……本当の尻尾みたいだ。

ていうより、コイツは……

「鷹山先輩、遂に戦兄妹を取ったんですね。さすがです。」

「まだ何も言ってないのによくわかったな……」

鷹山先輩が驚いたような表情をする。

まぁ、ここで僕の『推理』の実力を見せておくか……

「後、鷹山先輩の背中にすぐ隠れるって事は人見知りが激しいはず……

何より鷹山先輩をチラチラと見るあたり、鷹山先輩の周囲の人物に慣れていない……即ち契約したのは最近辺りからな。」

「！！！」

青髪のポニーテール少女は心の中から驚いた表情をする。

俺はそれをチラッと見てから鷹山先輩に視線を戻す。

「んで鷹山先輩は左腕に怪我か……
魔剣にやられましたね？
いくら鷹山先輩が疲労していてもSランクの先輩がそんな怪我をするはずが無いです。しかも包帯から微妙に超能力の本当に微量の力が漏れてますよ。」

「……」

「それで大方ここに来たのは神崎からもらった武器を改造するためですよね？
先輩、神崎に信頼されてるしP－14に支障がでてそうですしね。」

「……お前は何でも分かるんだな。」

鷹山先輩が関心していた。

「でも、アノ事件のせいで探偵術の重要なスキルの一つの『無意識推理』が無くなりましたけどね。」

「そんなスキルがあったのか……」

「まぁ、けど逆に嬉しいですよ。
今までは考える前に全ての事が無意識に分かってしまったけどコレからは分からない事だらけなんですから。」

朝っぱらからテンションが上がっていたのはコレが理由である。

昨日の夜、医者に診断してもらったら
仮死状態が長かくて、脳に血が行き渡っていなかったからスキルの
一つが無くなったらしい。

でも逆に忌々しかった『無意識推理』が無くなったから上機嫌だっ
たのだ。

「あっ、あのぅ……」

「あぁん、何だよ？」

鷹山先輩の戦妹が俺に話しかける。

それに僕は目を細めて視線を戦妹に向ける。

「えっ、えーと……
アナタは一体何者なんですか？」

「ただの強襲科の落ちこぼれだ。」

「違うだろ。」

ゴスッと鷹山先輩の空手チョップが俺の脳天に叩き落とされる。

「いってぇぇぇぇぇ！！」

ツッコミの為のチョップだから力を抜いていると思ったが、割と本気だった。

かなり痛い……

「希、コイツの名前は竹崎裕太って言うんだ。
色んな二つ名があるがやっぱり一番多く呼ばれてるのが『深藍の知者』だな。
コイツはさっきの言動や二つ名から分かるように頭がかなりキレる。
何より竹崎は中1から武偵活動をしていたらしいから経験に関しては綾先輩よりも上だ。」

「あの綾先輩よりも……」

戦妹が鷹山先輩の解説のうち綾さんの単語に異常に反応した。

どうやら魔剣戦のときにかなり世話になったらしい……

「ちなみに、男だ。」

「えぇぇぇぇぇ！！」

「イヤ、俺の制服ちゃんと見ろや。
俺が着てるのは男子用制服だろうが。」

呆れ顔で戦妹を見る。

フツウ男子用制服を着てて間違う奴なんていねーだろ。

「だって……」

「だって何だよ？」

何かを言いかけて止めた戦妹に続きを促す。

「だって……そういう性癖かと思ったんだもん。」

……ブチッ

「ッテメェェェェ！！」

さすがに今のはキレた。

特殊な性癖を持っていると思われて黙っているほど俺は大人しくない。

「イヤ、だって見た目は完全にかわいい女の子だから……」

「たとえ俺が女であったとしてもそんな酔狂なマネはしねーよ！！」

「えっ、やっぱり女の子なの！？」

「だーかーらー！！！」

戦妹にどうやって常識を教えようかと思っていたら、鷹山先輩がようやく口を開いた。

「まぁ、とりあえず紹介しよう。
俺の戦妹の風連希だ。
同じ一年だから仲良くしてやってくれ。
ほら、希も自己紹介しろ。」

鷹山先輩は戦妹に自己紹介を促す。

とりあえず、俺も戦妹を長ドス振り回しながら追うのをしぶしぶやめて自己紹介を待つ。

「強襲科一年の風連希です。
アナタの噂はかねがね先輩から聞いてますよ。

なんたって、二人は垣根を超えた……れ、恋愛を……」
「「してねえよっ！！！」」
鷹山先輩もこれについては否定した。
全く、俺はただたんに先輩を尊敬してるだけなのによ……

「あぁ……竹崎裕太だ。
専門科目は強襲科。
得意なのは推理だ。」
とりあえず俺も自己紹介をした。
「よろしくね、竹崎君。」
お互いに挨拶が終わり、一息つきたところで俺はため息をもらす。
「しかし、アレがあるからとはいえ、どうして俺はこんなに女にしか見えねーんだろぅ……」

アレとは『レパル』の事だ。
レパルはホルモンを分割して使う技なので、回復しやすいように体が常に女みたいになっている。
つまり、レパルがあるから体が女の子っぽいってわけだ。

「へー、大変なんだねー。」

風連の同情の声が聞こえる。

……できれば、同情だけにしてもらいたかった。

「てっきり、性転換したのかと思ったよ。」

……ブッチッッッッ！！！！

「テメー、一回死ねェェェ！！」

さすがに我慢のレベルではなかった……

俺は太ももホルスターから二丁のグロック17を素早く取り出して安全装置を外してトリガーに指をかける。

この間、0．5秒。

風連はようやく事の事態に気づき始めたくらいだ。

だがそんな風連に構わず、俺はトリガーを引く。

〈バァンッッ！！〉

ほぼ同時に鳴り響いた二つの銃声とともに銃から発せられた左右一つずつの合計二発の弾丸が風連に迫る。

まぁ、迫るとは言っても弾丸は風連の耳元を通り過ぎていくように狙いを定めたから大丈夫だ。

事実、風連は目を固く瞑っている。

これなら安心だ。

……と思ったら、

左右の弾丸がまるで風連を避けるように進路を変えた。

だが、それがいけなかった。

逸れた左の弾丸がさらに左にずれて、開いたドアに向かって進路を変えた

しかもドアには人がいた。

勿論、弾丸には気づいていた。

「あ……」

俺の間の抜けた声とともに弾丸が入ってきた生徒の耳元を通り抜けた。

「あぁ……！！」

風連が弾丸が当たらなかったのを安心したのか地面にへたり込む。

そんな暇ねーのによ……

俺は恐る恐る風連から弾が当たりそうになった生徒を見る。

ソイツは顔を伏せて肩を震わせている。

ソイツの付き添いの男子生徒が俺たちに視線を向ける。

『逃げろ』っと……

「へー、アンタ達はそんな事するんだー。」

その生徒は女子用制服を着ている身長が１４０ｃｍぐらいの少女で、

ここにいる全員が関わりがある少女だった。

「竹崎、どうする？」

「鷹山先輩、ここはヤッパリ……」

その生徒を知っているが故に、俺たちの行動は決まってた。

なぜならソイツは、

ピンク色のツインテールにカメリアの瞳。

隣にいる男子生徒、

強襲科の二、三年には知らないヤツはいないほど有名な、俺と風魔が崇拝する、遠山キンジ先輩を奴隷呼ばわりして使います程の実力者。

その名を、

『神崎・Ｈ・アリア』

通称、『双剣双銃のアリア』

ソイツの逆鱗にふれてしまったのだから……

「あ、アンタ達にはお仕置きが必要ね……」

そういい終わったと思ったら、神崎は銃を構えていた。

右の銃口が俺に、左の銃口が風連に向けられている。

……これ、やばくね？

「鷹山先輩、風連を頼みます！！」

「任せろ！！」

俺が鷹山先輩に合図を出したタイミングとほぼ同時だった。

双剣双銃の鬼武偵が死刑執行の合図を下したのは……

「教育的風穴ァー！！」

「「何じゃそりゃあぁ！！」」

俺と鷹山先輩はツッコミをしながら左右別々に突っ込んだ。
正確には横っ飛びで銃弾を避けた。
鷹山先輩は風連を素早く抱きかかえだがな……
「クソ、コレでも食らえ！！」
僕は対神崎用の閃光手榴弾を投げつける。
「そう何度も同じ手は食わないわ！！」
神崎は手をクロスして顔を隠す。
……その隙に、
「遠山先輩、お先に失礼させてもらいます。」
「あ、あぁ……またな。」
遠山先輩に一礼してから全力ダッシュで逃げ出した。
ちなみに、さっき投げつけたのは丸めて固めたティッシュだ。

神崎が反射的に動いてくれて助かった……

……と思ったら、

「待ちなさーい！！」

〈ガガガガゥンッッ！！〉

「何でだぁぁぁ！！」

背後に発砲しながら追いかけてくる神崎がいた。

てか気づくの早いわ！！

せめて後、三秒は稼げると思ってたのに！！

「待ちなさい！教育的風穴をわざわざしてあげるんだから！！」

「それただの風穴だろ！？」

「説教の上に風穴が待ってるのよ！！
お得じゃない？！」

「それただの拷問の後の処刑だろうがぁ！！」

「いいから風穴ー！！」

「絶対にイーヤーだー！！」

その後、俺と神崎の鬼ごっこは３０分の時間をかけて、俺が全力で神崎をまききるまで続いた。

俺、まだまだ傷が完治してないのに……

午後の専門科目の授業が億劫になる今日この頃であった。

【3章】・パートナー編（後書き）

ギャグは書いててていいっすねー

そして『防人の４５口径』の『風連希』の登場！！

……マジで白石先生には土下座もんです……

とまぁ、それは置いておいて

次回の場面は強襲科です。

ではまた次回～

感想待ってまぁ～す！！

…2　嵐の前の静けさ（前書き）

平和な一時です。

まぁ、ほとんど回想ですがね…

てか『強襲科』ほとんど関係ねー。

前振りじゃん。

…2　嵐の前の静けさ

4月のとある日の夜。

大雨に見まわれた日。

僕は空き地島の隅っこで膝を抱えていた。

僕がここに来るのはいつも気分が沈んだ時だ。

実際に僕の気分は沈んでいる。

4月のあの事件以来、一向に治る気配が無い。

いつもあの事件の事を考えてしまう。

どうして真咲が死ななきゃならなかったんだろう?

どうして綾さんは僕に『殺してやる!!』なんて言ったのだろう?

どうして、僕が生きてるんだろう？

こんなに、力を持っていたのに……

色んな力を持っていたのに……

守れなかった……

何でだろう？

どうしてだろう？

深藍の知者と呼ばれたこの僕が、分からない。

全く分からない……

あぁ、イライラする。

あぁ、ムカムカする
あぁ、……むなしい……
色んな思いが頭の中を回っている。
考えたくないのに……
何も考えたくないのに……
ふと、周りに明かりが灯る。
そして近づく一機の飛行機。
それを見て、瞬時に理解した。
『海に落ちるな、この飛行機。』

視力７．５の左目から見える飛行機の減速度と止まるまでの距離を無意識に計算して出た答えだ。

大方、ハイジャックをジャックし直したはいいが、燃料切れか爆弾でも仕込まれた為の緊急着陸だろう。

だけど、

このままだと人がたくさん死ぬ。

すると僕の行動は決まっていた。

左手を軽く伸ばして呟く。

「レパル」

その言葉とともに、薄紫の一辺が５０ｍを越える正方形の盾を展開する。

反発力を弱めるごとに盾の色も薄くなり、次第には微かに見えるぐらいになった。

そしてそのほぼ透明になった薄紫の壁に飛行機がぶつかる。

すると、飛行機は魔法がかかったみたいに急激に減速して右翼を風力発電の柱にぶつけて止まった。

ふと、視線を感じた。

僕自身、無気力だったから仕方なく左目で視線の先を追う。

そこにいたのは、全身真っ黒な服を着てバイクにまたがっている覆面の男がいた。

けど僕は気にも留めなかった。

僕はソイツから視線を外し、
びしょ濡れになった病院服のまま、飛行機から人が降りてくる前に空き地島から静かに街中に姿を消した。

僕は知らなかった。

その人物が、

『黒の疾風・紅い閃光』と呼ばれる、正体不明の謎だらけの武偵だ

と言うことを……

「裕太、早く強襲科行こう♪」

高めの明るい声に、僕は目覚める。

どうやらご飯を食べ終わった後、不覚にも寝てしまったみたいだ。

……というより、

「綾さん、ここ『1－D』ですよ?」

「迎えにきたのよ。
裕太いつまで経っても来ないからね」

時間は既に2時。

完全にサボりに入る。

「スミマセン、綾さん。
わざわざ貴重な時間を……」

「いいのよ。
それより、久しぶりに任務の協力がなかったから
今日は裕太のアル＝カタの訓練につきあってあげるわ♪」

「ありがとうございます。」

そういいながら、銃を確認しながら強襲科に向かう。

ちなみに帯銃の仕方も変えた。

具体的には、
太ももにピースメーカーで、両脇にグロック、腰にＤＥ改だ。

……体が少し重い。

「そんなに帯銃してどうするの？」

綾さんの質問はもっともだ。

並の武偵にこの装備は逆に俊敏性を失わせるからよくはない。

でも僕は違う。

僕は全高1の陸上競技の『～走』と入るモノはいつも一位だ。

「武器の用途は、ピースメーカーが早打ち専門。
グロックが通常戦闘ですかね。」

「へー、さすが裕太は考えることが違うわね。」

「あはは、お褒めに頂き光栄です。」

歩きながら話すこの会話は、どこか楽しげだった。

実際に楽しかった。

だが、そんな思いも直ぐに崩れ去った。

この後起こる、強襲科の大事件のせいで……

…2　嵐の前の静けさ（後書き）

次回はバトル。

しかも真剣。

お楽しみに～

P．S．

かなり遅めになります。

…3　無敵ｖｓ多能力者（前書き）

はい、バトル開始！！
タイトルで想像つきそうですね。

では、どうぞ！！

…3　無敵ｖｓ多能力者

「「あっ、本当に生きてた……」」

強襲科に久しぶりに来たと思ったらこの挨拶だった。

……ヒドくない？

僕、こんなに嫌われてたっけ……

「コラ、あなた達！！
久しぶりに戻ってきた仲間にその態度は無いでしょ！！」

綾さんが涙を流さないように必死に耐える僕を抱きしめながらみんなを怒鳴りつけている。

僕、しばらくは強襲科に来ないようにしよう……

「イヤ、すまんすまん。
でもよ京乃宮、ソイツ確か死んだんじゃなかったっけか？」

強襲科の三年の先輩が僕を指差しながらオトボケ顔で綾さんに質問する。

綾さんはそれを呆れ顔で見つめ、ため息を一つ吐いてからみんなに説明する。

「裕太は仮死状態だっただけよ。
でもあまりにも長すぎたから先生も勘違いして死亡扱いしただけよ。」

綾さんの説明にみんなが驚く。

そして、

「オイ後輩!!
お前、今武偵高の中じゃあメチャクチャ有名になってるぞ!!」

「『不死身の知者』とか言われてるぜ!!」

「綾さんを含めた色んな有名な先輩達がお前を助けに行ったとか、羨ましすぎだぜ竹崎!!」

僕を待っていたのは、
男女学年を問わずに押し寄せる詰問の嵐だった。

さすがの綾さんも僕を守りきれず、どんどん群れの外へ追いやられる。

どうやってこの人の群から抜け出して綾さんと合流するか考えていると、

不意に、殺気を感じた。

その殺気は、どんな気配にも瞬時に反応できるぐらいの感覚を持っている僕が気づき遅れるほど、微かに反応できるぐらいの微量な殺気だったが、それだけではない。

その殺気は、明らかに隠している。

無理やり、
溢れ出す殺気を無理やり止めているような感覚だ。

しかも、質が違う。

ただのチンピラなんかとはい比べ物にならないぐらいの研ぎ澄まされた殺気。

明らかに幾つもの血生臭い修羅場を潜った者の類い希なる殺気。

それを捜そうと精一杯首を動かしていると、

向こうから来た。

「お前ら、少しどいてろ。」

その一言だけで、俺を取り囲んでいた人並みが一気に開く。

その列の中央に、一人の男がいた。

……コイツだ。

コイツから、研ぎ澄まされた殺気を感じる。

やけに背が高い事もあり、威圧感が半端ではない。

「コイツが、『不死身の知者』か……」

まるで値踏みをするような目つきで俺を見つめる。

その威圧感に耐えられずに、僕は話しかける。

「いきなり何ですか？」

何とか声を震えないようにしたが、それが精一杯だった。

体が動かない。

「……お前、俺と戦え。」

「……えっ？」

突然だった。

眩い光が僕の視界を奪ったと思ったら、

僕の体に重くて鈍い衝撃が襲ってきた。

金縛りにあって硬直していた体に今のダメージはキツかった。

しかも、僕はまだまだ治療中の身。

そんな体なのに、攻撃を受けた。

威力的に、ＤＥだ。

そんなモノを不意打ちで四発も食らったら、

さすがの僕も殺意がわく。

「許さねえ……」

体をくの字で折った体勢をゆっくりと戻しながら呟く。

「戯れ言を言う暇があるのなら全力でこい。」

わざわざ手招きまでして挑発する男に、

俺は最後のリミッターを外す。

「あぁ、もう『怪物』でも『化け物』でも何でも呼ばれていいや……ただソレと引き替えに……」

体をようやく全て起こして顔を上げる。

その目は、

「……殺す……」

真っ赤に染まっている。

冷たい……

冷たい……

血が冷たい……

骨が冷たい……

皮が冷たい……

肉が冷たい……

臓器が冷たい……

そして、

感情が、冷たい……

『キル・ヴァーサク』

京乃宮家の呪われた能力。

京乃宮家にしかつかえない能力を『使った』。

不意に、先程みたいに視界が眩い光によって奪われる

だが、分かる。

見えなくても分かる。

見えないならば、『音』でだ。

弾は１２発。

９パラが６つに５０ＡＥが６つ。

僕はそれを、

『避ける』

まず一発目を左に避ける。

そして避けた先の二発目を体全体で交わしながら三発目は屈んで避ける。

そしてソレを幾度も繰り返し、

俺はほぼ同時に発せられた１２発の全ての弾丸をキレイにかわした。

〈ドドドドドドドドドドォンッッ！！〉

１２発の弾丸がマシンガンみたいに規則的に壁にぶつかり大きな穴を空ける音がする。

『……えっ？
なんだ、今のウェ○カーみたいな動き？』

強襲科の男子が驚きが台無しになるような事を言う。

だけど、ソレが一番しっくりくる。

だって僕は本当にバイ○ハザードのウェ○カーみたいな動きと素早さで弾を全て避けたのだから……

だが安心している暇もなく、また銃弾が飛来する。

その数３０発。

避けられないわけではない。

ただ、３０発はキツいから対処を変える。

使う技は勿論アレだ。

「レパル」

そのワードとともに、僕の目の前に薄紫の半透明な盾が出来る。

そこに飛来する銃弾がぶつかった瞬間、

弾が『反発』した。

無音で跳ね返ってくる３０発の弾丸。

それをつまらなさそうに見つめると、視界からヤツが消えた。

それと同時に前方のレパルを消して、振り返らずに後方にレパルを展開する。

それと同時にレパルに弾が当たる感覚がする。

そして銃弾が全て反発した瞬間に今度は頭上に展開した。

また銃弾が反発する。

それを幾度も繰り返していく内に、向こうの弾が切れたらしく大きくバックステップをして距離を開ける。

「んで、アンタは何者なんだ？」

「！！！」

キル・ヴァーサクの力で一瞬で背後を奪った僕に振り向きざまに発砲する。

だが、僕はまた素早く動いて背後を奪う。

「質問ぐらいは答えてくれてもいいんじゃないんすか、先輩。」

レパルを解いて、ひたすら銃弾を避けつつ背後を幾度も奪う。

「ならば、これならどうだ。」

すると、どこからか黒いナイフを取り出して構える。

……俺のドスに似てるな。

そう思っていると、
遂にソイツが名乗った。

「萩原家八十八代当主、萩原願。いざ尋常に参る！」

そう言いながら突っ込んで来るソイツの背後をまた奪い、距離を取りながら考える。

『萩原って……あの萩原か』

キル・ヴァーサク化していた為、あまり驚かなかったけど、俺は微かに息を呑んだ。

萩原願と言えば、一言で説明がつく。

……『無敵』……

その二文字だ。

鳳凰院先輩が『最強』ならば萩原願は『無敵』。

そう呼ばれているコイツが、何故に僕にケンカをふっかける？

一般的には『Ｅランク』武偵のこの僕に……

「何のようなんッスか先輩……っと、危ねぇ。」

また黒いナイフが俺に襲いかかる。

頸動脈に、眉間に、心臓に、肝臓に、金的に、音速のごとき一閃が近づく。

だが、それを全て避けきる。

意地悪く０．１ｍ単位でね……

「ちょっとは話を聞いて下さいよ。」

襲いかかるナイフと弾丸を次々と避ける。

が、そろそろ面倒になってきたな……

「いい加減にして下さいよ先輩。
……第３の力を解放しますよ。」

すると、萩原先輩がナイフの構えを解いた。

「俺はただ、貴様の実力を確かめたかっただけだ。」

「……あぁん？」

実力を確かめる？

つまり、Ｅランクのメッキが剥がれてきたのか？

理由と言えば、一つあった。

「あの事件か……」

通称、『アドシアード事件』

俺を救出するために、
綾さん、鷹山先輩、極めつけは武偵高最強の鷹山先輩などの武偵高屈指の戦力が集結した。

実質Ｓランクの三人がたかがＥランクに集結するわけがない……っ

てところか。

「『不死身の知者』って言葉が流行ってるから気になったからだ。後、タカの弟分がどんなヤツか気になったりしたからだが……」

値踏みをするような目で俺を見て、萩原先輩は再びナイフを構える。

「メチャクチャ楽しめそうだぜ！！」

そう言いながら突っ込んで来る。

だが、先程とは明らかに違う。

動きが……速すぎる！！

「チッ」

小さな舌打ちをしてレパルを球形にして完全攻防体にする。

「シャットダウン（能力強制終了）」

萩原先輩が何を呟いたかは分からないが、レパルの中にいれば少なからずは安心だ。

そう思っていた。

しかし、違った。

「バカな……！！」

驚愕の声がコロシアムに響き渡る。

萩原先輩はレパルのスレスレで立ち止まっていた。

レパルは……展開したままだ。

「今のはレパルを打ち消そうとしたんですよね、萩原先輩。」

俺の声に反応して、またバックステップで距離を取る。

コロシアムの左端から右端までたった一回のバックステップで……

「残念ながら、コレはフツウの超能力じゃないんですよ。」
そう言ってレパルを打ち消す。

「コレは精神力じゃない、ホルモンを分解して燃焼する力。
だからフツウの超能力封じじゃ対抗できない。
でも解析すら出来るはずがない。」

僕は頭を親指でコツコツ叩く。

「『キル・ヴァーサク』
この力のおかげで脳内はガッチガチに冷やされて外部の干渉が一切遮断されるんっすよ、どんな力を使ってもね。
例えるならば、
ダイヤモンドでできたスコップで分厚い南極の永久凍土を開通させようとするようなものなんですよ
アナタはスコップ一つで南極大陸全てを海に沈められますか？
無理ですよね、それと同じです。」

そう言って、僕もようやく武装する。

武器は真っ黒なドス、一つだけだ。

「貴様、それをどこで！？」

萩原先輩が何か急にキレたがシカトする。

いや、シカトしようと思ったがやめる。

「心配しなくても先輩のとは別物ですよ。
……ただ、提案があります。」

僕は人差し指を立てて提案する。

萩原先輩は初めは怪訝な表情をしていたが、マジメな顔つきに戻った。

「何だ？」

続きを促す先輩に僕は伝える。

「実は俺、まだ怪我が治っていないのでこれ以上は闘いたくないんですよ。
ですけど、それだと先輩に失礼だ。
だから……」

そして僕は告げる。

「先輩にさわれたら俺の勝ちでいいですか？」

それを聞いた瞬間、萩原先輩はキョトンとしていた。

だがそれは直ぐに治り、マジメな顔つきに戻った。

「いいだろう。」

許可が出た。

「ありがとうございます。
んじゃ……」

そう言って僕は……

「お先に失礼しますね。」

ポンと萩原先輩の肩を軽く叩く。

「！！！！」

萩原先輩は驚いていた。

「バカな！！
今の俺はＳ．ＨＳＳのはず！！
なのに何故気づけなかたった！？
貴様はどうやって俺のそばに移動した！？
答えろ！！」

ガシッと僕の肩を掴んで僕を無理やり振り向かせる。
僕はそれに対してドスを見せつけながら簡単に答えた。

「このドスには『時空間』を操る能力があるんですよ。
だから1分間、時空間を止めている間に近づいてポンと肩を叩いただけですよ。」

そう言ってドスを鞘に入れてからケツポケにしまい、出口に向かって歩き出す。

「あぁ後、『願』先輩。
俺はあんまり闘いはキライなんで戦闘の申し込みはやめて下さいね♪」

ウインクを一つ、願先輩にやってから再び歩き出す。

強襲科のメンバーが次々と道を開けていく。

その中を俺は歩く。

ちょっぴり恥ずかしがりながらね…

【萩原願サイド】

俺は……負けたのか？

イヤ、負けたわけではない。

あれは負けに入らない。

けど……あれは……

「遂に出てきたな、願。」

「……遼」

「無敵のお前にも『敵』になりうる奴がな。」

「ふん、それをいうなら鳳凰院先輩もだ。
あの人は油断したら俺でも負ける。」

「それなら二人目かな？」

「お前らも合わせたら六人目だな。」

「そっか。
んで、再戦はするつもりなの？」

「あぁ、勿論だ。」

「やっぱりな。」

「そのこと何だけどさ。」

「……あんたは確か、京乃宮先輩。」

「うん。
とりあえず、裕太を襲うのはやめてちょうだい。」

「……は？」

「アナタはいきなり無防備な裕太に発砲した。
裕太が今どんな状態か分かる？
上半身は穴だらけで肝臓がやられているのよ。」

「「なっ！！？」」

「フツウだったら初めのヤツだけで悲鳴を上げて倒れてもおかしくなかった状態だったのに、頑張って相手したのよ。
その辺を考えて上げてね。」

「怪我した状態であの強さって……
願、どう思う？」

「……さすがタカの弟分だな。」

「はぁ……まぁいいわ。
私が言いたいのは裕太には手を出さないでってことよ。
わかった？」

「……わかった。
『戦闘方面』では手は出さないようにする。」

「……まぁいいわ。
約束は守りなさいよ。
じゃね。」

「……戦闘方面では、な……」

…3　無敵ｖｓ多能力者（後書き）

はい、萩原願さん登場。

無敵にはもってこいな先輩ですね。

ちなみに、裕太は後３つ能力を持っています。

天才であり超人であり多能力者です。

京乃宮家だけのキル・ヴァーサクがどうして使えて、制御しているのかはだいたいの人が気づいていると思いますが、その内公開します。

次回はいつぞやで約束した風魔との任務です。

ではまた次回～

…4　男の娘の悩み（前書き）

ギャグ少なめ、

そして……

うーん……

…4　男の娘の悩み

「ゴハッ」

「裕太！！大丈夫！？」

あのバトルの後、僕は任務受付板の所に向かっていた。

だが、急に喉に何かがこみ上げてきて耐えきれずに地面に吐き散らしてしまった。

とっさに口を抑えた左手を見ると、真っ赤な液体で染まっている。

血だった。

「裕太！！大丈夫なの！？」

綾さんが慌てふためいている。

とりあえず落ち着かせなければ……

そうだ！

この話題でいこう！

「イヤー、まさかケチャップを吐き散らすとはな～」

「どこからどう見ても血じゃない！！
第一アナタはいまお粥ぐらいしか食べられないじゃない！！」

うーん、失敗。

ならば次は、

「胃液って、真っ赤なんだ……」

「あなたは今までの１６年生きてきた中で嘔吐をしたことがないの？！」

またまた不発。

どうしよう……

「実は鼻血が口から放出されたんだ～、ってゆうのはどう？」

「それだぁ！！……ってお前は…！！」

後ろから声をかけられたらので振り返ると、そこには青髪に黄色のリボンで髪をポニーテールにまとめ上げた美少女。

風連希がいた。

「この前はありがとうございました、綾先輩。」

「いや、私が勝手についていっただけよ。」

風連が綾さんと何かを話していたが、とりあえずスルーして風連に訪ねる。

「そんな事より風連、お前こんなとこで何してんだよ?」

綾さんとの会話を一旦中断してから風連は俺に振り返る。

「陽菜がアナタを探してたのよ。
それの手伝いかな?後、希でいいわよ。」

陽菜?

あぁ、風魔陽菜か……

しかし、風魔が俺に何の用だろう?

……ってそれよりも、

「ちょうどよかった。その内、風魔に罰を与えてやる予定だったなぁ……」

無意識の内に笑顔になりながら指をバキボキと鳴らす。

「とりあえず、風魔はどこだ？」

清々しいぐらいの笑顔を向けて風連に質問する。

……背後に邪悪なモノがあるけどね……

「あ…まぁ、私についてきてよ。
綾先輩も如何ですか？」

希が綾さんを誘い、綾さんが首を縦に振る。

「それじゃついてきてください。」

希の後に続く俺たち。

その間も、俺の体は痛み続けていた。

「さぁさぁ、この裕太の寝顔の写真はどうだ!?
今なら五万円からにしておくでござるよー!!」

「俺は１０万円払う!!」

「僕は１２万円!!」

「俺っちは１５万!!」

諜報科棟の裏から世話しない声が聞こえる。

何だろうと思ってのぞき込むと、

「Ｍｅハ２０マン、ハライマース!!」

「「クソ、無理だー!!」」

万札を持って風魔にたかっている男子共がいた。

つーか、風魔が持ってる写真って……

「では今回もジョン殿の２０万ということでよろしいでござるな?」

「クソ、ずりーぞジョン!!」

「ハッハッハッ!!
カネガナイＹｏｕタチガワルイノデース!!
ソレニクラベテワタシハチャントニンムデカセイデっ『ゴスッ』っ
ゥマァァァァ!!!」

喋ってるところに関わらずジョンをぶん殴って写真をぶんどる。

ちなみにジョンは頭が壁に埋め込んで動かない。

……後で抜いてあげねーとな。

てかそれよりも手に入れた写真を確認する。

写っていたのは僕の寝顔の写真。

しかも、胸のところがはだけていて女の子だったらかなり際どい危なげなシーンだった。

それを見た瞬間、僕のやるべき事は決まった。

「ふぅぅぅまぁちゃぁぁぁぁん!!」

ジャキッと、『対物大型拳銃』である『DE改』を風魔に向けて構える。

照準は眉と眉の間。

即死コースだ。

「裕太、ダメー！！！」

「何やってるのよ竹崎君！！」

両脇から綾さんと希が押さえ込んでくる。

クソッ、照準が……！！

「安心してください！！
一発で終わらせますから！！」

「そうゆう問題じゃないのよ！！」

「陽菜が死んじゃうじゃない！！」

「しまった！！ＤＥ改の弾がない！！」

「あったら本当に撃つつもりなの！？」

「陽菜、逃げてー！！」

「クソッ、こうなったらバブルグロックで蜂の巣にしてやるぜー！！」

「「落ちつきなさいってば！！」」

～～しばらくお待ち下さい～～

〈ゴスッ〉
「痛いでござるー！！」
結局、俺は空手チョップで譲歩してやった。
「全く、何やってんだよ。」
「ごめんなさいでござる……」
シュンと落ち込む風魔。
そんな風魔を見てもいられず、俺は話を促す。
「んで、何のようだよ？」
「そうでござった！！」
風魔はいじけ顔から一転して楽しそうに自らのカバンの中を弄る。
……そこは忍者じゃないんだな。
「裕太、コレを一緒に受けてもらいたいでござる！」
風魔がカバンから取り出した紙を受け取り確認する。

「何々、『潜入、豪華パーティーで裏調査をせよ』か……」

別に悪くはないな。

諜報科のＢランク相当レベルだし。

「それで裕太、ここを見てほしいでござる……」

風魔が下の条件の部分を指差す。

「えーっと、『Ｄランク以上女子五名以上限定』……」

左にいる風魔に目で語りかける。

『どう言うことだコラ？』

すると風魔は視線を背けて申しわけなさそうに言葉を紡ぐ。

「イヤー、実はまた金欠気味で、ちょうど２０万も儲かる任務があって、それで……」

風魔が本当に申しわけなさそうに告げている。

……確かに俺は自分でも女の子みたいだと自覚している。

今まで何人のチンピラに襲われかけた事か……

（力がなかった小学生の時は姉ちゃんがチンピラを１０分の７殺し

にしてた。）

んだからハッキリ言ってコンプレックスなんだ……

だが、ハッキリいって今回の任務の条件を見ただけでも女装は必須事項だ。

しかも任務の場所がパーティー会場。

普通の女装だけでは済まない。

女装は嫌だ……けど任務は女装必須。

俺は……

俺は……！！

「やっぱり、裕太はこの任務を受けたくないでござるよね。ごめんなさいでござる。」

「……やるよ。」

「「えっ？」」

風魔及び綾さんと希が素っ頓狂な声を上げる。
それをため息で吹き飛ばすように風魔に告げる。

「ハァ……、まぁ任務の一環だと思えば何とか手伝ってやってもいいさ。
それに……」

「「それに？」」

女子陣が首を傾げて答えを待つ。
俺は大して待たせずに答える。

「お前と約束したしな。
あの間宮との出会いの時に…な。」

「！！」

風魔が驚いた顔をする。
その顔がだんだんと赤く染まっていくのに気づいて慌てて任務の確認をする。

「そっそんな事より、任務はいつなんだ？」

風魔は真っ赤な顔のまま俺の問いに答える。

「明後日の5時に現地に武偵高に集合してから6時に現地に到着。
そして現場の人にパーティーの内容と事前練習をしてから次の日の
6時にパーティーが開始、
という流れでござる。」

「分かった。じゃあ俺はもう一人雇っとくな。」

内容をしっかりメモしてから忘れないように携帯のカレンダーにア
ラーム付きで記入してからアイツを誘おうとするためにその場を離
れようとする。

「ゆ、裕太!!」

だが、風魔の突然の呼びかけに体が止まる。

「何だよ風魔?」

振り返ると、風魔が両腕を開いて俺に飛びつき終わっていた。

俺は病院で女の子になって目覚めるまでづっと眠っていたから身長
が１６１ｃｍになっていたが、

そんな事もお構い無しにあっさりと押し倒される。

「ちょっ!?いきなり何すんだよ風魔!?」

慌てて風魔を突き飛ばそうとするが、出来なかった。

だって……

「し、心配したんでっござるよ……裕太っ…！！」

涙をボロボロと流していたんだから……

「裕太が生き返ったって聞いて、嬉しかった……
でも、裕太に会おうと思ったらっ…面会謝絶にっ、なってて……」

「……」

俺は何も言えない。

黙って風魔を見つめる。

綾さんたちは微笑ましそうに俺たちを見つめながら立ち去る。

「ようやく面会謝絶が解けて、会いに行ったら裕太はねてたでござる。
その時、某は『死んでる』って思ってしまったでござる。
けど、写真を撮ってまた売りさばいているのを聞けば、きっと裕太は飛んできてくれるって……」

「そうか……」

あれは、風魔が寂しさを振り切る為、
俺が生きてるって証明するために……

「よかった……！！」

「風魔……」

「裕太が生きてて……よかった……！！」

その言葉に、俺の胸が痛む。

俺が、どれだけ色んな人を傷つけたのか……
改めて思い知らされる。

「ごめんなさいでござる。」

「……はっ？」

今度は意味が分からない？

と思ったが、瞬時に分かった。

「あの時、守れなくて……ごめんなさい。」

やっぱり気にしていたのか……

あの事件は俺が一人で自分勝手に死んだ事件。

それなのに……

「ごめんなさい……」

何で謝るんだよ？

謝るなよ？

おまえらは悪くないのによ……

それ以上謝ると、

「ごめんなさい……」

「それ以上謝るなよ。
次謝ったら罰を与えるぞ？」

「ごめんな…んっ……」

風魔の謝罪の言葉を無理やり終わらせる。

方法は簡単。

風魔の後頭部を両手で引き寄せて、俺の唇を使い風魔の唇を塞ぐ。

以上だ。

「……っぷはぁ」

一分ぐらい唇を重ねたまま足で風魔の胴をクロスして引き寄せたまま固定した。

だがさすがに息が続かず、お互いの唇を離す。

「ゆ、裕太！！いきなり何をするでござっ！！」

風魔が何か言い出す前に、風魔の胴でクロスした足を大きく動かして、上下の位置を変える。

今度は俺が風魔を押し倒す形だ。

「ゆ、ゆうっ…」

また何か言う前に唇を重ねる。

今度は口と口だけではない。

風魔の唇の間をすり抜けて、中にある柔らかなモノを俺の舌で弄る。

そのたびに風魔の小さな喘ぎ声が聞こえる。

だが、それだけでは止まらない。

風魔を押さえつけていた両手が離れて、セーラー服の中に潜りこむ。

そしてあるものをこねるように撫で回す。

「んっ、んっ、んんっ！！！」

風魔の喘ぎ声が強くなるほど僕の舌使いと手に力がこもる。

それに乗じて風魔の体がビクンビクンと震える。

……このあたりでいいかな？

「っぷはぁ……ダメじゃない、忍者がこのぐらいの辱めに耐えられなくて。」

「ゆう……た？」

虚ろな風魔を優しくお姫様抱っこして、近くのベンチに寝かせる。

「アナタを調教するのは楽しそうね、クノイチちゃん♪」

「……えっ？」

顔を真っ赤に染めたまま『私』を見つめる風魔ちゃん。

だけど疲れちゃったのか、いつの間にか寝てしまったみたいだ。

私はそのまま風魔ちゃんのよだれで汚れた顔を拭き、身だしなみを整えて上げた後、

「じゃあね、私のかわいいかわいいクノイチちゃん♪」

最後にクチズケを一つしてから立ち去った。

～～数分後～～

「あああああああああああああああああ！！」

僕は今、空き地島の隅っこで海に向かって絶叫していた。

恥ずかしい……

恥ずかしすぎる……！！

まさかあのモードになるなんて……！！

「ちくしょう、今度から風魔を正面向いて見れないよ……！！」

顔を手で覆って首をブンブンと左右に動かす。

あのモードに関しては制御しようがない。

あのモードは、

いつの間にか体を乗っ取られていて、
好きなだけ女性を弄び、
そして後悔を僕に渡してなくなる。

全く忌々しい能力だ……

だけど、救いがいのあることが2つ。

一つ目は、『記憶に残さない。』

二つ目が、『その対象の負の思いを摘み取る。』

と言うことだ。

だが、それでも死にたくなるのは確かだ。

しかも風魔に……

あの信頼すべき同士である風魔に、あんなコトをしてしまうなんて
……

「あああああああああああああああ！！」

また叫び声が東京湾に響き渡る。

「出て来いよ、相手してやるぜ。」

遥か３ｋｍにあるビルの屋上に微笑みかける。

それと同時に、屋上で『俺』を観察していた男がインカムで通信を取る。

そして、瞬時に展開した『反発（レバル）』に八方向から頭目掛けて放たれた狙撃弾が触れたと思ったら、反発していた。

いや、既に反発した弾丸がそれぞれの狙撃銃を破壊し終わっていた。

それを合図に、空き地島に八台のバンがなだれ込む。

そして２０ｍ辺りで急停車して、中から大量の黒ずくめの覆面集団が出てきた。

……そして……

その手には、『ＡＫ－４８』。
人数はざっと１００人ぐらい。
そして覆面集団の一人が俺に命令する。
『手を上げろ！大声を上げずに大人しく我々に従え！！』
その黒ずくめの男の後ろには、ロープと布を用意した男たちが待機している。
それにしても……
「僕もナメられたもんだな……」
その言葉と共に、自分でも分からなくなる様なぐらいの速さで取り出したピースメーカーのトリガーを引きまくる。
〈ガガガガガガガガガガガガッ！！〉

１２発の銃声とともに放たれた４５コルト弾が黒ずくめの体にぶち当たっていく。

だが、銃声が終わる頃には既に二丁のグロック１７が黒ずくめの男たちに向けられて……

〈〈ババババババババババババババァウンッ！！〉〉

左右それぞれ２０発の合計４０発の弾丸が黒ずくめの男たちの体に吸い込まれていた。

その事で呆気を取られている男達をシカトしてグロックのマガジンを素早く交換する。

「ちょうどイライラしてたんだ。
ちょうどいい……」

そしてグロックを両脇にしまい、４５コルト弾を１２発分上空に投げる。

その間にコルト・ピースメーカーを取り出して空莢を全て排出して、落ちてくる弾を銃をクルッと一回転させて弾込めをする。

その間、１秒。

「お掃除してあげちゃうぜ、コノ野郎ォォォ！！！！！」

数多の銃声が空き地島に鳴り響いた。

そして、１対１００の戦いが始まった。

大概の人はどちらが勝つか一目で分かるであろう。

だけど、よく考えてもらいたい。

Ｓランクに、不可能は無いのだ。

…4　男の娘の悩み（後書き）

ピンクでしたね、ハイ。

とりあえずすみません。

かなりヤバいですねー

まぁ、次回は未定です。

お楽しみに！！

…5　運命の再会（前書き）

内容は伏せます。

ちなみに、バトルは無し！！

…5　運命の再会

「ハァ……虚しい……」

僕はまた、東京湾で黄昏ていた。

あの後、結局は簡単に群がる黒服共をジャスト１００発の弾丸でしとめ終わり、
今はロジの生徒が黒服共を連行しているところだ。

「コレはお前がやったのかい？」

ロジの先輩が俺に話しかけてきた。

それに俺は首を振る。

だが先輩は笑いながら、

「あの萩原願と互角に戦ったんだろ？
だったらお前には朝飯前だろうよ。」

そう言い残して護送車で走り去ってしまった。

どうやら願先輩と戦った事により、僕の『Eランク計画』が崩れてしまったみたいだ。

「ハァ……」

何回か分からないがため息を漏らす。

何だか疲れたな……

まるで背負っていた重石が解き放たれたような解放感と疲労感でいっぱいだ。

ただ、茜色に染まった海水の波や夕焼け空が静に僕の疲れを癒していく。

ザザァーと波の声、

クゥークゥーとカモメの会話が僕に静けさを与えてくれる。

気持ちいい……

純粋にそう思えた。

不意にカモメがチョンと僕の肩に乗る。

そのカモメをチラッと見て、微笑む。

あぁ……

何て平和なのだろう。

ずっとこのままでいたい。

動きたくない。

そう物思いにふけり続けていたかたった。

だが、僕の平和な世界はいきなり破られた。

僕の肩からカモメが急いで羽ばたき去っていく。

何だろうと思って海から視線を外すと、
真っ赤な太陽に黒い陰が出来た。

その陰が、もの凄い勢いでこちらに飛んでくる。

すぐさま視力7．5の左目で確認すると、人型の何かが近付いているのが分かった。

だが、それは急に真っ黒い何かで遮られた。

「やっと見つけましたよ、『我が主』。」

その声がいきなり耳元で聞こえた。

その瞬間、

「うわぁぁぁぁっ！！」

自分の出せるだけの脚力を使い、後方に飛んだ！！

だが、計算なしで飛んだのがまずかった。

第一に、いきなり体のことを考えずに激しく動いたから願先輩の時に開いた傷口がまた少し開いた。

第二に、慌てて着地地点を確認しようと背後を見ると、あるのはコンクリートの地面ではなく、茜色に染まる海だけだった。

『あ……死んだ。』

あまり知られていないが、僕は『かなづち』なんだ。

１００ｍで本当に死にそうになっている僕がこんな広い海に落ちたら……死ぬ。

だが、遅かった。

〈ザバァァンッ！！〉

激しい波音とともに僕の体が茜色の海に沈んだ。

必死に水を掻いて浮かぼうとするが、さらに悲劇が僕を襲う。

『いっ、いたい……！！』

海水が上半身の37個の傷穴に染み渡り、痛みで体の動きが止まる。

そして、水を吸った衣服に引っ張られるように海の底に沈んでいく。

苦しい……

苦しいよ……！！

誰か……

助けて……

……

……

……

……

ザバァァンと大きな水しぶきを上げて、何かが海面から勢いよく飛び出す。

海面から出てきたのは１８歳ぐらいの女性。

そして、病的なまで白いその細腕には藍色の長髪の少年が抱えられている。

「全く、我が主は昔から変わらないのね。」

その女性は背中にある2mを軽く越す巨大な『黒く禍々しい翼』をゆっくりと羽ばたかせて、コンクリートの地面にフワリと着地する。

そして優しく少年を地面に寝かせて呼吸を確認する為に口元に手を置く。

だが、少年の口に当てた手からは何の感覚や反応がない。

『息をしてないわね……』

そのからその女性の対応が素早かった。

素早く口の中を確認して異物が無いのを確かめ、右手で頭部を支え、下顎を人差し指と中指で引き上げて気道を確保し、支えていた左手で鼻を摘む。

そして開いた少年の口を覆うようにして自らの唇を密着させて、1秒間ゆっくりと大きく息を吹き込む。

吹き込むことにより少年の胸が膨らみ、また萎(しぼ)んでいく。

そしてまた大きく息を吹き込み、萎むのを待つ。

それから唇を少年から離し、今度は心臓に両手を置き、心臓や肋骨を折らない程度に力を込めて強く押し始める。

毎秒一回、合計３０回し終えた後、女性は再び少年の唇を唇で覆い、吹き込む。

それを繰り返すこと三回、

「ゲホッ、ゲホッ！！」

心臓マッサージをしている最中に少年が大きく水を吐き散らした。

それとともに、少年の胸が自動で上下の動作をし始める。

それを見た女性は、今度は少年の上半身の服を脱がし始めた。

そして露わになる少年の華奢な肉体。

だが、脱がされて露わになった上半身には痛々しい３７の傷穴があった。

その傷穴から海水とともに赤い液体が流れ出る。

『この程度なら大丈夫ね。』

そう女性は内心で判断して、その少年の傷穴に顔を近づける。

そして、その口内から伸びる赤い舌で、傷穴を『舐めた』。

舌を擦り付けるように、

唾液で汚すように、

塗りたくるように舐める。

端から見れば官能的な場面であろう。

だが、事実がそれを否定する。

舌で傷穴に塗りたぐった『唾液』が、少年の傷を癒やした。

まるで唾液がパテのように少年の傷穴を塞いだのだ。

『出来ればこの様な行為は『交わる時』にしたかったわね……』

そう思いながら、女性は少年の上半身全体を、舐める舐める。
そのたびに僅かながら少年の喘ぎ声が聞こえるのが女性の心身を癒していた。

『我が主ったら、かわいい。
１１５年も待った甲斐が会ったわね……』

そして、少年の傷穴が全て塞がり女性は顔を離した。

『ようやく見つけた、我が主。』

その少年の間近で正座をして、その太ももを少年の枕代わりにする。

スゥー、スゥーと規則正しい寝息を聞きながら、少年の頭を静かに撫でる。

『アナタ様が百巡りを終えて１５年も経過してしまいましたが、ようやくです。』

そして、女性は再び口を開く。

「さぁ、再び私と『契約』をしましょう。」

そう告げた女性の顔が少年の首筋に迫る。

大きく開いた女性の口から伸びる、鋭く長い『二本の牙』が、少年の首筋に優しく突き刺さった。

「ッ……！！」

少年が少し痛がり体を震わせたが、それはわずかだった。

その間に女性は自らの唇で少年の首筋を押さえながら牙から経由される少年の『血』をゆっくりと味わいながら吸う。

体内の１０分の１ぐらい吸って、女性は少年の首筋から離れる。

少年の首筋にはくっきりと女性の唇による鬱血の後が残っていた。

だが、

今度は女性は自らの左腕に噛みつき、血を吸う。

そしてある程度吸った後に少年の顔に……

無防備な唇に自らの唇を近づける。

そして……

『１５年待たせてすみません。

ですが、私はアナタの力になりたい！』

唇を重ねた。

その唇から、先程吸った自らの血を流し込む。

ゆっくりと、ゆっくりと流し込む。

少年の口内に舌を入れ、血が入りやすいように少年の舌を自らの舌で転がす。

少年の口の端から零れた真っ赤な血が流れ落ちる。

少年が苦しそうにするが、構わず血を流し込む。

次第に舌使いも激しくなる。

そんな永遠とも呼べる３０秒がすぎ、

女性がゆっくりと味わいながら舌を少年の口内から抜く。

お互いの口から赤い糸が引く。

最後に女性が零れた血を舌で舐めとり、小さく告げた。

「契約完了。
主を義藍炎家の男の子（おのこ）、
従を『ヴァンプ』の稀姫と定め、
今このときから私、『アリサ・ルウィーズ』は、義藍炎魅宏に全てを委ね、絶対服従を誓う。」

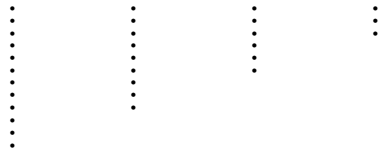
その言葉に反応して、彼女たちの半径１０ｍを幾何学な紋様の円が取り囲み、二人を輝かせる。

その不思議なな光景は１０秒で終わり、
そこには一人の少年が寝かされていた。

だが、周りには誰もいない。

先程の黒い翼の白人女性もいない。

そこには、竹崎裕太と言う伏せ名の
『義藍炎魅宏』（ぎあいえんみひろ）と言う名の少年だけが、静かに眠りを貪っていた。



【荒井サイド】

「こんな所で寝やがって、全く……」

病院で目が覚めた頃には既に１８時で、俺はまだ病院に帰ってきていない裕太を夜麻貴と探していた。

まぁ、実際は帰り道だ。

裕太は予想通りに空き地島にいて、何故か寝ていた。

「こんなずぶ濡れな状態で寝てて、風邪引いちまうっての。」

「あはは、確かにね。」

夜麻貴と談笑しながら暗い夜道を歩く。

「ねぇ荒井君？
竹崎君って……ヤッパリ一番大切な人なの？」

夜麻貴が意味ありげな表情で質問して来る。

「そんなもん、当たり前すぎて声に出すまででもねぇよ。」

軽く当然のように答えると、夜麻貴は何故かしょんぼりとして小声で、

「じゃあいざとなったら私じゃなくて竹崎君を助けるのね……」

と呟いていた。

それに対して俺は、

「バァーカ。」

パチンと強めのデコピンを夜麻貴の額に当てる。

が、案外痛かったらしく、

「荒井君、痛いよ……」

と涙目になっていた。

次は気をつけよう。

「だけどなぁ夜麻貴、お前は俺をバカにしてんだろ？」

「えっ？」

夜麻貴が不可解そうに俺を見つめる。

そんな夜麻貴に俺は伝えた。

「俺はどっちも必ず助けるぜ。
お前も裕太も捨てるなんてことは絶対しねーよ。
俺らは大切な仲間どうしだろ？」

そう、当たり前の事を行ったはずなのに夜麻貴は、

「あ……あぁ……！！」

真っ赤になって目に涙を溜めながら口元を押さえていた。

「なに赤くなってんだよ？」

立ち止まってまで赤くなって硬直する夜麻貴を呆れ顔で見つめると、夜麻貴は嬉しそうにこう言った。

「何でもないわ♪」

その後、裕太に誘われた明日の潜入任務や世間話をしながら俺たち

は病院に帰っていった。

武偵高ではなかなか味わえない、
『青春』ってヤツを感じながら、

俺たちは夜道を歩く。

今は、静かにこの『青春』を楽しもう。

…5　運命の再会（後書き）

次回、いよいよ潜入任務開始！

どうなるかはお楽しみに～

…6　トラウマと怒りの報復と任務（前書き）

タイトル通りです。

後、荒井の行動にはちゃんとした理由があります。

彼を責めないで下さい。

今回は下い……

ついでに、人外レベルの戦闘があるんでご注意下さい。

…6　トラウマと怒りの報復と任務

『やっと会えた……』

『１１５年の時を越えて……』

『もう離さない……』

『もうあんな思いはさせない……』

『もう誰にも傷つけさせない……』

『私の、私だけの物……』

『アナタだけは絶対に手離さない……』

『例えどんな辱めや痛みや辛さが私を襲っても……』

『アナタに会えるのなら耐え抜いてみせる……』

『アナタが、いてくれるから……』

『この永遠の時を、耐え抜いていける……』

『だから……』

『早く思い出して……』

『私の……』

『私の愛しい愛しい、我が主様……』

……

……

……

……

「昨日のアレは一体……」

「どうした裕太？」

風魔との任務当日。

僕は女子用制服に着替えながら昨日の夢を思い出していた。

てか女子用制服って肌着無しで着用するんだ……

上下ともにスースーするよ。

「いや、昨日妙な夢見ただけだよ……」

「そうか。」

曖昧な返答を鵜呑みした荒井は上半身の服を脱ぎ、ベッドにうつ伏せになる。

その背中には蜘蛛の巣のような、
稲妻のような激しい傷跡。

俺を救うために作った、『一生消えない』傷痕……

「だいぶ治ったけど一応塗っておくわね？」

「あぁ、頼む。」

夜麻貴が手のひらに水色のクリームを塗り、それを荒井の背中に塗り始める。

それと同時に……

「ぐぅぅ……！！！」

荒井の顔が痛みより激しく歪む。

シーツを噛んで、悲鳴を上げないように我慢しているのを見て、胸が潰れそうになる。

あの『15発の9パラを受けて顔色を変えなかった』あの荒井が、痛みを精一杯堪えている……

その理由を作ったのは僕だ。

僕が捕まったりしたからだ……

今は真咲も姉ちゃんもそばにいない。

僕が皆を守らなきゃいけないのに……

「別にお前が悪いわけじゃねーよ」

気づけば荒井がいつの間にか僕のそばにいた。

そして僕の頭に手を置き、優しく撫で始める。

「でも、何かお詫びをしなきゃ……」

「詫び？それなら……」

急に手を引っ張られて僕はベッドに投げ捨てられる。

「きゃっ！！」

軽い悲鳴を上げた僕に何かが覆い被さる。

目を開けるとすぐそばに荒井の顔が……

「何すんだよ！！」

咄嗟に荒井を突き飛ばそうと両手を上げるとその両手を逆に掴まれ、頭の上で僕の量手首がクロスした状態で荒井の右手によりガッチリと拘束される。

「クソ、離せ！！」

必死に拘束から抜け出そうとするが、全然動けない。

両手首はガッチリと拘束され、お腹を挟むように押さえつけられた荒井の両膝が僕の下半身の力を奪う。

ハッキリと言うと、
僕は力では荒井に劣ってしまう。

故に、荒井には近接格闘の組み手では負けてしまう。

いや、

組み手ならDランクレベルの武偵になら負けてしまう。

しかも、
拘束されたら僕は何もできない。

というより、
小学生の時に輪姦（？）されかけた時のトラウマが僕を襲って動けなくなる。

スッと、荒井の右手が僕の唇をなぞる。

それだけで僕の目から涙が零れ落ちる。

「あ、荒井……」

必死に荒井の名を呼びかけて離れるように伝えようとするが、出てくるのは荒井を呼ぶ声だけ。

これだけでは荒井を求めているみたいではないか……

だんだんと、荒井の顔が近づく。

遂に吐息が唇がふれる距離。

唇と唇の距離が５ｍを切った時、

あの時のフラッシュバックが起こった。

あの時、

僕が小６の時のある日

なんの理由があったのか、
いきなり誘拐された僕は、とある廃屋で酷い目にあっていた……

廃屋には、
大の字で両手と両足を乱暴に押さえつけられた僕。

そして、それにたかるように群がる生臭い男共……

服が所々破られ、体のあちらこちらで唾液と白い液体で塗りたくられる。

『気持ち悪い……』

『やめて、触らないで……』

『もうやめてよ……』

そんな僕の願いを無視して近づく男の顔。

その顔が僕の唇を無理やり奪い、口内を蹂躙して僕の心を崩壊させる。

『苦しい……』

『いや……』

『お願い、やめて……』

崩壊していく意識の中、ズボンが下げられてパンツも下げられていく。

『イヤだよ……』

『お願い、やめて……』

『そんな事しないで……』

『もう止めてよ……』

『苦しいよ……』

そして、男がアレをくわえようとする……

『誰か……』

『誰でもいいから……』

『助けて……』

そんなときに現れた、茶い長髪の美少年。

その美少年、『遠山金一』さんのおかげで助かった僕ではあったが、

それ以来、
僕は人間が嫌いになった。

ハッキリと、完全にハッキリと嫌いになった……

「うーん……」

いつの間にか気絶していたらしい僕が次に目を覚ましたのは車の中だった。

「あ、裕太起きた？」

綾さんが運転しながら声をかける。

「すみません綾さん。」

「いいわよ。それよりもう少しで待ち合わせ場所に着くわ。」

「分かりました。」

僕はそう言って起き上がる。

よく見ると、風魔が僕を膝枕していた。

寝ている風魔の顔を見て、あの時を思い出して赤くなる。

あぁ、ダメだな……

これで恥ずかしがってるんだから、海なんか行けそうにないや……

～ところ変わって強襲科～

〈ドガァァァァン！！！〉

激しい崩壊音が強襲科コロシアムから響き渡り、中から人が投げ出される。

だがその人物は空中で何度も回転して地面へ上手く着地をする。

だが、今までのダメからかひざを突き、動けなくなる。

そこに音速で近づく何か。

それから放たれた音速の右拳が倒れている青年の顔を襲う。

だが青年は腕をクロスしてガードした。

その腕から〈ゴキンッ〉と何かが複雑に砕ける音がする。

その拳はクロスした腕ごと青年を音速で吹き飛ばす。

だが青年の姿は無く、

青年はいつの間にかオレンジ頭の大きな少年の背後を奪う。

〈ババババババババババババァァァァァン！！！〉

ありったけの銃弾が青年の銃から飛び出し、少年の痛々しい背中にぶち当たる。

だが少年は怯まない。

少年の背中には一生消えない歪な傷痕があるにも関わらず、

痛みを感じさせない静かな動きで振り返る。

そして、少年のブラウンの瞳が青年を写しだした瞬間、

〈ドガァァァァン！！〉

また激しい崩壊音とともに、青年が吹っ飛んだ。
青年は激しく横に飛ばされながら、『防弾防爆使用の』強襲科コロシアムの壁を破壊しながら中に吹き飛ばされて、ようやく中の壁に深く食い込む形で青年は止まった。

対する少年は、拳を振り切った形で崩壊した壁を見る。

少年の体中はズタズタに避けている。

それは人間の限界を超えた動き、

音速すら遥かに凌駕する速さで動いた結果だ。

普通の人間ならば、その動きによる空気の摩擦熱によって塵すら残らないはずだ。

なのに、少年は生きている。

その理由は何か？

それは、

「起きやがれ萩村願。
裕太を傷つけた責任はまだ取り切ってねーぞ。」

音速を超えた動きでその少年、荒井玄司は倒れている青年、萩村願に向けてかかと落としを放つ。

だが萩村は素早く転がりそれを避ける。

そのままかかと落としは床を捉え、

〈バガァァァァァン！！！！〉

激しい崩壊音とともに荒井を中心とした場所から蜘蛛の巣みたいに半径６０ｍを凹ます。

勢いよく地面を蹴って、荒井がいるであろう１０ｍは凹んだ場所に銃の狙いを定める。

だが荒井の姿はもうない。

変わりにガシッと何かを掴む音がして、足が潰れそうになる。

足元を見ると、荒井が足を掴んでいた。

そう思った瞬間、ビュンッという音が一瞬したかと思った０．１秒後には、全身が痛みで悲鳴を上げた。

〈ドォォォォォォンッ！！！！！〉

激しい爆音とともに立ち込める土煙。

萩村願は武偵高の第２グラウンドに自らの体で大きな穴を作った。

だが萩村は無理やり立ち上がる。

そして、横に跳ぶ。

だがそれでも少し遅かった。

音速で真っ直ぐ飛んできた荒井の横殴りが萩村の脇腹を掠めた。

それだけで萩村は体を回転させながら体育倉庫の扉を突き破り、中に吸い込まれる。

それを見た荒井は、幾つもの旗を掲げる為にある１０ｍを越す金属製の棒を『へし折る』。

そしてノロノロと倉庫から出てきた萩村に体を回して遠心力をつけた力で、『投げつける』

〈ビィヒョゥウゥウゥウゥウゥ！！！！！〉

トン単位はあろう金棒が、風を裂き、摩擦熱で火を帯びながらステッキのごとく回転しながら音速で体育倉庫に近づく。

間一髪萩村は上空へ逃れたが、変わりに体育倉庫は『真一文字』に真っ二つになり、校舎に突き刺さる。

だが安心は出来なかった。

「うゥゥゥるぅあああああああ！！」

激しい雄叫びとともに迫る第二陣。

それを萩村は……

「『反発』（レパル）」

『反発』させた。

長方形の紫の盾により、金棒が同速で戻ってくる。

それに荒井は裏拳一つで、『叩き割る』。

〈バガァァァァンッ！！〉

と真っ二つに砕けた金棒が地面に刺さる。

すると萩村がこちらにジェットのごとく紫の球体を纏って飛んでくる。

「大方、空気を反発させて飛んで来てんだろうがよぅ……」

荒井が唸るように低い声で呟く。

萩村と荒井の距離が１０ｍになった時、

荒井は叫んだ。

「所詮はコピー。

裕太にかなうわけねぇだろうがァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！」

拳を構え、地面を蹴る。

それだけで地面が扇状に５ｍは削れる。

音速で飛んでくる荒井が、『反発』の塊の球体に触れる。

だが、荒井の体は球体を『すり抜けた』。

「！！！！！！！」

萩村の驚愕に体が反応する暇もなく、
音速の拳が頬に突き刺さった。

〈ドガァァァンッッッッ！！！！！！！〉

まるでアニメ上の超人達のバトルのように幾つもの建物を突き抜けてまた強襲科コロシアムに叩きつけられる。

萩村は、動かない。

そこに荒井が現れる。

「いろんな奴から聞いたが、テメーの力の秘密はそのナイフらしいな……」

そう言って荒井は萩村の右手に持つナイフを蹴り飛ばす。

「そのナイフで裕太の反応を真似たみたいだが、ヤッパリ『劣ってる』な……」

吐き捨てるように萩村の鳩尾を踏みつけながら荒井は叫んぶ。

「裕太を真似るなんざぁ、一億年はえーんだよォ！！！」

力の限り萩村を蹴り飛ばす荒井。

だが、荒井は振り返らずに歩き始める。

「それに、俺には『超能力』は効かねーんだよ。
勿論、裕太の『反発』も例外じゃねー」

そして出口に差し当たった所で荒井は振り返り、こう呟く。

「覚えとけ。
『愛と憎しみと努力』で人は『どこまでも強くなれるんだよ』。」

そして、荒井は傷だらけの体を引きずりながから立ち去った。

後に、荒井宛に多額の負債金届が来たのは言うまでもない……

～とある港～

「着いたわよ」

綾さんがそう言って静かに車を停止させる。

車を降りて確かめると、そこには二人の女性がいた。

一人がピッシリとスーツを着込んだ伊達眼鏡のいかにもインテリ感を持たせる長身の女性で、

もう一人は寝巻きのようなピンクのスエットに真っ赤なハンチング帽を目深かにかぶった小さな少女だった。

「アナタ方が今回の依頼の方ですか？」

メガネの女性が凛とした声で訪ねる。

「はい、そちらも今回の依頼主でよろしいのですね？」

対する綾さんも凛とした声で返答する。

「はい、では内容をお話しますので場所を移動しましょう。」

そう言って女性が車のドアを開く。

その動作に綾さんが眉をひそめた。

「どうしてわざわざ移動するのですか？
第一、待ち合わせ場所が人気のない港と言うのがおかしいのでは？」

綾さんがそう言うと、女性が困ったような顔をした。

「実は……言いにくい事実があるのですが……」

女性がそう言いよどむ脇でハンチング帽の女性がハスキーな声で言った。

「狙われてるの、私。」

その言葉を聞いて僕は銃を取り出して発砲した。

〈ガガガガガゥンッ！！〉

ソニックショットにより放たれた６つの弾丸が少女の後方に『隠れ

ていた』男たちに当たる。

ドサッと倒れた男たちには抜き身の拳銃が握られていた。

男たちが倒れた音とともに、

〈ババババババババババババァンッ！！〉

〈ズギュウンッ、ダァンッ、ズギュウンッ、ダン！〉

ＵＳＰのフルオートの連射音と銃声が違う自動拳銃と回転式拳銃の音が聞こえ、ドサドサッと大量の黒スーツの男たちが倒れる。

綾さんと希が仕留めたみたいだ。

「裕太よく気づいたわね？」

綾さんが賞賛の眼差しで僕を見る。

「いや、殺気丸出しの奴らが何人もチラチラとコッチをずっと見てたからボディーガードかと思ったんですが、
あの少女が『狙われてるの』って言った瞬間、焦りの表情を浮かべながら銃を取り出したのを見たのでね。」

「殺気って……
裕太君はゴルゴかなんかなの？
気づくだけでも大変だったわよ？」

「イヤー、綾さんは気づくのは分かってたけどまさか希も気づくなんてな…
お前、本当にDランクなのか？」

「某達はただ唖然としていただけでござる……」

「何があったか全く分からなかったです……」

「風魔に夜麻貴、それが普通だから安心していいよ。」

そんな武偵同士の会話をしていると、ハンチング帽をかぶった少女が近づいてきた。

「アナタなら安心ね。」

そう言うと少女は僕の手を取って両手で握る。

「……どうしました？」

少し怪訝な表情を浮かべながら少女に愛想笑いをする。

すると少女は楽しそうにこう言った。

「アナタにパーティー終了まで私の『ボディーガード込みの使用人』の依頼をするわ♪」

「……はっ？」

あまりの事で着いていけなくなったが、

どうやら僕は、

『パーティーの潜入調査』と

『パーティー終了までのボディーガード込みの使用人』の二重任務を受けることになったらしい。

…6　トラウマと怒りの報復と任務（後書き）

次回いよいよお楽しみの任務開始！！

果たして裕太は主人にちゃんとご奉仕出来るのかな？

P．S．

荒井のセクハラ行動の理由も明らかに！！

…7　決意（前書き）

特に述べることはありません

…7　決意

【パーティー会場】

「わぁー、陽菜ヤッパリ似合うわね～」

「そういう希こそ似合うでござるよ～」

「皆さん、カワイイですね……」

「「いや、火憐ちゃんはかわいいすぎよ！！」」

明日、パーティー会場となるホテルのロッカーで私たちは着替えをしていた。

とはいっても……

「綾先輩ー、まだですか～？」

「もう少し待って～」

私はこのメイド服を着るのに手間取っていた。

なぜなら……

「胸が苦しいわね……」

私の胸が大き過ぎてメイド服にイマイチ入らなかったからだ。

けどなんとか着ることができ、メイド服と一緒にあったカチューシャを頭に着けて自分の赤に近いオレンジ色の後ろ髪をまとめ上げてポニーテールにする。

ちなみに、髪の長い子はポニーテールにまとめるのが原則らしく、火憐ちゃん以外のメンバーはみんなポニーテールになるみたい。

まぁ、私以外はいつも通りみたいだけれどね。

「ごめん、待たせちゃったわね。」

更衣室のドアを開けてみんなと合流すると、

「「「……あぁ、綾せんぱっ……！！！」」」

私を見て言葉を失っていたと思ったら…

「「「無理だー！！！」」」

三人とも地面にひれ伏した。

「えっ？どうしたの？」
あまりのことに驚いていると皆が嘆き始めた。

「これが、巨乳という『凶器』なのかァァァ！！」

「これにはかなわないでござるよ！！
というより綾殿は美しすぎるでござるよ！！」

「顔好し！スタイル好し！性格好しの三種の神器をそろえてるなんて……
羨まし過ぎですよ綾先輩！！
それだけのモノがあれば、荒井君も……」

「えっと……
とりあえずみんな落ち着いて？
みんなだってよくにあうわよ？」

「「「勝者に言われても……」」」

「じゃあ何て言えばいいのよ！？」

その後、
三者三様の事をいいながら地面に泣きつく三人を連れて秘書の『如月』さんの所に行くのに五分もロスしてしまった。

みんなだってかなりかわいいと思うわよ？

「随分時間がかかりましたわね
いったい何をやっていたんですか？」

黒スーツをピッシリと着込んだインテリ系の美人、如月さんが呆れた表情で眼鏡を押し上げながらこちらを見ている。

「すみません、私が着替えるのに手間取ってしまったので……」

「そうですか、分かりました。
では、早速パーティーの内容と探って貰いたい内容をお教えします。」

「「「はいっ！！」」」

三人とも元気よく返事をする。

「それにしても……」

如月さんがチラッと私を見て、バッと背を向けた。

『……美しい』

「？」

何て言ったのかはよく聞こえなかったけど、とりあえず任務の事を考えることにした。

……そういえば、

「如月さん。ゆうっ……竹崎さんはどこに？」

さっきから裕太の姿が見つからない。

このホテルに着いたとき、あの『お嬢様』に連れられてどこかに言ったはずだけど……

「あぁ、『彼女』ならお嬢様の使用人としてのレクチャーをひとしきお嬢様から教わっているはずですよ。」

「あ……なるほど……」

若干苦笑いになりながら返事をしておく。

しかし、『彼女』か……

ヤッパリ女に見られてるのか。

じゃあ私は傍目からは、『レズ』に見えるのかな？

「ハァ……」

「どうかなさいましたか？」

ため息を漏らした私に如月さんが心配そうに問いかける。

「大丈夫です。それよりもパーティーの仕事について、よろしくお願いします。」

「ええ、こちらこそ。」

その後、私たちはしっかりと如月さんにパーティーの仕事と調査の内容を教えてもらった。

【荒井サイド】

「ハァ……やっちまったな……。」

茜色に染まる海を見つめながら俺は武偵病院の屋上の給水棟に腰を掛けて、右手の紙を眺めていた。

「被害総額が６００億円、どうやって払うんだよ……」

俺が持っているのは今回の俺と萩原のバトルによる損害賠償の請求書だ。

まぁ実際は６００億円はいってないんだけどバカな俺には単純に６００億円の方がしっくりする。

あのバトルの後、萩原の手によって学園島から退避していた生徒や先生たちが戻ってきて、諜報科の先生がざっとみてコレぐらいはかかると言っていた。

てか請求書を渡された。

「６００億円って……一生掛かっても返し切れねーよ。どうすんだよこれ？」

俺はあまりの現実に打ちのめされた。

だってそうだろ？

６００億だぞ６００億！！

将来、裕太のパートナーになってＬＤランク９０レベル（プロ中のプロレベル）の仕事を受け続けても返しきれるかどうか……

「ハァ……それより俺は裕太に謝らなくちゃいけねーのに……」

ズズッと左手に持ったコーヒーをすする。

……苦い。

謝りたいけど謝れない今の俺の気持ちみたいだ。

…

……

……

……

「おーらよっと。」

俺は裕太の手を掴んでベッドに放り投げた。
そして流れる動きで裕太に覆い被さる。
「何すんだよ！！」
すると顔を真っ赤にした裕太が俺を突き放そうと両手を突き出した。
俺はその両手を軽く受け止めて力で裕太の頭の上でクロスした状態でガッチリと押さえ込む。
「クソっ離せよ！！」
押さえつけられた裕太が必死に腕や足に力を入れるが、俺が裕太の脇腹に挟んだ膝に力を入れると裕太の下半身の力がみるみる失い、遂には抵抗する事を止めた。
「……ははは～、どうやら組み手は俺が優位らしいな～
実験につきあってもらってどうも～」
俺は初めて裕太に『勝った』という嬉しさで裕太にズズッと顔を近づけてしまった。
……俺は知っていたのに
イタズラで裕太の魅了するような唇を親指でで軽くなぞる。
「あ、荒井……」

すると、裕太の声が聞こえた。

その声は、今にも泣き出しそうな
か弱い声だった。

「ゆ、裕太？」

慌てて裕太に顔を近づけて表情を窺おうとする。

だが、顔を近づけていくたびに、裕太の目には恐怖が宿り、
体からは震えが強くなる。

そしてお互いの顔が５ｍｍを切った時、

遂に裕太が耐えられなくなった……

「いやぁぁぁぁぁ！！」

突然悲鳴を上げる裕太。

あまりの事に俺はビックリして裕太を拘束している左手と膝に力を
入れてしまった。

だが裕太はそんな事に構わず叫び続ける。

「いやぁぁぁ！！！
犯される！また犯される！！
誰か、誰か助けてぇぇぇ！！」

裕太の叫び声を聞いて、俺は遅すぎたが気づいた。

裕太は一度犯されかけた事があって、それ以来、体の自由を奪われた状態で性的な行動をされると我を失う事に……

「誰か、誰かぁぁぁぁぁ！！
お願い、助けてぇぇぇ！！
何でもするから見逃して！！
お願い、許して！！」

「ゆ、裕太落ち着け！！」

叫び声を目一杯上げる裕太の口を左手で塞ぐ。

「んんー！！んんー！！ンンー！！」

それでも裕太は必死に助けを求めようと唸り声を上げる。

裕太は、拘束された状態で必死に体を動かして拘束を逃れようとしている。

その固く瞑られた目から、大量の涙を流しながら、
髪を振り乱し体を大きく揺らし、
俺から必死に逃れようとしている。

すると、裕太の体に異変が起こった。

「や、夜麻貴！これを見ろ！！」

俺の後ろで顔を赤くしながら俺たちを見ていた夜麻貴に声をかける。

「こ、これは……！！」

俺の横まで来て裕太を見た夜麻貴が絶句した。

なぜなら……

「竹崎君が、『女の子』になってる……！！」

そう、裕太がだんだんと女に変化しているのだ！

具体的には、裕太の胸が膨らんでだんだんと大きくなっている。

「裕太、すまん！！」

そう言ってから俺は裕太の口を左手で押さえつけながら左手を離す。
その時に俺は裕太に馬乗りして両膝で裕太の手のひらを押さえつけて自由を奪う事を忘れない。

そして開いた左手で裕太のトランクスのゴムに指を引っ掛けて、
裕太のトランクスを一気に膝までずり下ろす。

そして全開になる裕太の下腹部。

そこには、裕太のアレが無い。

あるのは妙な液体で湿った女性特有の陰部だけだった。

「ンンンンンン！！！！！」

パンツを下げた瞬間、裕太の呻き声と体の抵抗が強くなる。

だが、先程と明らかに違う。

今の裕太の抵抗は、裕太特有の力強い抵抗ではなく、
明らかに力の弱い女子が必死に抵抗している様なぐらい、力がこもっていない。

本当に、このまま片手で押し付けながら裕太に『性的に乱暴な事』を出来そうなぐらいに、
今の裕太は、か弱い。

「どうなってんだよコレ！？」

必死に医療のエキスパートの夜麻貴に助けを求める。

だが、夜麻貴の行動は終わっていた。

「ンンンン……」
呻き声を上げながら、裕太がうっすらと視線をさまよわせ、
遂には意識を手放した。

その裕太の首筋には一方の注射器が刺さっていて、夜麻貴は既に中の薬品を注入し終わっていた。

「とりあえず眠らせました。まぁ命に別状はありませんし、ほうっておいても大丈夫でしょう。
……女体化の方は、『夜麻貴』で調べておきます。」

夜麻貴が静かに注射器を抜き、裕太の首筋に血止めを塗る。

そして俺に振り返って、顔を赤らめて質問する。

「どうしてあんな事をしたの？」

その問いに俺は答えられなかった。

だって言えるか？

裕太のトラウマを知っていたのに、

『裕太に勝つためにがんばったんだ～』だなんて、

死んでも言えるわけがない。

……

……

……

……

「こんなトコニいましたか、荒井サーン。」

不意に後ろから掛けられた声の主に振り返らず、コーヒーを一口すすってから俺は口を開く。

「何のようだ、ジョン。」

声の主のジョンはその１８７ｃｍの身長を曲げながら俺の隣に座る。

「実は荒井さんに提案があるのです。」

「……」

ジョンがいつもの似非Ｅｎｇｌｉｓｈな話し方を止めた。

どうやら本当に真面目な話らしい。

「何だよ……」

ズズッとまたコーヒーをすすりながらジョンに続きを促す。

するとジョンは青いサングラスの中から鋭い目つきで俺を見た。

『覚悟して聞け』っと言っているみたいだ。

「教師たちからアル任務を私と荒井さんの二人で受けるように命令されました。
どうやらこの任務を達成したら、荒井さんの負債が６億円まで引き下げられるらしいです。」

「ほぅ……」

１００分の１まで引き下げられる任務か……

どんな任務なんだろう？

「任務の内容は、
超重要機密テロ組織『黒雨（くろさめ）』のＮｏ．３、天変地異を操る超能力者の『天地龍』の逮捕です。
ちなみに、ＬＤランクは２０００です。」

「……２０００、か……」

俺はジョンが口にしたＬＤランクを口に出した。

「ＬＤランクの２０００越え、実質の『任務不可能（ミッションインポッシブル）』か……先生方はよく『Ｅランク武偵』のこの俺にそんなとんでもない任務を押し付けたもんだな……」

呆れてコーヒーを一気に飲み干す。

「本当にそうお思いですか？」

いきなりジョンが俺の言葉を否定した。

「ご覧下さい、この学園島を。どこもみな地面や建物が抉れ、潰され、叩き割られたこの惨状をお造りになったのは誰ですか？他でもない、『アナタ自身』ですよ？」

「……」

ジョンが指差す学園島の様子を黙ってみる。

辺りには所々ひび割れた道路や欠けた建物、武偵高に限っては金棒が突き刺さっている。

「コレはSランクでも……、下手をすれば『Rランク』や最強の『Vランク』ですら単体では作り出せない状態です。
それをアナタはたったの『五分』だけでここまでやった。
ならばアナタに出来ないはずがない。」

ジョンが静かに、だが力強く言い切る。

それに対して俺はこういった。

「それはお互い様だろ。」

そして拳をジョンに突き出す。

ジョンはそれに対して、

「そうでしたね。」

笑いながら自分の拳を軽くぶつけた。

「よし、なら『思い立ったが知己日（ちき）』だ。
明日で終わらせようぜ！！」

「荒井サーン、『キチジツ』デスーヨ？」

「……細かいことは気にすんな！！」

こうして俺たちは『任務不可能（ミッションインポッシブル）』に挑むことになった。

メンバーは二人。

一人は、
『超近接距離戦最強』と

もう一人は、
『超遠距離戦最強』の

『超最強コンビ』でな……

…7　決意（後書き）

次回は裕太サイドにするか荒井サイドにするか決まってません。

よかったから感想で次はどちらがいいか投票して下さい。

感想待ってま～す！！

…8　天変地異（前書き）

残念ながらジョンは出ません。

…8　天変地異

「ふーん、ふふーんふーん♪」

高層ビルが建ち並ぶとある都市の中、一人の少女が歌を口ずさみながら歩道を歩いていた。

その少女は白い。

何から何まで白い。

見た目よりも少し大きいぐらいな１５０ｃｍの身長に顔に幼さを残す少女。

少女の白さは目を引く。

汚れのない純白なワンピースに、同じくらい白いミュール、雪のように真っ白に光を反射して薄く神々しく輝く白髪（はくはつ）。

肌はまるで一度も紫外線を浴びたことのように白い。

唯一白く無かったのは、その雪のような長髪の頭に被さった大きな麦藁帽子に、
深海のような深い藍色をした瞳。

その真っ白な少女は楽しそうに、嬉しそうにスキップをしたり無意味に回ったりしながら、『誰もいない』ビル街を歩く。

「ふーん、ふふん、ふふんふーん♪
……あれ？」

真っ白な少女がふと何かの存在に気づき、スキップをするのを止めて麦藁帽子を両手で押し上げる。

そして露わになった藍色の瞳に何かが映し出される。

少女が見たのは人だった。

少女から３０ｍ離れた所で腰に手を当てて少女を見つめる少年。

その少年の身長は高校一年生には大きすぎる１９６ｃｍの背に前髪ごと立てたオレンジ色に輝くツンツンの髪、服の上から見て僅かに分かる筋肉質な体。

その力強いブラウンの瞳が少女を映し出していた。

「ねぇねぇそこの大きいお兄ちゃん。
どうしてここに人がいないか分かる？」

少女が明るい声でこの現象を不思議そうに尋ねた。

「あぁ、それはな。
ここ一体を人払いしておいたからだ。」

それに対して少年は静かに問いに答えた。

少年の言うとおり、ここ一体は立ち入り禁止区域に指定されている。

これから起こるであろう、『天変地異』のために。

「お前が……天地龍（あまちりゅう）か？」

その少年、荒井玄司は静かに少女に尋ねた。

少年は心の中で否定してもらいたかった。
こんな幼さが抜けきっていない少女となんか『死合い』たくはなかったからだ。

だが、現実は厳しい。

「えへへ……女の子には似合わない名前よね。」

少女は恥ずかしそうにしながら舌を出した。

その時荒井は、言いようのない辛さを味わっていた。

『こんな幼い少女とこれからバトルをしなきゃいけねーのか……第一、こんな無邪気な少女が『世界を崩壊に導く組織』のＮｏ．３なのか……』

荒井は悔しさから下唇を噛む。

荒井でなくとも戦いたくないはない相手だったであろう。

資料によると、

その少女は体の発達が異常なだけであって、
情緒や性格や思想という感情は実際年齢と同じ『11歳』という、
正真正銘の少女なのだから……

『……何でこんな子どもがテロに……』

すると少女が口を開いた。

「ねぇねぇお兄ちゃん。
アナタもヤッパリ……私の敵なの？」

少女は麦藁帽子を深く被り、僅かにできた隙間から荒井を上目遣いで見つめる。

荒井は何も答えない。

少女はそれを肯定とみなし、静かに告げた。

「お兄ちゃん、逃げていいよ？」

「……あぁん？」

少女のいきなりの勧告に荒井の言葉が荒くなる。

少女はそんな荒井に申し訳なさそうに、
だが決して引かない口調で事実を突きつけた。

「だって私は『天変地異』を司る能力があるのよ？
『人間が自然に勝てるわけない』じゃない。」

「……確かにそうだな。」

少女の言葉に荒井は同意する。

一次関数がまともにできない荒井でも流石にそんな事は分かる。

だが荒井には分からない事があった。

……それは、

「お前は何で『逃げろ』なんて言うんだ？」

荒井はそこが理解出来なかった。

少女は確かに圧倒的な力を持っているはずだ。

その『力』に驕っているのなら分かる。

だが少女にはその様な様子は見当たらない。

少女の瞳から伝わるのはただ単純に、『戦いたくない』という視線だけだ。

そんな悲しい瞳をした少女は荒井に答える。

「私だって、人を殺したくないよ……」

少女の呟きに荒井はミリ単位で首を傾げる。

「……資料によると、お前は今まで『１０万人』もの人間を『殺した』んじゃねーのか？」

「……」

少女が押し黙り、荒井も口を閉じる。

「……仕方がなかったんだもん……」

次に聞こえた少女の声は、震えていた。

「だって、『黒雨』が『全員殺せ』って命令するんだもん！！」

少女が叫んだ瞬間に、少女の体から爆風が外に発せられた。
その爆風が、ビルの窓を全て粉砕する。

荒井は、黙ったままだ。

「黒雨の命令は絶対!!
誰も断ることはできないの!!」

少女がその変声期の過ぎた大人の声で喚く。
その少女が声を荒げる度に、風は強くなり、
薄黒い雲が晴れ渡っていた上空を覆う。

「私だって、殺したくなかった!!!
やめたかった!!
助けたかった!!
……でも、そんな事したら私は『誰にも知られないまま悲しく無惨に殺される』だけなのよ!!!
それだけは……嫌だ!!」

少女は泣き叫ぶ。

今までの『１０万人の殺害』という重い楔に苦しめられ、
泣きながらも、『命令』に従いつづける事に。

だがその楔は、一人の少女には重くて痛々し過ぎた。

荒井は荒れ狂う風に制服や髪をなびかせながらようやく口を開いた。

「なら俺がお前を『知って』やるよ。」

少女は俯いていた顔を地面から上げる。

少女の涙で濡れていた顔を、
荒井はしっかりと見た。

「お前は人をたくさん殺した。
それはどんな事があっても許されるわけがねぇ。」

「っ！！」

その言葉に少女は激昂する。

「あなたに何が分かるのよ！！！！！
自分の存在意義や居場所もない私にどうすればいいっていうの！？
殺したくないのに殺さなきゃ私が死ぬっていうことがないあなたが
……」

少女の手に大気が圧縮していく。

そして、

「知ったような口を……
聞くなァァァァァ！！！！！」

少女の叫び声とともに、圧縮していた空気が『膨発』した。

〈ギィチィァァアアアアアァァァ！！〉

奇妙な音が辺りに響き渡り、少女の眼前にある数多のビルを、『薙ぎ倒す』。

ビルは真ん中から凹んでいき、だんだんと罅がビル全体に響き渡り、仕舞いには『大きな残骸』となる。

そんな核爆弾に並ぶ圧倒的な風力が少女の眼前に広がり、少女の視界が大きく広がる。

少女が目にしたのは、遠くにビルの残骸が大量に転がり落ちた無惨

な光景。

「すげー威力だな。」

……だけではなかった。

その残骸よりも遥か手前。

先程少女と話していた場所と全く変わらない場所に、

荒井はたたずんでいた。

「……何で!?どうして!?
どうして生きてるの!?
今のは絶対に死んじゃうくらいの力を込めて出したのに!?
何で生きてるの!?」

少女は叫ぶ。

あまりにも理解しがたい状況に混乱して叫ぶ。

少女が放った核爆弾レベルである風力は確かに作動した。

それはビルの残骸を見れば分かる。

なのに荒井の体は傷どころか制服すら全く痛んでいなかったのだから。

理解しがたい事実に喚く少女に荒井は告げる。

「『お前を助けたい』から……かな？」

「！！！！」

その言葉だけで、少女の白い頬は赤く染まる。

だが荒井は止まらない。

「来いよ……
俺が全部『打ち砕いてやる』よ。
けどな、罪はちゃんと償ってもらうぜ。」

「……言ったわね……」

ゴロゴロと上空で雷が鳴り響き、

近くの山が噴火を起こし、

二人の場所が地震で少し揺れ、
白い少女の周りを暴風が舞う。

「どうなっても……知らないわよ……」

「気にせずガンガン来い。
お前の技や罪や楔ごと、全て打ち砕いてやるからよぉ！！」

荒井がそう叫んだ時、
雷が、
火山弾が、
地震の揺れが、
荒井に一斉に襲いかかった。

それに向かって荒井は走り出す。

今、

『天変地異と勇敢な人間の闘い』が始まったのだった……

…8　天変地異（後書き）

次回、ジョンが活躍？

てかどうやってジョンを出そう……

まぁお楽しみに～

…9　皆は何を思う？（前書き）

タイトルあんまり意味がありません。

…9　皆は何を思う？

【とあるホテル】

「お嬢様。今から三時間ぐらいおヒマを下さい。」

「うーん？ヒマ？」

僕は今、『秋紗』お嬢様が昼食を終えて一息ついたときにそう告げた。

「ふーん、まぁいいわよ。
昨日いろいろと奉仕してもらったしね。」

「ありがとうございます、お嬢様。」

僕はそう告げて失礼の無いように部屋を退出する。

だが、部屋を出た途端……

全力で走り出した。

『荒井待ってろ！

今助けに行くからな！！』

２０分前、料理を部屋に運ぶ最中に友達の『工藤沙織（くどうさおり）』からのメールが着た。

一体何だろうと思ってメールを確認してみたら、

『噂で、荒井がＬＤレベル２０００の任務を受けるって聞いたのよ！！

竹崎君、お願い。

荒井君を助けて！！』

心臓が止まるかと思った。

僕は確かに荒井に類い希なる超人的な才能を見いだしている。

きっと荒井は将来僕なんかよりもずっと強くなっていく。

けれど、それはあくまで『将来』の話だ。

今の荒井は急速に成長しているけど精々『Ｂランク』相当。

どんな奇跡が起こったとしても、『不可能』を可能にはできない。

なのに……

ＬＤレベル２０００？

絶対に無理だ！！

手遅れになる前に早く助けて出さねーと！！

『そんなにそやつを助けたいのですか？』

ホテルを出た瞬間、頭に声が響いた。

『誰だ！？』

いきなりの声に驚き挙動不審気味に首を振りながら辺りを見回す。

だが辺りには誰もいない。

『我が主、お答え下さい。

アナタは助けるのですか？』

だが頭には声が響き渡る。

最早探しても意味がないと感じた僕は諦めて質問に答えた。

『当たり前だ！！！
アイツは俺の「パートナー」なんだ！！
助けるに決まってるだろ！！！』

心の声で僕はソイツに怒鳴り散らした。

すると、

『そうですよね……
アナタはやはり私の主、「義藍炎魅宏」の生まれ変わりなのですから。』

『！！！！』

俺は驚愕した。

『義藍炎』をコイツは知っている。

あの伝説の……名前を！！

『テメーは何者だ！？』

頭を激しく動かしながら声の主を必死に探す。

するとソイツは……

「私の名は『アリサ・ルウィーズ』
またの名を『ヴァンプの稀姫』。」

ソイツは、いつの間にか俺の前にいた。

いや、降りたった。

ソイツは真っ赤なメチャクチャ高級なドレスを着込み、
絹のように美しい白髪と白い肌。
そして目を引く赤の瞳。

だが一番の特徴は、背中から生える『禍々しい黒い翼』

その翼に目を惹かれていると、

「では代償としてアナタの『血と体』をもらいましょうか。」

「えっ？」

抵抗する暇もなかった。

彼女はいつの間にか僕を抱きしめて僕の鬱血の痕がある首筋に優しくかぶりついた。

「イタッ！！」

首筋の２つの穴に彼女の八重歯が入り込み痛みが走る。
そして彼女は首筋を唇で強く押さえつつ血を吸っていく。

血が吸われるごとに、なぜか気が高ぶる。

この女性に、みとれていく。

「これぐらいでいいかしらね。」

彼女は僕の首筋から八重歯を外し、間近で僕の顔を見つめる。

「では参りましょうか、我が主。」

彼女が僕から目をそらし、翼を大きく広げた。

片翼だけで２ｍあった翼が伸びて伸びて、最終的には１０ｍまで広がった。

「まって、アリサ。」

僕はアリサを呼び止める。

「如何なさいましたか、我が主?」

アリサは再び僕にその美しい顔を向けてくれる。

僕はその美しい顔を両手で優しく触れ、だが強引に引き寄せる。

そして……

唇を無理やり合わせた。

「ウグッ!?」

アリサが驚いてる事に構わず、僕は唇でアリサの唇をこじ開けてその口内に舌を入れる。

「ンッ!…ンッ……」

アリサがだんだんと驚きから解放されて、僕の舌を受け入れ始める。

舌でアリサの舌を弄り、口内を蹂躙していた僕の舌をアリサが吸う。

僕も負けじとアリサの舌を吸う、そしてまた舌でアリサの舌を絡めて口内をいじくり回した。

クチュクチュと水音がなる中、僕の目に涙が溜まる。

分からないけど、

懐かしい。

会いたかった……

分からないそんな思いが僕を包み込み、
僕の興奮を高める。

もっと欲しい……

アリサが欲しい……

アリサの全てが欲しい……

その思いが舌を動かす力になる。

アリサが喘ぐたびに、
アリサの唾液を飲む度に、
アリサの恍惚そうな顔をみる度に、

アリサが欲しくなる。

「っはぁ……我があるっ…」

息継ぎの為に一回唇を離すがまた素早くアリサの唇を塞ぐ。
そして僕の左手がアリサの胸を掴もうとしたとき、アリサが強引に僕から唇を離した。

一本の糸が僕たちの唇を繋ぐ。

それをアリサは舌で拭いながら僕に告げた。

「それより、あの男を助けに参らないのですか？」

……あっ

「そうだった！！
アリサ、頼む！！」

「了解致しました。」

するとアリサは僕の背後に周り、胴に腕を回す。

そして、

「舌を噛まないようにご注意下さい。」

ドゥゥゥンと言う音とともに、『音速の５倍』で空に飛び立った。

……

……

……

……

……

ドガァァァァンという激しい爆音が響き渡る。

爆音の音源には無惨な地形で争う二人。

そしてそれを見つめる人がいた。

「あぁん？
なんやいい感じやな～
資質はあるみたいやな。」

その激戦地から遥か２ｋｍ離れたビルの残骸の中、

一番高く積みあがったビルの残骸にひとりの女性がいた。

その女性は、２４５ｃｍの体を伸ばし、後ろ手をついてその光景を眺めていた。

「しっかし、なんや『おかみ』が焦ってウチに接触して『アナタがこの任務をほうっておいたら日本や君の家族や弟君が大変な事になるんですよ！！』とかほざいてたからせっかく『引退した身』なのに来てやったっちゅーのに……」

彼女の遥か彼方には、

体中傷だらけで肩で大きく息をしているが決して諦めの見えない顔で上空にいる少女を睨みつける大柄なオレンジ色の髪の勇敢な少年と、

荒れ狂う暴風を纏い、上空に立ち上るマグマの地柱と黒雲から煌めき轟く大いなる雷を従わせた真っ白な少女がいる。

「まさか先客がおるとはな～」

その女性、『竹崎夜凪』は藍色の髪を遠くから伝わる暴風にはため

かせ、水色に近い藍色の目でその少年の有志を目に焼き付ける。

「あん時はズタボロやったけど、今もズタボロかいな～
まぁ、男は傷ついてなんぼや。
その傷の数だけおどれを強くするで～」

夜凪は呟く。

いつの日だったか、自分の弟を殺そうとしていたヤツに諭していた
言葉を……

「きばりや～、荒井玄司
ウチの弟を守りたいならこんぐらいはせなあかん。
ウチは期待しとるんでぇ、裕太が久しぶりに惚れ込んだ奴らしいか
らな～
やから……」

夜凪は笑顔で遥か彼方にいる荒井に微笑みかける。

「がんばりや、『裕太のパートナー』さんよ。」

……

……

……

……

「くっ……」

ガクッと荒井玄司は膝を地面につける。

それを少女は遥か上空から見下ろしていた。

「どうしたの？私の全てを『打ち砕く』んじゃなかったの、お兄ちゃん？」

「うるせえ！！」

荒井は怒鳴りながら斜め左に向かって走り出す。

目的はビルの残骸。

それを飛び台にして遥か上空にいる少女に向かって飛ぶためだ。

「オオオォォォ！！」

荒井は雄叫びをあげらながら残骸を一気に駆け上り、そして残骸の頂上で今までの勢いを足に溜めて上空に飛び立とうとする。

だが、

「甘いよ。」

その少女の声とともに、荒井の体から半径５ｍ。

地中から何かが噴き出した。

〈ゴォォォォォ！！〉

激しい音を立てて地中から噴き出したドロドロの液体は、荒井を包み込む。

だが荒井には意味がない。
荒井には全ての超能力が『効かない』。
それは竹崎裕太の事象をも超越した最強の結界、『反発』も例外ではない。

そんな荒井に超能力によって噴き出された『マグマ』などは効きはしない。

だが、それはあくまでも『荒井玄司』だけだ。

荒井の足場にしているビルの残骸まで耐えられる訳ではない。
ビルの残骸は次第に溶けていき、マグマの地柱が収まったときには荒井の足場がなくなっていた。

「あっ……」

荒井は間抜けな声とともに、地面に落ちていく。

慌てて体を回転させて地面に着地できる体勢を整えた。

そして、

〈ゴギャッ！！〉

鈍い音が響き渡り、荒井の体に衝撃が走る。

だがそれは着地の衝撃ではない。

荒井の左側から飛んで来た、５ｍもあるビルの残骸が彼の体にぶつかったからだ。

荒井は衝撃に耐えられず２０ｍ滞空した後、数十回バウンドして少女から１００ｍも離れた所で残骸にぶつかり止まった。

だが荒井はガクガクと激しく揺れ動く体で無理をしながら立ち上がろうする。

だが、少女は甘くなかった。

ゴロォォォォン！！！

激しい雷が荒井の目の前に落ちた。

そして、あまりの光を取り入れた荒井の目が一時的に使えなくなる。

「目が見えないとお得意のスピードが意味ないわね。」

ビュォォォっと天地が風を集束させる音がする。

だが荒井は今、目が見えない。

そんな荒井に一迅の風が吹き抜ける。

勿論それだけではない。

〈ザッ、バシュッ、ドスッ〉

複数の奇妙な音とともに、荒井の体を何かが引き裂き、突き刺さる。

『これは……ガラスか！？』

ようやく見えるようになった目が捉えたのは、彼の体中に突き刺さったビルの窓ガラスの破片だった。

「グゥ……」

あまりの痛みに荒井は膝を着く。

本来なら逃げなければならないのに、痛みがそれを遮る。

「これで……ラストよ。」

膝を着き、無抵抗な荒井を見て天地が再び風を集束させる。

荒井は全く動けない。

ガラスの破片による痛みが荒井の行動力を奪っていた。

だが、少女にもはや慈悲の心などない

あるのは、『殺人による罪悪感』だけだった。

「ごめんなさい……」

その言葉を合図に、１５ｍもある巨大なビルの残骸が宙に飛び上がる。

巨大な残骸は宙を弓上に闊歩してやがて地面に沈んでいく。

そして、残骸は地面に落ちた。

一人の少年を巻き込んで……

……　　……

……

……

「願君！速く行かないとヤバいよ！！
だってさっきあそこに大きな変なモノが落ちたんだよ！！」

「落ち着け、柚梨佳」

とある激戦地から３ｋｍの封鎖されたはずの国道に、一つの大きな車が走っていた。

その中にいる一人の男、萩原願は頬杖を着いて現地に着くのを待つ。

「ったく……
せっかく暇つぶしに防衛省に『ちょっぴりお願い』してこの任務を
見つけ出したと思ったら、
またアイツか……」

「まぁ落ち着きなさいよ願」

「俺はいつでも落ち着いてるよ翠。
まぁ、あの野郎の任務を横取り出来るだけで十分腹いせに……」

「……まぁ、アンタにとってＬＤ２０００は本当にちょうどいい『
暇つぶし』よね。」

「相変わらずだな願よ。」

「翠、当たり前だ。
後、遼。お前は何でいるんだ？」

「いくら何でも酷くね、ソレ！？」

「先輩ー、車内の暇つぶしに『きもちいいこと』しませんかー？」

「後ろから抱きつくな変態（美優）！！！」

車内にいる五人は端から見れば楽しそうにドライブしているように
見える。

だが、実際は違う。

この賑やかな五人組みは、『チーム・ネメシス』

現日本の有する『最強チーム』である。

だが任務が始まるまではあくまで平和。

その束の間の平和は、予定より速く消え去った。

〈ズドォォォォォンッ！！〉

激しい爆音とともに、何かが地面に落ちてきた。

すぐさま運転を担当していた伊椎翠はブレーキを踏み込みながら車体を横にして車を止める。

そして車が止まらない内に五人が一斉に車内から飛び降り、前転しながら勢いを殺して膝立ちでエモノを構える。

狙いはただ一つ。

砂埃が立ち込める爆音のした１０ｍ前だ。

ごくっと息を飲む中、砂埃から人影が見えた。

「悪いがこっから先は立ち入り禁止や。
せっかくの男の意地を見せる所を潰すなんて野暮なマネはアカンで～
悪いことは言わんから、はよ家に帰りや～」

砂埃から悠然とした態度で歩いて現れたのは、

濃い藍色の膝まである長い髪と薄い藍色のつり上がった勝ち気で活発そうな目をした、だるだるのジーンズと白いＴシャツにこれまた特大サイズの薄い黒緑色のフード付きコートを着た２４５ｃｍのギネスレベルの超巨大身長な女性だった。

萩原はすぐさまその女性に命令した。

「『萩原』の名の下に命令する。
今すぐそこをどけろ。
さもなくば……痛い目をみるぞ。」

その瞬間、萩原からもはや龍を超えるぐらいの凄まじい殺気が放た

れる。
背後は同じＶランクの遼以外はガクガクと震えている。
萩原曰わく、『殺気７０％』
ソレを見てその女性は、
「ははははははははははは！！」
笑っていた。
「ははははははははははは！！
ウケるわー！！まさか『裏の日本の支配者』にこないな命令されるとはな～
あはははははは！！」
〈ババババババババババババババァァァンッッ！！〉
女性の笑い声が辺りを支配する中、眩い閃光とともに、多数の銃声が鳴り響いた。
原因は萩原のＤＥとサムライ・エッジによる『不可視の銃弾』。

そしてそれを行使した萩原は、

「萩原を……バカにするなァァァァ！！」

闇色のオーラを纏った、暗黒色金により発せられたオーラを纏っていた。

その黒いオーラは純粋に練成された殺気が渦巻いている。

これぞ『Ｃ・ＨＳＳ』

だが、

「おぉ、強いな～兄ちゃん！！
ウチもちぃーとばっかし本気に『なりそう』やったわ～」

そこにはさっきと全く位置が変わらずにいるアノ女性がいた。

そして遂に萩原が完全に『キレた』。

「ふざけんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

殺気を１２０％まで出し切り、
Ｃ・ＨＳＳを発動しながらとある超偵の能力、『雷神化』をも発動する。そしてその二つが混ざり合い、通称、『闇神化』が発動した。

そして発現する、最強のＨＳＳ。
その名は、『スサノオ（Ｑ・ＨＳＳ）』

全ては一瞬だった。

萩原が光りの速さで女性に肉薄し、『光速のおよそ三倍』で右拳をその女性の鳩尾に向けて振り切る。

普通の人間だったらその拳だけで全身が分子レベルで分解されるだろう。

だが、

「惜しかったなぁ。」

その右拳は届かなかった。

拳は鳩尾から３０ｃｍ辺りの所でガッチリと手首を掴まれて止められていた。

「まさか『ウチ以外に』光速を出せるヤツがいるとはな～
予想外やったわ。」

ギリギリと萩原の右手首を掴む左手の握力が強くなり、だんだんと女性の顔が歪む。

そして、

「だがなァァァァ！！
ウチに勝てる奴なんかぁ……
この世にはいねぇんだよおおおおぉぉぉオォ！！！！！」

激昂とともに、萩原は吹っ飛んでいた。

それもまた光りの速さで、

だが、スサノオを使い、一気に距離を縮めて今度は左右から挟み込むように拳を振るう。

女性は拳が頬にぶつかる前に右足で思いっ切り萩原の顎を蹴り上げて阻止し、上空に飛ばないように足を掴み、地面に叩きつける。

たったそれだけの行動で、萩原を中心として半径５０ｍは地面に蜘蛛の巣のような穴を開けた。

そして女性は萩原に馬乗りになり、拳を胸に振り落とす。

「！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

最早言い表せないような悲痛な音とともに、『秒間５０００発』の寸止めパンチが萩原に襲いかかる。

例えるのならば、

この状況は『音速ジャブを秒間５０００発』、『プロボクサーパンチを秒間１０００００発』受けているようなモノだ。

そして悪魔の１０秒後、萩原はグッタリと死人同然になっていた。

「ヤッパリなんかの方法で肉体強化をしとったみたいやな。うん、勘が当たって良かったわ〜
さすがにもう『殺し』だけは勘弁やねん。」

そして振り返ると、立ち上がっている者は霧藤遼ただ一人だけだった。

いや、霧藤もフラフラといつ倒れてもおかしくない死人同然な状態だ。

それをチラッと見てから、その女性は携帯を取り出して誰かに連絡を取る。

「あぁ、Ｊか？
おどれは毎度仕事が速いな～
惚れ惚れしちまう働きやわ～」

『お褒めいただき恐縮至極に存じます。
竹崎夜凪様。』

その女性、竹崎夜凪から遥か５ｋｍ程離れたビルの屋上で、Ｊことジョン・リケイドは自作超遠距離型狙撃銃、『ラファールＭ１ＪＲカスタム』を寝そべりながら霧藤遼の足元に照準を構えている。

ジョンは夜凪が萩原の攻撃を受け止めたころには既に、このラファールＭ１ＪＲカスタムで３人の意識を持っていっていた。

ジョン・リケイドが超遠距離戦最強と言われるのは訳がある。

まずは自作超遠距離型狙撃銃のラファールＭ１ＪＲ。

最大飛距離はなんと２５ｋｍで速さは『毎秒１０ｋｍ』のバレットをも遥かに超越した狙撃銃であることと、

ジョン自らの近距離を見るためのサングラスを外すと１５．０の視力をも誇る怪物並みの視力と『絶対半径１０ｋｍ』の神以上のテクニックだ。

そんなジョンに、たかが５ｋｍの狙撃などボルトアクションであっても五秒あれば簡単に終わる。

ただ、地面が狙撃した地面がミサイルでも落ちたのかというぐらい削れるのが厄介な部分だが……

「しかしお前は荒井を助けんのか？」

夜凪が不思議そうにジョンに質問すると、ジョンは静かに答えた。

『彼が「一人で絶対に勝つ！だから信じてくれ」と言ったのですか

ら私は彼を信じて手を出しません。』

「……さよか。
ほな今回はわざわざ手伝ってもらってどうもな～
おおきに～」

『はい、失礼します。』

そして夜凪が携帯を切り、霧藤に告げる。

「すまんな～兄ちゃん。
やけど、ウチはアノ男に『賭けてみたいんや』。
アノ男が裕太を守れるだけの男かを……
やから、すまんが……引いてもらえんか？」

夜凪はその巨身を９０度に曲げて懇願する。

それに対して霧藤は、黙って首を縦に動かした。

「さてと……後は、」

夜凪は霧藤が萩原たちを車内に運んでいるのを背後に、荒井がいる

であろう方向に振り返る。

そして静かに呟いた。

「おどれの根性、ウチにみせてみやがれ。」

…9　皆は何を思う？（後書き）

次回で一括りして裕太編に戻りたいですね～

てかだんだんとバトル描写が酷くなる一方だな……

これは一度、基礎を見直した方がいいのかな……

まぁ、感想待ってま～す

…10　オレが望むこと（前書き）

決着です。

…10　オレが望むこと

真っ暗な闇の中、俺はただ俯いていた。

体が全く動かない。

思考判断もうまくいかない。

ただ、暗闇の中で俯いていた。

『オレ、何やってたんだっけ？』

いまいちな頭を働かせようとするが、すぐにやめる。

『オレ、何でこんな所で俯いてんだ？
つーかここどこだよ？』

オレはようやく目を開ける事ができた。

するとそこは懐かしい光景だった。

茜色に染まった夕焼けの空に、茜色の海。

それを波打ち際に膝を抱える状態で座り、静かに眺める深い藍色の長髪の少年。

その少年からは、静かに夕日を眺めている。

「裕太！不謹慎なのは分かってるし、分不相応なのも自覚してる。」

そこにいたのは俺だった。

まだあの頃は武偵とも呼べないような、弱くて未熟なオレがいた。

けど、そんなオレでも力になりたかった。

今ここにいる小さな少年が、

自分の信じ、愛してやまないぐらい大切に思っていたパートナーの少女を失って、悲しみにくれている少年を……

信頼して、姉弟同然に接していた女から殺されかけ、拒絶され、生きている意味を否定された少年を…

強くて、頭がよくて、美しくて、優しくて、皆から愛されるべき少年を…

今にも壊れて、バラバラになって、崩れて、消えてしまいそうな、この儚げな少年を…

「だけど聞いてくれ、裕太！」

そんな傷つき、疲れ果てて、失意のまま消えてしまいそうな少年を……

昔のオレを助けてくれたように……

オレは……

「裕太！オレは絶対にお前から離れないし、お前を守る！
絶対に、お前から笑顔を絶やさないようにする！
お前が泣くならオレがその涙を拭いてやる！

お前が笑うならオレも笑う！
お前が戦うならオレが全ての攻撃を薙払って、敵を打ち砕いてやる！
んでその後、ポカリスエットでも奢ってやる！
それからまたお前に……笑顔を作らせてみせる！
だから……！！」

オレはそこで顔を上げて、裕太を力強く見る。
裕太はいつの間にか振り返って、光りの灯ってない死人のような眼でオレを見ていた。

そんな抜け殻のような裕太に、オレは腹一杯に空気を吸い、喉が張り裂けんばかりに言った。

「オレを、パートナーにしてくれぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

オレの叫びにより何羽かカモメが空き地島から飛び立ち、静寂が訪れる。
今聞こえるのは、ザザァーンと海水が空き地島のコンクリートを波打つ音だけだった。

２０秒ぐらいたち、オレは決心して目を開き裕太の表情を窺う。

裕太は相変わらず死人のような無表情だった。
瞳からツゥーと流れ落ちる、２つの雫が無ければだが……

「……ダメだ……」

一週間ぶりに裕太から聞こえた言葉は否定の言葉だった。
その事実にオレは膝と手を着く。
裕太はオレを必要としていない……
その事実がオレに深くのしかかり、思考や体を動けなくする。

「今のお前ならな。」

耳元に聞こえる裕太の声。
慌てて顔を上げると、藍色の髪がオレの顔をくすぐり、首に何かが巻きついて体が密着する。

「オレが特訓に付き合ってやるからさ……
いつでも頼ってくれていいからさ……
別に守ってもらわなくても、一緒に美味しいもの食べたり笑ったり時にはケンカしたりしてさ……
だから、ボクと……」

いつの間にか裕太は口調が変わり、話している言葉に嗚咽が混じる。
そして、

「ボクとずっと一緒にいてよ……！！
君が望むなら何だってするよ……

だから……！！」

裕太がオレから少し離れ、真っ直ぐにオレを見つめる。
裕太は顔を真っ赤にして目から大量の涙を流し、必死に言葉を発しようとする。
その行動にオレに必死に伝えようとする裕太の雰囲気が、優しく伝わる。
……そうか、オレと裕太の考えている事は一緒だったんだな……

「荒井……！！
ボクのパートナーになって下さい！！」
裕太が頭をオレに向かって下げる。
オレはただ、その震える体を優しく抱きしめる。
それだけで、裕太の体は激しく震え、

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！」

裕太は泣いて、オレを抱きしめ返した。

今、ボロボロに傷ついたオレはその光景を黙って見つめ、気づき直した。
そうだった……
オレは忘れちまってたんだ。

あの日から、オレと裕太の特訓が始まった。
裕太の特訓はとても苦しかったけど蘭豹先生みたいに分かりやす

く丁寧で、何より厳しくも優しかった。
終わった後のポカリスエットも最高で、『上達してるよ』の一言で、疲れが吹っ飛んだ。　しかも裕太は偏差値３０未満のオレに勉強も教えてくれたり、裕太をゲームセンターに連れて行ったり、一緒に銭湯に行ったりした。
時には訓練疲れで風邪を引いて高熱で倒れていたオレの為に裕太はわざわざ学校を休み、違う部屋なのに一日中オレを泊まり込みで看病してくれた。

そして、裕太は必ず笑っていた。

それを思い出して、オレは気づく。

『オレ、死んでいいのか？』

そしてまた思い出す。

裕太の死人のような無表情を……

そうだよな……
オレは誓ったんだ。『お前に笑顔を作らせてみせる！』って。

だから……

寝てるわけにはいかねーよな。

……

……

……

……

グラッ

「えっ？」

眼前に広がる半径１５ｍの球体のビルの残骸が僅かに傾くのを少女は見た。

だが少女は信じることが出来ない。
あの残骸は見た目で明らかに十数トンはある。
そんなものに人間が耐えきれるわけがないのだ。
だが、
グラッと、さっきよりも大きく揺れる。
そして徐々に揺れは大きくなり、遂に残骸が浮き始める。
その残骸の本から、何かが聞こえる。
残骸が持ち上がるにつれて、だんだんと声も大きくなり、ハッキリと聞こえるようになる。

「……ォォォおおおおおぉあああああああああああ！！」
そして雄叫びが空を裂き、残骸が２ｍ辺りまで浮く。
その下にいたのは、浮き上がる血管から血を噴き出しながら残骸を両手で持ち上げる少年、
『荒井玄司』がいた。

荒井は持ち上げていた残骸を明後日の方向に放り投げた。
残骸は緩やかな弧を描きながらズゥゥゥンと鈍い音と揺れを立てて、地面にめり込む。
その光景を少女は驚愕の眼差しで目に焼き付けていた。

「何で……アナタは生きてるのよ！？」

少女は喚く。
自らの理解できない事が多すぎて、混乱する。
だが荒井は静かにこう言った。

「死んじゃいけないからだ。」

「！！？」

少女は驚愕の表情を緩めない。
だが荒井はそんな事はお構いなしと言わんばかりに歩み出す。

「オレが死んだら裕太はきっと泣く。
それだけはさけなきゃならねー。
それに、お前ぐらいの奴がいつも裕太を狙ってんだ。
つまり、お前を倒せなきゃオレは裕太を守れるだけの力が無いって事になる。」

荒井はそう言いながら上半身の衣類をすべて脱ぎ捨てる。
その体は、プロ中のプロのように、無駄な所に筋肉が着かず、引き締まって美しさを表していた。
背中の稲妻模様の火傷が無ければだが……

「天地龍。
お前のおかげでオレは初心を思い出した。
礼を言う。」

荒井はそう言いながら静かに腰を落とす。
少女は黙って少年の一手を待つ。

「んだから礼は……拳で行くぜ！」

そう言いながら荒井は駆け出す。
荒井はまた突進する中で、一人の少年を思い浮かべる。
その思いを込めた拳を自ら出せる全力の力で圧縮して拳に触れた瞬間放出する。

それだけで、荒井の拳に捉えられたらビルの残骸が崩壊してバラバラになった。

「！！？」

少女は自らの盾として展開した巨大な岩がいとも簡単に拳一つで打ち砕かれたのに恐怖して、暴風を操り空に逃げる。

荒井は敢えて深追いはせずに地上から空にいる少女を見つめながら教える。

「知ってるか？
人は『愛と憎しみと努力』でどこまでも強くなれるんだよ。
だからオレは全てを打ち砕いて見せる。」

オレの頭には、一人の少年の笑顔で満たされていた。
その少年の笑顔を守るためならどんな事でも出来る。
少年を想うだけで、痛みは体から引いていき、力が湧いてくる。
体が温まっていく。

「それにオレ、言っただろ？
『お前を助けたい』ってよ。」
「なっ！！？」

少女はその一言だけで顔を赤らめながら全身を震わせ、藍色の瞳から雫をこぼす。
その顔は、年相応の無邪気な泣き顔だった。

「アナタを含めて3人目よ……そんな事言ったのは……」

少女は必死に目をこすり、視界を確保しながらオレに伝える。
そんな悲しげな少女に、オレは言ってやった。

「三度目の正直だ。
その二人の思いを遂げてやる。
オレがお前を助ける」

スッと腰を下ろし、いつでも走れる体勢に入る。
少女はその雪のような真っ白の顔を赤く染めて涙を流しながら、
覚悟を決めた。

「アナタに超能力が効かないのは分かる……
でも最後は私の力だけで全力でいくわ。
それで私は今までの殺戮にピリオドをつける……って大人っぽいかな？」

少女は舌を出して恥ずかしそうにする。
だが、少女の涙は止まらない。
そんな悲しげな少女は地面に降り立ち、静かに右手を空に上げる。

少女の右手に風が集まり、凝縮して固まる。
少女の右手から半径約１ｍが風が凝縮して固まり球体の中で荒れ狂い回る事により、右手付近の空間が歪んでいるように見れる。

「いくよ……」

少女は覚悟を決めた揺るぎない目で荒井を見つめる。

「あぁ……こい！」

荒井も前屈みの姿勢に拳を握り締めて両脇を締める。

そして、少女が右手を振り落とした。

ソレと同時に荒井も右足で地面を５ｍぐらい蹴り抜いて一直線に飛ぶ。

少女の右手から半径１ｍの空間を歪める程の風の凝縮体が荒井目掛けてゆっくりと放たれる。

対する荒井は弾丸のような速さで少女へ一直線に飛びながら上半身を後方に捻る。

あと数ｍで球体が荒井にぶつかろうと言う距離で、また荒井が上半身を捻った。

今度は本の体勢に戻るための反発力。

その反発力を生かした『引っ掻き』で、球体に触れる。

すると球体はまるで豆腐のように呆気なく荒井の爪と指に引き裂かれ、四散した。

だった一つの引っ掻きが、水素爆弾レベルに凝縮された風を四散させた……

スタッという着地音とともに荒井が少女の目の前に降り立つ。

それに対して少女はただ泣いている。

……嬉しそうに、泣いている。

「よかった……本当によかった……！！

これで私は人殺しをしなくていいんだ……」

少女は涙を流しながら喜ぶ。

もう人を殺さなくていいという事実に、嬉し泣きをしている。

だが荒井は……

「バーカ。」

コツンと少女の額に軽くデコピンをする。
少女は軽く額をさすると静かに荒井を見上げる。
それをみた荒井は鼻でため息をつき、少女を諭す。

「喜ぶところが違うだろ？
そこは、『ようやく私のやりたいことが自由に出来る』だろ？」

「えっ……」

少女は驚いた顔をする。
涙は止まらない。

「でも、罪がどうとかって……」

「それはゆっくりと償って行けばいいよ。
だからな、お前は喜んでいいんだよ？
せっかく手に入れた『自由』なんだからな。」

荒井はそう言いながら少女の頭を優しく撫でる。
その少女の髪は、まるで絹のように解れがなくサラサラだった。

「本当に……いいの？」

少女はまた荒井に問い掛ける。
それに対して荒井の言葉は、『いいんだよ』の一言と頭を撫でるだけだ。

たったそれだけなのに、少女は声を上げて泣く。

一人の少女は、長年付き従っていた闇から抜け出した。

そしてまた一人の勇敢な少年が関わっている。

その少女はその少年に助けられた。

一度闇に呑み込まれたその少女は、

もう二度と闇に呑まれることはない。

…10　オレが望むこと（後書き）

荒井を『ホモ』とバカにしないでください。
お願いします。

次回はカオス。

はてどうなる事やら……

…11　最強の敵（前書き）

R－18レベルです。

ぶっちゃけコレは読まなくても次回に関係無いんで大丈夫です。

今回はただエロいだけ。

CいかないけどBです。

ご注意下さい。

てかまじで今回読まなくとも前回と次回で繋がります

…11　最強の敵

無惨に繰り広げられた瓦礫の戦場に座る一人の少年。
その少年は静かに瓦礫に体を預けて迎えが来るのを待っていた。

「いってぇ……
この前のアドシアード事件より怪我ヒドいんじゃねーかな？」

荒井は静かに体の異常を探りながら、自分の膝で眠る少女を見つめる。
その少女は目が赤く腫れていたが幸せそうな寝顔を荒井に向けている。
それだけで荒井の心は満たされていた。

『まぁ、これでコイツは殺人をしなくて済むんだ。
だったらオレのこの傷なんて安いもんだな。
あぁ…後、刑罰については裕太や綾さんに頼んで死刑や終身刑とかじゃない……そうだ！コイツの超能力を利用して『期間決めの風力発電』とかいう刑罰にして、後は自由に生活していい、とかにすればコイツも人生を無駄にしなくてすむんじゃね？』

荒井はこんな傷だらけの時でも少女の今後を心配していた。
あの深藍の知者と呼ばれ、文武両道の限りを尽くした少年が何故こんな未熟なヤツをパートナーに選んだかは荒井のこの様な人間性を深く評価していた所もある。

「……まぁとりあえず。

まだまだ一人じゃ立てない子どもなんだ。
オレがお前を守ってやるからな。」
荒井は改めて少女を見つめる。
静かに純白の髪で覆われた頭を撫でる。
気持ちよさそうに目を細める少女を荒井は慈しみの表情で眺めていた。

……とある闖入者がこの風景に割り込むまでは……

……

……

……

「アイツなら任せてええやろな。」

荒井たちがいる場所から大分離れた瓦礫の山の中、竹崎夜凪は一人次の目的地に歩いていた。

「Ｎｏ．３もいなくなったし、次は黒雨のＮｏ．４を逮捕……かな？ウチだけで大丈夫やろうが……Ｊも連れてこうか？」

竹崎夜凪は次の対象を決めながら目的地に向かう。

夜凪の本来の仕事を遂行するために……

「うーん、ヤッパリＪとＱとＫを揃えて全員でＮｏ．２と１を……」

竹崎夜凪が指揮する団体の今の目標は、超重要機密テロ組織『黒雨』の撲滅。

その黒雨をどう潰していくか考えている時に、夜凪は声を掛けら

れたら。

「やぁーなぁーぎぃーちゃん♪」

その声を聞いた瞬間、ゾクッと総毛立った。

夜凪は声が出せない。

体すら動かせない。

瞳がグラグラと激しく揺れ、全身から気持ち悪いぐらいの大量の冷や汗が流れ落ちる。

「夜凪ちゃん、無視はヒドくない？

せっかく君の大好きな僕が現れたって言うのにぃ。」

その声の主は夜凪の背後から正面へ小走りで移動して夜凪を見上げた。

夜凪の目の前にいるのは、身長１６５ｃｍの童顔の青年。

真っ白なダボダボの半袖のティーシャツにそれに対する真っ黒のスラックスのようなジャージを履き、柔和な笑みを浮かべている。

……だが、そんな事はどうでも良かった。

今夜凪の目の前にいるのは、彼女達の最大の目標、

「くぅぅぅぅろぉぉぉぉさぁぁぁめぇぇぇぇぇぇ！！」

超重要機密テロ組織『黒雨』のボス、

『黒雨涅槃（くろさめねはん）』だったのだから。

「死ねぇぇぇぇぇぇ！！」

夜凪は全身の力を振り絞って右足を蹴り上げる。
その右足は黒雨の鳩尾を貫き、華奢な体を爆散させた。
……だが、

「相変わらず暴力的だな～夜凪ちゃんは。」

黒雨から飛び散ったのは、黒い何かの物質で、その霧のような真っ黒の物質は徐々に人型に戻り、
『黒雨涅槃』の形に元通りに戻った。
そして、

「夜凪ちゃん、少し大人しくしてもらおうか？」
「！！！」

夜凪の体は自然と力を失い、膝をつく。
夜凪自身が動きたくても小指一つ動かせない。まるで未知の力で無理やり体を押さえつけられてるようだ。

「あは。ヤッパリ間近で見ると夜凪ちゃんってメチャクチャかわいいよねぇ。
弟君や京乃宮姉妹も結構かわいいけど夜凪ちゃんと比べると『月とすっぽん』だねぇ。」

黒雨は夜凪が愛おしそうに頬を撫でる。
それを夜凪は拒む事ができない。
ただ唯一動く唇と舌と声帯を使って黒雨に反抗する。

「それはお前ビジョンだからやろ。
ウチは今まで告白なんてされたことはないでぇ。」

「それはその身長だからだよ。
実際にさ、高校生の時密かに男子生徒はみんな夜凪ちゃんに釘付けだったんだよ。
だから僕もアソコまでキミに執着してたのにぃ。」

「……本当にテメェだけはウチは許さへん。」

突如夜凪は声のトーンを落として黒雨を威圧する。

「お前がウチらに何したと思ってんねん？
お前はまず、ウチの『初めて』を奪おうとした。あんな精神的、肉体的までウチを屈服させてウチから望ませて『ヤってくれ』って言わせるぐらいに……」

「そうそう、だって夜凪ちゃんかわいいしスタイル抜群だし、無防備だし、フェロモンメチャクチャまき散らしてるんだもん。
本当、長時間かけて調教してようやく僕のモノになったと思ったのに、弟君がねぇ……」

「ウチが許せへんのはそこや！！」

夜凪は唾を吐き散らすように怒鳴った。
黒雨は柔和な笑みのままだ。

「テメェはウチを助けてくれた裕太を……誘拐した！！」

「うん、そうだね。」

黒雨のしれっとした態度が夜凪の怒りの火に油を注いだ。

「テメェのせいで裕太は『人間嫌い』になったんやぞ！！？
裕太が男とはいえ、『初めて』を失ってどのくらい塞ぎ込んだか分かっとんのか！？
ウチのかわいい弟を傷物にしやがって！！
ウチは絶対テメェだけは許さへん！！」
夜凪は無理やり目を動かして黒雨を睨みつける。
対する黒雨は、笑っていた。

「何がおかしいんや！！！？」
「だってさ、夜凪ちゃん気づいてないんだもん。」
「だから何がやねん！！？」
「裕太君に僕はもっと酷いことしたんだよ？」
「！！？」

夜凪は驚きで息が止まった。
そして不意に感じた無重力感と背中に伝わる硬い感触で、いつの間にか自分が押し倒されたのに気づく。
ススっと黒雨の右手が夜凪の唇に触れ、左手が胸を優しく掴み、ゆっくりと優しく揉み始めた。

「くっ、はぁ…あぁ…あぁ……」

夜凪の口から望んでいないのに喘ぎ声が漏れる。
はっきりと夜凪は快感を感じ取っている。
段々と揉みが強くなる程、夜凪の喘ぎ声は大きくなり、快楽の海に沈んでいく。

「夜凪ちゃん、僕が弟君にしたことはね……」

夜凪が快楽の海に沈む前に、黒雨は告白した。

「裕太君の目の前でパートナーを殺して、そんでそのお姉さんに裕太君へ向けて憎悪と殺意の呪いを押しつけたんだよ。」

「！！！」

夜凪は目を見開き驚いた。

だがそれも一瞬。

何かを言おうとした夜凪の口内に黒雨の舌が侵入して夜凪の舌や口内を蹂躙し、右手を下腹部に侵入させ小さな突起物を弾く。

その三方向の攻撃により、夜凪は呆気なく『堕ちた』。

「ンンンーー！！」

夜凪は小刻みにビクンビクンと痙攣して、虚ろな目で黒雨を見つめる。

黒雨は柔和な笑みを浮かべて夜凪を見つめ返した。

「今度こそ君をもらうよ、夜凪。」

その鋭い目を夜凪は虚ろな瞳で見つめ、こう言った。

「アナタを……ください。」

世界最強無敵の女が、一人の極悪な男に堕ちた瞬間だった。

…11　最強の敵（後書き）

どうだったでしょうか？

とりあえずラスボス登場です。

次回は荒井たちに魔の手が！！

お楽しみに～

…12　忍び寄る魔手（前書き）

R－17……かな？

かなりエロいです。

見るか見ないかはご自由にどうぞ。

…12　忍び寄る魔手

『ねぇ、お兄ちゃん？』

『……天地、オレの名前は荒井玄司だ。
荒井って呼んでくれないか？』

『うーん、じゃあ『ゲンにい』でいいでしょ？』

『……悪いがオレの1歳年上にゲンって名前の先輩がいるんだ。
だからな、ゲンにいはちょっと……』

『やだ、ゲンにいがいい。
私はアナタをゲンにいってよぶ！』

『……とりあえず、『にい』だけは外してくれないか？
オレは別にお前の兄貴何かじゃないからさ。』

『私はゲンにいを家族だと思いたいの。
私も……家族が欲しいの……』

『……分かった。
じゃあ、今日からオレとおまえは『家族』だ！！
いいな……龍？』

『！！！……うん！！！』

白い少女が仄かに頬を朱に染めていた。
オレは間違えなくこう思ったんだ。
『コイツを幸せにしてやりたい』……てな。

龍との闘いが終わって２０分ぐらい経ち、オレの意識はかなり朦朧としていた。
明らかな血液不足による貧血と、数百トンの建物にプレスされたことによる内臓の損傷のせいだ。
自分でもよく不思議に思う。
『何故オレは生きているのか？』とか、
『裕太がくれた武器はどうしてこんなに頑丈なのか？』とかな……
オレの武器は全て裕太が作ってくれた物だ。
オートマグ？、ＤＥ、Ｍ５００、そして昨日宅配でオレ宛に届けられた漆黒の『バンカー・ブレイカー』。
この全ては裕太が作るまたは注文してくれた。
……こんなオレのためにな……
まぁ、そんな裕太の愛情が詰まってるオレの愛銃たちが何故数百トンの重みに耐えられたのか……
今度裕太に聞いてみる必要があるな……
とそんな事を思考しているうちに何かの音が聞こえる。

《……バラバラバラ》

この音は……ヘリコプター？
しかも近いな……
とりあえずオレは辺りを見回す。
そして見てしまった……
遥かかなたから近づいてくるのは軍用ヘリコプターだ。
ミサイルポットが２つとＭ６１バルカンが着いた殲滅用のヘリコプター。
そして、Ｍ６１バルカンがクルクルと開店し始めた。

「！！！」

それを見た瞬間、オレは瞬時にオレの膝の上で寝ている龍を素早く小脇に抱えて『跳んだ』。
その直後だった。
《ガガガガガガガガガガ！！》
先ほどまでオレと龍がいた地面が大きく凹んだ。
Ｍ６１バルカンの弾によって……

「くそっ！！」
とりあえず、５０ｍ跳躍して危なげに地面に着地したオレは走り出す。
そのままじっとしていたらオレたちは蜂の巣……いや、ミンチになってしまう。
とりあえず今は逃げるのが優先だ。

「ゲンにい！！あれ！！」
いつの間にか起きた龍が背後を見て叫ぶ。
だがオレは見なくても何が怒っているのか理解した。
バシュゥゥゥという空気を引き裂く音が聞こえる。
……多分、ミサイルだ。それも四発。

ならやることは一つだ。

「龍！耳を塞いで風を操る準備をしてくれた！！！」

「分かった！！」

龍はオレの指示通りに両手で耳を塞いぎ、静かに目を閉じて瞑想する。

それを片目で確認して、オレは再び地面を強く蹴った！！

そのさいオレは体を大きく捻り、腰のホルスターから一番の愛銃兼最古銃であるオートマグ？を開いてる右手で掴み、セミオートからフルオートに変換した。

まるでフィギュアスケートの選手のように回転するオレの視界に四発のミサイルが飛んでくるのが分かる。　ミサイルは左右上下から挟み込む逃げ場のないコースだったが、甘いな……

《ババババァァォンッ！！》

オレはマグ？を稲妻を描くように振りながら撃った。

マグ？から飛び出た５０ＡＥ弾は真っ直ぐとミサイルのど真ん中に吸い込まれるように進む。

そして来た！！

「龍！今だ！！！」

「分かった！！」

龍がカッと目を見開いた。

その瞬間、

《ドガァァァァァァァ！！》

ミサイルと５０ＡＥ弾がぶつかり合い、爆発を起こした。

そしてオレたちはその『爆風』を生かし、

「「いっけぇぇぇぇ！！」」
前もって準備させた龍の気候操作能力を発揮させた。
そしてオレたちは今、『飛んでいる』。
着地点を軽く肉眼で捕捉すると、……驚愕した。
荒井の着地点にいた人、
その人たちはあまりみんな荒井の知らない人ばかりだった。
いや、一人だけは知っている。
……夜凪さんだ。
彼女は今、服どころか下着すら纏っていない全裸の格好で一人の男性に抱き抱えられた状態で気を失っている。

そしてその男からもう少し離れた所にボロ雑巾のようにズタズタになって体中怪我だらけのダボダボの白いシャツと黒いズボンの服装の男性がいた。
そして、その対面には
血のような真紅のドレスを纏う漆黒の髪と瞳を持つ大人びた女性と、純白の二文字で説明がつくようなぐらい白い髪に、白とハッキリと見分けがつくぐらいに美しい銀色の瞳をして、まるで古代ギリシャ人が着ているような布を羽織った男性がいた。
だが、オレがこの二人に驚いているのはそこではない。
オレが驚いているのは、
女性の背中から大きく生え出た黒く禍々しい翼と女性を取り巻く不吉な赤黒い光、
男性の背中から大きく生え出た白く神々しい翼と男性を取り巻く幸福な青白い光だ。

「何だよ、これ……」
オレの呟きは着地の衝撃音によりかき消された。

…

……

……

「アリサ……君は一体何者何だ？」

ボクは今、アリサに後ろから抱きつかれている状態で空を飛んでいる。

ボクは推定時速１００ｋｍで静かに空を飛ぶ中、ずっと気になっていたんだ。

「……知りたいのですね……」

後ろを振り返らないけど分かる。

アリサはきっと辛そうな顔をしているはずだから。

「私は……闇の生き物の祖先なんです。」

「……はぁ？」

闇の生き物の……祖先？

「全ての闇の生き物は私から産まれました。

……魔王サタンやベルゼブブ、吸血鬼のドラキュラ伯爵、サキュバ

スや鵺に、あまつは九尾の妖狐などの祖先なのです。
……信じられない話でございますが……」
「……」
ハッキリ言わせてもらおう。

「君こそ魔神じゃないのか？」
アリサはあははと静かに笑った。
ただ、笑っただけだった。
沈黙が僕たちを制した時、僕はある話題を切り出した。

「じゃあ、その魔神様がどうして僕の事を『主』とか言うの？」
「そ、それは……」
「と言うより、君はどうして『義藍炎魅宏』の事を知っているの？」
「……」
アリサは黙り込んだ。
けどボクは引けなかった。

「我が主はどこまで知っているのですか？」
アリサが逆に質問仕返したがボクはキチンと答える事にした。

「義藍炎魅宏の事は竹崎家に伝わる『竹崎季長の異族討伐伝』、ようは蒙古襲来伝で知ったさ。
確か祖先の竹崎季長が義藍炎魅宏とある契約をして元軍を台風で追い詰めた……とかだったかな？」
「ええ、そうです。」
アリサは頷く。
だが、それだけではなさそうだ。

「義藍炎魅宏は……私の夫なのです。」
「……はぁ！？」

夫!?例の日本の救世主が魔神の夫!?

「ええ、正式には主従関係でしたが魅宏は私を妻として扱ってくれました。
魅宏との毎日は本当に幸せで、魅宏と交わりは本当に心地よいものでした……
そして気がついたらたくさんの息子や娘が出来てました。
あぁ、あの頃のサタンは可愛かったのにな……」
アリサはどこか遠くを見つめて過去を思い出している。

魔王サタンが可愛いって……
て言うかどれだけ義藍炎魅宏と、……その……『子作り』してるんだよ……

「ですが、彼は１１５年前に死んでしまいました。」
「……えっ?」
「そして、見つけたのです。
魅宏の生まれ変わりを……」
「まさか……」
ボクはイヤな汗をかいていた。
まさか、ボクが……

「ええ、アナタが私の愛しき人。
闇と光の生物の祖先の、『義藍炎魅宏』の生まれ変わりなのです。」
嘘だ。
そんなの嘘だ。
嘘に決まってる。
ボクが悪魔達の祖先?
そんなバカなことが……

「我が主、私は待ち望んでいました。
アナタと再び会える日を……
これはお願いなのですが、ここ１００年、アナタの血が足りなくて白髪になってしまったので……アナタの血が欲しいのですが……」

アリサが何かを言っているが、ボクの耳には入ってこない。
……それよりいいのか？このままこんな奴といて。
ボクは、このままだと悪魔を産み出すための道具として使われるんじゃないのか？

「それは違います。」

アリサの強い否定の言葉がボクの心を揺さぶった。
……どうしてなんだろう？
アリサの言葉には、嘘が感じられない。

「私は今まで魅宏と数えられないぐらい交わりあいました。
けどそれはお互いの愛情表現なのです。
私たちは本当に惹かれ合った……そして体を重ね、気がついたらたくさんの子どもが出来ていました。
私は嬉しかったです。
アナタと私の子どもたちを見て、夫婦であると言うことが実感出来て……」
「……」
なぁんだ。ボクの勘違いか……
どうやらアリサは本当にボクが好きなだけらしい。
……そのぐらい、口調で分かるさ。

……だけど

「アリサ、でもボクは好きな人がいるんだ。」
「ええ、知っています。」
「あれ!?知ってたの!?」
「はい、アナタの事は既にお見通しですよ。」
「ええ～?」
「何千年アナタと共にいたと思っているのですか?」
「何千年!?」
「ええ、出なければ世界中に悪魔や天使などははびこらないでしょう?」
「じゃあ君は何歳何だよ!?」
「……内緒です。」
「そこで内緒にしないでよ!!」

いつの間にかボクたちに笑顔がはびこっていた。
うん、そうだね。
ボクたちはまだ会って間もないけどわかる。

ボクはアリサに惚れてしまった。

もう好きで好きでたまらない。
アリサが欲しい……

「ねぇ、アリサ……」
「はい、我が主?」

ボクは体を捻ったアリサの顔を見る。
アリサは顔や体は魅惑的だが確かに顔色が悪いし、髪は年老いた人

の白髪のようだった。
けど、そんなになるまでボクを待っててくれたんだね。
なら、ボクがする事は……

「荒井を助け終わったら、ボクのことを『好きにしていいよ』。
ボクの血を吸うでも何でもいい。
今日だけボクは君のモノになって上げる。
だから……ボクと一緒に……」
「……バカ……」

突然だった。
アリサの顔が近づいたと思ったら、アリサの唇がボクの唇を塞いでいた。

「ッ！！」
自分の顔が赤くなるのが分かる。
いきなりの事で頭がついて行かなかったが、徐々に分かる。

『アリサはもう堪えられない』みたいだと。

だからボクは敢えてアリサのする事を受け入れた。

「我が主……いや、魅宏。
私……もう堪えられない……！！」

いつの間にかボクは地面に寝かされていた。
そしてアリサが乱暴にボクのYシャツをむしり取った。

むしり取られたYシャツから表れたのは、ボクの身長にしては少

し大きいぐらいに膨らんだ胸……って！

「またボク女になってッムグ！！」

思わず叫ぼうとしたボクの唇をまたアリサは塞いだ。

しかも今度は舌を強引に入れて口内を激しく蹂躙し始める。

不意にボクの胸に何かがふれる。

そして後から伝わるボクの胸を優しく揉み始めるアリサの右手。

左手はボクの内股を優しく弄っていた。

「フグッ！！……ウゥゥ……」

だんだんとアリサの舌使いと揉み手が強くなっていく。

ボクはそれにただ従順に従うだけだ。

そう思っていたら不意に、ボクの胸から伝わる衝撃が頭を貫きぼうっとしてしまいそうになる。

ふと胸を見ると、アリサはボクの胸の先端を摘んでいた。

そして再び胸の先端を摘みクリクリと動かす。

「ふぁっ！あぁぁぁ……」

たまらずボクの口から女の子らしい喘ぎ声が溢れ出す。

アリサはそれをチラッと見て、ボクの口から唇を引き、開いている左胸の先端をくわえた。

そして今度は両胸から今まで感じたことのない電撃が頭を貫いた。

「アァ！アァァァ！！」

口が自由になったことでボクの喘ぎ声はより一層強くなっていく。

しかも今度は下腹部からも刺激を感じる。

よく見ると、アリサの左中指がボクのアソコの口を擦っている。

そして、その中指がピンク色の何かを弄び始めた瞬間、

「アァァァァ！！」

ボクはここ一番の衝撃を食らった。

頭には最早、気持ちいいと言う感情しか残っていない。

……それなのに、

「もっと気持ちよくさせて上げますよ。」

アリサはボクの胸から手と口を外し、ボクの股を内側から外側に広げて閉じられないように両肘で太ももを抑えた状態で固定する。

何をするの？

ボクがそう聞こうとした瞬間だった。

ズボッと変な音が下腹部からして痛みが頭を突き抜けた。

思わず足を閉じようとするけどアリサの両肘のせいで閉じられない。

そんなボクに、アリサは耳元でこう呟いた。

「安心して、すぐに気持ちよくなるから……」

その言葉と共に、アリサの右手が下腹部の突起物をクリクリと動かし中指が中で動き始める。

「ンンッ！！ンアァッ！！」

最早、喘ぎ声など止められるはずがなかった。

ボクはなされるがままにアリサに蹂躙されて哀れに喘ぎ声を漏らすだけになっていた。

けど、悪い気はしない。

むしろ嬉しかった……

ボクは好きな人に気持ちよくさせている。

そう思うと嬉しくて目から雫が零れた。

と思っているのもつかの間、ボクはそんな事を考えられないぐらいに快楽の波に襲われていた。

だんだんとこみ上げてくる何か。

その何かが今にもはじけ出しそうで、ボクは怖くて股を閉じようとするけどアリサに股は広げられている。

その様子を感じ取り、アリサは再び顔を近づけた。

「魅宏……イキそうなんだね？」

「ハァ、ハァ……イク？……なにそッアァァ！！」

だんだんとアリサの行動パターンが読めてきた。

アリサは確信を突く場所を敢えて言わせないみたいだ。

「イクっていうのはね、今までにないぐらい気持ちいいのよ？大丈夫。痛くも怖くもないわ。

だから安心して私に任せて。」

アリサの静かな微笑みにボクは見とれ……完全に支配された。

アリサはラストと言わんばかりに両手を素早く動かし、またボクの口内を舌で蹂躙する。

ボクはもうこらえられなかった……

「あぁ、イク！イクぅぅぅ！！」

ボクは知らない現象の言葉を叫び……快楽がリミッターを切った。

「アァァァァァァァ！！」

体がびくんびくんと痙攣して何かを排出している気がする。

でもそんな事は気にならなかった。

頭がぼうっとして何も考えられないぐらい。
体が熱く、びくんびくんと震える。
ボクの体は快楽という名の締め付けのない縄のようなモノで締め付けられ、動けなかった。

そんな心地よい拘束に捕らわれているボクをアリサは貪っていた。
アリサはボクの首筋などの色んな箇所に吸い付き、そして下腹部に顔をうずめた。
アリサが顔をうずめたボクの下腹部からピチャピチャと変な水音がしたが今のボクは何も考えられなかった。

「魅宏……ありがとう。
アナタのおかげで力をある程度取り戻せたわ。」
「……」
「……やりすぎたかしら。」

アリサはそう静かに笑うと破れたYシャツを再び拾い上げようとYシャツを取りに歩き出した。
ボクはその様子を視力7．5の左目で眺めていた。
アリサは顔色がよくなり髪や瞳も健康的な黒に染まっている。
けれど、ボクは見てはいけないものも見てしまった。

遥か遠く。推定5ｋｍ先に見える2人の男女。
女性はボクと同じ藍色の髪をして男性は黒い髪をしていた。
その男女は今まさにお互いの陰部を混じり合わせようとしている。

ボクは2人とも知っていた。

女の人は、ボクの姉の竹崎夜凪だ。
夜凪姉ちゃんは、涙を流しながら抵抗しようとしていりが黒髪の男性に無理やり押さえられている。
そして男の人は……
いつぞやのにこやかな微笑みを浮かべながら今にも夜凪姉ちゃんと交わろうとしている。

ボクはアイツを知っている。
アイツはボクから大切な人を奪った……　クソ野郎だ！！

「黒雨ぇぇぇぇ！！」
アイツを見た瞬間意識は一気に覚醒した。
アリサが隣でびくりと体を震わせたが気にならなかった。

ボクは駆け出した。
いや、飛んでいた。
無意識の内に地面すれすれの低空飛行をしている。
どうやってかは分からないけど背中からバッサバッサと鳥が羽ばたくような音が聞こえるのが分かる。
そしてボクはたった二秒で黒雨に肉薄し、『蹴り飛ばした』。

黒雨は無様に吹き飛びながら瓦礫にぶつかり見えなくなる。
その間にボクは夜凪姉ちゃんを抱きかかえる。

「ゆ、裕太ぁ……」
夜凪姉ちゃんの呻き声て喘ぎ声の合わさった声が、ボクの怒りを増幅させていた。

また、あのクソ野郎はボクの大事なものを奪おうとした……

「あはは、君はまた僕の邪魔をするのかい？
竹崎裕太君……いや、義藍炎魅宏。」
瓦礫の山から黒雨が這い出てきた。

その瞬間、ボクの中で何かが弾け飛んだ。

その後の事は、ボクはよく覚えていない。

…12　忍び寄る魔手（後書き）

オレとしたことが迂闊でした……

まさかの『投稿し忘れ』！！！

何か感想来ないな～と思いながら次話を書こうと思ったらまだ残ってました。

はい、本当に申し訳ございません！！

とりあえず、

本当に申し訳ございませんでした！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8662u/

緋弾のアリア～武偵の道～

2011年11月24日02時46分発行